海外果樹農業情報 No. 139

2018-3

# 海外の果樹産業ニュース 2018 年度下期版

2019年3月

(公財)中央果実協会

[JAPAN FRUIT ASSOCIATION]

本書の内容について、ご質問やお気づきの点がありましたら、 下記あてにご連絡下さるようお願いいたします。

## 公益財団法人 中央果実協会 情報部

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-9-13 三会堂ビル 【電 話】03-3586-1381 (代) 【F A X】03-5570-1852

## はしがき

果樹農業を取り巻く国際化の進展に伴い我が国の果樹産業は、外国産果実及びその加工品等との競争が激化している状況にあります。このような我が国の果樹産業を取り巻く環境の変化に対応して、当協会では関係機関・団体等からの海外果樹関係の情報ニーズを踏まえ、海外における果実及びその加工品等の生産・流通事情等に関する情報の収集・提供を行うことにより、我が国果樹産業の活性化・振興及び果実の需給・価格の安定のほか輸出の振興にも資することとしております。

当協会では、これまで特定のテーマを対象とした調査報告書、果樹全般についての FAO (国連食糧農業機関)の生産・貿易統計データをもととした報告書を取りまとめ、刊行してきました。

加えて、海外の果樹産業を扱う雑誌、新聞、ウェブサイトから我が国果樹産業に 密接に関係する記事や公表資料を翻訳し関係者に提供していますが、この度 2018 年 度下期に提供したニュースを取りまとめ刊行することといたしました。

本書が最近の世界の果樹産業事情を理解する上で少しでもお役に立てれば幸いです。

なお、本書の翻訳責任は当協会にあることを申し添えます。

2019年3月

公益財団法人 中央果実協会 理事長 弦間 洋

## 目 次

1	世界のリンゴ市場(2)	1
2	2018 年中国の生鮮果実輸入に関する政策レビュー	3
3	ニュージーランドで開発された果肉の赤い遺伝子組換えリンゴ	5
4	有機農業の推進と米国の新農業法	(
5	海外が見る日本の果実輸入	7
6	米国新農業法で果実・野菜対策が充実	8
7	リンゴ新品種コズミッククリスプの販売促進活動を始動	Ć
8	カリフォルニアのカキのシーズンは終了	11
9	2018/19 年 世界の落葉果樹需給(リンゴ、生食ブドウ、ナシ)	12
10	チリのアボカド事情	19
11	メキシコのアボカド事情	22
12	米国新農業法の合意間近、カンキツグリーニング病対策に予算	24
13	中国がスペイン産生食ブドウの輸入を解禁	25
14	チリの降雹による被害は1.2~1.5億ドル	26
15	メキシコのリンゴ輸入は減少の予想	27
16	オースストラリアの落葉果樹(生食ブドウ)事情	28
17	中国のリンゴ濃縮果汁産業	31
18	バレンシア地方の大雨でカンキツとカキの生産に影響	32
19	カリフォルニア州のカンキツ事情	33
20	チリの降雹被害は調査中	35
21	チリで大規模な雹害、サクランボ等に被害	37
22	トルコの落葉果樹(リンゴ、ナシ、生食ブドウ)事情	38
23	台湾の落葉果樹(リンゴ)事情	42
24	米国のリンゴ新品種レーブ又の名をファーストキス	44
25	ゼスプリが知的所有権侵害で賠償請求	45
26	チリの果実輸出量は中国向けを中心に記録を更新	46
27	中国落葉果樹(リンゴ、ナシ、生食ブドウ)事情	48
28	ニュージーランドの落葉果樹(リンゴ、ナシ)事情	54
29	チリの落葉果樹(リンゴ、生食ブドウ、ナシ)事情	60
30	世界のカキ市場	66
31	EU28 カ国の落葉果樹(リンゴ、ナシ、生食ブドウ)事情	69
32	台湾消費者の生食ブドウに対する嗜好の変化等	79
33	中国のシャインマスカット	80
34	世界のサクランボ情報を発信するニュースレター	82

35	アジア特有の果物ヤマモモ	83
36	2018 年米国北西部のサクランボ生産を振り返って	84
37	ゼスプリは今シーズン北半球での生産を拡大	85
38	果物だけを食べて 27 年間	86
39	イタリアのカキ生産	88
40	ペルーの落葉果樹(生食ブドウ)事情	89
41	チリのサクランボ生産量は最大 20%減少との予測も	91
42	世界のオレンジ消費量は増加傾向	92
43	スペインのカキビジネス	93
44	生産市場協会の年次総会	96
45	世界のリンゴ市場(1)	98
46	チリの果実貿易戦略	101
47	アジアへの進出を目指すスペインのカキ業界	103
48	ニュージーランドのキウイの脅威を及ぼすクサギカメムシ	104
49	中国でリンゴの価格が上昇	105
50	2018/2019 年産の米国のカンキツ生産見通し	106
51	オーストラリアは日本へのブドウ輸出を急速に拡大	109
52	世界のマンダリン市場	110
53	ゼスプリの過去と未来	113
54	サクランボ栽培の新技術「開閉式被覆装置」	116
55	この冬オーストラリアから中国へ空路でサクランボを輸出	117
56	ポーランド産リンゴの中国への輸出	118
57	インドネシアの果実輸入規制と果物消費	119
58	中国のキウイベリー生産	121
59	ワシントン州のリンゴ生産量は昨年よりも少ないが品質は良好	122
60	中国の早取りリンゴは記録的高値	124
61	チリが日本市場にレモンの売込み	125
62	米国のカキ販売状況	126
63	チリの果実輸出の増加はサクランボが牽引	127
64	米国でこの秋カキの新品種を発売	128
65	「2018 年リンゴ産業見本市」で東方諸国に焦点を当てた会議を予定	129
66	「初物ふじ」で欧州のリンゴ市場を席捲	131
67	中国市場で需要が旺盛だったカナダ産サクランボ	132
68	カナダ産サクランボが日本市場へ	133
69	香港の輸入果実市場	134

## 1. 世界のリンゴ市場(2)

#### FreshPlaza 電子版 (2019 年 1 月 18 日)



欧州のリンゴ生産量は史上最高となったことから、市場は安定している。というのも、現在、貯蔵庫にはリンゴが満杯の状態であるからだ。各国で豊作であったため、フランスの輸出業者は欧州北部向けの販売では苦戦を強いられている。ポーランドの輸出業者はアジア市場向けの輸出拡大を狙っている。中国では予測よりも生産量が少なかったため、需要が供給を上回っている状況である。従って、輸入の増加の余地がある。米国でも見込みよりも生産量は少なかったが、市場は安定している。南半球からはシーズン最初のリンゴの収穫時期を迎えている。今後、数週間で収穫量は増加の一途を辿る見込みだ。

#### 欧州の貯蔵量は2014年に匹敵

2018年12月1日時点のリンゴ貯蔵量は欧州全体で510万トンであり、豊作年であった2014年に匹敵する数字である。なお、不作であった2017年に比べると44.7%増加している。

#### アジア市場に活路を求めるポーランド

市場では一時の低価格から回復してきてはいるが、依然としてポーランド産リンゴの価格は欧州で最も安い。加工向けリンゴの価格はここ数ヶ月で2倍になったが、引続き加工業界からの需要は途切れていない。輸出面では、アジア市場への販売を強化している。「アジアの輸入業者は欧州産リンゴに対して強い興味を示している」と輸出業者は語っている。ある業者によると、アジアで人気があるポーランド産品種はロイヤルガラ、レッドジョナプリンス(Red Jonaprince)、ゴールデンデリシャス等とのことだ。欧州内でも、ポーランド産リンゴは価格の安さから人気がある。

一方、将来の展望としては、生産者中に有機栽培へ移行を目指すものが出ていることが報告されている。

#### フランスで市場は安定

現時点ではフランスのリンゴ市場は平穏である。業者によれば、価格の変動は小さく、むしろ低下気味だという。これはポーランド産やドイツ産の安いリンゴはが輸入されているからだ。このため、業者としては、自国産リンゴは貯蔵庫に保管し、需要が増加したときに販売しようと考えている。しかし、2月末までは貯蔵庫から出荷されそうもない。輸出に関しては昨年と様相が異なっている。ベルギー、ドイツなど北部欧州各国への輸出に関しては、これらの国でも豊作であったことから困難な状況に置かれているからだ。品質の面では、例えば品種ガラは夏が温暖であったため着色が優れ、総じて良好である。

#### イタリアでは貯蔵庫が満杯

世界リンゴ・ナシ協会が公表した2017/18年産のイタリアの生産量は170万トンであり、昨年よりも30%増 とのことであったが、過去5ヵ年の平均である220万トンよりは少ない数字である。しかし、イタリアでは貯蔵庫 は満杯の状態である。南チロル地方の商工会議所が毎月公表しているデータによると、2019年1月1日の 貯蔵量は103万トンで、2017年同日の106万トンに匹敵し、2018年同日の64万トンに比べると大きく上回っている。品種別には、多い順にゴールデンデリシャス(50万トン)、デッドデリシャス(16万トン)、ガラ(8万トン)、グラニー・スミス(7万トン)、ふじ(6万トン)、ブレイバーン(Braeburn)(5万トン)、クリプス・ピンク(Cripps Pink)(5万トン)である。

#### 中国では供給量不足で価格が上昇

悪天候に見舞われたため、過去に例を見ないほど国産リンゴの供給量が減少しており、近年になく価格が 上昇している。輸出市場では価格競争力に劣るため、輸出量は減少しており、従来の輸出分は国内市場に 向けられている。リンゴは春節における人気商品であることから、価格は高値を継続すると予測される。

中国はリンゴを多く輸入しているが、今年はポーランドからの輸入量が大幅に増加している。ポーランド産リンゴは価格が安く、価格競争力が強いからである。中国消費者は味の面でもポーランド産リンゴには満足しているようだ。米国産リンゴに対しては需要が大きいことから、関税が上乗せされる措置が講じたれたものの、相当程度の輸入量があった。消費者への浸透度は未だ十分進んでいないが、フランス産のリンゴも多く輸入されており、販売促進活動が活発に行われている。

#### 米国:ワシントン州では減収するも価格は変動せず

業者の中には、「ワシントン州の生産量は当初見込みより25%も少ないので落胆している」と述べるものがいる。減収の理由を特定するのは難しいが、冬の期間の降霜が理由の一つと考えられている。品種別にはグラニー・スミスの減収が最も著しい。ハニークリスプ(Honey Crisp)は栽培面積が増加したことにより、前年に比べて生産量は増加する見込みだ。

ミシガン州やペンシルベニア州では生産量が増加したが、市場を十分に満たすものではなかった。「ワシントン州はスーパーで販売される生鮮リンゴの中核をなすものだからだ」と業者は述べている。

需要は堅調であり、ガラ、ふじ、ピンクレディー、グラニー・スミスの需要は高い。一方、レッドデリシャスはガラに第1位の地位を譲り渡した。しかし、価格面では昨年と比べてほとんど変化はない。「有機リンゴの価格は高く推移しているが、慣行栽培のリンゴ価格は平均的水準であり、高いとは言えない」と業者は語っている。とはいえ、生産量の減少で今後は価格が上昇すると見込まれる。

#### ニュージーランドでは2月半ばから収穫開始

市場に出回るのは2月15日頃からと予測される。夏の日照が十分であったこと、降雨に恵まれたことから順調な生育が見込まれている。最初に出回る品種はコックス(Cox)であり、1週間後にはロイヤルガラが続く。前者は英国及び欧州市場向けであり、後者は世界中に輸出される。新品種ではチェリッシュ(Cherish、登録商標名)が昨年に比べて10倍の供給量が見込まれるようだ。同品種は世界中に輸出されるが、大部分はアジア市場向けである。また、青リンゴで甘さが特徴のミランダ(Miranda、登録商標名)も昨年の倍の供給量が見込まれている。

#### オーストラリアでは被害発生、中国市場開拓に努力

1月中には、ロイヤルガラ、シュミッテン(Smitten)、マイアップル(MiApple)などの早生品種の収穫が始まる。オーストラリア・リンゴ・ナシ会社(APAL)は、品種ピンクレディー(登録商標名)を中心にアジア市場での販売促進のための活動を行っている。しかし、残念ながら中国本土向けの輸出が実現するには時間がかかりそうだ。業界では1年間に3回の使節団を中国に派遣し、オーストラリア産リンゴを中国市場に輸出することのメリットを説明し、プロセスの加速化を要請してきた。

生産面では、夏期に悪天候に晒され、一部で被害が発生した。アデレード地方では降雹があり果実に損傷があった。ニュー・サウス・ウェールズ州のオレンジ郡では15分で20mm の豪雨があり、ネットを張っていない生産者は甚大な被害があった。

#### 南アフリカでは早生品種の収穫が始まる

リンポポ州北部の産地で、暑さに強い地元品種の収穫が既に始まっている。次いでロイヤルガラの収穫も続く。10日から14日後には、大産地である西ケープ州、ラングルーフ渓谷で産出されるロイヤルガラ等の品種が大量に出荷される見込みである。今シーズンは灌漑用水に不足がなかったため、生産見通しは楽観的である。

## 2.2018年中国の生鮮果実輸入に関する政策レビュー

#### Produce Report 電子版(2019年1月16日)

2018年、中国の生鮮果実の輸入は力強い拡大を続けた。11月までの生鮮果実及びナッツ類の輸入量は516万トンで、輸入金額は75.8億ドルに達した。この数字は、前年同期間と比較すると、数量で25.7%、金額で34.4%増加したことになる。2018年の中国の果実輸入に影響を及ぼした要因としては、中国消費者の果実需要の拡大、中国市場へのアクセスの拡充(輸入可能果実品目及び対象国の増加)、通関手続きの迅速化、継続する中国と米国との間の貿易摩擦、中国が新たに設定した残留農薬基準などがあげられる。

ここでは、2018年の中国の生鮮果実輸入に影響した主要な政策について論じることとする。

#### 市場開放は進展したもののテンポは鈍化

2018年には10種の果実の輸入が承認されたが、17種が承認された2017年よりも数は減少した。また、大部分は年の後半に承認された。2018年に輸入が承認された生鮮果実は、ウルグアイ産ブルーベリー、キルギスタン産メロン、アルゼンチン産ブルーベリー及びサクランボ、ラオス産バナナ、カンボジア産バナナ、フィリピン産ココナッツ、パナマ産パインアップル、スペイン産生食ブドウ、ポルトガル産生食ブドウであった。この内、中国で販売が拡大されると見込まれるのは、フィリピン産ココナッツ、ラオス産及びカンボジア産バナナ、スペイン産及びポルトガル産生食ブドウである。特にココナッツは、近年、中国市場で成長が著しい。ココナッツの主要な輸入先はタイであるが、輸入が始まった2013年には年間1,000ドルの輸入金額であったものが、2018年には2,559万ドルに急拡大している。ということは、フィリピンが販売を拡大する絶好の好機と得たと言えよう。

ラオスとカンボジアからは、これまでも闇のルートを通じてバナナが輸入されてきた。今回、正式に輸入が 承認されたことで、輸出業者は正規ルートを使って輸出することが可能となった。両国のバナナ栽培面積は、 中国本土のバナナ生産の拡大により縮小を余儀なくされてきた。しかし、本来、両国はバナナ栽培に適した 気象条件を持っていることから、高品質のバナナの生産が可能なのだ。

スペインは欧州で最大のブドウ栽培面積を誇っており、中国市場に販売する絶好の機会を得たと言える。というのも、中国市場へ生食ブドウを輸出している国の大半は、チリ、ペルー、オーストラリア、南アフリカなど南半球諸国であり、スペインとは季節が逆になり競合が避けられるからである。スペイン産生食ブドウに課せられる関税は13%であるが、同じ北半球の競合国となる米国には現在53%の関税が課せられていることから、この点でも有利と言えよう。

#### 米中間の貿易摩擦の高まりとこれに伴う果実輸出の打撃

米中間の貿易摩擦は2018年3月に始まり、その後、この年を通じて激化の道を辿った。数次にわたり、中国政府は米国の農産物に対して関税の引き上げ措置を講じ、この中には大部分の生鮮果実、乾燥果実、及びナッツが含まれた。

年末時点における中国が課した米国産果実及びナッツ関税措置のうち、主なものは以下の通りである。

- ・リンゴの関税を10%から50%に引上げ
- ・サクランボの関税を10%から50%に引上げ
- ・オレンジの関税を11%から51%に引上げ
- ・スモモの関税を10%から50%に引上げ
- ・ 設付きクルミの関税を25%から65%に引上げ
- ・ピスタチオの関税を5%から45%に引上げ
- ・アーモンドの関税を10%から50%に引上げ
- ・ヘーゼルナッツの関税を25%から65%に引上げ

米国の関連団体によると、2018年の生食ブドウの中国への輸出量は41.6%の減、リンゴは33%の減、サクランボは概ね半減、アーモンドは5%の減であったとしている。12月1日になり、両国は貿易摩擦の更なる拡大に歯止めをかけることに合意をしたが、上記の関税措置は引続き継続している。

#### 組織改革を通じた通関時間の短縮

2018年3月に始まった中国の行政組織の改革により、大きな成果が得られた。即ち、輸入検疫及び検査を担ってきた質量監督検験検疫総局(AQSIQ)が、税関を司る海関総署(GACC)に統合されたのである。検査、検疫、税関機能の統合及びこれに関連した輸入手続きの改革により、通関手続きに要する時間が短縮された。このことは、特に生鮮果実を輸入する際に大きな恩恵をもたらした。GACC は8月1日に通関と検疫の申告書を1つに統合した。そして、9月には、2018年末まで通関に要する時間を大きく削減する具体的目標を提示した。加えて、農産物や生鮮産品に関してはより迅速に通関が行えるよう、「グリーンチャンネル」を設けることとしたのである。

#### 安全基準の強化と残留基準を設定する農薬の種類の拡大

6月21日、中国当局は「国家食品安全基準-パラコートを含む43種の農業用化学物質の食品中の最大残留基準-」と称する全国レベルの基準(GB 2763-2018)を公表した。この内、7つは、主に果樹及び野菜用として利用される農薬であり、残留許容基準として設定されたものである(その他の化学物質は主に家畜残留する物質として設定されている)。7つの農薬は、フルトリアホール、フルオピコリド、マンジプロパミド、トリフロキシストロビン、スピネトラム、エトキサゾール及びフェンピロキシメートである。

この新基準は12月21日から発効し、中国に輸入される全ての果実に適応される。中国へ輸出する業者は、輸入業者と連携し、できるだけ早く新基準を理解し、準拠しているか否かを確認する必要がある。

加えて、土壌汚染の防止と汚染修復のための新たな制度も2019年の初めに施行された。この制度も中国 国内で農産物を生産する全ての関係者に影響を及ぼすことになっている。

著者:Dan Siekman

## 3. ニュージーランドで開発された果肉の赤い遺伝子組換えリンゴ

FreshPlaza 電子版(2019年1月9日)



植物・食品研究所の Allan 教授とその研究チームが開発した果肉の赤いリンゴ は物議を醸している。というのも、ニュージーランド国内では試食をすることができないからだ。食べるためには果実を米国に輸送しなければならず、その際、種が残らないように芯がくりぬかれた。そして三重の袋に入れられ、封がされた。

植物検疫証明書によると、研究所があるオークランドのマウントアルバートの温室から空港に移送され、米国に空輸するという条件が付けられた。教授のチームは貴重な貨物をサンフランシスコに輸送したが、そこには味覚試験を行う50名が待ち構えていた。

遺伝子組換えの手法がとられたため、植物・食品研究所の温室は、規則により内部から外に植物体が流出できないよう、厳重に密閉された環境下で栽培が行われた。この研究には6年の歳月をかけており、教授は育成したリンゴが成功を納めるか残念な結果に終わるかに関し、大いに心配していた。

温室内では食事は禁止されており、コーヒー一杯を飲むのもできないので、リンゴを食べることなどは問題外の行為である。温室外で食味試験を行うことに関し、これまで2年にわたり当局に申請をしてきたが、いずれも却下された。唯一の解決策は、生鮮遺伝子組換え食品を食べることが許されている米国に輸送することであった。

教授によると、試食は成功に終わったとのことである。目隠しされた味覚試験者は、それがロイヤルガラであると識別し、加えて、風味の面で優れていると評価をしたのである。

ニュージーランドのリンゴとナシの輸出額は2017年には7億ドルに達し、業界は2022年までに10億ドルに拡大することを目標に掲げている。

ニュージーランドではジャズ(Jazz)のような新しいタイプのリンゴが欧州市場で売上を伸ばすのに貢献している。12月下旬には植物・食品研究所が開発した新品種を発表した。20年間の育種プログラムにより育成したダズル(Dazzle)であり、果実が大きく甘い品種であることから、アジア市場で人気が出ることが期待されている。

ウェブサイトの Stuff.co.nz が報じるところによると、教授の育成した今回のリンゴは大変に見事であり、外観が目新しいことから、販売に当たり有利であることは明らかだとしている。また、えび茶色の果皮と赤みを帯びた果肉により、他のどんな商業品種とも異なるリンゴだと評している。

## 4. 有機農業の推進と米国の新農業法

#### The Packer 電子版 (2019 年 1 月 15 日)

2018年12月20日にトランプ大統領が署名を行った米国新農業法に対し、有機農業界は大いなる称賛を送っている。

カリフォルニア州サンタ・クルーズに本拠を置く、カリフォルニア認定有機農業者会(CCOF)は、「今回の法律では有機農業に対する画期的な措置が講じられた」と声明を発表した。

「新法では、先ず、有機農業研究に必要な資金を支出することが義務づけられ、世界の有機農産物サプライチェーンの監視が強化された。また、有機認証コストを負担するための資金の支出が定められ、有機農業に関するデータ収集のための資金も認められた」と説明している。

CCOF は2017年に制定された有機農業研究法の共同提案者であったカリフォルニア州選出の下院議員 Panetta 氏に特別の賛辞を送っている。

CCOF は、「2017年の有機農業研究法は新農業法の中に組み込まれ、2023年までの間、有機農業研究 及び技術普及に対する予算措置が強化されて5,000万ドルまで支出することが認められた」と説明している。 また、この措置により、「認証される有機農法に限定された研究資金が確保されるともに、有機農業を勉強 する学生に対する就業機会の提供、教育訓練も可能となった」とも表明している。

CCOF は、新農業法における有機農業推進のための施策として、以下の内容が含まれていると整理・説明している。

- ・米国有機農業プログラム(National Organic Program)に対する提供資金の増額。NPO が行う国際有機農産物追跡システム及びデータ収集システムの近代化のための支援。これらを通じて、米国有機農業業界の発展と国際的な有機農産物サプライチェーン監視システムの強化が実現できる。
- ・有機認証コストを負担することによる生産者への支援。この支援を通じ、有機認証に要する経費の75%が助成される。これは、小規模生産者や新たに有機農業を始めようとする農業者にとって特に重要な役割を果たすことになる。
- ・「有機農業生産及び市場データ構想」への資金提供。これを通じ、有機農産物の価格設定、生産物の追跡、 輸出促進に関する情報収集体制が整備される。ここで得られるデータは公的な有機農業に関する唯一のも のであり、有機農産物市場の安定にとっては極めて重要となる。

「以上のような優先順位の高い事項が認められたことは、年間500億ドルに上る有機農業界にとって大きな勝利である」と CCOF は表明している。

## 5. 海外が見る日本の果実輸入



#### ASIAFRUIT 電子版 (2019 年 1 月 11 日)

2018年の日本のキウイフルーツの輸入量は史上最高となる見込みで、初めて10万トンを超えた。東京青果が示すデータによると、1月から11月までの輸入量は104,949トンで、2017年に記録した92,681トンを14%上回るとのことであり、日本の果実輸入の中で、キウイフルーツは第3位に躍進したようだ。

この内、ニュージーランドのゼスプリから輸入される量は100,628トンであり、前年同時期よりも19%上回っている。

日本では果実消費量が減少し、果実輸入量も

低下傾向にある中で、キウイフルーツの輸入の増加は特徴的である。輸入業者によると、昨年9月の販売量は好調に推移し、前月を204%上回り、価格も過去10年で最高を記録したそうだ。一方で、果物全体の輸入量は過去10年で最低の水準であったことから、キウイフルーツの尋常でない人気が際立っている。

東京青果によると、10月の輸入量も驚くべきもので、前年同月を73%上回ったそうだ。また、11月の輸入量も56%増加した。

日本の果実輸入会社によると、キウイフルーツの輸入量の増加はニュージーランドのゼスプリ社の活動の 賜であるとのことだ。同社の話では、「キウイフルーツは日本で輸入が増加している数少ない果実の一つであ る。輸入の99%はゼスプリ・インターナショナルにより行われているが、その強みは、一貫して高品質な果実 を安定的に供給し、加えてマーケティング活動を強力に進めていることである。毎年、9千店舗のスーパーで 販売促進活動が行われている。これが、2018年に日本の輸入量が過去最高を記録した要因である」と語っ ている。

主にメキシコから輸入されているアボカドも日本で輸入が増加している果物の一つである。東京青果によると、2018年1月から11月までの輸入量は、前年を23%上回る68,131トンであった。11月には前年を40%上回り、10月も前年を20%上回る数量が輸入された。

先の果実輸入会社によると、「日本人はアボカドを食べることに益々喜びを見出している。消費者はネット情報からだけでなく、小売店からもアボカドを美味しく食べるための情報を入手している。アボカドはレシピを紹介するウェブサイトであるクックパッドの中で最も人気がある生鮮食材となっている」と説明している。

一方、輸入生食ブドウの増加にも貿易業者は驚いている。11月には輸入量が50%も急増した。1月から1 1月までの輸入量も前年を16%上回る34,205トンに達した。

米国農務省によると、生食ブドウの輸入先は、第一位が米国で35%を占めており、次いでチリが33%、オーストラリアが27%を占めている。忙しい日本の消費者にとって、簡単で食べやすい健康的な食品として、種無しブドウは引っ張りだこだとのことである。

## 6. 米国新農業法で果実・野菜対策が充実

#### The Packer 電子版 (2018 年 12 月 20 日)

2018年12月20日、トランプ大統領が新農業法案の調印を行ったが、果実・野菜業界は新法の制定は業界に恩恵をもたらすものとして大いに歓迎している。

2018年農業法の調印は、アイゼンハワー・エグゼクティブオフィスビルおいてトランプ大統領により行われ、多くの上下両院議員、行政責任者、業界代表者が出席した。

パーデゥー農務長官は、調印に当たり、「新農業法は米国農業に対するクリスマスプレゼントである。議論が始まった2017年の早い段階から、私はこの法律は米国農業に革命をもたらすのではなく、進化をもたらすものだと確信してきた。そして遂に実現した」と声明を発表した。

新農業法を受け、業界の指導者は、(実行中の)重要なプログラムを継続して進めることができることを評価している。米国リンゴ協会の会長兼最高執行責任者のBair,氏は、「法律のお蔭で重要なプログラムの予算が拡充された」と声明を発表している。

生鮮食品生産協会連合の公共政策担当副会長である Guenther 氏は、「2018年農業法は生鮮食品生産者にとって大きな勝利である。生産者、消費者にとって大きな恩恵をもたらす法案の成立に尽力してくれた上下両院の農業委員会議長及び有力議員に謝意を伝えたい」との声明を出している。同時に、この声明の中で、特定農作物(果実・野菜等)に対する優遇措置を実現するために組織された120以上の関係団体が構成員となった「特定作物農業法連盟」の活動に大いなる賞賛を送っている。

連盟の構成員である全国バレイショ協議会も共和・民主両党の議員を称賛し、同協議会の副会長兼最高経営責任者の Keeling 氏は、「特に上院の Roberts 議員、Stabenow 議員、下院の Conaway 議員、Peterson 議員のリーダーシップには感謝申し上げる。彼らの活躍は大統領の調印により報いられた。この素晴らしい新農業法案が一日も早く実効に移されるよう、農務長官に協力したい」と語っている。

生鮮食品生産協会連合及び全米リンゴ協会によれば、特定農作物に関連する新法の主な内容は次の通りである。

- ・特定農作物の競争力を強化するための資金(Specialty Crop Block Grant Program)の支出額を引続き毎年8,500万ドル維持する。
- ・特定農作物に関する研究開発資金を引続き毎年8,000万ドル提供することに加え、新たにカンキツ・グリーニング病研究に必要な資金を2,500万ドル提供する。
- ・果実・野菜に関する病虫害対策調査研究費の規模を維持する。
- ・低所得者向けの食料支援対策、栄養補給対策を拡充する。
- 連邦政府が実施中のリンゴを含む作物保険の資金を維持する。
- ・輸出促進のためのプログラムとして、市場アクセス改善のための2億ドルの資金及び特定農産物に対する技術支援策としての900万ドルの資金を維持継続する。
- ・他国から病虫害の侵入を防止するための資金として、毎年7,500ドルを支出する。
- ・学童の肥満を防止するため学校に生鮮果実・野菜を軽食として提供するプログラム(Fresh Fruit and Vegetable Snack Program)を維持継続する。
- ・連邦政府が主導する「バイ・アメリカン」の一環として、米国産食品購買活動を強化する。

Guenther 氏は、「米国農務省や他の業界団体と協力して新農業法が円滑に推進されることを期待している。 議会と大統領がこの法律を承認したことにより、果実・野菜やその他の特定農産物(ナッツ、ハーブ、花など) は、経済的にも食料供給という意味でも益々重要となってきたことが確認された」とコメントしている。

## 7. リンゴ新品種コズミッククリスプの販売促進活動を始動

Good Fruit Grower 誌(2018 年 12 月号)



ワシントン州立大学と関係会社は、協力してリンゴ新品種 WA38 をブランド名コズミッククリスプ(Cosmic Crisp) として世に出すに当たり、5年間で1,070万ドルを費やして販売促進活動を行うことを契約した。販売促進活動では、小売販売開始を前に、消費者に興奮と関心を呼び起こすことを狙いとしている。

この品種は、米国内では、少なくとも今後10年間はワシントン州内だけでしか生産することが許されない。 この取組みには、大学の研究者、生産者、出荷業者、販売会社、小売業者、消費者まで多くの人達が関与している。未だ市場において評価が確立していない品種を栽培する生産者にとっては、これ以上に財政的なリスクが高いことはないだろう。

これまでのところ、ワシントン州の生産者は2017年以降、670万本のコズミッククリスプを植栽した。商業的生産が行われる最初の年となる2019年には、まだ17.6万箱(1箱42ポンド)しか出荷は見込めない。しかし、出荷量はその後、以下のように着実に増加する予定である。

- •2020年 170万箱
- •2021年 550万箱
- •2022年 1,050万箱

ワシントン州立大学がコズミッククリスプの販売を管理、監督するために契約した PVM 社の社長の Brandt 氏は、「急速に生産量が増加する見込みなので販売活動を早急に進める必要がある」と語っている。

同氏は、業界の推計では、生産者は最初の2年間だけで既に5億ドルをこの新品種のために投資している と説明している。だから、販売促進活動に当たっては、消費者と向き合った取組みが何よりも大事だと考えて いる。「我々は商品価値を高めるために懸命の努力をする。そうすることで全ての利害関係者に利益を還元 することができる。ある日、突然、他の品種と何ら変わらないリンゴになるような真似は避けなければならない。 従って、堅実なスタートを切ることが大切だ」と語っている。

過去数ヶ月をかけ、PVM 社はマーケティング計画の枠組を作成した。そして、この枠組はワシントン州リンゴ出荷業者のマーケティング委員会及びワシントン州立大学の幹部を通じて大学の知的所有権委員会へ報告された。この計画には関係者の多くが賛同しており、大学も11月には承認する見込みのようである。

大学のビジネス開発担当である Tsui 氏によると、大学と PVM 社は予算の詳細を公表することは拒んでいるそうだが、1,070万ドルのかなりの部分は5年間の後半に支出される模様だ。財源は苗木の販売代金から徴収されることになっており、既に400万ドルが確保されているという。

Tsui 氏は、「PVM 社により展開されようとしているマーケティング計画と業界の管理、監督業務に関しては

大変満足している。これまでは皆さんから頂いた金は品種開発のために使われた。つまり、リンゴ業界関係者のための金であった。一方、マーケティング計画のために既に400万ドルが集まった。関係者の成功を支援するためである」と語っている。また、業界のマーケティング委員会は、PVM 社の活動に対して、外部からの幅広い意見が反映されるよう、第3者による小委員会を設けることとしている。

さらに、「PVM 社には販売活動の方向性に関し、ある程度の自由度を持たせている。裁量権は与えているが、業界のためには抑制と均衡という面も必要だ」とも語っている。これまでのところ、業界からは幅広い支援を受けている。「過去2ヶ月にわたり、業界からの意見の集約に努めてきた。もし、酷い不満や異論があった場合は、適切に対処しなければならないが、これまでのところ耳にしていない。我々としては、可能な限り高い値段で販売できるよう、最大限の努力を傾注している」と述べている。

Brandt 氏によると、未だどの程度の販売価格に落ち着くのか、自分自身の考えは固まっていないそうだ。 何故、高価格を期待しなければならないかについて、「全ての生産者が採用している新しい栽培技術は、コズミッククリスプだけでなく他の品種を生産するに際してもコストが高くなっているからだ」とし、「ただ幸いな点は、コズミッククリスプはハニークリスプのように維持管理にコストがかからない」と話している。

#### 比類の無い品種か?

ワシントン州立大学は品種エンタープライズとハニークリスプを交配して WA38 を育成した。数年間のほ場試験を経て、PVM 社に品種登録及び品種に関する権利保護、苗の増殖及び販売、ブランド化、マーケティングに関する管理、監督業務を委託した。ワシントン州内の出荷業者や販売業者はコズミッククリスプの出荷、販売を行う場合は認可を受けることができる。認可を受けた生産者は、認可を受けた出荷業者にしか出荷はできないし、認可を受けた出荷業者は、認可を受けた販売業者とだけしか取引することができない仕組みとなっている。

PVM 社でマーケティングを指揮する担当部長の Grandy 氏は、新品種の増産がこれほど急速に見込めるケーズは初めてであると語っている。「これまでの経験では、新品種のリンゴの販売を前に、これ程多額の宣伝活動などの支出はしないものだ。我々は既にコズミッククリスプの話題を広めており、先々高価格で販売が可能となるよう、多くのメディアと接触している」と話している。

既に、ニューヨークタイムズ、米公共ラジオ局のような新聞、オンラインメディアまでコズミッククリスプの話に食いついている。Grandy 氏によれば、PVM 社は経験豊富なマーケティング会社や宣伝会社と提携をしており、消費者調査、従来型や新しいメディアを活用した販売促進活動、新しい技術を用いたパッケージに関する「画像識別技術」の導入などを進めようとしている。「様々な会社がモバイル機器を活用した技術を検討している。モバイル機器は、パッケージや小売業者と消費者と結びつける良いツールだと期待している。まだ決まったわけではないが、本気で検討をしており、マーケティング計画の中で重要な役割を果たすと認識している」と話している。

ただ、消費者が関心を持つ「健康」は別の視点で対応する必要があるとも語っている。「真正面から消費者の健康のことを考えた取組も積極的に進めたい。そして、消費者により多くのリンゴを購入してもらいたい。既に消費者向けの素晴らしいアイデアを持っており、心待ちにしている」と述べている。

Brandt 氏は、結局のところ、販売業者は小売業者にリンゴを売るだけだが、消費者はリンゴを選択することができる存在だとした上で、「最初から我々は消費者との間に立ち、最高の利益が産み出せるような努力をする必要がある。つまり、消費者に寄り添うことが必要だと信じている」と語っている。

## 8. カリフォルニアのカキのシーズンは終了

#### FreshPlaza 電子版 (2018 年 12 月 10 日)



カリフォルニア州のカキのシーズンは終了に近づいている。生産者からの情報では、 今年は着果数が少なかったが、その割に 市場価格も高くなかったので、課題が多かったとのことだ。今年は隔年結果の裏年に 当たるが、生産量が減少したのは他の理由 もあるという。特に開花期に低温に遭遇したことが大きな要因だとしている。

カリフォルニア州 Marysville の Maxey Farms 社の Steve Maxey 氏の話では、「カキの収穫はほぼ終了した。着果数が大変少なかったので、収穫期間は短かった。カキは隔年結果するので、収量の少ない年と多い年がある。しかし、今年は特に収量が

少なかった。様々な要因があるが、特に開花期に低温であったことが響いているようだ」とのことだ。

#### 品質は高かったのに価格は伸びず

生産者によれば、品質も良く、サイズも適切であり、出荷量が減少したにもかかわらず、価格は伸びなかったという。需要が減少したため価格が抑えられたとも考えている。中国による米国産果実に対する関税の上乗せが(間接的に)影響している可能性もある。生食ブドウなどが国内市場に多く出回ったことが、秋果実の需要を減退させたのではないか、とも考えられている。いずれにせよ、Maxey Farms 社にとっては課題の多い年であった。

同氏は、「我が社の果実の品質とサイズは素晴らしかったが、市場は惨憺たるものであった。今年はカリフォルニア産の多くの果実で市場価格が低迷した。このことは、コスト、特に労働力コストが上昇している中で厳しい問題だ。今年については需要も低迷した。以前は他の果実も栽培していたが、今はカキだけを栽培している。カキの経営は毎年厳しくなっており、事業から撤退することも検討している」と語っている。

#### 人気のある富有

カキの主要な品種は富有と蜂屋である。同氏によると、消費者に人気のあるのは富有だという。同社で生産されるカキは北米全土に供給されているそうだ。

「我が社では富有と蜂屋を生産しているが、富有の方が人気は高い。出荷先はカナダ、米国全土であり、2 5ポンド入の箱を用いている。少量ではあるが平積み(1 層)の箱でも出荷しているが、それはあまり需要が旺盛というわけではない」と説明してくれた。

著者:Dennis Rettke

## 9. 2018/19 年 世界の落葉果樹需給(リンゴ、生食ブドウ、ナシ)

#### 米国農務省海外農業局ホームページ(2018年 12月6日公表)

#### **<リンゴ>**

世界のリンゴ生産量は8年ぶりの低水準に落込み、前年を560万トン下回る6,860万トンと予想される。これは中国で気象災害により大幅に減収するためであり、EUで増産が見込まれるものの相殺できないからである。輸出量は中国とイランで減少するため、600万トンに低下するが、輸入量は前年と同程度の580万トンと見込まれる。

**中国**の生産量は前年を25%下回る3,100万トンと予想され、9年ぶりの低水準である。これは主要な生産地を襲った4月の厳しい霜害によるものであり、加えて、5月の豪雨と雹害で生産量が更に減少した。輸出量は前年を18%下回る110万トンと見込まれが、輸入量は0.7万トン上回る7.5万トンと予測される。

EUの生産量は、昨年春の厳しい霜害から回復し、冬期が温暖で経過したことから、前年を40%上回る1,400万トンの新記録を達成すると予測される。生産量が回復したため、輸出は前年を80%上回る140万トンと予測されるが、輸入は49.3万トンにとどまる見込みだ。

米国の生産量は、最大産地のワシントン州で減少するものの、他の産地で増加するため、全体では前年の同程度の500万トンと予想される。農業統計局が業界動向を調査し、2018年8月に公表したレポートによると、輸出量は前年を15万トン下回る85万トンと予想している。これは、メキシコが報復措置として6月5日に20%の関税を上乗せしたことなどによる。輸入は、国内生産量に変動はないものの、カナダ、ニュージーランドからの輸入が増加するため、前年を1.6万トン上回る15万トンと見込まれる。

ロシアの生産量は、前年を14.3万トン上回る150万トンと予測される。これは商業的生産量が10万トン以上増加し、非商業的生産や家庭内での生産量を上回るためである。政府は、新植に対する助成から果樹園の維持管理への支援へ転換しつつある。商業的生産量が非商業的生産量を連続して上回るのは2008/09年以来である。生産量の増加で輸入量もやや減少し、81.5万トンと予測される。

**チリ**の生産量は、前年と同程度の130万トンと良くされる。 栽培面積は、サクランボやナッツ類などの高収益品目への転換が進んでいるため、6年連続して減少している。 輸出量は3万トン減少し、72万トンと予測される

**メキシコ**の生産量は3年連続して減少し、前年を5万トン下回る66万トンと予測される。コアウイラ州、ドゥランゴ州で晩霜害に遭遇したためである。生産量の現象にもかかわらず、輸入量はやや減少し、27.5万トンと予測される。これは米国に対する上乗せ関税の影響とみられる。

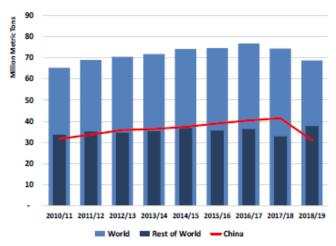
アルゼンチンの生産量は、単収の増加から、前年をやや上回る53万トンと予想される。しかし、栽培面積は引続き減少傾向である。生産コストの増加と低い所得により、生産者は収益性の高いブドウなどへの転換を進めているためである。生産量の増加で、輸出量は10万トンに増加すると見込まれる。

ニュージーランドの生産量は引続き増加傾向であり、前年を1.5万トン上回る58万トンと予測される。これは生育環境が良好であったことと、新植果樹園が結果樹齢に達したためである。栽培面積の増加率は、毎年3~4%と推測される。また、栽培面積のやく半分が、クラブ制リンゴ又は知的所有権で保護されたリンゴもしくは商標登録されたリンゴと推計される。生産量の増加により、輸出量は過去最高の39万トンと見込まれる。輸出先は記録的な生産量であるEUからアジアにシフトしている。

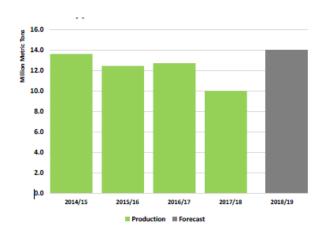
**南アフリカ**の生産量は、天候が順調に推移したこと、水の供給が潤沢で干ばつから回復したことから、前年を3.6万トン上回る85万トンと予測される。輸出量は品質が改善されれば前年を2.1万トン上回る55万トンと予測される。

トルコの生産量は、冬期、開花期、着果期の生育条件に恵まれたことから、300万トンに増加すると見込まれる。輸出量もイラク向けを中心に、前年を3.1万トン上回る22万トンと予測される。

**インド**の生産量は、気象災害から回復し、前年を40万トン上回る230万トンと予測される。輸入量は、中国からの輸入を引続き禁止しているため、22.5万トンに減少すると見込まれる。



世界のリンゴ生産量の推移(棒グラフ(薄い色):世界の生産量、棒グラフ(濃い色):中国を除く生産量、折れ線グラフ:中国の生産量、単位:百万トン)



EUのリンゴ生産量は過去最大の見込み(単位:百万トン)

#### <生食ブドウ>

世界の生産量は、中国とトルコで気象災害に見舞われたことから。前年を120万トン下回る2,220万トンと予測される。このため、輸出量も前年並みの300万トンと予測される。輸入量は米国及びロシアで輸入需要が減少することから、前年をやや下回る290万トンと予測される。

**中国**の生産量は、河北省と陝西省で厳しい霜害に見舞われたことから、前年を100万トン下回る950万トンと予測される。このため、輸出量も4.1万トン減少し、22万トンと見込まれる。生産量の現象にも関わらず、米国に対して報復関税を課したことから、輸入量は20万トンに減少すると見込まれる。米国は北半球の中で中国に対する最大の輸出国である。

トルコの生産量は、8月にエーゲ海沿岸で豪雨に見舞われたため、前年を22万オンした回る190万トンと予測される。このため、輸出量もロシア、EU向けを中心に4.5万トン下回る23.5万トンと予測される。

**EU**の生産量は、最大の生産国であるイタリアで、昨年の豪雨による被害から回復したため、前年を10万トン上回る160万トンと予測される。栽培面積は、消費者需要の強い種無し品種への転換が進んでいるため、再び増加すると予測される。過去10年間栽培面積が減少してきたが、昨年はやや増加に転じた。域内で生産された果実が出回るため、輸入量はほとんど変化がなく、輸出量は前年と同程度である。

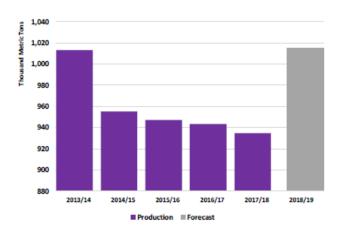
**米国**の生産量は、生育条件に恵まれたことから、前年を8万トン上回る過去最高の100万トンと予測される。 農業統計局が業界動向を調査し、2018年8月に公表したレポートによると、生産量が増加し、品質が高いに もかかわらず、輸出量の増加は少なく34万トンであり、大部分は旺盛な国内供給に振向けられたようである。 国内生産量が多いことから、輸入量は3.8万トン減少し、58万トンと見込まれている。

ペルーの生産量は、昨年の豪雨被害から回復し、3.5万トン増の65.8万トンと予測されており、増加傾向は 今後も続くとみられる。生産増から輸出も北半球向けに増加し、8万トン増の36万トンと予測される。

**チリ**の生産量は、栽培面積がやや減少していることから、前年を1万トン下回る90.5万トンと予測される。輸出量も連動し、前年よりやや少ない72万トンと予測される。

**ロシア**の生産量は、栽培面積に変動はないものの、前年をやや上回る3.1万トンと見込まれる。輸入量は、 南半球産の販売価格が高いことから、需要が伸びず、前年を3.5万トン下回る35.2万トンと見込まれる。

**インド**の生産量は、降雨が遅れ選定作業に影響が出たことから、前年を10万トン下回る270万トンと予測される。しかし、EUで冬期及び早春期のインド産ブドウに対する需要が強いことから、輸出量は前年をやや上回る18万トンと予測される。



米国の武装生産量は過去最大(単位: 千トン)

#### くナシン

世界の生産量は、中国で4月に霜害に見舞われたことから、前年を310万トン下回る1,940万トンと予測される。輸出量もやや減少し、180万トンと見込まれるが、輸入量は前年と同程度の170万トンと予想される。

**中国**の生産量は、主産地の河北省と山東省で4月の開花期に厳しい冷気に見舞われたため、前年を20%下回る1,310万トンと予測される。このため、輸出量も前年を20%下回る43万トンと見込まれるが、輸入量はやや増加して1万トンと予測される。

**EU**の生産量は、オランダ、ポーランドで生育条件に恵まれたことから、前年を14万トン上回る250万トンに回復すると予測される。このため、輸出量も中国向けを中心に2万トン増加し、36.5万トンに達すると予想される。中国向け輸出は、報復関税を課した米国産にとって代わり、シェアを伸ばすと見込まれる。輸入は、行く内産が増加することから減少し、18.5万トンと予測される。

**米国**の生産量は、カリフォルニア州産が開花期に冷気に増遇したことと火傷病の影響で減少が見込まれるが、ワシントン州、オレゴン州で増加することから、全体では前縁と同程度の66.7万トンと予測される。農業統計局が業界動向を調査し、2018年8月に公表したレポートによると、輸出はメキシコの需要が旺盛なことから前年をやや上回る12.5万トンと見込まれ、輸入はアルゼンチン産が増加することから8.5万トンに増加すると予測される。

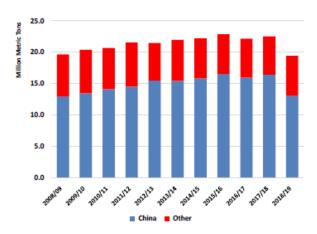
アルゼンチンの生産量は、栽培面積が減少を続けているものの、単位面積当たりの収量が増えるため、前年を3万トン上回る58万トンと予測される。輸出はブラジル等の需要が強いことから、前年を1万トン上回る33万トンと予測される。生産量と輸出量は、過去数年減少傾向にあったが、この2年は増加を続けている。しかし、業界にとっては生産コストが増加し、投資への魅力が減退している。

**チリ**の生産量は、前年を1万トン下回る12.5万トンと予想される。単位面積当たりの収量に変動はないが、 栽培面積が減少しているからである。輸出量は前年を0.5万トン下回る12.5万トンと予測される。

**南アフリカ**の生産量は、生育条件に恵まれたためと、灌漑用水が確保できたことから、前年を上回る42万トンと予測される。栽培面積は、干ばつから解消されつつあるため、増加傾向にある。2018/19年以前は、8

年のうち7年は栽培面積の増加を記録した。輸出量は前年を1万トン上回る24万トンと見込まれる。

**ロシア**の生産量は、前年と同程度の21.1万トンと予測される。しかし、生産量の95%は非商業的生産によるものであり、小売業者としては販売用のナシは輸入に頼っている。加えて、ナシは気象条件に敏感であるため、国内の商業的生産者はナシからリンゴ栽培にシフトをしつつある。ロシアの消費者はより安価な他の果実へ需要をシフトしているため、小売業者としては、輸入量を前年より少ない27万トンと予測している。



ナシの生産量は過去11年で最も低い水準(単位:百万トン)

世界のリンゴ需給 (単位:千トン)

	世界以	リンコ	おねし	型位:十	<u> </u>				
	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19			
						(12月予測)			
生産量									
中国	36,300	37,350	38,900	40,393	41,390	31,000			
EU	11,865	13,636	12,453	12,723	10,014	14,009			
米国	4,690	5,067	4,521	4,957	5,018	5,048			
トルコ	2,930	2,289	2,740	2,900	2,750	3,000			
イラン	2,413	2,500	2,799	2,799	2,799	2,799			
インド	2,498	2,498	2,520	2,258	1,920	2,300			
ロシア	1,417	1,409	1,311	1,509	1,360	1,503			
チリ	1,310	1,210	1,335	1,310	1,300	1,250			
ウクライナ	1,085	1,180	1,099	1,099	1,099	1,099			
ブラジル	1,379	1,265	1,049	1,049	1,049	1,049			
その他	5,735	5,688	5,732	5,680	5,532	5,588			
合 計	71,621	74,091	74,459	76,677	74,230	68,645			
			鮮消費量						
中国	31,540	33,470	33,826	34,682	35,378	27,025			
EU	7,353	7,781	7,544	7,749	6,532	7,787			
米国	2,498	2,702	2,538	2,787	2,625	2,838			
トルコ	2,639	2,064	2,532	2,576	2,452	2,671			
イラン	2,207	2,213	2,365	2,566	2,075	2,581			
インド	2,662	2,681	2,311	2,231	1,919	2,213			
ロシア	2,116	1,803	1,646	1,583	1,807	2,203			
その他	9,838	9,975	10,382	10,280	9,829	9,817			
合 計	60,852	62,687	63,144	64,454	62,617	57,134			
	0 700		加工量	0.04=					
EU	3,562	4,139	3,601	3,817	3,247	5,345			
中国	3,850	3,200	4,000	4,400	4,800	3,000			
米国	1,562	1,492	1,393	1,473	1,519	1,510			
チリ	295	332	320	310	306	291			
アルゼンチン	250	300	230	232	202	191			
カナダ ニュージーランド	149	151	142	172	157 $121$	160 120			
その他	114 869	161 805	141 778	108 859	687				
	10,651	10,580	10,605	11,371	11,037	404 11,020			
合 計	10,651	10,080	輸入量	11,571	11,057	11,020			
ロシア	1,254	820	746	657	859	815			
EU	622	400	451	424	528	493			
ベラルーシ	278	724	657	544	223	400			
メキシコ	227	314	218	267	287	275			
イラク	189	202	296	238	307	230			
インド	197	204	202	370	249	225			
カナダ	222	217	230	221	222	220			
エジプト	158	201	267	145	72	190			
バングラデシュ	148	151	204	245	232	185			
サウジアラビア	119	150	162	174	154	175			
その他	2,571	2,714	2,929	2,895	2,794	2,634			
合 計	5,983	6,099	6,362	6,180	5,928	5,842			
Ц Н	0,000	0,000	輸出量	0,100	0,020	0,012			
EU	1,573	1,792	1,590	1,488	762	1,370			
中国	934	748	1,151	1,381	1,280	1,050			
米国	843	1,037	778	868	1,008	850			
チリ	820	628	765	716	750	720			
南アフリカ	382	466	511	553	529	550			
ニュージーランド	308	329	347	345	375	390			
トルコ	193	128	109	215	189	220			
イラン	206	288	435	233	725	218			
セルビア	143	153	233	239	156	190			
アルゼンチン	144	106	91	78	90	100			
その他	460	868	492	394	392	378			
合 計	6,006	6,542	6,502	6,510	6,255	6,036			
年産は米国、メ									

年産は米国、メキシコは8月 $\rightarrow$ 7月、その他北半球は7月 $\rightarrow$ 6月 南半球は翌年の1月 $\rightarrow$ 12月

世界の生食ブドウ需給 (単位:千トン)

	世界の生食ブドウ需								
	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19			
	2010/11	_011110		2010/11	2011/10	(12月予測)			
			生産量						
中国	8,085	8,800	10,000	10,100	10,500	9,450			
インド	2,585	2,823	2,590	2,784	2,800	2,700			
トルコ	2,200	2,350	2,005	2,350	2,120	1,900			
ウズベキスタン	1,441	1,579	1,580	1,580	1,580	1,580			
EU	1,816	1,638	1,753	1,718	1,453	1,557			
米国	1,013	955	947	943	935	1,015			
ブラジル	1,454	1,498	985	985	985	985			
チリ	1,055	939	868	917	915	905			
ペルー	500	500	540	611	623	658			
南アフリカ	252	291	285	334	308	330			
その他	1,124	1,212	1,164	1,058	1,143	1,072			
合 計	21,525	22,586	22,716	23,381	23,361	22,151			
			上鮮消費量						
中国	8,212	8,899	10,022	10,080	10,454	9,430			
インド	2,448	2,752	2,220	2,356	2,394	2,301			
EU	2,241	2,131	2,280	2,279	2,059	2,166			
トルコ	1,997	2,094	1,831	2,178	1,841	1,666			
ウズベキスタン	1,422	1,521	1,474	1,483	1,454	1,510			
米国	1,117	1,113	1,150	1,189	1,217	1,255			
ブラジル	1,460	1,495	982	964	973	970			
ロシア	407	389	346	228	412	382			
韓国	329	324	293	294	293	309			
ペルー	273	222	231	294	336	296			
その他	1,605	1,531	1,563	1,561	1,684	1,584			
合 計	21,509	22,471	22,390	22,906	23,117	21,868			
		20.4	輸入量	0.40	20.	200			
EU	577	604	615	649	685	688			
米国	519	547	530	593	618	580			
ロシア	349	302	256	213	387	352			
香港	210	215	232	229	250	225			
中国	231	226	249	237	215	200			
カナダ	180	175	170	176	180	181			
タイ	87	89 48	131	157	143	120			
インドネシア	46 77	48 69	49 67	68 76	81 81	85 80			
メキシコ ベトナム	51	51	76	14	100	75			
その他	329	360	369	397	370	358			
合 計	2,656	2,686	2,744 輸出量	2,807	3,110	2,944			
<b>⊄</b> 11	790	761		791	791	720			
チリ ペルー	728 228	761 280	688 297	731 311	731 276	720 360			
	416	389	328	347	336	340			
米国 南アフリカ	226	264	$\frac{328}{255}$	304	280	300			
ドルコ	204	$\frac{264}{257}$	$\frac{255}{175}$	304 173	280	235			
中国	104	$\frac{257}{127}$	$\frac{175}{227}$	$\frac{175}{257}$	261	233			
中国 インド	104 $142$	76	160	$\frac{257}{202}$	170	180			
1/1	164	172	190	$\frac{202}{212}$	$\frac{170}{214}$	170			
省徳 メキシコ	150	172 $152$	164	$\frac{212}{156}$	196	148			
オーストラリア	80	84	110	107	110	137			
その他	213	216	238	$\frac{107}{237}$	246				
・こくなし		2,777	2,830	3,035	3,099	187 2,997			
合 計	2,655								

年産は米国、メキシコは5月→4月、その他北半球は6月→5月 アルゼンチン、チリ、南アフリカは10月→9月、オーストラリア、ブラジル ペルーは翌年の1月→12月

世界のナシ需給 (単位:千トン)

	世界の	カナシ書	<b>詩給(</b>	単位:千	トン)	
	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19
						(12月予測)
			生産量			
中国	15,440	15,820	16,530	15,960	16,410	13,100
EU	2,523	2,566	2,513	2,340	2,386	2,525
米国	795	754	729	668	663	667
アルゼンチン	690	590	580	540	550	580
トルコ	415	305	415	440	420	450
南アフリカ	414	411	430	432	408	420
インド	317	317	323	340	280	340
日本	295	277	278	278	278	278
チリ	267	290 303	267	290	262	252
韓国	282		261	238	266	214
その他	503	552	536	618	592	595
合 計	21,940	22,184	22,861	22,144	22,516	19,421
<b></b>	10.040		三鮮消費量		14.005	11 400
中国	13,646	13,848	14,431	13,938	14,325	11,480
EU	2,008	2,027	2,048	1,965	1,958	2,027
米国	409	414	387	406	399	411
ロシア	528	400 282	397	390	411 366	405
トルコ インド	392 333	282 335	381 299	414 326	366 261	395 314
日本	333 294	335 276	299 277	326 277	261	276
日本 ブラジル	294 227	201	162	171	276 172	185
韓国	258	273	228	202	223	185 179
平     インドネシア	256 96	273 86	92	155	180	165
その他	1,087	1,180	1,221	1,242	1,244	1,282
A		19,321		19,486	19,814	17,119
台 計	19,277	19,521	加工量	19,400	19,614	17,119
中国	1,500	1,650	1,700	1,520	1,550	1,200
平国 EU	300	294	356	275	281	318
米国	$\frac{360}{265}$	255	262	209	222	216
アルゼンチン	186	153	170	160	140	150
南アフリカ	158	160	132	119	136	137
チリ	65	58	56	57	57	53
ロシア	20	9	9	55	47	42
トルコ	10	7	10	10	10	10
韓国	0	6	10	10	11	7
インド	0	0	7	7	6	7
その他	36	6	6	7	8	7
合 計	2,539	2,599	2,718	2,430	2,468	2,147
	,	,	輸入量	,	,	,
ロシア	431	265	267	252	285	270
EU	255	221	224	209	197	185
ブラジル	208	179	147	156	157	170
インドネシア	96	86	92	155	180	165
ベラルーシ	60	186	151	152	133	150
米国	82	89	76	73	79	85
香港	64	72	76	68	73	80
その他	505	538	585	591	597	604
合 計	1,700	1,637	1,617	1,656	1,701	1,709
			輸出量			
中国	299	332	407	509	543	430
EU	470	417	310	309	345	365
アルゼンチン	409	333	310	280	320	330
南アフリカ	207	205	250	266	230	240
チリ	117	144	129	152	130	125
米国	203	175	156	126	122	125
ベラルーシ	38	163	122	92	83	85
その他	65	67	73	69	101	97
合 計	1,808	1,836	1,758	1,800	1,874	1,797
年産は北半野	<b>ポでけ7日</b>	→6日 🛱	半球でに	<u></u>	<u>→12日</u>	

## 10. チリのアボカド事情

#### 米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2018 年 12 月 5 日)

#### 生産

チリではハス(品種)が、サイズ、クリーミーな質感、味の面で最も好まれている。ハスの栽培面積は25,660 ha で、全体の88%を占めている。

チリ・アボカド委員会(CAC)によると、2018/19年(7月から翌年6月まで)の生産量は24.5万トンで、前年を8.8%上回ると予想している。

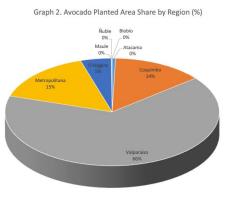
例年アボカドの収穫は6月に始まるが、今年はペルー産のアボカドとの競合を避けるため、戦略的に収穫の開始を7月に遅らせた。

アボカドは成長が期待されているものの、ハスの生産者にとっては、この品種が低温に弱いことが問題となっている。低温に遭遇すると果樹園全体で被害を受けるからである。また、水不足の問題にも直面している。

例えば、今年初め、バルパライソ州ペトルカでアボカド生産者と住民との間で騒動があった。住民はアボカド生産者が水資源を使い果たし、生活用水に事欠いたと非難したのである。この問題は国際的にも報道され、地元の環境団体(NPO)がソーシャルメディアを媒介に非難活動を増幅させた。このため、チリ輸出業者協会(ASOEX)はチリ産アボカドの顧客である EU に対して丁重な説明を行うとともに、農業大臣も紛争の沈静化のために介入することとなった。



それに続き、15%、14%の割合を占めている。



州別栽培面積の割合

アボカドの栽培面積は、過去5年で減少を続けている。2013/14年の栽培面積は36,355ha であったが、現在(2018/19年)は29,166ha となっている。減少の理由は、生産者が気温の高い地域に限定して栽培を進めようとしているためであり、加えて、平地や水源が確保されない地域での生産から撤退したためである。 州別の栽培面積割合では、バルパライン州が最も割合が多く66%を占めている。 首都圏州とコキンボ州は

#### 消費

チリの人に、「アボカドより好きな果物はあるか」と質問すると答えに窮するくらい人気のある果物であり、様々な用途で利用される食材である。従って、他の果物には見られないほど国内需要が大きく、年間6.6万トンと生産量の30%を占めている。アボカドの価格は5月、6月が最も高く、キロ当たり8ドルに達するが、この時期は国産の供給がないため、ペルー、メキシコからだけでなく、米国からも輸入を行っている。

#### 貿易

2017/18年のアボカドの輸出量は、前年を3.5%上回る157,697トンであった。2017/18年の輸出金額は3.64億ドルで、前年を16%上回った。2017/18年の輸出先では、オランダが最大で全体の40%を占め、次いで米国が19%、英国が11%を占めた。前年との比較では、オランダ、米国が、15.4%、0.6%増加した

#### が、英国は1.9%減少した。

中国への輸出は過去3年で急速に増加しており、2017/18年は前年より11.6%上回る14,578トンであった。これは2014年に中国がチリ産のアボカドの輸入解禁を行ったためである。

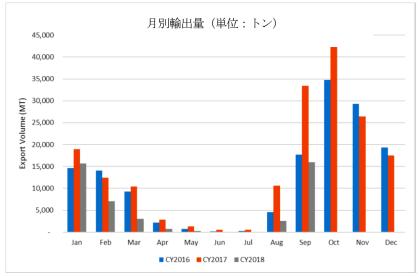
2018/19年(9月まで)の輸出量は、前年を58.3%下回っている。これは収穫が例年よりも遅れたためであり、CAC では生産量が前年を8.8%上回る見込みのため、輸出量も最終的には前年を上回ると予想している。

アポカドの輸出量	単位:トン.	米ドル

アホカトの輸出室 単位:トン、米トル							
	年産(7月から翌年6月)			直近まで			
	2016/17	2017/18	対比	2017年7月から 9月17日	2018年7月から 9月18日	対比	
A =1	150,000	157.007	0.5%			F0.0%	
合 計	152,399	157,697	3.5%	44,519	18,580	-58.3%	
オランダ	54,341	62,735	15.4%	12,107	4,659	-61.5%	
米国	29,204	29,389	0.6%	15,773	10,560	-33.1%	
英国	17,198	16,874	-1.9%	4,376	355	-91.9%	
アルゼンチン	14,535	15,031	3.4%	3,624	970	-73.2%	
中国	13,061	14,578	11.6%	3,823	394	-89.7%	
スペイン	7,403	7,998	8.0%	2,895	647	-77.7%	
コスタリカ	3,041	2,967	-2.4%	698	430	-38.4%	
ベルギー	1,707	2,408	41.1%	185	142	-23.2%	
フランス	4,574	1,327	-71.0%	481	114	-76.3%	
スイス	2,176	1,221	-43.9%	68	44	-35.3%	
ドイツ	3,759	933	-75.2%	67	118	76.1%	
香港	363	600	65.3%	135	20	-85.2%	
ブラジル	258	519	101.2%	25	-	-100.0%	
ウルグアイ	338	506	49.7%	98	55	-43.9%	
アラブ首長国連邦	24	240	900.0%	72	72	0.0%	
その他	417	371	-11.0%	92	0	-100.0%	

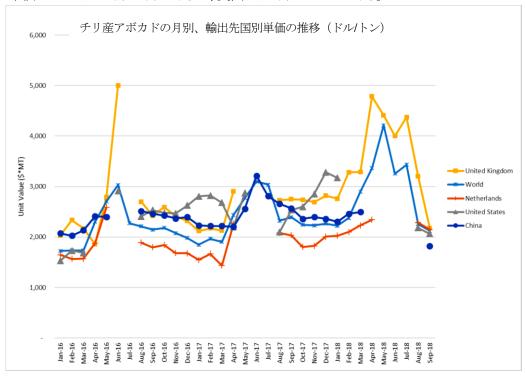
アポカドの輸出金額 単位:米ドル

アルルトの制田並領 単位: 木トル							
	年産(7	7月から翌年6	月)	直近まで			
	2016/17	2017/18	対比	2017年7月から 9月17日	2018年7月から 9月18日	対比	
合 計	315,205,949	364,156,978	16%	7	39,853,672	-62%	
オランダ	92,466,145	122,266,723	32%	24,793,182	10,048,968	-59%	
米国	74,496,468	76,024,369	2%	39,026,839	22,063,148	-43%	
英国	41,832,700	46,345,191	11%	12,012,096	797,736	-93%	
アルゼンチン	28,388,813	35,860,412	26%	7,794,693	2,258,901	-71%	
中国	30,748,030	35,367,527	15%	9,928,992	719,272	-93%	
スペイン	16,347,541	21,301,555	30%	7,494,027	1,257,046	-83%	
コスタリカ	8,938,336	10,031,265	12%	2,175,008	1,435,656	-34%	
ベルギー	2,320,214	3,584,650	54%	276,332	264,372	-4%	
フランス	7,181,484	3,038,025	-58%	1,215,554	204,402	-83%	
スイス	3,149,326	2,482,695	-21%	143,161	104,880	-27%	
ドイツ	5,767,246	2,047,721	-64%	150,234	223,200	49%	
香港	1,014,821	1,653,384	63%	367,786	57,329	-84%	
ウルグアイ	702,576	1,300,375	85%	214,723	191,712	-11%	
ブラジル	550,269	1,228,292	123%	49,280	-	-100%	
アラブ首長国連邦	58,145	710,400	1122%	206,400	227,051	10%	
その他	1,243,835	914,394	-26%	221,799	-	-100%	



アボカドの単価(ドル/トン)は年により変動している。当然ながら供給量が減少する時期(5月、6月)は価格が上昇する。加えて、輸出先市場によっても単価が高まる時期が異なっている。例えば、米国ではチリ産ア

ボカドの単価のピークは12月と1月であるが、英国では3月がピークである。



#### 政策

チリは米国、中国、EU との間で自由貿易協定を締結しており、これらの国はチリ産のアボカドの関税はゼロである。

インドへの輸出に当っては、臭化メチルを使用しない「システム・アプローチ」を導入することについて合意 しているが、インド政府は未だに実施に移していない。

チリ政府は韓国に対し輸入の解禁要請を行っており、3年目に突入している。現在、協議は、全部で8のステージのうち、第3ステージにある。

注)輸入(2017暦年で5,700トン、主な輸入先はペルー、メキシコ)に関する記述は省略した。

## 11. メキシコのアボカド事情

#### 米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2018 年 11 月 30 日公表)

#### 生産

市場関係者によると、2018/19年(7月から翌年6月)の生産量は190~200万トンと予測されている。これまでのところ気象条件に恵まれたことから、生産は順調である。情報筋によると、病虫害防除プログラムを実施したお蔭もあり、生産量の増加に結びついているとのことだ。2017/18年の生産量は、公式推計によると200万トンであるが、これはいわゆる表年に当ったためと適度な降雨があったためである。

メキシコアボカド生産・輸出協会(APEAM)は、生産者と協力して、ミチョアカン州において病虫害及び残留農薬をなくす技術的取組を進めている。この取組みは同州産アボカドの品質向上に繋がっている。ミチョアカン州はアボカドの最大の生産州で、全国の80%の生産を担っている。

ミチョアカン州では5~10ha 規模の小規模生産者により生産が担われている。多くの生産者は SAGARPA による食品安全プログラムを実施しており、実施に必要な経費は長期的な投資と考えている。情報筋によると、生産コストは、基礎的技術だけに頼る81,000ペソ/ha(4,308ドル/ha)から、機械や灌漑施設などの先進技術を用いた110,000ペソ/ha(5,851ドル/ha)までとなっている。ドルに対するペソの下落により、生産コストは上昇を続けている。ヘクタール当たりの収量は8~10トンであり、導入技術により差が出ている。ミチョアカン州とハリスコ州に限れば11トンである。生産者によると、過去3年間の平均単収は10.5トン/haであった。

アボカドの栽培面積は、過去のような伸びは見込めない。これは生産者が秩序立てて植栽を行っているからだ。とはいえ、植栽の決定は、国際市場におけるメキシコ産のハスアボカドの需要により左右される。実際、ミチョアカン州の生産者は、栽培面積を維持しつつ、新技術の導入を通じて生産量を増加させようとしている。アボカドの栽培面積は2017/18年に231,028ha であり、2016/17年は218,492ha であった。ミチョアカン州では2017/18年は2016/17年に比べて5%増加したが、過去の伸びに比べると緩やかであった。

メキシコの州別栽培面	<b>積(単位:ha)</b>
------------	-----------------

<u> </u>	及4月四位(千四·11a)	/	
州名	2016/17(推計)	2017/18(予測)	増加率(%)
チアパス州	3,241	3,281	1.2
ゲレロ州	4,492	4,273	-4.8
ハリスコ州	21,027	22,534	7.1
メキシコ州	8,841	9,978	12.8
ミチョアカン州	158,805	166,512	4.8
ナヤリット州	6,129	7,059	15.1
合 計	218,492	231,028	5.7

#### 消費

生鮮果実の国内消費量は、輸出量によって決まる。輸出価格の方が高いために、生産者は極力輸出を行おうとするためだ。2017/18年の国内消費量は、価格が前年より高かったが、76.4万トンであったと推計される。2018/19年の消費量は、国内価格が高く消費者も購買意欲が大きくないことから、前年と同程度と推計される。この数字は供給量と価格により変動すると見込まれる。アボカドはメキシコの家庭料理の中で主要な食材ではあるが、生産者が輸出を第一に考えることから、残りの部分が国内消費に向けられる。一人当たりの年間消費量は、輸出量の増加と国内価格の上昇から、6.5~7.0kgである。2017/18年の価格は、前年に比べて高価格で始まり、国内供給量が少なかったことから、高値が続いた。2017年6月から8月にかけても、国内市場供給量が少なかったことから高値で推移した。2018/19年の価格は、安値で始まったが需要が高まったことから上昇を示している。

ほとんどの州では、貯蔵性が優れ、海外市場での需要が多い品種ハス(Hass)を生産している。その他に 栽培されている品種は、量は少ないが、Fuerte、Criollo、Bacon、Pinkerton、Gwen、Reed.である。

アボカドには、抽出オイルを用いて製造する化粧品のように、食用以外の用途もあるが、生鮮品での輸出で利益がえら得ることから活用されていない。消費者がアボカドの副産物は高価であると考えているため、化粧品業界はアボカドを利用する機会を逃している。なお、アボカドオイルは少量が食用に用いられている。

#### 貿易

アボカドの輸出は過去3年で増加を続けており、2018/19年のアボカドの輸出量は、国際的な需要が大きいことから100万トンに近いと見込まれる。ドルに対するペソ安も輸出の増加を後押ししている。2017/18年の輸出量はAPEAMが目標としていた100万トンの大台に達した。なお、2016/17年の輸出量は873,963トンであった。2017/18年の米国向け輸出量は、Global Trade Atlas (GTA)によると766,431トンであったが、APEAMによる数字では869,057トンであった。

一般的には、国際的な需要の高まりと、米国50州に年間を通じて供給できることから、輸出は増加する傾向にある。また、カナダ、日本、欧州への輸出も増加している。アボカドの輸出金額は、2016/17年が25億ドルであったのに対し、2017/18年は28億ドルに達した。2018/19年のアボカドの米国向けFOB価格は、サイズ48で7月に1箱42.00ドルで始まり、9月には72.00ドルまで上昇したが、10月中旬には26.00ドルに下落している。

ミチョアカン州で起った生産者と出荷業者の間の価格を巡る争議で、生産者は一時収穫作業を停止したため、2018年10月29日から2週間、輸出が停止された。ミチョアカン州は米国にアボカドを輸出している唯一の州である。生産者は米国市場に輸出される際の受取額が少ないと考え、最低価格の設定を要求したのが争議の発端である。その後、2018年11月14日に合意が成立し、ストライキは決着した。メキシコ政府と販売関係者は、今後、輸出量、国内販売量、販売先に関する情報を毎週公表することとしたためである。その意図は、アボカドの取引に関する販売額などの情報について、透明性をもって提供することにある。販売業者は、需要と供給の原則に基づいて販売価格を調整することも約束した。生産者は、ストライキ期間中に米国向け輸出で3.8万トン分の損失があったと主張しているが、実際はこれらの製品は、その後、数週間をかけて流通されたものと考えられる。

米国はメキシコのアボカドにとって最大の輸出先国であり、74~79%を占めている。日本、カナダも戦略的な輸出市場であるが、輸出に占める割合は、日本が6~7%、カナダが7~8%となっている。ミチョアカン州では45の業者が米国への輸出資格を持っている。一方、その他の州は日本、カナダ、フランス、スペインへの輸出に重点を置いている。

業界によると、アボカドを加工処理したグアカモーレ(アボカド等をペースト状にしたもの)の輸出量が概ね17万トン以上あり、米国、欧州、中東、アジアで販売されているという。しかし、公式統計データは存在しない。

輸出の大部分は出荷業者が直接行っており、大部分の業者には米国資本が投入されている。ミチョアカン州の生産者は、スポット市場で出荷業者にキロ当たりペソの支払いで販売している。収穫とそれに伴う費用(輸送、箱代)は出荷業者が負担しており、収穫労働者も業者が手配している。他の果樹と同様、出荷業者の主な業務は、果実を洗浄し、品質(サイズ、外観だけでなく乾物重を含む)に応じて選果をし、契約仕様に応じて箱詰め(ラベル添付、バッグ詰め、ばら積み等)を行うことである。一般に、輸出契約仕様を満たさない製品は国内市場に回される。

	アボカ	ドの	輸出	量(	単位	<u> </u>	・ン)
--	-----	----	----	----	----	----------	-----

2016	6/17年	2017/18年		
米国	668,095	米国	766,431	
日本	61,716	カナダ	82,848	
カナダ	71,607	日本	59,677	
その他	72,545	その他	892,956	
合計	873,963	合計	1,035,481	

#### 政策

メキシコから米国へ輸出する際には、出荷や認証に当たっての所定の手続きを遵守することが条件付けられている。現在、ミチョアカン州が唯一米国にハスアボカドの輸出を行える州となっている。ハリスコ州も米国への輸出認証要件を満たすよう働きかけを行っている。その他の州は、米国以外の市場を目指している。

#### 閏税

メキシコのハスアボカドに対して米国は関税を課していない。しかし、ハスアボカド理事会と米国農務省農業市場局によるプロモーション活動費として1ポンド当たり2.5セントが徴収される。また、生産者は輸出する際、APEAMに1ポンド当たり5セントを支払い、米国農務省による検疫費用に充当されている。

## 12. 米国新農業法の合意間近、カンキツグリーニング病対策に予算

#### FreshPlaza 電子版 (2018 年 12 月 3 日)



米国上下両院の新農業法交渉責任者は、「新農業法の基本的部分で合意に達した」と声明を発表した。

このため、年内にも最終案が決着することに弾みがついた模様だ。

合意文書の冒頭部分には、2019年から5か年間、毎年2,500万ドルをカンキツグリーニング病並びに同病気を媒介するミカンキジラミに関する調査研究費を計上することが記述されている。

この「緊急カンキツ病害研究開発基金」は、2014年の農業法で定められ、カンキツの病害にも充当された「特定作物研究開発イニシア

ティブ(SCRI)をベースとして設けられるものである。

この動きを受け、カリフォルニア・カンキツ・ミューチュアル(CCM)は、今回、新農業法でカンキツグルーニング病に特化した対策を講じることは、現在カリフォルニア州の生産者の拠出により同病の蔓延防止のために行っている年間4,000万ドルのプログラムを支援するものであり歓迎する、と声明を発表している。

両院の交渉責任者は、米国農務省動植物検疫所の予算である、植物病虫害管理及び被害防止プログラム、植物の病害回避のためのネットワーク事業(National Clean Plant Network)の継続についても合意に達した。 さらに、人為的な貿易障壁に基づく弊害を克服するため、国として行う特定作物に対する技術支援(TASC)についても予算を継続することが合意された。

## 13. 中国がスペイン産生食ブドウの輸入を解禁

#### EUROFRUIT 電子版 (2018 年 11 月 29 日)



スペインと中国政府は、スペイン産の生食ブドウを中国に輸出する道を拓くことで合意し、署名を行った。 今回合意された協定では、生食ブドウを輸出するに当っての植物検疫要件も定められ、スペインを訪問中であった習近平主席とペドロ・サンチェス首相との間で調印が行われた。

両国は相互の貿易促進のため、スペイン産の豚肉の中国への輸出拡大を含む事案に関しても二国間協定が署名された。

両国の間では、これまでスペインから輸出できる果実はカンキツ、モモ、スモモに限られていた。2017年のスペインの中国への果実輸出実績は2.4万トンで、金額にして3,300万ユーロであった。

スペインの生産者・輸出業者連盟(Fepex)は、今回の生食ブドウに関する交渉が、わずか2か年で調印に至ったことを歓迎し、業界にとって大いなる前進であるとしている。

連盟のマネージング・ディレクターの Pozancos 氏は、スペインの市場の多様化に大きく貢献する絶好の機会であると話している。

スペインでは、サクランボ、ブルーベリー、カキの生産者も中国市場の開放を求め、ロビー活動を展開している。

スペインは、2017年に生食ブドウ143,500トン、2億8,500万ユーロを輸出した実績を有している。このうち90%以上が欧州市場に輸出され、残りは南アフリカ、カナダ、アラブ首長国連邦に輸出された。

## 14. チリの降電による被害は1.2~1.5億ドル

#### FreshPlaza 電子版 (2018 年 11 月 27 日)

チリの雹害から10日余り、チリ果実輸出業協会(ASOEX)会長の Bown 氏は果樹分野における被害を公表した。

各果実分野の代表者は、ブルーベリー、サクランボ、生食ブドウ、キウイに関する被害は、地域が限定され、 当初予想されたよりも少ないと見込んでいる。「しかしながら、収穫皆無、あるいは、ほとんど収穫できない生産者もいる。果樹分野の生産は気象条件に依存している。今回経験したような、生育の重要な時期に遭遇した異常な被害は、紛れもなく重大な問題である」とBown 氏はコメントし、「果樹部門の被害額は、1.2~1.5億ドルと見込まれる」と話している。

ブルーベリーに関しては、チリ・ブルーベリー委員会の事務局長によると、オイギンス州で最も被害が大きく様々な果樹園から被害報告があったそうだ。「しかし、輸出への影響はそれ程大きくないと見込まれる。というのも、同州の生産量は国全体の7%にしかならないからだ。とはいえ、マウレ州から山岳地帯にかけてのロンガビ、パラル、レティーロなどの自治体では被害の報告があった。その他の地域では軽微のようであるが」と語っている。

委員会の代表者が語るには、「予備調査の段階では首都圏地域から南部にかけて、約2,000ha のブルーベリーで何らかの被害がったようだ。輸出量は、落果や傷がついて廃棄するものがあるので4,200トンの減少が予測される。このため、当初の輸出見込量の105,000トンから100,800トンと約4%少なくなるが、全体としは大きな数字ではない。ただ、被害は早生種と中生種に集中しているので、第46週(11月18日から)から第48週(11月25日から)までの輸出には影響が出るだろう」と述べている。

第46週のブルーベリー輸出量は625トンで、北米向けが66%、アジア向けが24%、欧州向けが10%であった。現在までの総出荷量は1,905トンで、前年に比べると14%増加している。なお、有機ブルーベリーの輸出量は全体の41%で、北米向けが99%と大部分を占めている。

サクランボ委員会は、当初、今シーズンの輸出量は前年を10.5%下回ると予測していたが、雹害の影響で、 更に7.1%減少すると見込んでいる。この結果、輸出量は33,446,491箱(1箱5kg)、167,232トンと予測している。この数字は、チリ全土の出荷量の80%をカバーする54社の推計に基づくものである。

生食ブドウ委員会会長の Sat 氏によると、「一般に損失量を算定するという所まではいかない。網羅的に調査したわけではないが、被害はオイギンス州の幹線道路から山岳地帯にかけての限定された区域である。2 018/19年産の生産量は、前年を2%下回ると見込んでいるが、減収は雹害が原因ではなく、業界をあげて品種の転換を進めているためだ。古い品種は市場性を失っているので急速に減少しており、新品種が増加している。チリ産生食ブドウの輸出は第48週(11月25日から)ないし49週(12月2日から)に始まるが、世界市場には未だカリフォルニア産、ペルー産が出回っているので焦って出荷する必要はない」とのことだ。

キウイ委員会会長の Cruzat によると、技術専門家が被害地区を調査し、被害量を5%と推計したとのことだ。 しかし、会長の懸念は樹体へのダメージと落葉による次期シーズンの生産への影響とのことだ。

## 15. メキシコのリンゴ輸入は減少の予想

#### The Packer 電子版 (2018 年 11 月 26 日)

2017年の米国のリンゴ輸出量のうち、メキシコ向けは28%を占め、他の国に比べて飛び向けて多い。 しかし、米国農務省のレポート(海外農業局 GAIN レポート)によると、メキシコの輸入業者はリンゴの輸入に 関して慎重になっているという。

今回新たに公表されたレポートでは、メキシコ通貨ペソの米国ドルに対する下落と国際リンゴ相場がペソに 換算した場合に割高になっていることから、2018/19年産のリンゴ輸入量は、前年に比べて減少すると予測 している。

レポートはメキシコの落葉果樹全般に関する見通しを示しているが、上記状況にあっても、米国は依然としてメキシコにとって大きなリンゴ供給国であり続けるだろうとしている。実際、2016/17年のメキシコのリンゴ輸入のうち98%は米国からであり、残りわずかはチリとカナダからであった。

しかし、「ドルに対するペソの下落と市場の不確実性のため、メキシコの輸入業者は取引に慎重になっており、加えて、2018年6月、米国によるメキシコ産鉄鋼、アルミニウムに対する関税引き上げへの報復措置として、メキシコは米国産リンゴに関税20%を上乗せしたことが取引の停滞の要因だ」と指摘している。

また、関税引き上げによる輸入業者の手持ち資金不足も指摘している。業者は輸入品を販売する前に関税を支払わなければならないからだ。

輸入リンゴの65%は1月から7月までに輸入されるが、消費者は年中リンゴを食べる習慣があるため、輸入業者としては、この間も輸入品に対する需要が継続することを願っている状況だ。

なお、米国からの輸入のうち、ワシントン州産は約85%であり、残りはカリフォルニア産である。

#### メキシコの消費

レポートによると、次の4品種が輸入リンゴの98%を占めているという。

・38%:レッドデリシャス、・33%:ガラ、・18%ゴールデンデリシャス、・8%:グラニースミス、・1%ふじ 米国ではレッドデリシャスの生産が減少している分、ガラなどの品種の割合が増加しているという。実際、20 17年にはカラの割合は26%であったが、2018年には33%に上昇している。

#### メキシコのリンゴ牛産

2018/19年産のリンゴの栽培面積は、一部の州では増加するものの、全体ではやや減少すると予測している。収穫面積は、コアウイラ州、ドゥランゴ州で霜害にあったことから前年より減少すると予測している。

品種別にはゴールデンデリシャスが徐々に栽培面積を減少させており、リンゴ栽培面積の46%を占めている。一方、レッドデリシャスの栽培面積は32%である。

州別の作付面積割合は、ドゥランゴ州が14%、プエブラ州が14%、コアウイラ州が10%である。

レポートによると、メキシコではリンゴの生産コストが高いこと、(生産者の)資本が不足していること、水不足、 国産リンゴに対する市場拡大に限界があることから栽培面積の拡大は期待できないとしている。

2018/19年産のリンゴ生産量は66万トンで、2017/18年産の71.4万トンに比べ減少が予測されている。

## 16. オースストラリアの落葉果樹(生食ブドウ)事情

#### 米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2018 年 11 月 22 日公表)

#### 生産

2018/19年産(2019年1月から12月)の生食ブドウ生産量は、天候に恵まれ単収が増加することから、前年を18%上回る20万トンと予測される。2018/19年の栽培面積は、収益が拡大することへの期待から新植が増加し、前年を9%上回ると予測される。なお、昨年の生産量は多くの産地で高温により単収が低かった。オーストラリアの生食ブドウ生産は、中小規模の家族経営により支えられており、大規模生産者は少ない。Sunraysia 地方はオーストラリアで最大の生食ブドウの産地であり、80%の生産を担っている。北部準州とクイーンズランド州(セントジョージ、エメラルド、マンダベラ)などでは収穫時期が早く、ビクトリア州のミルデューラ、Robinvale からなる Sunraysia 地方は70%を占める晩生種が中心である。

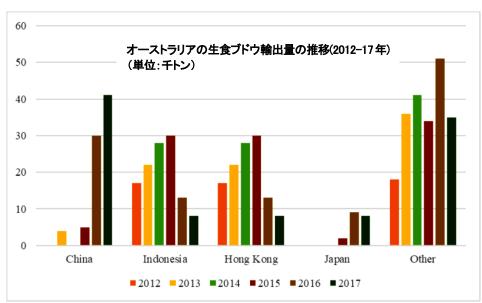
オーストラリアの生食ブドウ主要品種と収穫時期								
品種名	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	
ドーン・シードレス		×	×	×	×	×		
Menindee Seedless	×	×	×	×				
トンプソン・シードレス			×	×	×	×	×	
クリムゾン・シードレス				×	×	×	×	
フレーム・シードレス	×	×	×	×				
Ralli Seedless			×	×				
レッドグローブ*		×	×	×	×	×	×	*種のある品種
オータムロイヤル			×	×				
Sugrathirteen		×	×	×				

単位面積当たりの収量は地域により大きく異なる。Sunraysia 地方では1樹当たり20~25キロであるが、クイーンズランド州ではわずか5キロである。収穫期間は6~7ヶ月続き、11月に始まりポークは2月である。

#### 消費

2018/19年の国内生鮮消費量は、前年を2%上回る76,500トンと予測される。国内消費量は比較的安定しており、生産者は輸出の拡大を進めている。とはいえ、南米を除くとオーストラリアは一人当たりの生食ブドウの消費量は米国に匹敵するくらい多い。歴史的に見ると、国内消費は主に自国産によるものであるが、現在では輸出に重点が置かれている。大規模な小売チェーンが国産生食ブドウを販売する主要なルートであり、4つのスーパーチェーン(Woolworths、Coles、Aldi、IGA.)が売上の80%を占めている、

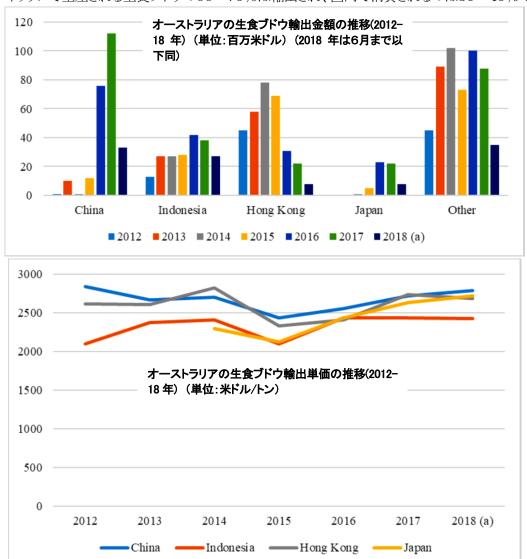
#### 貿易



オーストラリアは世界で第10位の生食ブドウ輸出国であるが、栽培面積を拡大しており、生産と輸出の拡

大を進めている。生食ブドウはオーストラリアで最大の生鮮果実輸出業界の一つである。2018/19年の輸出量は137,000トンと予測される。2017/18年の輸出量は110,000トンでその前年より3%増加したが、予想よりも少なかった。これは収穫時期が遅れたためである。輸出先では中国が最も多く41,000トンで、次いでインドネシアが16,000トンである。輸出量は、過去5年間で倍増している。

オーストラリアで生産される生食ブドウの60~70%は輸出され、国内で消費されるのは30~40%である。



6 月から12月の間は米国から輸入を行っているが、輸入量は近年伸びていない。これはオーストラリアドルの為替相場が米ドルに対して安く推移しているためである。しかし、小売段階では年間を通じて生食ブドウを消費者に提供している。

#### 政策

オーストラリアの生食ブドウ産業は、同国が数多く結んでいる自由貿易協定のお蔭で、輸出関税が軽減され輸出手続きも簡素化されているなどの恩恵を享受している。例えば、韓国との FTA では、2014年には関税が45%もあったのに対し、2017年には6%に削減され、2018年には撤廃された。日本との経済連携協定(JAEPA)では、輸出時期と日本国内の生産時期が逆になっていることが有利に作用している。中国との自由貿易協定(ChAFTA)では、関税が徐々に引下げられ、2019年には5%からゼロとなる予定である。さらに、2016年、産地の Riverina が正式にミバエが存在しない地域として認定され、収穫前及び収穫後のミバエ防除処理を行うことが免除されている。

オーストラリアの生食ブドウ統計(在豪 米国農務省 農務官)

			/JC 1// H /
	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	10,000	11,000	12,000
収穫面積(ha)	10,000	11,000	12,000
販売生産量(トン)	178,600	170,000	200,000
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	178,600	170,000	200,000
輸入量(トン)	15,300	13,500	13,500
総供給量(トン)	193,900	183,500	213,500
国内生鮮仕向量(トン)	87,100	73,500	76,500
輸出量(トン)	106,800	110,000	137,000
総出荷量(トン)	193,900	183,500	213,500

年産:翌年1月→12月

## 17. 中国のリンゴ濃縮果汁産業

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 11 月 23 日)

中国のリンゴ加工産業は、濃縮果汁生産を中心に行われている。加工用リンゴとして購入されたリンゴのうち約67%が最終的には濃縮果汁に加工されている。しかし、過去数年にわたり濃縮リンゴ果汁の価格は下がり続けており、上昇の兆しはない。

中国は重要なリンゴ生産国であり、濃縮リンゴ果汁の価格は比較的安い。このため、中国は濃縮リンゴ果汁の主要な輸出国となっている。中国で生産される量の約95%は輸出されており、その約50%は北米向けである。

中国の濃縮リンゴ果汁の価格が下がりだしたのは4年前からである。Zhuochuang 社のデータアナリストである Yang Jun によると、2014/15年シーズンから世界的な経済危機(注:ギリシャ危機、ロシア危機、中国の経済減速を指すと思われる)を契機として価格の低下が始まったとしている。2016年は輸出量が増加に転じ、2017年も引続き増加したが、国際市場における濃縮果汁の競争と世界経済を巡る状況から価格は一貫して下落を続けた。2017年は濃縮果汁の輸出量の増加と輸出価格の下落が同時に進展した年であった。

Yang Jun 氏は、価格の下落は、一つには生産量の増加と原料価格の低下によりもたらされたものであるとし、もう一つの要因は輸出量が増加しているにもかかわらず、過去の過剰生産の結果、余剰在庫が依然として多いからだと指摘している。

情報源:comnews.cn(中国商务新闻网)

## 18. バレンシア地方の大雨でカンキツとカキの生産に影響

REROFRUIT 電子版 (2018年11月20日)



バレンシア地方の生産者は、ここ数日間の豪雨による被害を大いに懸念している。

今回の豪雨は、ここ数十年間、秋の気象災害としては例を見ない規模であり、特にカンキツとカキの収穫最盛期に当たり大きな影響を受けている。

多くの農地は浸水しており、収穫作業が行えない。また、過度な湿気により、pixat という果皮障害やカビによる被害が懸念されている。

また、この地方では道路や農場を隔てる石垣などのインフラ被害も報告されている。

バレンシア農業生産者組合(AVA)がスペインの通信社 EFE に語ったところによると、熟期を迎えているカンキツは特に被害を受けやすいそうだ。

地元の農家・家畜組合(Unió de Llauradors i Ramaders union)の Peris 氏によると、水の浸漬により、カンキツとカキの根が呼吸困難に晒されているという。

同氏によると、被害の程度は今後数週間の気象条件によるという。つまり、高温と多湿が続けば状況は悪化し、低温と乾燥が続けば被害は軽減されるという。

一方、豪雨はプラスの側面もあるという。豪雨のお蔭でこれまで水が枯渇していた貯水槽を満たしたため、1 月以降に収穫される晩生のカンキツにとっては、品質面の向上、果実の肥大(注:これまで今シーズンのスペイン産カンキツは果実のサイズが小さいと評価されてきた)が見込めるからだ。

とはいえ、この雨がもたらす影響は生産者にとって深刻だ。というのも、12月6日の聖ニコラス祭に向け、オランダなどでは伝統的にカンキツが贈物とされるため、需要が大きいからだ。

# 19. カリフォルニア州のカンキツ事情

### FreshFruitPortal 電子版(2018年11月16日)

南米からの過剰な輸入、中国との貿易摩擦、昨年よりも少ないと見込まれる生産量等、カリフォルニア州のカンキツ産業には課題が多い。しかし、明るい側面もある。輸出先としての隣国カナダ、韓国、そして最近輸出プロトコルが見直される見込みのオーストラリアなどは期待が持てるからだ。生産者としては国内外の市場に新たな道を目指している。

1ヶ月前にカリフォルニア・シトラス・ミューチュアルの Nelsen 会長は、FreshFruitPortal に対して米国市場における供給過剰問題について語ってくれたが、この問題はそれ以降改善されていない。

「例えばこの数週間でチリからの輸入は300コンテナに達した。そして、米国産果実よりもかなり安い価格で販売されている。カリフォルニア産のカンキツは昨年よりもやや遅れて収穫が始まったが、市場では供給量が不足しているという状況にはない。輸入カンキツの安い価格に対抗せねばならず、カリフォルニアのカンキツシーズンは苦しい立ち上がりであった。しかし、我々としてはこの状況に立ち向かわなければならない。夜温が下がってきたため、着色は良好である。果実サイズが小さいことは引続き課題として残るが、困難な障害を乗り越えなければならない」と語っている。

最後の点に関しては、Kings River Packing 社の販売担当者 Silva 氏は嬉しい驚きがあるとし、「今年は着果量が少なかった昨年に比べ着果数が多かった。従って、果実サイズは小さくなると見込んでいた。しかし、収穫が始まってみると、当初考えていたよりも果実のサイズは大きい。小さい果実が大量に生産されるということではないようだ」と語っている。Silva 氏は中型の果実が多いと断言しており、品質に関しても、これまでのところ、早生の Beck や福本オレンジは良好だとしている。「食味も良好だ。糖度はこの時期としては平年並みの10~12度あるし、着色も良い。収穫時期は、昨年より2週間遅れている。スタートは遅れたが、それ以外は現時点では順調である。シーズンが深まるにつれ着色は進み、ネーブルは12月、1月に着色のピークを迎える。その後は中生品種にバトンタッチされる」と説明している。

Silva 氏は、南半球からの輸入されたオレンジとマンダリンは過剰だったことを強調している。「まだ、過剰な輸入品と戦っている最中だ。しかし、大部分の小売業者や販売業者はチリ産果実に代わってカリフォルニア州産果実に切換えたいと思っているはずだ。勿論、中には輸入果実の方がカリフォルニア州産の早生種よりも味が良いし、着色も濃いことから輸入果実を歓迎するものもいる」と語っている。

一方、収穫が遅れて始まったということは、出荷シーズンが長く続くことを意味するのではないだろうか。 Nelsen 会長はこの点に関し、「結果がどうなるかは時間が経たないと分からない。収穫が遅れ、スロースタートとなったことに加え、中国市場を失うという事態にあって、シーズン後半に大量の果実を販売しなければならないのは事実だ。しかし、その分、7月4日(独立記念日)を過ぎても高品質なカンキツを十分供給できるというメリットを考慮すべきだ」と語っている。

Nelsen 会長は、カリフォルニア大学リバーサイド校が開発した、「枝へ2,4-D を散布する」という技術が生産者の間で広まっていることを強調している。「散布することで枝を丈夫にし、果実を保持する時間を長く保つことができる。このお蔭で、貯蔵庫に4ヶ月も保管しなくても済むようになった。この技術を晩生ネーブルの販売にどう活かすかについて暫く時間がかかったが、ようやく理解することができた。この技術を用いれば、7月でも良好な状態の果実を販売することができる。間違えはない」と述べている。

### 代替輸出市場

中国市場に代わる代替市場について、Nelsen 会長はネーブル、マンダリン、レモンに至るまで楽観的な期待を抱いている。「カナダがカリフォルニア産カンキツの最大の市場であることを忘れてはいけない。数パーセントカナダ向けの輸出を増やすだけでも大きな量だ。韓国市場は成長を続けている。韓国との自由貿易協定(2012年)により関税が引下げられ、輸出コストが削減されている。だから韓国市場は有望だ。日本市場やその他のアジア市場は輸出量が増えることはないだろう。しかし、その分、今シーズンはオーストラリア向け

の輸出を拡大したい」と語っている。

会長によると、オーストラリアは輸入規則をたびたび変更するため、輸出量が変動してきたそうだ。このため、カリフォルニア州としては、オーストラリア検疫当局の懸念を軽減するための対応が求められてきた。「我々は長年オーストラリア当局が使用を認めてきた農薬ホスフィンを用いた燻蒸を行うこととした。我々としては懸念を持っていない害虫(アザミウマ)ではあるが、オーストラリアは懸念を持っているからだ」とのことだ。この措置により目に見えて害虫の検出が少なくなり、「輸出量を拡大することができる」と自信を深めている。「オーストラリア側は輸出プロトコルの見直しのために訪米しているが、問題解決には楽観的である」そうだ。

## 米国市場の動向:マンダリンへの関心の高まりと特定品種のブーム

Silva 氏は、中国問題が起る中、彼の会社が国内市場に重点を置いてきたことを幸運と考えている。

一方、皮を剥き易いマンダリンに関して、Cuties of Sun Pacific や Halos of Wonderful Citrus ブランドとの競合について質問すると、両ブランドとも Kings River Packing 社にとっては「有り難い存在である」と答えている。「両ブランドはカリフォルニアのマンダリンを普及する上で良い仕事をしてくれた。お蔭で消費者は十分な知識を得たので、他にも良いブランドが市場に存在することが理解されるようになった。つまり、小さな会社でも高品質なマンダリンを提供していることを認識されるようになったのだ」と語っている。 Kings River Packing 社はその一つというわけだ。「長年、高品質のマンダリンを生産するためのプログラムを推進し、大きなブランドに対抗できるような差別化を行ってきた。 我が社では異なる土壌、気象条件に合わせて高糖度のマンダリンの生産に努めてきた。 Halos と Cuties ブランドは消費者にマンダリンの良さを広め、 Halos と Cuties はマンダリンの会社だと認識されるようになった」と述べている。

Silva 氏は、今や消費者はゴールドナゲット(Gold Nuggets)や Tahoe Golds のような特定の品種にも関心を持つようになってきたことも強調している。「ニッチ市場を持つ品種は多く存在する。一般に、消費者はマンダリンに対して大いなる興味を抱いている」と語っている。「消費者が多種多様なカンキツを一カ所で購入できるよう品揃えをしている。具体的には、消費者の関心が高まり、ブームとなっているカラカラ、ブラッドオレンジ、各種マンダリン、ミネオラ、レモンなどだ」とも語っている。彼の会社は、毎年300~500エーカーの園地を改植し、新品種を植栽しているという。

## 20. チリの降雹被害は調査中

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 11 月 15 日)

11月12日にチリ中央部、南部を襲った豪雨及び雹害により、多くの作物に影響があった。被害は生産者



により異なっている。問題は、この被害により輸出やこの地域の雇用にどの程度の影響がでるかである。チリ果実輸出業者協会(Asoex)の Bown 会長は、今回の気象災害で、オイギンス州、マウレ州、ニュブレ県(ビオビオ州)、ビオビオ州、ラ・アラウカニア州で被害があったと話しており、チリ農業大臣は近日中にオイギンス州を中心に現地調査を行うとしている。

## 核果類(サクランボを除く)

Asoex のプレスリリースによると、被害の全容を知るのは時期尚早であるが、特定の作物に関してはいくつか

の情報が入っているそうだ。核果類(スモモ、ネクタリン、モモ、アンズ)については、被害が大きいのは、ちょう ど開花期に遭遇した晩生種であるようだ。しかし、生産者の情報によれば、晩生種でなくとも落果の被害があ ったという。

### ブルーベリー

ブルーベリー委員会によると、プエンテアルト、パイネ、サンフランシスコ、グラネロス、ランカグア、マチャリ、コデグア、レキノア、レティーロ、パニマビダ、ロンガビ、パラルで被害がったとのことだ。現時点では、被害額を明らかにするのは時期尚早とのことだ。

### サクランボ(左に写真)



サクランボ委員会によると、被害が大きかったのはグラネロ、ラ・プンタ、モスタサルであり、「バルパライソ(チリ中央部)からアイセン(チリ南部)にかけては3万 ha のサクランボが栽培されているが、多くの地域では気象災害の影響はなかった可能性がある」と説明している。

委員会は、当初予定していた今シーズン2回目の生産量予測の 公表を、気象災害が定量化されるのを待ち、11月19日の週まで 延期することとした。第一報によれば、被害割合は5%だとしてい る。サクランボの輸出見込み量は減少するようで、「果実の被害は

サクランボを中心とする核果類で大きい。雨による水分過多で裂果が起こり、市場に出荷できなくなる可能性がある。また、雹に当った果実にはアザが生じ、商品価値が下がってしまう。さらに、落下した果実もある。これらによる被害により今シーズンの事態はさらに悪化するだろう。というのも、2017年は生産過剰で推移し、2018年の冬は暖かく十分な低温に遭遇できなかった。このため、今シーズンのサクランボの開花量は少なく、ただでさえ減収が見込まれていたからだ」と語っている。

#### ブドウ

生食ブドウ委員会会長の Sat 氏によると、オイギンス州では果実及び開花中の花に多少の影響があった模様だ。プレスリリースによると、「影響を受けた地域は限定されている。委員会としては被害面積だけではなく品質への影響について引続き調査をしている」としている。

## キウイ

キウイ委員会も声明を出した。Cruzat 会長によると、オイギンス州とマウレ州で被害があったようだが、被害量は調査中とのことだ。

Cooperativa.cl(チリのニュースサイト)によると、今回の災害で被害が大きかったのは、ブルーベリー、サク

ランボ、モモであり、地域としては、オイギンス州のモスタサル、レンゴとマウレ州のリナレスであったとのことだ。 記事では業界の反応も掲載している。例えば、Alerce Group 社のマネージャーGarrido は、「我々は財政的な支援を求めているわけではない。ただ、迅速な対応をお願いしており、定量的に被害を解明して欲しい。 願わくは、全てをなくした生産者には支援の手をさしのべて欲しい」と語っている。

コデグアでネクタリンを生産している Ponce 氏は、「大きな被害を受けた。樹に残っている果実にも被害がある。他にリンゴ、モモを栽培しているが、全てに被害があった」と話している。

被害地域の業界代表者は、政府と銀行の橋渡しを要請し、「被災した生産者は銀行に返済する資金がない。 返済期限の猶予を願いたい」と語っている。

Frusexta 社の Garcia-Huidobro 社長も自らの立場を踏まえ、「返済期限が迫っているローンを抱える生産者は資金が枯渇している。銀行は返済期限を延長しなければならない。でないと抵当流れを起こし悲惨な結果に陥る」と述べている。

#### (追記)

11月15日の EUROFRUIT 電子版で、以下の記事(要点のみ)が配信された。

チリ果樹生産者連盟(Fedefruta)会長はテレビ局のインタビューに答え、「今回の気象災害による被害で深刻なのは、サクランボとブドウである。被害額は2億ドルに達すると見られ、このうちサクランボの被害額は1億ドルと見込まれる。被害面積は3万ヘクタールに達する」と語った。

## 21. チリで大規模な雹害、サクランボ等に被害

### FreshFruitPortal 電子版(2018 年 11 月 14 日)



チリの中央部及び南部地域で大規模な雹害が発生した。被害状況は調査中であるが、サクランボを含む多くの作物に著しい被害が発生した模様である。

今週月曜日(11月12日)、首都圏州からビオビオ州に 至る地域は悪天候に襲われ、特に山麓地帯で大きな被 害があった。

豪雨にも遭遇したが、被害をもたらしたのは異常な降 雹によるものであり、特に中央部に位置する負いオイギ ンス州の被害が最も大きかった。

降雹があったのは、サクランボ、ブルーベリー、核果類などで、場所によっては収穫が始まった時期であるが、

被害の全容解明には、未だ時間がかかりそうだ。

チリ果樹生産者連盟(Fedefruta)会長の Jorge Valenzuela 氏が FreshFruitPortal 社に語ったところによると、今回の雹害には3つの特徴があるという。先ず広範囲であったこと、次に長時間(20~30分)にわたったこと、

最後に雹の粒が大きかったことである。



チリ貿易振興局(ProChile)のオイギンス州担当部長 Sofia Silva 氏によると、今回の気象災害は広範な地域に程度の異なる被害をもたらしたという。「被害の程度は農場の場所により違っている。コードグア(Codegua)

市(オイギンス州)では核果類(原文ママ)、サクランボ、スモモ、ネクタリン、キウイ、リンゴ、ナシなどで100%の被害があった生産者もいる」と語っている。

Valenzuela 氏によると、「コードグアでは各種果実に80%の被害があったと話す専門家もいる」とも述べている。同氏は降雨により、今後病害が発生することも懸念しているという。また、オイギンス州だけでなく、チリ南部の山麓地帯に位置するリナレス(Linares)、パラル(Parral)、チャン(Chillan)でも大きな被害があったと語って



いる。これら地域ではブルーベリーへの影響が最も大きく、「大きな損害があり、落果が見られる」としている。 果実への被害は、今後生産者が実態を把握する過程で膨らむことが見込まれるとし、「実際には被害があっても、現時点では表面化していない果実も多い」とも話している。

火曜日には調査団が212の生産者、1000ha の被害調査を行ったが、被害レベルは20%から100%まで様々だったそうだ。

調査団との話では、コードグアはサクランボの Lapins では20%、レイニアでは40~50%、モモでは100%の被害があった地域もあるとのことだ。

火曜日、農業大臣の Antonio Walker 氏は今回の被害について全国的な調査を実施中だとし、「まだ被害額を公表できる段階ではないが、被害生産者への支援を行うことにしている。既に現場に入り被害調査を行っている。当初想像していた以上の被害だ。特に果実、野菜の被害が大きい。果実にとっては着果が終了した段階で、大変にセンシティブな時期だ。サクランボ、スモモ、ネクタリン、モモ、ブルーベリー、リンゴ、ナシで大きな被害があったと承知している」とコメントしている。



# 22. トルコの落葉果樹(リンゴ、ナシ、生食ブドウ)事情

### 米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2018 年 11 月 6 日)

### 生産

トルコでは数多くのリンゴ、ナシ、生食ブドウの品種が栽培されているが、ほとんどは商業的に流通していない。しかし、近年輸出機会が増加するとともに輸出による高値販売が期待されるようになり、大規模な商業生産を行う果樹園も設立されるようになった。このような果樹園では、品質の高い苗木を導入し、近代的な農法により商業販売できる品種が生産されている。大規模な果樹園の多くは、輸出市場において需要の大きい新品種を生産している。

#### リンゴ

伝統的に、リンゴは落葉果樹の中で、最も経済的に重要な品目であり、次いで生食ブドウ、ナシの順である。 2017/18年(7月から翌年6月)の生産量は、開花期は順調に推移したものの、6月に雹害に遭遇したため、 前年より5%減少し275万トンであった。

2018/19年については、冬期は温暖で生育環境に恵まれた。開花期及び着果期も順調に推移し、降霜による被害もなかった。このため、生産量は300万トンと予測される。中央アナトリア地方と北部地中海沿岸地域では特に単位面積当たり収量が大きいと見込まれる。

リンゴの生産量は、年により変動は大きいが、トルコは世界で5番目に生産量が多い国である。即ち、中国、EU、インド、米国に次ぐ生産量を誇っている。しかし、伝統的に生産性の低い果樹園が大宗を占めていることから、リンゴの輸出という点では大きな存在ではなかった。リンゴは地理的にも気象的にも大きく条件が異なるトルコ国内の大部分の地域で生産されている。しかし、商業的生産を行う地域は、中央アナトリアの南部、地中海沿岸北部に位置している。収穫は7月に始まり10月まで続く。トルコでは地理的条件が多様であるため460の品種が栽培されているが、商業的に流通するのはわずか10品種である。

商業的な生産量のうちおよそ50%は3つの県(イスパルタ、カラマン、ニーデ)により担われている。約60万トン(トルコ全体の生産量の20%)はイスパルタ県で生産されており最大の産地である。次いでカラマン県がトルコ全体の15%の生産量を担っている。輸出に当たって、生産者は既存の果樹園をより収益性の高いリンゴに改植する取組みが進められている。カラマン県では200万本が新植されており、今後数年以内に商業生産が増加することが見込まれる。商業的生産は、アンタルヤ、カナッカレ、デニズリ、アマシャ地域でも進められている。

品種構成は変化しているものの、トルコで生産されているリンゴの40%はレッド(スターキング)デリシャスで、1/4はゴールデンデリシャスである。グラニースミス、ふじ、ガラ、Amasya、ジョナオールド、クリプスピンク、ブレイバーンも生産が増加している。新品種は、輸出可能性が高いことから、生産者の間で人気が高まっている。

トルコの公式データによると、2017年のリンゴ樹数は7,400万本で、2007年に比べると57%増加している。 この間、栽培面積は実質的に増加していないため、密植栽培により収量を高めることができる矮性のリンゴへの転換が進んだことを示している。現在では、およそ半数の果樹園が近代的な(矮化栽培による)生産方式によると推計される。

近年、栽培面積は17万 ha と変化はないが、生産者は徐々に古い樹を改植して輸出に適した品種への転換を進めている。改植本数は、トルコ産に対する海外市場からの需要が増加していること、政府か支援していることから、年々増加している。

#### ナシ

2018/19年(7月から翌年6月)の生産量は、開花期の気象に恵まれたことから前年よりも増加し、45万トンと推測される。栽培面積に変化はないものの、生産者は古い樹を改植し、徐々に生産性の高い樹を植栽している。2017/18年は、6月に雹害に遭遇したことから、前年の44万トンから42万トンに減収した。

トルコでは多くの品種が栽培され、年間を通じて収穫が行われているが、約50%はマルマラ海沿岸で生産

されている。次いで、エーゲ海沿岸、北部地中海沿岸であり、都市名としては、ブルサ、ヤロバ、アンタルヤ、アンカラ、コンヤ、ブルドゥルである。トルコでは地元原産の品種と外国から導入された品種が生産されているが、主な品種は、サンタマリア、Akca、Mustafabey、Cassia、ウィリアムス、アンカラ、Deveciである。

## 生食ブドウ

トルコでは各地で生食ブドウが生産されており、重要な商業作物となっている。種無しブドウは主にエーゲ海沿岸(トルコ西部)で生産されている。マルマラ地域(トルコ北西部)ではワイン用ブドウと生食ブドウが生産されている。最も収穫が早いのは地中海沿岸地域(トルコ南部)であり、5月に始まる。その後は各地で収穫が行われ、10月まで続く。

2018/19年(6月から翌年5月)の生産量は、8月にエーゲ海沿岸のマニサで豪雨に見舞われたことから、前年を10%下回る190万トンと予測される。2017/18年の生産量は、主要な産地で天候不順であったことから、前年を10%下回る212万トンであった。

## 消費

### リンゴ

伝統的に、トルコでは生産量の90%は生鮮果実として消費される。5%はジュース、缶詰、ビネガー、ドライフルーツとして加工に仕向けられ、5%は生鮮果実として輸出される。リンゴは手に入れやすいこと、伝統的な利用方法があること、品種が多いことから最も好まれる果実である。CA 貯蔵庫が整備されてきたことから、年間を通して市場に供給されるようになってきた。現時点の冷蔵貯蔵施設の収容規模は100万トンであるが、毎年整備が進められている。

消費者は品種に対して大きな関心を持っていないが、リンゴの違いは色(赤、黄、緑)と味で判断している。トルコで好まれるリンゴの大きさは中程度(1kgで約6個)のものである。人気のある品種はレッド(スターキング)デリシャス、ゴールデンデリシャス、グラニースミスである。シーズンの始めにはレッド(スターキング)デリシャスの人気が高く、新年を超すとゴールデンデリシャスの人気が高まる。レッド(スターキング)デリシャスは収穫後に冷蔵施設に保存されなければ果肉が軟化するためである。

2018年10月の段階では、市場(平均的な小売市場)価格は、リンゴでキロ当たり4トルコリラ(以下リラ)(昨年は3リラ)であり、ナシは6リラ(同4リラ)、生食ブドウは6リラ(同3リラ)であった。価格が上昇しているのは平均的な物価上昇と機を一としている(約20%)ためである。ブドウの価格上昇率が大きいのは、生産者によると、リラの為替レートが安くなり輸出機会が増加したことによるものだそうで、この先も(輸出の増加が予想されるため)国内市場価格の上昇が見込まれる。一般に生産者手取り価格は市場価格の約半分以下である。

#### ナシ

伝統的にナシは生鮮果実として消費される。しかしながら、3~5%は輸出され、若干量は缶詰に加工される。人気のある品種は、サンタマリア(全体生産量の30%)、Deveci(同20%)、アンカラ(同10%)、ウィリアムス(同10%)、Keiffer(約5%)、Akca(同5%)である。冷蔵貯蔵施設が整備されつつあるため、春まで出荷が可能となっている。

#### 生食ブドウ

生食ブドウは季節性の高い果実であり、夏から秋の半ばまでが出荷期間である。出荷期間は消費量が多い。通常、販売形態は大部分が消費者に好まれるバラ売りである。ただし、スーパーやハイパーマーケットではパッケージされたブドウも販売されている。生産量が減少したことと輸出が増加したため、2018年10月の段階では地元市場の価格は相当上昇している。

#### 貿易

トルコは世界でもトップクラスの落葉果樹生産国であるが、伝統的に生産量に比べて輸出量が少ない。年により、生産量により異なるが、生産量に占める輸出割合は5~15%の範囲内である。輸出割合が低い理由は、輸出市場で好まれる新品種の生産量が少ないこと及びトルコ国内の市場規模が大きいことである。しか

し、最近では輸出業者が新規市場の開拓に熱心に取組んであおり、生産者も古い樹を改植して輸出市場で好まれる品種に転換する動きがある。加えて、ロシア市場がトルコに対して輸入禁止措置を解除したため、2017/18年から輸出は一層活発になっている。

#### リンゴ

2017/18年の輸出量は18.9万トンであった。イラク、ロシア、シリアが3大輸出先国であり、3カ国で輸出量全体の75%を占めた。最大の輸出先国はイラクで60,485トンであり、ロシアの47,315トンが続いている。近年輸出量が増加しているのは、トルコ近隣諸国からの需要が増加しているためである。2018/19年の輸出量は22万トンと予測される。これは近隣諸国からの需要が強まることを前提に、生産量の増加から推計した数字である。

١.	ルコの	リンゴ	国別輸出量	ł

170-3772-67	2015/	16年	2016/	′17年	2017/18年		
	輸出金額(ドル)	輸出量(トン)	輸出金額(ドル)	輸出量(トン)	輸出金額(ドル)	輸出量(トン)	
イラク	13,214,555	54,921	36,882,119	168,755	13,342,697	60,485	
ロシア	2,499,353	3,056	331,351	461	36,703,018	47,316	
シリア	4,254,171	22,313	2,573,179	11,307	12,559,515	32,997	
インド	730,560	1,123	2,709,358	4,114	7,555,799	10,475	
サウジアラビア	783,146	1,375	2,431,164	6,550	3,891,887	9,819	
アラブ首長国連邦	441,601	743	1,544,316	2,608	1,948,967	2,621	
ヨルダン	1,717,293	4,373	612,344	1,972	1,831,330	4,263	
リビア	166,177	391	626,352	1,194	1,750,657	3,547	
北キプロス	1,116,752	2,373	1,233,308	3,232	1,429,589	3,638	
トルクメニスタン	1,071,807	1,620	1,495,138	3,014	1,261,059	2,326	
その他	7,700,161	18,217	5,110,849	12,572	6,290,524	11,591	
合計	33,695,576	110,505	55,549,478	215,779	88,565,042	189,078	

#### ナシ

2017/18年の輸出量は、前年の1.6万トンから4.37万トンに増加した。これは近隣諸国からの需要が増加したためである。イラク、ロシア、ルーマニアが3大輸出先国である。2018/19年の輸出量は、近隣諸国からの需要が安定して推移すると仮定し、4.5万トンと予測した。

K /L-7:	の+シ	/EI 9	ж.	-
1.1/	~	/ <b> </b>   / /	 щ.	

トルコのナン国が輸出量								
	2015/	16年	2016/	/17年	2017/18年			
	輸出金額(ドル)	輸出量(トン)	輸出金額(ドル)	輸出量(トン)	輸出金額(ドル)	輸出量(トン)		
イラク	2,816,800	9,504	2,044,251	7,085	4,319,693	12,098		
ロシア	3,274,406	5,106	83,392	132	10,720,239	15,931		
ルーマニア	321,409	379	304,276	298	1,845,675	2,274		
トルクメニスタン	1,253,477	1,475	843,217	955	1,149,043	1,615		
サウジアラビア	1,409,036	2,195	961,100	1,657	742,301	1,627		
ブルガリア	24,851	53	58,486	117	865,412	1,464		
北キプロス	582,134	1,134	493,034	968	525,949	1,214		
シリア	537,967	1,081	516,420	1,301	420,617	1,260		
ドイツ	540,722	432	529,462	438	889,078	804		
ギリシャ	147,003	216	222,527	312	415,600	567		
その他	1,733,539	2,622	1,982,508	2,695	2,946,716	4,833		
合計	12,641,344	24,197	8,038,673	15,958	24,840,323	43,687		

#### 生食ブドウ

2018/19年の輸出量は、ロシア等からの需要が安定的であると仮定すると、30万トンと予測される。ロシア、ウクライナ、ドイツが3大輸出先国である。2017/18年の輸出量は28万トンで、ロシアが輸入禁止措置を解除したため、前年の17.3万トンを60%上回った。2017/19年の最大の輸出先はロシアであり、16.3万トンと輸出量の60%を占めた。リラの下落により、国内市場で販売するより輸出に向けることが優先されている。

トルコの生食ブドウ国別輸出量

2015/ <sup>-</sup>	16年	2016/	′17年	2017/18年		
輸出金額(ドル)	輸出量(トン)	輸出金額(ドル)	輸出量(トン)	輸出金額(ドル)	輸出量(トン)	
97,158,278	119,447	-	_	121,168,425	162,696	
4,461,338	7,519	10,969,440	23,211	12,503,643	27,577	
9,459,091	9,898	9,925,308	11,422	10,159,595	11,006	
5,606,305	9,235	25,642,371	49,426	9,709,219	15,357	
4,947,236	5,163	7,479,834	8,870	9,617,092	11,396	
6,187,501	8,797	12,001,301	17,768	7,486,882	13,421	
769,881	758	1,548,496	1,738	4,070,351	4,158	
1,572,452	1,700	1,375,021	1,809	2,822,825	3,532	
10,582,603	12,106	35,519,087	58,991	19,652,572	30,531	
140,744,685	174,623	104,460,858	173,235	197,190,604	279,674	
	輸出金額(ドル) 97.158.278 4.461,333 9.459,091 5.606,305 4,947,236 6.187,501 769,881 1,572,452	輸出金額(ドル) 輸出量(トン) 97,158,278 119,447 4,461,338 7,519 9,459,091 9,898 5,606,305 9,235 4,947,236 5,163 6,187,501 8,797 769,881 758 1,572,452 1,700 10,582,603 12,106	輸出金額(ドル) 輸出量(トン) 輸出金額(ドル) 97.158.278 119.447 - 4.461,338 7.519 10,969.440 9.459.091 9.898 9.925.308 5.606,305 9.235 25.642.371 4.947.236 5.163 7,479.834 6.187.501 8.797 12,001,301 769.881 758 1,548.496 1,572,452 1,700 1,375,021 10,582,603 12,106 35,519,087	輸出金額(ドル) 輸出量(トン) 輸出金額(ドル) 輸出量(トン) 97.158.278 119.447 4.461.338 7.519 10.969.440 23.211 9.459.091 9.898 9.925.308 11.422 5.606.305 9.235 25.642.371 49.426 4.947.236 5.163 7.479.834 8.870 6.187.501 8.797 12.001.301 17.768 769.881 758 1.548.496 1.738 1.572.452 1.700 1.375.021 1.809 10.582.603 12.106 35.519.087 58.991	輸出金額(ドル) 輸出量(トン) 輸出金額(ドル) 輸出量(トン) 輸出金額(ドル) 97.158.278 119.447 121.168.425 4.461,338 7.519 10.969.440 23.211 12.503.643 9.459.091 9.898 9.925.308 11.422 10.159.595 5.606,305 9.235 25.642.371 49.426 9.709.219 4.947.236 5.163 7.479.834 8.870 9.617.092 6.187.501 8.797 12.001.301 17.768 7.486.882 769.881 758 1.548.496 1.738 4.070.351 1.572.452 1.700 1.375.021 1.809 2.822.825 10.582.603 12.106 35.519.087 58.991 19.652.572	

#### 政策

落葉果果実の大部分は国内で消費され、輸出に回る量は比較的少ないが、民間業者、専門のマーケティング協同組合を通じて輸出されている。輸出市場からの需要が安定していること、政府の支援があることから

トルコの生産者は新たな果樹園の開発に投資を行っている。最近では政府の支援を通じて冷蔵貯蔵施設の 数が増加しており、果実の周年供給に役立っている。

農林業省に登録した生産者は、農林業省から直接支払いを受けることができる。2018年の公式発表によると、農林業省は燃料コスト、肥料コストを支援するため、ヘクタール当たり140リラを支払っている。また、新たに果樹園を設置する場合は、標準的な矮性苗木の購入及び果樹園の開発に要する経費として、ヘクタール当たり1,000リラが支払われている。もし、政府が認証した品質の良い果実を生産する矮性苗木を導入する場合はヘクタール当たり4,000リラに引上げられる。また、有機農業や農業生産工程管理を推進する場合も支払いを受けることができるが、その額はヘクタール当たり100リラから1,000リラまで幅がある。さらに、政府は作物保険に対する支援も行っており、(保険料の)50%が補助されている。

トルコ政府が認証した矮性苗木に対して2018年に助成した金額は、果樹全体(落葉果樹、核果類、カンキッ類を含む)で2,500万リラ(450万ドル)であった(2018年10月現在1ドル=5.5リラ)。

政府がリンゴ、ナシ、生食ブドウに課している輸入関税は以下の通りである。

トルコの輸入関利		
品目	関税番号	関税率(%)
生鮮リンゴ	808.10	60.3
生鮮ナシ	808.30	60.3
生鮮ブドウ	806.10	54.9

トルコのリンゴ統計(在トルコ 米国農務省 農務官)

トルコのリンコ統計(仕トルコ	木凷辰猕旬	長務目)	
	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	107,500	170,000	170,000
収穫面積(ha)	170,000	170,000	170,000
結果樹数(千本)	55,000	55,000	59,000
未結果樹数(千本)	15,000	15,000	15,000
果樹数合計(千本)	70,000	70,000	70,000
販売生産量(千トン)	2,750,000	2,600,000	2,850,000
非販売生産量(トン)	150,000	150,000	150,000
生産量計(トン)	2,900,000	2,750,000	3,000,000
輸入量(トン)	1,000	600	500
総供給量(トン)	2,901,000	2,750,600	3,000,500
国内生鮮仕向量(トン)	2,576,000	2,451,600	2,670,500
輸出量(トン)	215,000	189,000	220,000
加工仕向量(トン)	110,000	110,000	110,000
総出荷量(トン)	2,901,000	2,750,600	3,000,500

年産:7月→6月 注)栽培面積は原文ママ

トルコのナシ統計(在トルコ 米国農務省 農務官)

1 / V — V V / V / IV V II V / II / V		, <u>— //X, //, — /</u>	
	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	230,000	230,000	230,000
収穫面積(ha)	230,000	230,000	230,000
結果樹数(千本)	20,000	20,000	20,000
未結果樹数(千本)	20,000	20,000	20,000
果樹数合計(千本)	40,000	40,000	40,000
販売生産量(千トン)	420,000	400,000	430,000
非販売生産量(トン)	20,000	20,000	20,000
生産量計(トン)	440,000	420,000	450,000
輸入量(トン)	100	20	20
総供給量(トン)	440,100	420,020	450,020
国内生鮮仕向量(トン)	414,100	366,020	395,020
輸出量(トン)	16,000	44,000	45,000
加工仕向量(トン)	10,000	10,000	10,000
総出荷量(トン)	440,100	420,020	450,020
F +			

年産:7月→6月

トルコの生食ブドウ統計(在トルコ 米国農務省 農務官)

トルコの生食ノトワ税計(イ	住トルコ 木国	辰猕自 辰於	(音)
	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	300,000	300,000	300,000
収穫面積(ha)	300,000	300,000	300,000
販売生産量(トン)	2,200,000	2,000,000	1,780,000
非販売生産量(トン)	150,000	120,000	120,000
生産量計(トン)	2,350,000	2,120,000	1,900,000
輸入量(トン)	500	500	500
総供給量(トン)	2,350,500	2,120,500	1,900,500
国内生鮮仕向量(トン)	2,177,500	1,840,500	1,600,500
輸出量(トン)	173,000	280,000	300,000
総出荷量(トン)	2,350,500	2,120,500	1,900,500

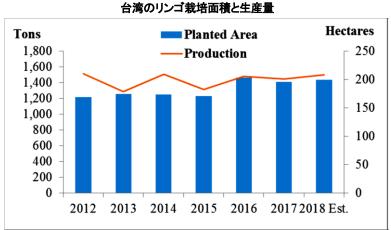
年産:6月→5月

# 23. 台湾の落葉果樹(リンゴ)事情

### 米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2018 年 11 月 2 日公表)

#### 生産

台湾のリンゴ生産量は少なく、国内需要の1%を下回る程度である。2018/19年産の生産量は平年並み の天候で推移したことから1,500トンと予測される。台湾農業会議(COA)の統計によると、2017年のリンゴ 栽培面積は196ha で、結果樹数は7.3万本である。産地は台湾中部の標高の高い南投県、台中市に集中し ている。栽培品種は、ふじ、Five Paw、Gold Crown、Honey で、収穫時期は9月から12月である。



#### 消費

台湾農業会議の統計によると、2017/18年(7月から翌年6月)のリンゴ消費量は、前年を8%下回る156.0 51トンであった。2018年初頭はバナナ、パインアップル、マンゴーなどの国産果実が潤沢で、2017/18年 の国産果実の価格は前年を20%下回った。このため、国産果実の消費量が増加し、リンゴ及びその他の輸 入果実の消費が減少した。貿易統計によると、台湾ではふじとガラの輸入量が依然として多い。

## 貿易

2018/19年の輸入量は、これまでの傾向からすると16万トンに回復すると予想される。2017/18年の輸 入量は、国産果実の潤沢な出回りにより、前年を6%下回る154,600トンであった。2017/18年のチリからの 輸入量は1%の減少に過ぎなかったが、米国からの輸入量は18%減少し、49,340トンであった。このため、 チリが米国を抜いて最大の輸入先国となった。米国からの総輸入量は減少したが、有機リンゴの輸入量は前 年を1%上回る4,307トンであった。なお、米国からの輸入量の内、95%以上はワシントン州産が占めている。 一方、日本からの輸入は、高品質の贈答用リンゴを中心に、17%増加して23,502トンであった。

台	渣	മ	П	ン	·ゴ	쉩	λ	量
	/5	~	•	_		THU!	/\	_

	総輸入		うち米国	少国の割合(04)	
	輸入量(トン)	輸入金額(百万ドル)	輸入量(トン)	輸入金額(百万ドル)	木国の割合(%)
2015/16年	169,054	265	53,883	70	31
2016/17年	168,109	265	59,939	85	36
2017/18年	154.600	262	49,340	70	32

#### マーケティング

リンゴの小売に占めるスーパー、ハイパーマーケットの割合は約70%である。主に市場で売られている品 種は、ガラ、ふじである。特徴的なことは、トキに代表される日本産の高級品種の販売である。輸入業者は、 オンライン販売やソーシャルメディアを通じた販売促進活動を積極的に進めている。有機リンゴは人気がある ものの、台湾独自の有機農産物に対する輸入規制の問題に悩まされている。国産リンゴは国内で販売され ているが、生産者は観光農園、贈答用の詰め合わせ、インターネット販売等を通じて収入を確保しようと努め ている。国産リンゴは従来型の市場でも販売されている。

## 政策

## 関税

輸入関税を優遇する協定は、台湾のリンゴ輸入に大きな影響を及ぼしている。特に、ニュージーランドと台湾の協定により、同国産のリンゴは無税で輸入することが可能となっている。加えて、グアテマラの関税は2.6%であり、ニカラグア、エルサルバドル、ホンジュラスは5.3%となっている。米国を含むその他の国からの輸入関税は20%である。加えて、ニュージーランドに比べると、他の輸出国は、植物防疫及び関連する規則に関して不利な扱いを受けている。

## 検疫及び関連規則

生鮮リンゴの輸入に関しては、健康保険部(MOHW)の下部組織である台湾食品医薬品局(TFDA)及び農業会議(COA)の下部組織である動植物検査検疫局(BAPHIQ)が定める規則に従わなければならない。TFDAは食品安全に関する責任機関であり、BAPHIQは動植物検疫に関する責任機関である。この規則の中には輸出国における果樹園、梱包施設、出荷施設に関する規制も含まれている。このため、米国から輸出を行うに当たっては、米国動植物検疫所(APHIS)が発行する証明が必要である。TFDAは港湾で定期的な検査をしており、残留農薬、重金属について監視を行っている。台湾の残留農薬基準はしばしば米国の基準や国際的な基準とも異なっている場合がある。台湾で残留農薬基準値が設定されていない農薬/作物(の組合せ)は、ポジティブリストとして0.01pmが適用されている。TFDAの「食品の残留農薬基準」は果実、野菜にも適用されている。また、重金属に関してはTFDAによる植物に由来する重金属の含有基準が適用されている。もし輸入生鮮農作物が検査の対象となった場合、輸入業者は自らの輸入倉庫で輸入品をTFDAの検査に供しなければならない。そして、全ての検査が終了するまで市場に出荷してはならない。台湾の規則に違反した場合は、通関が止められるか廃棄させられることになる。

台湾のリンゴ統計(在台湾 米国農務省 農務官)

H 12 44 7 5 - 120 H 1 / 12	. H /7 /\ H //5	. 1/1 E /JC 1/1 E	
	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	204	196	200
収穫面積(ha)	204	196	200
結果樹数(千本)	73	70	70
未結果樹数(千本)	0	0	0
果樹数合計(千本)	73	70	70
販売生産量(千トン)	1,483	1,451	1,500
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	1,483	1,451	1,500
輸入量(トン)	169,583	156,051	161,500
総供給量(トン)	169,583	156,051	161,500
国内生鮮仕向量(トン)	169,583	156,051	161,500
輸出量(トン)	0	0	0
加工仕向量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	169,583	156,051	161,500
左 <del>マ マ マ マ マ マ マ マ マ マ マ マ マ マ マ マ マ マ マ</del>			

年産:7月→6月

# 24. 米国のリンゴ新品種レーブ又の名をファーストキス

Good Fruit Grower 誌 (2018年10月号)



新品種は、ミネソタ州ではファーストキス(First Kiss)と知られているが、又の名をレーブ (Rave)ともいう。 生産者、市場関係者は、品種名 MN55 が今年市場で販売されるに当たり、どちらの名前であれ消費者の記憶に残ってもらいたいと願っている。

MN55 はミネソタ大学が新品種として27番目に世に送り出したリンゴであり、今年初めて相当量が小売店舗で販売された。ただ、生産された場所により違う名称で販売される。

ミネソタ州の生産者は、自らの税金が大学の育種プログラムで活用されることもあり、登録商標名ファーストキスとして販売することができる。同州の生産者であれば、誰でもこの品種を生産することが可能だ。しかし、同州以外の生産者は、ワシントン州のワナッチーに拠点を置く Stemilt Growers 社の独占的なライセンスの下でレーブとして販売しなければならない。ミネソタ大学で果樹育種プログラムのディレクターを務める Luby 氏によると、ミネソタの生産者に地元生まれの果実を地元で販売してもらうために設けた取決めだそうだ。「地元で生まれの果実を差別化したいからだ」と説明している。

ミネソタ州のリンゴ生産量は多くなく、新品種は貴重だ。一方、大学としては州外にも生産を拡大したいと考えている。今年のリンゴ生産予想量はミネソタ州全体で58万ブッシェル(1ブッシェル42ポンド)に対し、ワシントン州は1億5,500万ブッシェルもある。

このため、MN55の大部分はレーブとして販売される。Stemilt Growers 社としても、名称を違えることで独自の生産基準を設けることができるので好都合だ。

同社では、今年、6万箱(1箱40ポンド)を収穫したが、ワシントン州の内外の生産者にレーブの植栽を勧めており、収穫量は程なく3倍になるとマーケティングディレクターの Pepperl 氏は語っている。 具体的な生産目標は定めていないが、「現状は目指すところに程遠い」状況だそうだ。

この品種は、ハニークリスプとアーカンソー大学が育成した早生品種を交配して生まれた。酸味があり、ジューシーで、歯応えが良く、成熟が早い。Pepperl 氏によると、7月下旬には収穫を始め、8月初旬には出荷を始めたそうだ。

Stemilt Growers 社は、8月にニューヨーク市中心部の店舗でレーブの店内広告を行うとともに、3,000名を対象にサンプル果実の提供行った。

この品種の来歴は1990年代まで遡る。当時、ミネソタ大学の育種研究者は、同大学で育種したハニークリスプと同じ味と食感をも持ち、早く熟成する品種の開発を目指したのだ。この結果生まれた MN55 は、大学の広報によると、ハニークリスプよりも4週間早く収穫できる品種として誕生した。

## 25. ゼスプリが知的所有権侵害で賠償請求

### ASIAFRUIT 電子版 (2018 年 11 月 9 日)

ニュージーランド裁判所は、ゼスプリが知的所有権を持つキウイ品種を中国に密輸したとされる生産者が、 オーストラリアへも同様な持ち出し計画を立てている可能性がある旨を聴取した。

Haoyu Gao は、妻の Xia Xue 及び両者が運営する会社である Smiling Face とともに、「ゼスプリが商標登録したキウイ品種を中国に違法に持ち出して167ha のキウイ栽培を行っている」とのゼスプリの主張に対し、ニュージーランド高等裁判所は聴聞会を開催した。

ゼスプリはニュージーランド植物品種権利法違反及び知的所有権侵害により、3,000万ニュージーランドドルの損害賠償を求めている。

ゴールド3(サンゴールドとして知られる)の中国における無許可栽培は2016年に発見された。

ゼスプリはこの事件に関連して、ウィーチャットで会話されている内容から、ニュージーランドにおける栽培 者番号を判別し、Gao が事件に関連していることを浮かび上がらせた。

「Newsroom」によると、ゼスプリ側は、Gao が中国の生産者である Changqing Shu と偽造契約を結び、Shu はアジア圏にゼスプリ品種の苗木を販売しようとしていたと主張している。

ゼスプリは声明の中で、「今回の行動は、ニュージーランド国内外のゼスプリ関係生産者に対する、『知的 所有権を保護するという断固としたメッセージ』である」と主張している。

また、「今回の損害賠償額である3,000万ニュージーランドドルは、ニュージーランド国内におけるサンゴールドの知的所有権相当額であり、中国から支払われなかった対価に相当する金額である」としている。

今週の公判では、ゼスプリのグローバル生産マネージャーの Shane Max は、Gao が違法にゼスプリの Gold3 と Gold9 の苗木をオーストラリアに持ち出そうとした旨を証言している。

ニュージーランド公式情報法の下で入手された文書によると、Gao と名前が公表されていない男との間でニュージーランドからオーストラリアに苗木を輸送することに関しての会話が詳細に記述されているという。

一方、Gao の弁護士によると、「Gao はゴールドキウイに関する栽培方法に関して会話をしただけであり、不 法に苗木を持ち出すことには関与していない」とコメントしている。

なお、現段階では、Gaoは中国への違法な苗木の持ち出しに関しては訴追されていないという。

著者: Matthew Jones

# 26. チリの果実輸出量は中国向けを中心に記録を更新

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 11 月 9 日)

チリ果実輸出業協会(ASOEX)会長の Bown 氏が公表したところによると、2017/18年のチリ産果実の輸出量は2,781,092トンで、2016/17年の2,607,055トンを6.7%上回る新記録であったとのことだ。

ASOEX 会長の Bown 氏によると、「果実輸出量の増加は、主にアジア及び中国向けのサクランボ、ブルーベリーの輸出量が過去最高を記録したことによる要因が大きい。サクランボの場合は、昨年よりも96%増加し、チリの果実輸出品目の中で初めて第3位に躍り出た。サクランボは大々的な販売促進活動により消費が拡大し、輸出量の90%は中国向けであった。実際、アジア・フルーツ・ロジスティカ(注:2018年9月香港で開催)においてチリのマーケティング活動に対して賞が贈られたくらいだ」と語っている。

輸出先に関しては、輸出業者は極東が重要であると指摘している。「アジアはチリからの輸出が最も増加している地域であり、30.7%も増加した。これは、アジア・太平洋地域に対する関心が高まっていることを反映したものであり、特に中国は鍵を握る国である。近い将来、特に中国はチリの果実輸出の主要市場になると考えている」とも述べている。

Bown 氏は、米国、カナダもチリの果実輸出市場としては引続き重要だと説明している。2017/18年の同地域への輸出割合は32%に達する。しかし、前年に比べると輸出量は2.6%減少した。これは輸出先が多様化したことの結果であるそうだ。

この点に関して会長は、「チリの果実産業は輸出先の多様化を進めており、新規市場やニッチな市場の開拓を進めており、勿論、市場を開放する努力も行っている。しかし、これは従来からの得意先である市場から撤退することではなく、これら市場とは強固な連携関係を構築したい。チリの果実は品質の素晴らしさが認められている。我々の目的は世界の消費者にチリの果物を知ってもらうことだ」と語っている。

会長は、欧州向けの輸出が増加していることにも言及している。欧州向けの輸出は658,711トンであり、前年を10.3%上回ったそうだ。

## リンゴの輸出量が生食ブドウを上回った

品目別に見ると、リンゴが果実で最大の輸出品目となったのは過去2回目だ。伝統的にはチリの果実輸出は生食ブドウに牽引されてきた。そして、チリは世界で最大の生食ブドウの輸出国である。リンゴの輸出量は774,807トンで、前年に比べて10.2%増加した。次いで生食ブドウが731,746トン、サクランボが186,899トン、キウイが176,374トン、アボカドが143,395トン、ナシが129,564トン、スモモが120,652トン、ブルーベリーが110,207トンと続いている。

会長は、チリの果実業界にとってカンキツ(オレンジ、レモン、クレメンティン、マンダリン)も重要な輸出品目だと強調している。2017/18年の輸出量はカンキツ類合計で29万トンを超えているとのことだ。

#### 米国市場

輸出先国を見ると、米国が最大の輸出先であり、次いで中国-香港、オランダ、英国、コロンビアとなっている。米国向け輸出量は843,359トンで、前年に比べると3.1%減少した。とはいえ、過去6年間の中では3番目に輸出量が多い年であった。

品目別には、最も輸出量が多かったのは生食ブドウで、全体の39%を占める326,260トン、次いでオレンジ(82,714トン)、ブルーベリー(67,098トン)、クレメンティン(62,561トン)、リンゴ(61,014トン)、マンダリン(55,791トン)、レモン(51,086トン)であった。

米国向け輸出は、特にカンキツが多く、最大の輸出先となっている。また、クレメンティンは前年に比べ56%増加し、オレンジも16.3%、レモンも15.1%増加した。なお、チリ産果実の67%はフィラデルフィア及びロングビーチ港を経由して米国市場に輸出されている。

#### 極東

極東はチリの果実輸出先としては2番目に多い地域であり、過去6年で見ると最も多い626,729トンを記録

した。アジア向けに輸出される品目としては、最も多いのは生食ブドウで、全体の30%(188,035トン)、次いでサクランボが27%(166,773トン)、リンゴが20%(121,933トン)、スモモが7%(43,695トン)である。

アジアの中では、中国-香港が最大の輸出先で、全体の81.35%を占めており、2016/17年に比べて45%増加した。

中国向けに輸出された果実で最も多いものはサクランボで、全体の41%(161,508トン)を占め、次いで生食ブドウが31%(119,271トン)、スモモが11%(41,319トン)、ネクタリンが4%(16,833トン)であった。 この中では、サクランボが前年に比べて107%増加し、ネクタリンが117%増加した。

一方、インド向け輸出が急拡大しており、前年を133%上回る68,082トンを記録し、アジア向け輸出の14.19%を占めた。

#### 欧州

欧州はチリの果実輸出先としては3番目に多い地域であり、2017/18年には658,711トンを輸出した。前年に比べると10.3%多く、過去6年間では概ね60万トンを切っていたことから回復したと言える。これまでで最も輸出量が多かったのは2012/13年の708,240トンであった。

欧州は地域別に見ると、2017/18年で2番目に増加率が大きかった地域であった。

Bown 氏は、増加の要因としてリンゴ(対前年比46%増)、ブルーベリー(同12.2%増)、スモモ(同28.3%) をあげている。

輸出国別に見ると、最も輸出量が多い国はオランダ(欧州の輸出ゲート国となっている)で全体の28% (18 4,488トン)を占め、次いで英国が18.2% (120,094トン)、ドイツが12.3% (81,272トン)、ロシアが12.2% (80,590トン)となっている。

著しく輸出量が増加した国は、ドイツ(41.6%増)、フランス(18.5%増)、スペイン(15.6%増)であった。 品目別には、最も多く輸出された果実はリンゴで全体の34.2%(225,597トン)、次いで生食ブドウが19.6%(128,837トン)、アボカドが13%(85,903トン)、キウイが10.8%(71,438トン)、ナシは9.4%(62,099トン)であった。

## 中南米

中南米はチリの果実輸出先としては4番目に多い地域である。2017/18年の輸出量は505,058トンで、前年より若干(-1.1%)減少したが、過去6か年でみると数量は安定している。

コロンビアが最大の輸出先国で21.59%を占め(109,047トン)、次いでブラジルが19.31%(97,540トン)、エクアドルが15.60%(78,786トン)であった。

品目別には、最も多く輸出されたのはリンゴで、全体の55%を占め(278,989トン)、次いで生食ブドウが12%(58,929トン)、ナシが10%(52,455トン)であった。

#### 中東

中東への輸出は89,171トンで、前年より若干(-1.4%)減少した。最大の輸出先国はサウジアラビアで、全体の62.2%(55,480トン)を占め、次いでアラブ首長国連邦(17,413トン)、クウェイト(3,986トン)であった。 品目別にはリンゴが72%を占め、次いで生食ブドウが12%、キウイが8%であった。

#### 産地別輸出量

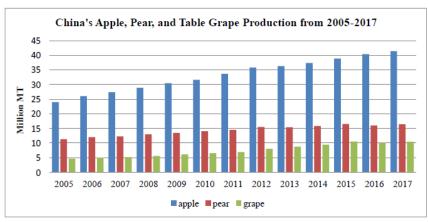
産地別輸出量でみると、最も輸出量が多かったのはオイギンス州で29.8% (828,197トン)を占め、次いでマウレ州が26.2% (728,129トン)、バルパライソ州が12.7% (353,896トン)であった。最も輸出量の増加割合が大きかったのはマウレ州で22.4%増加した。

輸出港として最も多くの荷を扱ったのはバルパライソ港で1,487,646トン、次いでサン・アントニオ港が824,477トン、ロスアンデスが123.721トンであった。

## 27. 中国落葉果樹(リンゴ、ナシ、生食ブドウ)事情

## 米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2018 年 11 月 6 日公表)

## 生産



Source: National Statistics Bureau, FAS Beijing

#### リンゴ

2018/19年産(7月から翌年6月)のリンゴ生産量は、前年より約25%少ない3,100万トンと予測される。4月上旬に主要なりんご産地である中国北西部の陝西省、甘粛省、山西省は厳しい霜害に襲われた。開花期にこの霜害が遭遇したことから、最大の産地である陝西省では、前年よりも20~30%の減収が見込まれる。さらに、山西省と甘粛省では前年より30~50%の減収が予想される。第2のりんご産地である山東省では霜害はそれ程ではなかったが、5月に雹害に見舞われ、前年より15%の減収が見込まれる。一方、遼寧省と河南省では穏やかな気象条件であったことから、平年作ないしは豊作が予想される。今回の悪天候は、特に冷涼な気候の北西部において、果実の品質(例えば小玉化)にも影響を及ぼした。山東省では豪雨により褐変病の発生はあったものの、品質は総じて良好であった。

2018/19年のリンゴ栽培面積は、232万 ha であり、前年と同程度である。陝西省南部、西部山西省、河南省では廃園が認められるが、陝西省北部と甘粛省南東部では新植が進められている。一方、山東省では古い樹を改植し、新植する動きも見られる。このようなことから、当面は中国のリンゴ栽培面積は、変動がないかやや減少するものと見込まれる。業界全体の動きを見ると、果樹農家の高齢化が見られる。高齢化のために



果樹経営を止め、協同組合や果樹生産会社に園地を引き渡す状況が生まれている。リンゴ業界では、これまで生産資源を統合することは希であったが、最近では徐々にではあるが着実にこの方向に向かいつつある。

農業技術は改善されつつあるものの、プレミアム品質の果実の生産割合は30%を下回っている。中国で生産されるリンゴの品種は数種類でしかなく、ふじが総生産量の70%以上を占め、早生のガラ等その他の品種が残りを占めている状況である。

#### ナシ

2018/19年産(7月から翌年6月)の生産量は、前年を20%下回る1,310万トンと予測される。リンゴと同様、開花期に中国北部のナシ産地は厳しい霜害に見舞われた。最大の産地である河北省では、前年に比べ20~25%減収すると見込まれる。生産量が第2位の山東省も同様に前年より10~20%の減収が見込まれる。厳しい霜害は、新疆ウイグル自治区、陝西省、河南省、安徽省でも報告されている。一方、大規模ナシ産地である遼寧省と四川省では豊作が予想される。生産量の減少は大きいものの、品質面ではそれ程の影響は報告されていない。ナシは海南等を除く中国全土で栽培されているが、生産量の70%は中国北部地域が担っている。

#### 中国のナシ主産地



茶色:生産量の20%以上(河北省)、黄色:生産量の5~10% (遼寧省、安徽省、山東省、河南省、四川省、陝西省、新疆)

2018/19年産のナシの栽培面積は、前年より若干減少し、110万 ha と予測される。栽培面積の減少は河 北省などの伝統的主産地で認められる。調査によると、一部のナシ生産者は収益性の高いブドウ栽培へ転 換し、一部の生産者は高齢化のために労働集約的な果樹栽培から撤退してトウモロコシ生産などに転換して いるという。業界筋によると、中国のナシ産業は労働コストの上昇、生産システムの老朽化、新品種導入の遅 延、等の大きな課題に直面しているという。中国全土では40品種以上が生産されているが、主な品種は Snow、Ya、Su、Huangguan、Frangrant、Nanguo である。

#### 生食ブドウ

2018/19年産(6月から翌年5月)の生食ブドウ生産量は、春の霜害の影響で、前年を10%下回る94.5万トンと予測される。中でも、河北省と陝西省では最も被害が大きく、地元の見積によると前年より30~50%の減収が見込まれている。その他の主産地では深刻な気象災害は受けていないようである。メディアの報道によると、今年の品質は良好とのことである。主要な生産地は新疆ウイグル自治区、河北省、山東省、雲南省、浙江省、遼寧省、陝西省、広西チワン族自治区、江蘇省である。

#### 中国の生食ブドウ主産地

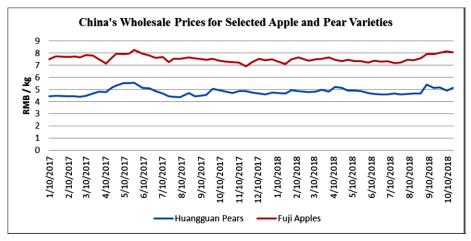


濃い色:生産量の 10~20%(河北省、新疆)、薄い色:生産量の 5~10%(遼寧省、浙江省、山東省、雲南省)

栽培面積の急速な拡大は沈静化したもの

の、収益性が高いことから引続き栽培面積は増加している。2018/19年産の栽培面積は、前年をやや上回る82.6万 ha と推測される。中国で生産されている品種は、いわゆるユーラシア種の巨峰、Xiahei、藤稔、Jingya、いわゆるユーラメリカ品種のレッドグローブ、トンプソンシードレス、マスカット、ビクトリア、マニキュアフィンガーなどである。Ruiducuixia、ジャンボマスカット、フレームシードレス、ゴールドフィンガー、シャインマスカット、クリムゾンシードレスなどの新品種も人気が出ている。品種が多様化していることと、新技術(例えば温室栽培)の導入が相俟って、現在では4月から11月までが収穫時期となっている。とはいえ、ブドウの品質は管理技術により大きく異なっている。食品安全の観点からは、過剰な施肥、植物ホルモンの施用(結果として果実に残留する)が中国消費者の懸念する事項である。

## 価格



China Fruit Marketing Association

生産量が大幅に減少したことから、リンゴの価格は前年より上昇している。国営テレビの調査によると、三東省の生産者価格(農場引渡価格)は最高品質のふじ(直径8cm 以上)がキロ当たり8.4元(1.22ドル)であり、前年より50%高いとのことだ。今後の価格上昇見込みから、現在リンゴはトン当たり11,000元(1,594ドル)で取引されている。ナシの価格も上昇基調である。例えば、メディアの調査によると、河北省の Huangguan(黄河)ナシの生産者価格は収穫時期(7月上旬から8月下旬)で2.8~3.4元(0.4~0.5ドル)と前年よりも30~40%高かったそうだ。ブドウについては、生産者からの情報によると、巨峰の生産者価格はキロ当たり7.0元(1.01ドル)と前年を40%上回っているそうだ。

### 消費

中国では生鮮果実の消費は着実に増加している。生鮮果実及びその製品は、大部分の中国消費者の食生活の中で中核的な位置づけ占めるようになっている。この傾向は、第一に所得が向上したこと、健全な食生活への関心が高まったこと、果実の入手が容易になったこと、果実の多様性が増したことによるものである。中国農業展望報告(China Agricultural Outlook Report (2018-27))によると、中国の年間一人当たり果実消費量は、2017年で92.5kgと推定され、2020年までには97.9kgに上昇することが見込まれている。中国人が果実を選択する際に留意する点は、栄養価、新鮮さ、果物の「特別さ」である。これらは、ブランド果実の人気が益々高まっていることと符合する。

国産リンゴ、ナシの消費は減速ないしは平準化の兆候を示している。これは、消費が飽和状態に達したことと他の果物(輸入果実を含む)との競合が生じているためと見られる。リンゴ、ナシに関しては、冷蔵施設が整備されてきたため供給時期が拡大してはいるものの、既に一人当たりのリンゴ、ナシの消費量は他の国と比べても相当高い水準にあり、更なる拡大の余地は限られている。国産のライチ、ブドウ、サクランボ、輸入されるドラゴンフルーツ、マンゴー、ドリアンなどとの競合は、リンゴ、ナシの消費の減速要因となっている。とはいえ、高品質のリンゴ、ナシは中国消費者によって引っ張りだこであり、供給量は不足している。

中国では生食ブドウの消費は引続き急速に増加しつつある。これは主に供給期間が長期化していることと、新たな品種が登場しているためである。近代的な温室、収穫を遅らせる技術、年2回の収穫技術などにより国産ブドウを長期間供給できるようになった。味、色、形(例えばフィンガータイプ、シリンダータイプ)の異なる様々な新品種は中国消費者を常に惹きつけてきた。これらが生食ブドウに対する需要を拡大させてきた要因ある。

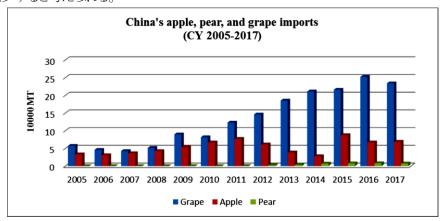
## <u>貿易</u> 輸入

2018/19年(7月から翌年6月)のリンゴの輸入は、国産リンゴが減収することから、前年より10%増加し、7.5万トンに達すると予想される。従来の最大の輸入先である米国は、中国による関税の上乗せにより大幅に減少すると見込まれる。しかしながら、米国産リンゴに代り、競合国であるポーランド、フランス等からの輸入が代替すると思われる。ニュージーランドやチリなどの南半球からの輸入も増加し、米国産のシェアに食い込

むと見込まれる。

ナシの輸入は他の落葉果樹に比べると遙かに少ないが、輸入量は増加すると見込まれる。2018/19年の輸入量は、国産のナシが減収することから、前年より12%増加し、9,000トンと予想される。米国はこれまで第2位の輸入先国であったが、関税の上乗せにより、輸入量は減少すると見込まれる。しかしながら、これに代り、競合国のオランダ、ベルギーからの輸入量が増加すると思われる。

2018/19年(6月から翌年5月)の生食ブドウの輸入量は、前年より7%減少し20万トンと予想される。米国は北半球の中では最大の輸入先国であり、他に有力な競合国もない。関税引き上げにより米国からの輸入は減少するが、有力な代替輸入先がないことから供給ギャップは拡大すると思われる。南半球からの生食ブドウの輸入は増加すると見込まれるが、年間を通して供給ギャップを埋めるまでに至らないため、生食ブドウの輸入量は減少すると考えられる。



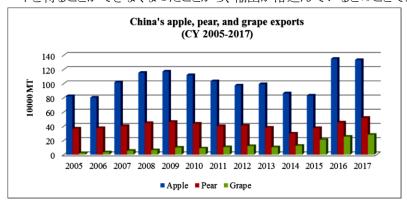
Source: China Customs Data

## 輸出

2018/19年のリンゴ輸出量は、国内生産量が大幅に減少することから、前年を18%下回る105万トンと予想される。価格が上昇することから、中国の近隣諸国である南アジア、東南アジア、ロシアは購入を控えると見られる。加えて、インドは植物検疫を理由に中国産のリンゴ、ナシの輸入禁止を継続している。輸入禁止は2017年5月1日に始まった。輸入禁止前、インドは中国産リンゴを大量に輸入していた。

2018/19年のナシの輸出も国内生産量が減少することから前年に比べ約20%減少し、43万トンと予測される。河北省のナシ価格は、通年ベースで30%上昇しており、東南アジアの業者は輸入を手控えると思われる。

2018/19年の生食ブドウの輸出量は、前年より15%減少し22万トンと予想される。雲南省は中国のブドウ輸出の半分を占めているが、地元業者によると、省政府が輸出リベート(輸出割り戻し)の監視を強化しているため、十分なリベートを得ることができなくなったことから、輸出が落込んでいるとのことである。



Source: China Customs Data

### 政策

中国が米国産果実に対して上乗せ関税を課したため、米国産果実は市場シェアを奪われる可能性が高い。

#### リンゴ、ナシ、生食ブドウに関する中国の関税及び付加価値税(単位:%)

輸入先国	リンゴ	ナシ	ブドウ	付加価値税
米国	7月6日から50%	7月6日から50-52%	7月6日から53%	10%
チリ	0	輸入禁止	0	10%
ペルー	輸入禁止	輸入禁止	0	10%
オーストラリア	2%	輸入禁止	2.60%	10%
ニュージーランド	0	0	0	10%
ベルギー	輸入禁止	10-12%	輸入禁止	10%
アルゼンチン	10%	10-12%	輸入禁止	10%
ポーランド	10%	輸入禁止	輸入禁止	10%
フランス	10%	輸入禁止	輸入禁止	10%

注)付加価値税は2018年5月1日から

#### マーケティング

中国では輸入果実は拡大を続けている。伝統的なの市場(Wet Market)や家族経営の販売店だけでなく、オンライン販売が拡大しており、革新的な「新小売チェーン」とも言える HEMA(アリババと共同運営する実店舗)のような形態の小売業、7Fresh(DJ.comが運営するオフラインの小売店)などでも輸入果実が扱われている。中国ではインターネットが浸透し、4G/5G モバイル技術が一般的となっているため、モバイルアプリを介した商品の販売が進んでおり、消費者はモバイルフォンでウィーチャットやウェイボーなどのソーシャルメディアを通じて益々便利に果物を購入できるようになっている。更に、果物を専門に扱う小売チェーンであるPagoda、Greenery、Fruit-mate などが急速に拡大している。

中国の小売業界は冷蔵貯蔵管理技術や冷蔵インフラが急速に発展しつつあり、品質向上の可能性が益々高まっている。こういった進展は第3級都市において特に著しい。同時に、中国の卸売市場は進歩を続けており、設備を増強しつつある。

中国南部は引続き輸入落葉果樹の中継基地として重要な役割を担っており、輸入果実の約60%が当該地域の港に陸揚げされている。同時に、上海、武漢、鄭州の卸売市場が扱う輸入果実の量は増加を続けている。中国南部では広州、深圳などの第1級都市だけでなく、第2級、第3級都市である厦門、長沙、三亜などでも需要は拡大している。落葉果樹にとって重要な市場は、他にも上海、北京などの第1級都市や地域の拠点となっている成都、重慶、杭州、蘇州、青島などがある。

米国産の落葉果樹は、他の輸入競合国と国産果実との間で厳しい競争関係にある。上述のような米国産 果実に課せられた上乗せ関税による影響は既に表面化している。ただ、長期的観点に立てば、中国の消費 者の新しい味や製品に対する強い需要を踏まえ、新しい品種などを輸出することを検討することが望まれる。

### 米国産リンゴ

中国に輸出されている品種は、レッドデリシャス、ガラ、グラニースミスが中心である。輸出は通常8月から始まり、3月まで続く。これら品種は、中秋節、春節などの贈答用として人気がある。しかし、今後どんな品種を中国に輸出すべきかを選択するのであれば、新品種も考慮することが必要である。

関税上乗せ措置が講じられる前は、米国産のリンゴは、中国産果実や他の輸入果実に比べて高い競争力を持っていた。中国は世界で最大のリンゴ生産国であり、チリやニュージーランドは自由貿易協定により優遇税率の恩恵に浴している。中国南部から輸入されるリンゴの大部分は最大の輸入拠点である深圳を経由している。貿易業務に携わる情報筋によると、米国産リンゴのイメージを向上させるには、教育セミナーの実施や消費者との交流が有効であるとのことだ。

#### 米国産ナシ

米国産のナシは中国産果実や競合輸入国(例えばベルギー、アルゼンチン、オランダ)の果実と厳しい競合関係にある。米国産ナシの主要な輸入港は、大連、広州、上海である。米国産のナシは果肉が柔らかいことから、中国北部の消費者には比較的人気が高い。南部の消費者は果肉が固く、パリパリ感がある中国ナシを好むようである。中国市場で販売されている米国産ナシの3大品種は、Starkrimson、Red Anjou、Green Anjou である。これらは、第1級都市の高級スーパーで販売されている。

中国はチリ、ペルー、オーストラリア、ニュージーランドとFTAを締結している

## 米国産生食ブドウ

過去数年間で、それまで中国市場に輸出されていた米国産の種のあるレッドグローブは、種無しのレッドグローブ、オーラムロイヤル、トンプソン、クリムゾンに置き換わった。小売業界筋によると、この変化は消費者の高級な種無しブドウに対する強い需要によることに加え、輸入業者としても種無しブドウの方が収益は大きいためとのことである。また、販売に当たっては、インストアの店頭販売促進活動により売上が大幅に増加するそうである。更に、中秋節などでのプロモーション活動は特に有効であり、特に第1級都市では高品質で新しい品種などのプレミアム商品に対して出費を惜しまない消費者が増加しているとのことだ。貿易業者も輸入品の緑系の種無しブドウに対する需要が増加していることを認めている。

#### 中国のリンゴ統計(在中国 米国農務省 農務官)

丁田ツノノールの八仕丁	一一个一点切员		
	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	2,324,000	2,320,000	2,322,000
販売生産量(トン)	40,393,000	41,390,000	31,000,000
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	40,393,000	41,390,000	31,000,000
輸入量(トン)	70,700	68,000	75,000
総供給量(トン)	40,463,700	41,458,000	31,075,000
国内生鮮仕向量(トン)	34,682,300	35,378,000	27,025,000
輸出量(トン)	1,381,400	1,280,000	1,050,000
加工仕向量(トン)	4,400,000	4,800,000	3,000,000
市場隔離量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	40,463,700	41,458,000	31,075,000

年産は7月-6月

中国のナシ統計(在中国 米国農務省 農務官)

十四ツノノルの「江干」			
	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	1,113,000	1,110,000	1,108,000
販売生産量(トン)	15,960,000	16,410,000	13,100,000
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	15,960,000	16,410,000	13,100,000
輸入量(トン)	6,900	8,000	9,000
総供給量(トン)	15,966,900	16,418,000	13,109,000
国内生鮮仕向量(トン)	13,938,299	14,325,000	11,479,000
輸出量(トン)	508,601	543,000	430,000
加工仕向量(トン)	1,520,000	1,550,000	1,200,000
市場隔離量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	15,966,900	16,418,000	13,109,000

年産は7月-6月

#### 中国の生食ブドウ統計(在中国 米国農務省 農務官)

中国の生良ノトリ杭計	(住中国 不臣	间层符目 层型	穷旨 /
	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	810,000	812,000	816,000
販売生産量(トン)	10,100,000	10,500,000	9,450,000
非販売生産量(トン)	0	0	0
生産量計(トン)	10,100,000	10,500,000	9,450,000
輸入量(トン)	237,100	215,000	200,000
総供給量(トン)	10,337,100	10,715,000	9,650,000
国内生鮮仕向量(トン)	10,080,400	10,454,000	9,430,000
輸出量(トン)	256,700	261,000	220,000
市場隔離量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	10,337,100	10,715,000	9,650,000

年産は6月-5月

## 28. ニュージーランドの落葉果樹(リンゴ、ナシ)事情

## 米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2018 年 11 月 6 日公表)

### 概要

2018/19年産(2018年1月から12月)のリンゴの収穫面積は9,700ha と前年を3%上回ると予想される。同年産の生産量は、栽培面積の増加と生育初期の気象条件が平年並みであることから、2017/18年産を2.6%上回る58.3万トンと予測される。

2017/18年産の生産量は、天候に恵まれたことから、現時点では56.8万トンと前年を9%上回る見込みである。

2018/19年産では、国内生鮮消費量が7.3万トン、加工仕向量が12万トンと予想される。生産量の増加は主に輸出の増加に結びつくと見られる。輸出量は、前年を4%上回る39万トンと予測される。

ニュージーランドの輸出業者は包括的及び先進的な環太平洋パートナーシップ協定(CCTTP)が2019年 初頭に批准され発効することを期待している。この協定により日本などへの輸出の増加が見込めると考えている。

2018年1月から9月までのEU向けのリンゴの輸出量は、EU域内でリンゴの価格が高水準で推移したことから、前年に比べて23%増加した。

2018/19年産のナシの生産量は、前年を3%下回る13,000トンと予測される。このため、ナシの輸出量も4,850トンに減じると予想される。

2017/18年産のナシの生産量は13,450トンと前年を15%上回る見込みである。このため同年産のナシの輸出量は、前年産を32%上回ったものと見られる。

### 栽培面積、収穫面積

#### リンゴ

2018/19年産の栽培面積は、2017/18年の推定栽培面積9,825haを3.5%上回る10,168haと予測される。2018/19年産の収穫面積は、前年を3.2%上回る9,700haと予想される。

面積の増加は、毎年300~400ha であり、増加率では3~4%である。業界筋によると、生産者は既存園についても、その約10%について付加価値及び生産性が高い品種へ改植、高接ぎを実施しているとのことである。

現在、栽培面積の40~50%に知的所有権で保護された品種(エンヴィ、ダズル、ロキット、ハニークリスプ等)が栽培されている。生産者はこれら品種の栽培に当たり、ロイヤリティーを支払うか毎年の販売量に応じた知的所有権料を支払っている。

収穫年(暦年)	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
ブレイバーン	2,246	2,034	1,869	1,740	1,589	1,504	1,381	1,352	1,303	1,239
コックス	295	281	248	236	203	178	150	134	121	111
クリプスピンク/ピンクレディー	285	353	397	434	446	459	443	461	523	562
エンヴイ			88	174	272	285	315	346	416	544
ふじ	829	899	931	970	934	906	832	837	858	831
グラニースミス	286	282	267	256	256	246	240	219	233	231
ジャズ	768	917	977	983	943	905	869	855	825	821
パシフィックビューティー	162	149	135	127	120	113	92	84	83	71
パシフィッククイーン	212	220	263	291	351	456	622	730	827	878
パシフィックローズ	454	424	416	399	396	390	379	364	365	342
パシフィック小計	828	793	814	817	867	959	1,093	1,178	1,275	1,291
ロイヤルガラ及び関連系統	2,669	2,538	2,417	2,423	2,369	2,386	2,337	2,410	2,549	2,604
その他品種	332	389	421	376	385	484	709	790	707	930
リンゴ合計	8,538	8,486	8,429	8,409	8,264	8,312	8,369	8,582	8,810	9,164
ナシ合計	412	412	429	473	441	448	403	407	403	371
落葉果樹未登録分							383	320	413	465
落葉果樹合計	8,950	8,898	8,858	8,882	8,705	8,760	9,155	9,309	9,626	10,000
ブレイバーンの割合	26.30%	24.00%	22.20%	20.70%	19.20%	18.10%	16.50%	15.80%	14.80%	13.50%
ロイヤルガラの割合	31.30%	29.90%	28.70%	28.80%	28.70%	28.70%	27.90%	28.10%	28.90%	28.40%

2018/19年産のナシの栽培面積は400ha で、前年と同程度と予測される。収穫面積も375ha で前年と同程度と見込まれる。業界筋の情報によると、老木が伐採され、Piqa Boo のような付加価値の高い品種に置き換わっているようだ。

### リンゴ生産量

2018/19年産のリンゴ生産量は、現段階では前年を2.6%上回り、過去最高となる58.3万トンに達すると予想される。これは、以下の理由からである。

- ・過去2~3年前に新規に植栽された果樹園が結果樹齢に達すること。
- ・主要産地であるホークス湾では、2018年の8月は湿潤で経過し、土壌水分が十分蓄積されていること。このため、必要とされる灌漑用水が最小限で済むこと。
- ・2018年7月から9月まで低温で経過したことから早期発芽が抑制されること。また、これまでの科学的知見によれば低温が遅くまで続いた場合は生産量が多くなる傾向にあること。
- ・多くの果樹園で隔年結果を防止する管理を行ってきたことから、前年が豊作であったにもかかわらず、2018/19年産に影響を及ぼさないと見られること。

## ナシの生産量

2018/19年産の生産量は、約13,000トンで前年産より3%下回ると予想される。これは単位面積当たりの収量が平年並みに戻る一方で、2018/19年に伐採される生産性の低い老木に代り、新規に植栽された生産性の高い果樹が減少分を埋め合わせるためである。

#### 輸出価格

#### ニュージーランドのリンゴ、ナシの輸出価格(FOB) 1箱(18kg)当たりニュージーランドドル



ニュージーランドのリンゴ、ナシの輸出価格(FOB) トン当たり米ドル



2017/18年産(8月まで)のリンゴの輸出価格(FOB)は、トン当たり1,446ドルであり、前年を2%上回っている。業界筋では2018/19年産も利益が見込めるとしているが、北半球(欧州)のリンゴ生産量が大幅に増加

するとすれば、FOB 価格はやや低下すると考えられる。しかし、ニュージーランドの輸出業者は、同国の輸出先は多岐にわたっており、欧州で価格が低下しても他の輸出先で利益が見込めると考えているようだ。

### 消費

#### リンゴ

2018/19年産の国内生鮮消費量は、前年を0.7%上回る73,300トン予測される。高品質で大量のリンゴが国内市場に出回り、他の果実に対して競争力を持つとすれば、この予測を上回る可能性もある。

#### ナシ

2018/19年産の国内生鮮消費量は、前年と同じ10,750トンと見込まれる。

#### 加工

2018/19年産のリンゴの加工仕向量は、前年を0.4%下回る12万トンと予測される。生産量は増加するものの、輸出量が増加する見込みであることから、加工に回る量が減少するためである。 ナシに関しては、前年を下回る1,800トンと予測される。

ニュージーランドのリンゴ統計(在新 米国農務省 農務官)

<u></u>	<u> </u>		<b>え1カ ロ /</b>
	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	9,600	9,825	10,168
収穫面積(ha)	9,164	9,400	9,700
販売生産量(トン)	520,000	565,000	580,000
非販売生産量(トン)	3,000	3,000	3,000
生産量計(千トン)	523,000	568,000	583,000
輸入量(トン)	482	300	300
総供給量(トン)	523,482	568,300	583,300
国内生鮮仕向量(トン)	70,552	72,800	73,300
輸出量(トン)	344,930	375,000	390,000
加工仕向量(トン)	108,000	120,500	120,000
総出荷量(トン)	523,482	568,300	583,300

年産は1月→12月

## ニュージーランドのナシ統計(在新 米国農務省 農務官)

	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	420	400	400
収穫面積(ha)	403	375	375
販売生産量(トン)	11,676	13,450	13,000
非販売生産量(トン)	200	200	200
生産量計(千トン)	11,876	13,650	13,200
輸入量(トン)	4,559	4,000	4,200
総供給量(トン)	16,435	17,650	17,400
国内生鮮仕向量(トン)	10,750	10,750	10,750
輸出量(トン)	3,785	5,000	4,850
加工仕向量(トン)	1,900	1,900	1,800
総出荷量(トン)	16,435	17,650	17,400

年産は1月→12月

#### 貿易

#### リンゴ輸出

2018/19年産の輸出量は、生産量が増加すると見込まれることから、前年産を4%上回る39万トンと予測される。

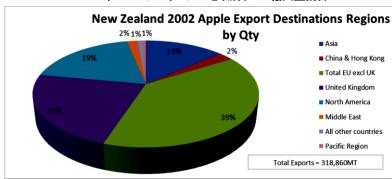
生鮮リンゴ輸出量(1月-9月)(2016-18年)

輸出先	<b></b>	前出量(トン)	)			2018年の	
制山元	2016	2017	2018	2016	2017	2018	対前年比
EU(英国を除く)	75,040	78,310	96,280	21.83	23.2	26.53	22.95
英国	42,925	49,237	44,665	12.49	14.59	12.31	-9.29
米国	48,624	38,206	40,462	14.14	11.32	11.15	5.90
インド	13,253	9,605	25,787	3.86	2.85	7.11	168.48
台湾	32,183	23,610	22,437	9.36	7	6.18	-4.97
中国	17,491	16,586	21,977	5.09	4.91	6.06	32.51
ベトナム	8,273	13,139	17,355	2.41	3.89	4.78	32.09
タイ	24,231	21,480	17,085	7.05	6.36	4.71	-20.46
アラブ首長国連邦	17,594	16,335	14,814	5.12	4.84	4.08	-9.31
香港	9,853	13,078	13,426	2.87	3.87	3.7	2.66
その他	54,302	57,921	48,579	15.8	17.16	13.39	-16.13
合 計	343,769	337,507	362,867	100	100	100	7.51

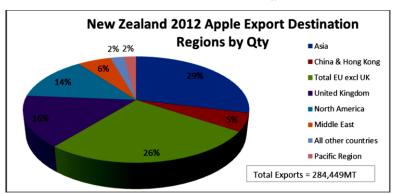
上記の表はいくつかの点で興味深い。先ず、2017年の欧州のリンゴ生産が不作であったことから欧州市場の価格が上昇し、ニュージーランドからの輸出量が増加したことである。一方、2018年の欧州のリンゴ生産量は通常状態に戻ることから、2018/19年産のニュージーランドからの輸出は、アジア及び中国向けに回帰すると見込まれる。次に、2017/18年産の輸出量はトータルでは増加しているにもかかわらず、上位10カ国以外の国への輸出量が減少していることである。2018/19年産においては、輸出量の増加が見込めるため、再び上位10カ国以外の小規模市場への輸出が増加すると見込まれる。

以下の図は、2002年以降のニュージーランド産リンゴの地域別輸出割合である。一見にて分かるとおり、「大きなアジア市場」に向けた輸出が増加している。2002年から2017年までのアジア向けの輸出量の増加率は、年間6.7%であった。一方、欧州及び英国向けの輸出量は、年間2.9%の割合で減少している

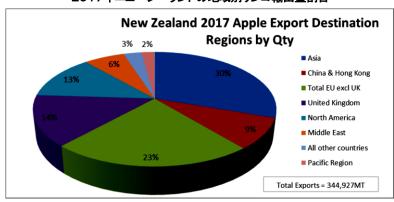
2002年ニュージーランドの地域別リンゴ輸出量割合



2012年ニュージーランドの地域別リンゴ輸出量割合



2017年ニュージーランドの地域別リンゴ輸出量割合



生鮮リンゴ輸出量(2015-17年)(暦年)

上駅 ノノー 利田県		<i>,</i>					
輸出先		輸出量(トン)				2017年の	
制山兀	2015	2016	2017	2015	2016	2017	対前年比
EU(英国を除く)	71,935	75,040	78,310	21.86	21.63	22.7	4.36
英国	47,236	42,925	49,237	14.36	12.37	14.27	14.71
米国	32,070	48,625	38,220	9.75	14.02	11.08	-21.40
台湾	22,096	32,183	23,673	6.72	9.28	6.86	-26.44
タイ	30,141	24,889	23,605	9.16	7.17	6.84	-5.17
アラブ首長国連邦	18,764	17,785	18,178	5.7	5.13	5.27	2.21
中国	20,331	17,491	16,586	6.18	5.04	4.81	-5.07
香港	10,599	10,183	13,416	3.22	2.94	3.89	31.74
ベトナム	4,248	8,316	13,311	1.29	2.4	3.86	60.07
インド	15,007	13,253	9,667	4.56	3.82	2.8	-27.06
その他	56,604	56,223	60,727	17.2	16.21	17.61	8.01
合 計	329,031	346,913	344,930	100	100	100	-0.57

## リンゴ輸入

2018/19年のリンゴの輸入量は前年と同程度の300トンと予想される。しかし、ニュージーランドのリンゴ生産量が引続き増加傾向にあり、CA 貯蔵庫も増加しているため、将来の輸入量は減少する可能性がある。

#### ナシ輸出

2018/19年の輸出量は生産量が減少する見込みであることから、前年を3%下回る4,850トンと予想される。

生鮮ナシ輸出量(2015-17年(暦年))

輸出先		か出量(トン)			2017年		
押山ル	2015	2016	2017	2015	2016	2017	の対前年
台湾	846	1,662	1,226	20.2	36.04	32.38	-26.26
米国	1,102	1,121	1,072	26.32	24.32	28.31	-4.44
中国	151	45	326	3.61	0.97	8.62	630.69
英国	644	280	282	15.37	6.06	7.45	0.85
EU(英国を除く)	174	239	184	4.16	5.18	4.86	-23.01
トンガ	68	84	122	1.62	1.82	3.23	45.79
シンガポール	121	103	117	2.89	2.22	3.1	14.51
カナダ	250	112	105	5.98	2.44	2.77	-6.94
フィジー	119	251	101	2.83	5.45	2.66	-10.82
仏領ポリネシア	62	93	83	1.48	2.03	2.2	-10.82
その他	650	622	167	15.52	13.49	4.41	-73.15
合 計	4,187	4,612	3,785	100	100	100	-17.92

### ナシ輸入

2018/19年のナシの輸入量は4,200トンと予測される。2008年以降、国内生産量の変動に伴い、輸入量は3,000~4,600トンの間で推移してきた。この傾向は、今後も継続すると見られる。

生鮮ナシ輸入量(2015-17年(暦年))

, <del></del>		······················	<b>/</b>	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	~~~~	,		
輸出先	車	創出量(トン)	)		シェア(%)			
押山ル	2015	2016	2017	2015	2016	2017	の対前年	
オーストラリア	2,839	2,108	3,171	68.75	65.23	69.56	50.46	
中国	423	505	718	10.25	15.63	15.76	42.28	
米国	777	513	572	18.83	15.86	12.56	11.68	
韓国	89	106	93	2.16	3.29	2.05	-12.17	
イタリア	0	0	4	0	0	0.08	0.00	
合 計	4,129	3,231	4,559	100.00	100.00	100.00	41.08	

#### 貿易政策

#### CCTTP

ニュージーランドの輸出業者としては、日本のリンゴ市場に大きな期待を持っている。2016/17年の日本への輸出量は、前年の1,440トンから3,624トンに増加した。2017/18年は9月までに3,379トンを輸出している。CCTTPにより日本のリンゴの関税は漸減し、最終的には撤廃される。

ニュージーランド産リンゴに対する日本の関税(CCTTP)

17.00% 12.70% 11.40% 10.20% 8.90% 7.60% 6.30% 5.10% 3.80% 2.50% 1.20% 0.00%	現状	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目	10年目	11年目
		12.70%	11.40%	10.20%	8.90%	7.60%	6.30%	5.10%	3.80%	2.50%		0.00%

CCTP が2018年に発効すれば、2019年の日本の関税率は11.4%になる。

メキシコはニュージーランドのリンゴ輸出にとっては小さな市場であり、2018年は年初来の輸出量は21トンに過ぎないが、現在20%の関税は11年かけて撤廃されることとなっており、有望な市場と考えられる。

## インドネシア

2015年、ニュージーランドは米国とともにインドネシアを相手取り、同国の輸入許可制度がWTO協定に違反していることについて提訴を行った。インドネシア農業省は、WTO判決にもかかわらず、2017年に新たな規則を制定し、園芸作物の輸入に関して新たな認可制度を導入した。新制度では、ニュージーランド産のリンゴに対して輸入禁止措置を講じることが可能となっている。

ニュージーランドからインドネシアへのリンゴ輸出の推移

	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
量(トン)	3900	3007	3722	8570	6257	3900	-
金額(FOB)	\$5.39m	\$5.21m	\$8.63m	\$13.37m	\$9.79m	\$7.3m	-

#### インド

地域包括経済パートナーシップ (RCEP)の自由貿易交渉は、今年後半又は来年早々に結論が得られるとの見方がある。この協定によるニュージーランドのリンゴ、ナシに関する恩恵はそれ程大きくはないが、インド・ニュージーランド FTA については見直されることが明らかになっている。現在、インドは米国を除く全ての国に対してリンゴの輸入に当たり50%の関税を課している。この高関税にもかかわらず、ニュージーランド産リンゴのインドへの輸出量は、最近、急速に増加している。2009年以降のインドへのリンゴ輸出量は15.6万トンであり、輸入金額は1.71億ドル以上、関税支払額は0.85億ドルに達する。

インド政府は、米国が鉄鋼製品の輸入に当たり関税を引上げたことに対抗し、報復として米国産リンゴに対して25%の関税上乗せを行うことを計画している(訳注:以前からインド政府は関税上乗せを行うことを表明してきたが、このレポートが公表された時点では実施されていない)。もし、この措置が発動されたなら、ニュージーランドからインドへの輸出機会が拡大すると見られる。2016/17年のインドのリンゴ輸入量は、330,853トンで、輸入額は2.86億ドルであった。

# 29. チリの落葉果樹(リンゴ、生食ブドウ、ナシ)事情

## 米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2018 年 11 月 5 日)

#### **<リンゴ>**

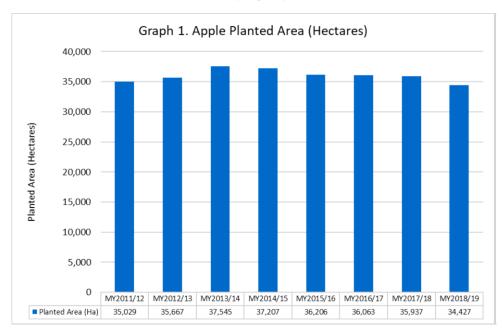
#### 生産

チリのリンゴ生産は、中央部のマウレ州、オイヒンス州に集中しており、それぞれ64%、22%の栽培面積を占めている。2018/19年産(2019年1月から12月まで)のチリ全土のリンゴ栽培面積は34,427ha と予測される。南部では、ラ・アラウカニア州の栽培面積が2,767ha で全国の8%を占めている。ラ・アラウカニア州は降水量が豊富であり、リンゴ栽培は従来から生産されてきた小麦やオート麦よりも収益性が高いとされる。

チリのリンゴ栽培面積は、2013/14年の37,545ha から2017/18年の34,427ha と減少傾向にあるが、これはサクランボ、クルミ、ヘーゼルナッツに比べて輸出収益が劣るからである。

リンゴ生産者は、古い果樹園を改植し、ジャズ、エンヴィ、ブルックフィールド、ローズィーグロー、アンブロージアの植栽を進めつつある。

情報筋によると、2018/19年産の気象条件はこれまでのところ特に問題はない。低温遭遇積算温度も十分であり、開花も通常通りと見込まれることから、生育は平年並みと見込まれる。しかし、最終的な生産量は春から夏にかけての生育期間の積算温度如何で決まる。2018/19年産の生産量は、平年単収の36トン/ha 程度と仮定すると、栽培面積が減少することから、2017/18年産を4.2%下回る124万トンと予測される。



チリのリンゴ栽培面積の推移(単位:ha)

#### 消費

2018/19年産の国内生鮮消費量は24万トンで販売生産量の19%、加工仕向量は29.1万トンで販売生産量の23%、輸出量は72万トンで販売生産量の58%と予測される。輸出向け規格に満たない(果実サイズが小さいもの、着色が悪いもの、貯蔵性に劣るもの)は国内市場や加工に回される。

#### 貿易

2017/18年産の生鮮リンゴの輸出量は前年を10%上回った(1月から8月まで)。米国が最大の輸出先であり、僅差でオランダ、コロンビア、インドが続いている。2016/17年産の米国向け輸出量は、前年に比べ17%減少し、2017/18年産の輸出量はこれまでのところ29%減少している。

2017/18年産の輸出量は、4月から8月まで増加していることに鑑み、75万トンに達すると予測される。 2018/19年産の輸出量は、単位面積当たり収量が前年と同程度仮定し、栽培面積が4.2%減少すると見

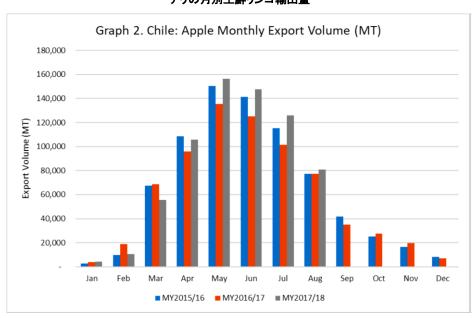
込まれることから、2017/18年産を4%下回ると予測される。

チリの生鮮リンゴ国別輸出量

輸出国	輸出量(トン)(年産)			輸出量(トン)1月-8月			
制山呂	2015/16	2016/17	対前年比	2017年1月-8月	2018年1月-8月	対前年比	
合計	764,833	716,307	-6%	626,961	686,748	10%	
米国	105,039	87,629	-17%	87,230	62,211	-29%	
オランダ	46,164	38,719	-16%	38,504	59,069	53%	
コロンビア	76,392	80,598	6%	58,652	56,996	-3%	
インド	32,189	24,102	-25%	24,102	56,119	133%	
台湾	49,899	53,519	7%	52,029	47,906	-8%	
サウジアラビア	47,075	45,730	-3%	44,968	41,520	-8%	
英国	27,150	28,256	4%	27,970	40,623	45%	
エクアドル	37,898	49,402	30%	34,898	40,056	15%	
ドイツ	9,791	15,155	55%	14,966	29,621	98%	
ロシア	20,632	26,722	30%	26,702	29,387	10%	
ペルー	47,894	52,779	10%	36,640	27,854	-24%	
ブラジル	86,261	34,465	-60%	21,709	25,372	17%	
カナダ	22,648	21,808	-4%	21,418	22,675	6%	
フランス	12,710	14,695	16%	14,574	19,451	33%	
ボリビア	22,457	24,364	8%	16,556	16,453	-1%	
その他	120,634	118,364	-2%	106,043	111,435	5%	

年産は翌年の1月から12月まで

チリの月別生鮮リンゴ輸出量



チリのリンゴ統計(在チリ 米国農務省 農務官)

and the same of th	2016/17年	2017/18年	2018/19年		
栽培面積(ha)	36,063	35,937	34,427		
収穫面積(ha)	33,600	33,400	33,000		
結果樹数(千本)	39,000	38,950	36,300		
未結果樹数(千本)	2,800	2,800	2,500		
果樹数合計(千本)	41,800	41,750	38,800		
販売生産量(千トン)	1,300,000	1,290,000	1,240,000		
非販売生産量(トン)	10,000	10,000	10,000		
生産量計(トン)	1,310,000	1,300,000	1,250,000		
輸入量(トン)	1,800	1,000	1,000		
総供給量(トン)	1,311,800	1,301,000	1,251,000		
国内生鮮仕向量(トン)	285,500	245,000	240,000		
輸出量(トン)	716,300	750,000	720,000		
加工仕向量(トン)	310,000	306,000	291,000		
総出荷量(トン)	1,311,800	1,301,000	1,251,000		
<del></del>					

年産は翌年1月-12月

<生食ブドウ> 生産 生食ブドウはチリで最も栽培面積が多い果樹であり、チリ北部のカピアポ渓谷から南部のマウレ地域に至るまで生産が行われている。

収穫は11月から4月まで行われる。カピアポ渓谷はチリで最も早く収穫が始まる地域であり、11月下旬から2月中旬が収穫期である。チリ中央部、南部では1月中旬から収穫が始まり3月末まで続く。1月及び2月の初旬はカピアポ渓谷とチリ中部のバルパライン地域、首都圏地域とで収穫時期は重複する。

米国農務省海外農業局のスタッフは北部カピアポ渓谷の生食ブドウ生産状況を視察した。当地での力を 入れているのは新品種への転換であった。生産者は、過去7年間で20%の果樹園を新品種に改植していた。 同地の生産は大部分が大規模会社により担われており、これら会社は輸出に関する経験が豊富で投資余力 も十分にある。

中央部及び南部の産地でも新品種への改植を進めているが、カピアポ渓谷ほどには進展していない。カピアポ渓谷で生産される生食ブドウは、主に、新しい種無し品種を好む米国に輸出されているからである。





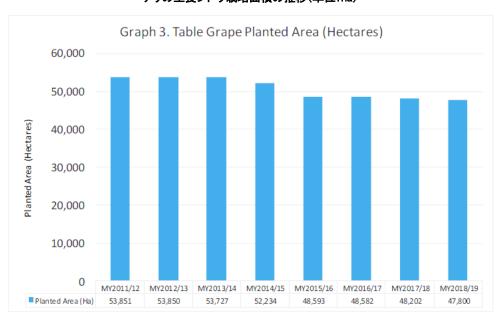


写真左:アタカマ地方のカピアポ渓谷の果樹園。サンチアゴ北800kmに位置する。灌漑用水はラウラロ貯水池と地下水から 導水している。

写真中:灌漑用水を供給するラウタロ貯水池、チリ政府は灌漑用水の利用効率化のために投資を進めている。

写真右:果樹園ではドリップ灌漑が行われており、丘陵にも園地が展開している。

## チリの生食ブドウ栽培面積の推移(単位:ha)



#### 消費

チリで生産される生食ブドウの80%は輸出される。残りの20%が国内生鮮消費及びレーズン、ジュース、ワイン等の加工に向けられる。

## 貿易

米国が最大の輸出先であり、2016/17年(10月から翌年の9月)に米国に輸出された量は344,180トンであった。

カピアポ渓谷から輸出される量は、例年8.2~10万トンであり、70%が米国に向けられる。米国向けは主に種無し品種である。同地で栽培されるレッドグローブは中国に輸出されている。2018/19年にカピアポ渓谷から輸出される量は9.02万トンと推測される。

2017/18年の輸出量は、収穫時期が遅れたこともあり、前年と同程度であった。米国への輸出量は前年に比べ5%減少したが、中国向けの輸出量は21%増加した。オランダ、韓国向けの輸出はそれぞれ4%、6%減少した。

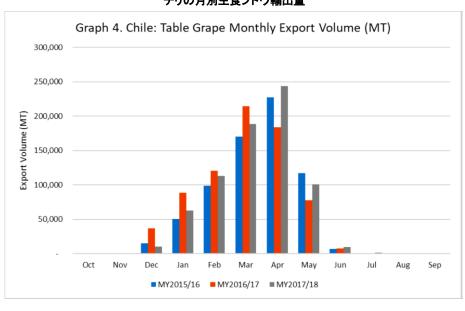
今後の輸出関しては、この傾向が継続すると見られる。つまり、中国向け輸出は高価格が期待できることから増加が見込まれる。2018/19年の輸出量は、単位面積当たりの収量が平年ベースであるとすれば、栽培面積の減少に伴い、前年に比べて1.5%減少し、72万トンと予測される。

チリの生食ブドウ国別輸出量

輸出国	輸出量(トン)(年産)			輸出量(トン)1月-8月			
キャラ キャック キャック はいまい こうしょう かいしょう かいしょう かいしょう かいしょう かいしょう かいしょう しゅうしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう しゅうしゅう かいしょう しゅうしょう かいしょう しゅうしょう しゅうしょう しゅうしょう はいしょう しゅうしゅう しゅう	2015/16	2016/17	対前年比	2017年1月-8月	2018年1月-8月	対前年比	
合計	687,559	731,156	6%	731,156	731,258	0%	
米国	314,221	344,180	10%	344,180	328,081	-5%	
中国	120,259	97,334	-19%	97,334	118,155	21%	
オランダ	43,806	45,728	4%	45,728	43,726	-4%	
韓国	33,857	34,343	1%	34,343	32,212	-6%	
英国	30,466	31,546	4%	31,546	32,823	4%	
ブラジル	18,446	18,505	0%	18,505	16,162	-13%	
カナダ	13,132	17,527	33%	17,527	17,182	-2%	
ロシア	11,937	15,218	27%	15,218	16,700	10%	
メキシコ	12,986	14,381	11%	14,381	16,505	15%	
日本	9,255	10,526	14%	10,526	8,972	-15%	
スペイン	5,637	9,088	61%	9,088	10,253	13%	
ドイツ	4,569	8,861	94%	8,861	9,316	5%	
インドネシア	4,303	8,191	90%	8,191	6,947	-15%	
台湾	6,421	6,459	1%	6,459	4,513	-30%	
サウジアラビア	4,990	6,155	23%	6,155	5,736	-7%	
その他	53,274	63,114	18%	63,114	63,975	1%	

年産は10月から翌年9月まで

#### チリの月別生食ブドウ輸出量



チリの生食ブドウ統計(在チリ 米国農務省 農務官)

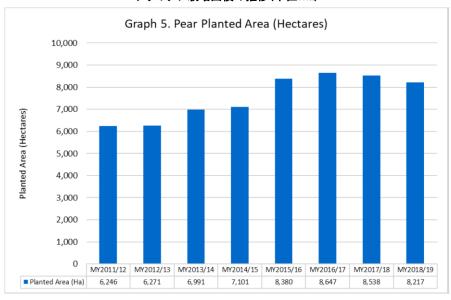
	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	48,582	48,202	47,800
収穫面積(ha)	46,100	46,000	45,900
販売生産量(トン)	912,156	910,578	900,000
非販売生産量(トン)	4,800	4,650	4,600
生産量計(トン)	916,956	915,228	904,600
輸入量(トン)	300	300	300
総供給量(トン)	917,256	915,528	904,900
国内生鮮仕向量(トン)	186,100	184,000	184,900
輸出量(トン)	731,156	731,528	720,000
総出荷量(トン)	917,256	915,528	904,900

年産は10月一翌年9月

#### くナシ>

## 生産

2018/19年産(2019年1月から12月)のナシの栽培面積は前年より3.8%減少すると予想される。2016/17年産の栽培面積は、8,647haでその後2年連続して減少した。しかし、2019/20年に中国がチリ産ナシの輸入解禁を行えば、今後は栽培面積が増加に転ずると見込まれる。2018/19年産の生産量は、平年作を前提とすれば、栽培面積が減少するため25万トンと予測される。



チリのナシ栽培面積の推移(単位:ha)

## 消費

チリのナシ輸出は販売生産量の50%と見込まれ、29%は国内生鮮消費向け、残りの21%は加工仕向けである。以上から、2018/19年産の国内生鮮仕向量は7.3万トンで、加工仕向量は5.26万トンと予測される。

#### 貿易

2016/17年産の輸出量は151,627トンであった。2017/18年産の輸出量は、8月までの段階で122,19 0トンである。主な輸出先はオランダ、次いでコロンビア、ペルー、イタリアである。2017/18年産ではこれら市場への輸出量は減少したが、代わってロシア向けの輸出が19%増加した。

2017/18年産の輸出量は、最終的に前年産より14%減少し13万トンと見込まれる。2018/19年産の輸出量は、生産量の減少が見込まれるため、前年産を更に2.3%下回る12.7万トンと予測される。

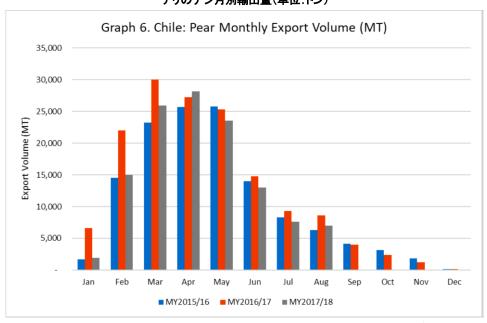
なお、チリ産ナシの中国への輸出解禁に関する交渉は2017年2月に始まった。チリ政府は2019/20年においては中国への輸出が実現できると期待している。

#### チリのナシ国別輸出量

輸出国	輸出量(トン)(年産)			輸出量(トン) 1月-8月		
制山邑	2015/16	2016/17	対前年比	2017年1月-8月	2018年1月-8月	対前年比
合計	128,703	151,627	18%	143,907	122,190	-15%
オランダ	21,065	27,273	29%	27,273	17,649	-35%
コロンビア	20,875	22,149	6%	18,785	16,544	-12%
ペルー	13,303	16,061	21%	14,161	10,361	-27%
イタリア	13,814	15,616	13%	15,616	10,937	-30%
ロシア	6,400	12,938	102%	12,938	15,455	19%
米国	13,896	12,638	-9%	12,638	11,930	-6%
エクアドル	8,981	12,332	37%	10,767	9,265	-14%
ドイツ	4,032	6,204	54%	6,204	7,097	14%
ブラジル	3,047	4,291	41%	3,951	2,838	-28%
スペイン	2,016	4,280	112%	4,280	5,233	22%
サウジアラビア	3,027	1,839	-39%	1,839	2,034	11%
パナマ	1,722	1,712	-1%	1,354	1,654	22%
ベルギー	1,732	1,695	-2%	1,695	1,705	1%
ポルトガル	1,528	1,522	0%	1,522	745	-51%
アラブ首長国連邦	1,562	1,312	-16%	1,312	643	-51%
その他	11,703	9,765	-17%	9,572	8,100	-15%

年産は翌年の1月から12月まで

チリのナシ月別輸出量(単位:トン)



チリのナシ統計(在チリ 米国農務省 農務官)

7 7 00 7 2 10 CH 1 ( IZ 7 7 2 1 CH		. н /	
	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	8,647	8,538	8,217
収穫面積(ha)	7,900	8,200	8,100
結果樹数(千本)	8,295	8,610	8,505
未結果樹数(千本)	1,308	1,155	1,050
果樹数合計(千本)	9,603	9,765	9,555
販売生産量(千トン)	288,000	260,000	250,000
非販売生産量(トン)	2,000	2,000	2,000
生産量計(トン)	290,000	262,000	252,000
輸入量(トン)	600	600	600
総供給量(トン)	290,600	262,600	252,600
国内生鮮仕向量(トン)	82,400	75,600	73,000
輸出量(トン)	151,600	130,000	127,000
加工仕向量(トン)	56,600	57,000	52,600
総出荷量(トン)	290,600	262,600	252,600

年産は翌年1月-12月

## 30. 世界のカキ市場

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 11 月 2 日)



米国ではカキの収穫はほぼ終了しているが、欧州、中国では現在最盛期である。気象条件に恵まれなかったため、スペインでは生産量が通常より40%減少する見込みだが、価格は上昇していない。世界的に見て、カキに対する興味は増大しており、南北アメリカ、欧州、オーストラリアでは需要が確実に増加しているようだ。このため、多くの国が新規市場を開拓する努力を行っている。スペインは、大きな市場である中国での販売に期待を寄せている。

#### スペイン: 生産量は40%減

スペインのバレンシアの生産者にとっては、霜害と雹害で著しい被害を受けたことから、今シーズンは良い スタートを切れなかった。実際、悪天候のせいで、スペインのカキ生産量は40%減少すると見込まれる。

今年の被害は大きく、新たに植栽された果樹園の多くが結果樹齢に達したにもかかわらず、被害を補うことはできなかった、と輸出業者は語っている。しかしながら、相当入荷が減少するにもかかわらず、市場価格は上昇していない。近年、スペインでのカキ栽培面積の拡大は制御不能に陥っている。このため、毎年、カキ市場では価格抑制圧力が高まっている。「カキの栽培面積の調整はうまく機能していない。こういったことはスペインでは良くあることだ。うまく売れると分かったら、十分な知識もなく植栽を進めてしまうからだ。昨年ですら、何回か供給過剰に陥り、酷い時にはキロ当たり15セントまで価格が値下がりした。もちろん、この水準では生産費は賄えない。今年は霜害と雹害により、市場はある程度バランスが取れた格好となっている。しかし、来年、平年作に戻ったなら、市場は混乱するだろう」と生産者、輸出業者は述べている。「このため、生産者の中には早々と果樹園を放棄しているものも出ている。将来的には、この業界に残るのは専門家かプロフェッショナルだけだろう」と語るものもいる。

いずれにしても、輸出量の30%を販売していたロシアが、輸入禁止措置を講じたことの打撃は大きく、代替市場は容易に見つかっていない。スペインの業者は市場の多様化を進めているが、最大の目標は中国市場である。「欧州市場に加えて、スカンジナビア、北米・中南米(カナダ、米国、ペルー、コロンビア)市場にも進出してきた。中にはカキのことを余り知らない又は興味を持ち始めたばかりの国もある。いずれにしても将来性は高い。アジアでは香港で輸出が増加している。しかし、何よりも中国が輸入検疫に関するプロトコルを承認してくれることを期待している。中国はカキに対して馴染みがあり、スペイン産のカキに関心を持ってくれも

のと考える。我々にとって最も大きな市場だ」とも語っている。

業界としては、現在でも新品種の探索を進めている。いくつか良い候補は出てきているが、主力品種のRojo Brillante を上回るものは出現しておらず、育種目標である販売時期の拡大(晩生種)に貢献する品種も生まれていない。「販売機会拡大のための品種開発は限界に来たようだ。しかし、品種開発によらず、最新のポストハーベスト技術、栽培技術を活用することで、販売期間の延長は可能となった。数年前は12月上旬で販売が終了していたが、今は3月まで延長している」と輸出業者は述べている。同氏はペルーが販売期間拡大の鍵を握ると考えている。実際、いくつかのスペインの会社が販売期間の延長を目的としてペルーに投資(カキの新規植栽)を行っている。

生産者によると、カキは美味しくて魅力的な果物だという。食べやすく、健康にも良い。「業界としてはこの 先の道のりは長いが、正しい方向を歩まなければならない。例えば、販売は十分に糖度が高まり、着色が進 んでから始めるべきで、利益が得られる価格となることが必要だ。また、特にシーズン初期に供給過剰が起き ないような販売計画とすることが必要だ」と述べている。

# イタリア:生産量は少ないが需要は旺盛

イタリアのカキ生産量は未だ最高水準には達していない。果肉の固いカキ(Rojo Brillante)に関しては、供給量は需要に追いついていない。Rojo Brillante の販売は、中部及び南部イタリアで未だ15日が経過した段階で、12月20日まで続く。価格は、昨年よりも20%高い状況である。エミリア・ロマーニャでも10月中旬から収穫が始まる。Rojo Brillante は生産者によって魅力的な果実となりつつある。一方、品種 Tipo については、昨年に比べて大幅な減産が見込まれている。

「2018年産の販売は、果実サイズが小さいものが多かった昨年に比べ、品質も果実サイズも良好である。 大変満足いく果実サイズで、品質も優れている。この他、果実の欠陥も特に見当たらない」と地元の生産組合 のマネージャーは語っている。

スペインと同様、今シーズンは生育の様々なステージで気象災害を被った。4月の霜害、強風による落葉、 落果、高温とともに襲った豪雨等である。このため、今年、生産量が減少することは不思議なことではない。

Tipo に関しては安定した市場がある。この古くからある香りが特徴の品種は果肉が柔らかく、通常スプーンを使って食べる。収穫は既にほぼ終了している。販売初期は好調だったが、その後異常な気温のために幾分減速した。10月に季節外れの高温に遭遇したため、園地及び追熟段階で支障が生じ、販売にも影響があった。需要が減速したためである。しかし、現在では回復している。この品種は2個入か4個入の袋に詰めて販売されている。パッケージには特徴があるため、小売段階では大変に人気がある。

一般に、カキの値段の年間変動は小さい。従って、スペイン産が大幅に供給量を減らしても、価格が高騰することはないと見られる。

若い消費者は、甘さとデリケートな風味、パリパリ感と食べ易さから果肉の固いカキを好む傾向にある。スライスして皮を剥けば手を汚さないことも有利な点だ。こういった特色を踏まえ、海外市場を開拓することが大切だ。

### ドイツ: 品質は良好だが価格や安い

ドイツの卸売市場ではカキが最盛期を迎えている。品質は良好だが、価格は昨年に比べると比較的安い。市場ではスペイン産のカキが圧倒しているが、イタリア産のカキも増加し、存在感を増している。イタリア産の問題点はスペイン産に比べて出荷のピークが数週間遅いことである。一方、Sharon(イスラエルでつけられた商標名で、品種名は Triumph) は特に有機栽培果実として人気が出つつある。これは主にスペイン産であり、約1.5週間出荷される。

#### オランダ:カキは競争に直面していない

ここ数週間はカキの供給はスムーズであるが、最近バレンシア地方の降雨の影響で入荷は減少傾向にある。この結果、価格は回復傾向だ。現在カキは5キロ当たり5~5.5ユーロで販売されている。輸入業者によると、ここ数週間、生産者は着色用にエテホン(ethephon)を多く使用しているため、着色、食味が均一のカキが出回っているとのことである。カキにとって有利な点は、既に市場には核果類が存在せず、良質なマンゴーも

市場になく、ブドウは高値となっていることだという。このため、カキの販売には条件が揃っている。

# フランス:古い品種に人気

ランジスの卸売業者によると、現在市場には大量のカキが出回っているそうで、「この量を売りさばくことは容易ではないが、結局は全て販売することに成功している」とのことだ。業者は特に古い品種に着目しており、「量が少ないが、需要は比較的多い」そうだ。大部分のカキはスペイン産であるが、消費者は主にアジア出身者やラテン系の人達だそうだ。

# 米国:ハリケーンで生産量が減少

米国ではカキの販売量は地域により大きく異なる。西海岸では相当量が出回るが、東海岸ではほとんど出回らない。ノースカロライナ州では2度にわたりハリケーンの被害を受けた。9月中旬のフローレンスと10月上旬のマイケルである。このためカキの生産量は減少した。生産者は、「今年は樹上に残っている果実は少なかった」と語っており、例年より15~20減収したと見込まれる。ハリケーン・マイケル来襲の後になってやっと気温が低下したため、着色も遅れた。生産者の中には、この間にカキに対する需要が高まり、価格もやや上昇したと話す者もいる。

## 中国:供給より需要が多い

中国のカキの収穫は最盛期を迎えている。収穫は台湾、陝西省、河北省で2週間前に始まった。今年は天候に恵まれたため、生産量は増加した。カキに対する需要が多く、供給を上回っているため一般に価格は上昇しているが、品種により価格が下落しているものもある。台湾産、陝西省産のカキの価格は高いが、その他のものは昨年よりも価格は安い。一時期に多くの品種が市場に出回るため、競争は激しい。とはいえ、価格は一般に安定しており、変動は小さい。

## オーストラリア:毎年需要は増加

オーストラリアではカキのシーズンは6月に終わり、最後の出荷があった。業界の協会によると、オーストラリアでのカキの需要は際だって増加しているという。ここ数年で、ニッチな果実から人気のある果実に変貌しているという。パーシモン・オーストラリア (Persimmons Australia) によると、多くの人がカキに親しみを抱くようになっており、カキに関する知識も増えているという。全国レベルでは、120の生産者が2,500トンのカキを生産している。今シーズンの供給量は昨年とほぼ同程度であったが、この先は南部諸州の未結果樹園が成園に達することから供給量の増加が見込まれる。Hort Innovation 統計によると、2017年6月までのシーズンの生産量は2,516トンで、生産額は1.05億ドルであったという。輸出量は143トンで、38%がマレーシアに輸出された。また、輸入量は492トンでニュージーランドからであった。

生産量の95%は甘柿で、主に富有、次郎であり、古い品種では蜂屋も栽培されている。

#### 南アフリカ: 灌漑用水は昨年より豊富

南アフリカでは、主に西ケープ州でカキの栽培が行われている。現時点ではまだ生育の初期段階である。 果樹園では剪定が終わり、開花が始まろうとしている。開花最盛期は11月中旬である。灌漑用水は昨年より も豊富であるが、カキは他の作物よりも干ばつの影響は受けにくい。

# 31. EU28 カ国の落葉果樹(リンゴ、ナシ、生食ブドウ)事情

# 米国農務省海外農業局 GAIN レポート(2018 年 11 月 2 日公表)

# **<リンゴ>**

EUの生食リンゴ統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	527,713	527,792	527,772
収穫面積(ha)	504,141	500,928	503,,227
販売生産量(トン)	11,475,296	9,312,335	12,500,470
非販売生産量(トン)	1,247,324	701,265	1,508,100
生産量計(トン)	12,722,620	10,013,600	14,008,570
輸入量(トン)	424,160	528,170	492,800
総供給量(トン)	13,146,780	10,541,770	14,501,370
域内生鮮仕向量(トン)	7,748,936	6,532,252	7,784,830
輸出量(トン)	1,487,592	761,578	1,372,000
加工仕向量(トン)	3,816,700	3,246,940	5,344,540
市場隔離量(トン)	93,552	1000	0
総出荷量(トン)	13,146,780	10,541,770	14,501,370

年産は7月-6月

#### 生産量

EU28カ国は世界のリンゴ生産及び消費に関して世界をリードしている地域の一つである。ポーランドは20 18/19年のEUのリンゴ生産量の34%を占め、イタリア(18%)、フランス(12%)、ドイツ(6%)、ハンガリー(4%)が上位5カ国であり、EUの生産量の77%を占めている。

EU28カ国の栽培面積は緩やかに減少している。こえは主にポーランドがロシアの輸入禁止措置のために 長らく低価格での販売を余儀なくされてきたことから、古い果樹園を放棄しているためである。加えて、オラン ダで収益の高いナシへの転換を進めていることも要因の一つである。しかしながら、古い果樹園(主にポーラ ンド)では、新しい果樹園に比べるとより集約的な生産が行われていないため、生産力自体は低下していな い。2018/19年の収穫面積は、2017/18年に比べると増加している。これは2017/18年の霜害のために 収穫を行わなかった果樹園面積が多く存在したためである。

2018/19年の販売生産量は、霜害で大きなダメージがあった前年に比べて34%増加すると予想される。もし、この通りの生産量であれば、過去最大の生産量となる見込みである。ポルトガル、スペイン、ラトビアを除き、全ての国で生産量が増加する模様だ。前年に比べて増加率が大きい国は、スロベニア、ベルギー、オーストリア、スウェーデン、ハンガリーであり、生産量の増加が多い国はポーランド、イタリア、ドイツ、ハンガリー、ベルーギーであり、それぞれ前年より160万トン、50万トン、37.3万トン、25.5万トン、12.4万トン増加する見込みである。

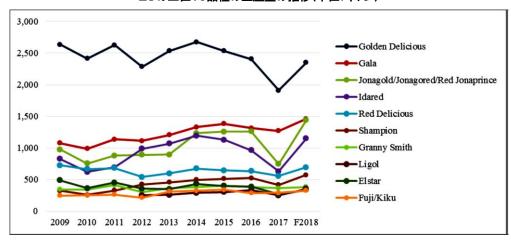
欧州全域で生育期間は天候に恵まれた。冬期は温暖で、主要な産地では霜害を免れた。北部、北東部では干ばつに見舞われたが、リンゴは根が深く張っていることが幸いし、穀物のような被害は生じなかった。果実の品質は一般に優れている。これは乾燥した天候で推移したことから、病虫害の発生が少なかったことによる。しかしながら、貯蔵性に関しては懸念されている。高温で推移したことから、収穫期は例年に比べて2~3週間早まった。夜温と昼の温度の差が小さかった地域では、アントシアニンの生成が十分ではなく、赤色品種の着色が悪いといった報告もある。加えて、幾つかの国では果実のサイズが例年より小さいことも報告されている。該当する国は、チェコ、フランス、ハンガリー、オランダである。

欧州で1万トン以上の生産量がある品種は20にのぼる。この中で、ゴールデンデリシャス、ガラ類、ジョナゴールド類(ジョナゴールド、ジョナゴレッド、ジョナプリンス)が上位3大品種である、しかし、国によって品種構成は異なっている。ゴールデンデリシャスはイタリア、フランス、スペイン、ポルトガルで最も生産量が多い品種であり、ジョナゴールドはドイツ、ベルギーで最も生産量が多い。アイダレッドはポーランド、ハンガリーで最も生産量が多い品種である。一方、ガラは多くのEU諸国で2番目に生産量が多い品種であり、第1位となっている国は極めて少ない。ピンクレディー、ルーベンス、テンテーション、キクなどの新品種も近年生産シェアを

伸ばしている。スロバキア、オランダ、英国はいわゆる新品種の割合が高い国であり、それぞれ13%、12%、 10%のシェアを占めている。

リンゴの国別販売生産量(単位:トン)							
国名	2016/17	2017/18	2018/19	18/19の前年と	18/98თ		
四石	2016/17	2017/18	(予測)	の比較	構成比		
ポーランド	3,504,000	2,700,000	4,300,000	59%	34%		
イタリア	2,272,027	1,704,283	2,199,530	29%	18%		
フランス	1,519,000	1,468,000	1,466,000	0%	12%		
ドイツ	1,032,913	596,666	970,000	63%	8%		
ハンガリー	402,765	380,070	635,000	67%	5%		
スペイン	581,160	557,000	548,000	-2%	4%		
ルーマニア	360,000	280,000	370,000	32%	3%		
ギリシャ	291,753	282,292	290,000	3%	2%		
オランダ	313,700	225,700	256,400	14%	2%		
ポルトガル	238,320	300,000	253,000	-16%	2%		
英国	244,000	207,000	230,000	11%	2.00%		
オーストリア	60,800	129,355	230,000	78%	2.00%		
ベルギー	227,000	84,920	209,000	146%	2.00%		
チェコ	124,997	105,280	127,710	21%	1.00%		
クロアチア	49,000	65,000	85,000	31%	0.70%		
スロベニア	42,739	13,605	75,000	451%	0.60%		
リトアニア	50,000	48,000	54,000	13%	0.40%		
ブルガリア	40,000	40,927	43,000	5%	0.30%		
スロバキア	20,722	32,477	46,830	44%	0.40%		
アイルランド	40,000	40,000	42,000	5%	0.30%		
スウェーデン	20,000	18,000	32,000	78%	0.30%		
デンマーク	24,000	19,000	24,000	26%	0.20%		
ラトビア	10,000	8,000	7,000	-13%	0.10%		
フィンランド	6,400	6,760	7,000	4%	0.10%		
合 計	11,475,296	9,312,335	12,500,470	34%	100%		

EUの上位10品種の生産量の推移(単位:千トン)



### 貯蔵量

世界リンゴ・ナシ協会(WAPA)によると、2018年7月1日の貯蔵量は165,884トンと前年を42%下回っている。 貯蔵場所は国より異なり、生産者団体が主体である国、卸売市場及び生産者団体である国に分かれる。 市場年度末の在庫量は新年度の価格の影響を及ぼす。この報告書では在庫量は「域内生鮮仕向量」の内数として扱っている。

## 消費

リンゴはEU各国で最も多く消費される果物である(ただし、カンキツが第一位のスペインを除く)。しかし、近年、一人当たりのリンゴ消費量は減少している。これは、ソフトフルーツ(モモ等)へ消費が転換している (英国、ドイツ等)、生鮮果実の消費が全体的に減少している(スペイン等)のためである。しかし、生産量が大幅に増え、価格が下がると見込まれるため、消費量は前年に比べると増加すると予想される。しかし、11月までの消費量の増加は自家で栽培しているリンゴの樹によりもたらされると見込まれる。

#### 加工

2018/19年の加工仕向量は、2017/18年に比べて65%増加すると予測される。加工仕向量は過去10年で最高の水準に達すると見込まれる。これは主に「非販売生産量」の増加によりもたらされ、加えて、長期貯蔵庫の容量が少ない地域では、生食向けに生産されるリンゴの多くが加工に回ると考えられるからである。 濃縮リンゴ果汁の貯蔵量は2018/19年が始まる7月1日時点でほとんど枯渇していたが、加工仕向用のリンゴの価格は、これまで「非販売生産量」が多かった2014年、2016年に比べても低下すると見込まれる。

加工向けリンゴの用途としては、果汁、濃縮果汁、リンゴ酒、ワイン/ブランデー、ソース、缶詰、チップス、パイがある。加工向けの割合は国により大きく異なり、0%のギリシャ、スカンジナビア諸国から70%のハンガリーまで区々だ。加工仕向割合は年によって変動するが、2017/18年の割合は34%と見込まれる。加工仕向量が多い国は、順番に、ポーランド、ドイツ、ハンガリー、イタリア、フランス、ルーマニア、オーストリア、スペイン、英国、チェコである。

### 貿易

大部分はEU域内で貿易が行われている。過去5カ年では、平均で約230万トンが域内の貿易量であり、 域外からの輸入量は40~53万トンである。域外からの輸入量は、リンゴ総供給量の3~5%に相当する。

### 域外との貿易

### 輸入

2018/19年の域外からの輸入量は、域内の生産量が増加するため、7%減少すると予測される。2017/18年の輸入量の70%は、チリ、ニュージーランド、南アフリカの3カ国により占められている。これら諸国は南半球に位置し、欧州のシーズンオフに輸入されている。

主な輸入国は英国、オランダで全体の58%を占めている。しかし、オランダに輸入される果実の大部分は 転送されて他のEU諸国で消費されている。

米国からは年間を通して輸入が行われているが量は少ない。これは2014年3月にジフェニルアミン(DPA) の残留農薬基準が引き下げられたためであり、現在では DPA を使用していない出荷施設からのリンゴしか輸入されないからだ。

国別リンゴ輸入量(単位:トン)

ξ		<u> </u>			
国名	2015/16	2016/17	2017/18	17/18の前年と の比較	17/18の構 成比
チリ	120,863	118,960	157,663	33%	30%
ニュージーランド	109,019	122,309	134,475	10%	25%
南アフリカ	96,520	87,690	109,713	25%	21%
ブラジル	24,029	18,405	28,318	54%	5%
セルビア	23,648	27,751	24,859	-10%	5%
アルゼンチン	15,328	15,758	24,137	53%	5%
ウクライナ	63	1,333	11,589	769%	2%
マケドニア	35,927	15,172	9,964	-34%	2%
モルドバ	181	413	7,311	1670%	1%
米国	5,356	2,305	5,356	132%	1%
ウルグアイ	2,399	4,348	3,497	-20%	1%
中国	2,071	961	2,343	144%	0.40%
ボスニア・ヘルツイェゴビナ	4,039	513	2,201	329%	0.40%
オーストラリア	699	1,362	1,533	13%	0.30%
トルコ	177	41	1,513	3590%	0.30%
アルバニア	7,190	4,705	1,410	-70%	0.30%
その他	3,036	2,134	2,288	7%	0.40%
合 計	450,545	424,160	528,170	33%	100%

### 輸出

2018/19年の輸出量は、域内の生産が増加したため、前年より61万トン(80%)増加すると予測される。この結果、米国産は多くの海外市場で、ポーランド産、イタリア産が厳しく競合することが見込まれる。

2017/18年の輸出量は、減収から価格が高騰したため、前年よりも49%減少した。また、アルジェリア向け輸出は、同国が2015年末から輸入許可制度を導入したため、大きく減少した。輸入許可制度が発効する前

は、アルジェリアへの輸出量は全体の9%を占めていた。

ロシアが輸入禁止措置を講じたため、欧州の輸出業者は様々な輸出先を開拓してきた(例えば、東欧、北アフリカ、中東、ブラジル)が、その成果は区々であった。代替市場の開拓に成功した国は、品種構成(ガラ、グラニースミス、ゴールデンデリシャス、レッドデリシャス)が適正であったためであり、また、ロシアが輸入禁止措置を講じる前から輸出市場の開拓努力を行っていたためである。新興市場として成功した例としては、インドがあげられる。ポーランド、フランス、スペイン、ベルギーは既にインド向け輸出を行っているが、チェコは2017年10月に植物防疫条件で合意したものの、輸出量は僅かに留まっている。米国への輸出については、2014年10月に「プリ・クリアランス」制度が導入され、イタリアとフランスは輸出を行うことが可能となっている。ポーランドはベトナムとの間で輸出協定を締結し、その他のアジア諸国とも協定を結んでいる。

2017/18年の主要な輸出先は、ベラルーシ、エジプト、サウジアラビアである。また、輸出国の上位5カ国が輸出量全体の90%を占めているが、この5カ国とはポーランド(主にベラルーシ、カザフスタン、セルビア、エジプトへ輸出)、イタリア(サウジアラビア、エジプト、ノルウェー)、フランス(アラブ首長国連邦、サウジアラビア、イスラエル、タイ)、ギリシャ(エジプト、ヨルダン)、スペイン(モロッコ、モーリタニア、アラブ首長国連邦)である。

米国産と競合する市場	EUの輸出国
サウジアラビア	イタリア、フランス
アラブ首長国連邦	フランス、イタリア
インド	イタリア、ポーランド、フランス、スペイ
	ン、ベルギー、オランダ

### くナシン

EUのナシ統計(在EU 米国農務省 農務官)

		C 1/21 III /	
	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	120,484	118,557	118,748
収穫面積(ha)	111,065	111,467	111,556
販売生産量(トン)	2,239,358	2,276,237	2,367,358
非販売生産量(トン)	100,813	110,159	157,600
生産量計(トン)	2,340,171	2,386,396	2,524,958
輸入量(トン)	208,577	197,389	185,000
総供給量(トン)	2,548,748	2,583,785	2,709,958
域内生鮮仕向量(トン)	1,964,863	1,957,924	2,027,245
輸出量(トン)	308,754	345,067	365,000
加工仕向量(トン)	275,131	280,794	317,713
市場隔離量(トン)	0	0	0
総出荷量(トン)	2,548,748	2,583,785	2,709,958
ᄼᅲᅕᅼᄀᄆ <sub>ᄼ</sub> ᄆ			

年産は7月-6月

#### 生産

2018/19年のEUの販売生産量は、前年を4%上回ると予測される。しかし、国別に見ると様相は異なる。例えば、南欧諸国では生産量が減少傾向であるが、北欧諸国では増加傾向である。ポーランド、ドイツ、ハンガリーは昨年気象災害により減収したが、今シーズンは大幅に回復が見込まれる。

EUでは上位 6 カ国が、生産量全体の90%を占めている。これら諸国は欧州の西部に位置している。イタリアが最大の生産国であり、栽培面積は3.2万 ha である。エミリア・ロマーニャ州が最大の産地であり、イタリアの生産量の3/4を占めている。2018/19年の生産量は74.1万トンと予測され、前年と同程度の見込みである。今シーズンの品質及び果実サイズは良好と見込まれる。イタリアでは品種 Abate Fetel の生産量が最も多い。

オランダではナシの栽培面積が増加を続けており、今シーズンは1万 ha を超える(10,058ha)と予測される。 干ばつにも拘わらず、生産量(品種 Conference が主体)は前年を21%上回る39.8万トンと予測される。5月から8月下旬にかけての高温と降水量不足により、当初は果実サイズが小さくなると懸念されたが、中央部の生産者を中心に灌漑に努め、8月下旬の降雨と相俟って果実サイズは適切な水準に達し、全体的に良好な 収穫時期を迎えた。しかし、オランダ南部では灌漑が十分に行えなかったため果実サイズは小さくなってしまった。とはいえ、今シーズンは寒害や雹害がなく、十分な日光を浴びたため、味の面では良好である。今シーズンは、特に灌漑が行われた地域を中心にオランダのナシ生産は順調に行われた。

スペインの生産量は、春の気象条件が優れなかったことと夏に雹害に見舞われたため、前年より6%下回る33.4万トンと予測される。カタロニア州がスペインの最大の産地であり、40%の生産量を占めている。次いでアラゴン州、ラ・リオハ州の順である。主な品種は Conference、Limonera (カタロリア州、アラゴン州)、Blanquilla (カタロニア州、アラゴン州、ムルシア州)である。栽培面積はこの10年間で徐々に減少してきた。これは収益性が改善された核果類に転換してきたためである。

栽培面積の増加はオランダだけでなくベルギーでも見られ、10,184ha に達している。ベルギーでは生産地はフランダース地方に集中している。開花期とそれに続く生育期は気象条件に恵まれた。しかし、その後は数次の熱波を含む干ばつに見舞われ、果実のサイズに悪影響を及ぼした。ベルギーではオランダ南部の生産者と同様、灌漑が十分に行えなかった。干ばつが終わっても果実サイズが回復するには至らず、このため、生産量は30.9万トンと推測される。ただし、味は良好である。

2017/18年のポルトガルの生産量は18.4万トンと豊作であったが、今シーズンは15%減少し、15.6万トンと推測される。これは開花期に天候に恵まれず、6月に豪雨と北部地方で雹害があったためである。ポルトガルではユニークな品種である Rocha が栽培されている。

EUの栽培面積は11.2万 ha と前年と同程度と見込まれる。スペインでは過去10か年間、収益性の高い核果類に転換してきたため面積が減少してきたが、今シーズンは下げ止まった模様である。一方、オランダとベルギーでは毎年500ha 面積が増加している。これは、品種 Conference がリンゴよりも収益性が高いためである。

EUで栽培されている品種の40%はConferenceで、主にベルギー、オランダ、スペインで生産されている。 その他の主要品種は Abate Fetel (イタリア)、William Bon Crétien/Bartlett (イタリア、スペイン、フランス)、 Rocha (ポルトガル)である。オランダとベルギーの生産者は、クラブ制品種の Migo、Sweet Sensation、Red Conference の栽培に取組み始めている。

ナシの国別販売生産量(単位:トン、%)

,		ノレエノエニ・ナリ			,	
国名	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 (予測)	18/19の前年と の比較(%)	18/19の構 成比(%)
イタリア	764,000	681,000	738,000	741,000	0	31.3
オランダ	345,000	370,000	327,000	394,000	21	16.6
スペイン	350,755	345,655	356,100	334,000	-6	14.1
ベルギー	357,500	313,000	302,170	309,000	2	13.1
ポルトガル	139,190	111,020	184,000	156,000	-15	6.6
フランス	141,000	129,000	130,000	130,000	0	5.5
ポーランド	59,878	75,500	50,100	80,000	60	3.3
ギリシャ	72,417	66,197	73,246	75,000	2	3.2
ドイツ	43,071	34,625	23,386	35,000	50	1.5
ハンガリー	31,249	36,690	23,000	28,100	22	1.2
英国	25,000	27,000	25,000	22,000	-12	0.9
ルーマニア	17,000	19,000	18,000	19,000	6	0.8
その他	39,300	30,671	26,235	44,258	69	1.9
合 計	2,385,360	2,239,358	2,276,237	2,367,358	4	100.0

1.200 --- Conference 1,000 -Abate Fetel 800 William Bon Crétien 600 Rocha 400 Coscia-Ercollini 200 -Guvot Doyenne du Comice 2009 2013 2017 F2018

EU の主要品種の生産量の推移(単位: 千トン

# 消費

ナシの一人当たり消費量は毎年変動している。EU におけるナシの一人当たり消費量は概ね4kgである。 一人あたり消費量の多い国はナシの主産国で、イタリアでは約10kg、次いでポルトガル、オランダ、ギリシャ、スペイン、ベルギーである。消費量の少ない国(2kg以下)は、ハンガリー、スロバキア、ポーランド、リトアニアである。2018/19年の域内消費量は、前年と同程度と見込まれる。

各国で人気のあるナシの品種は地元で生産されるものである。小売業者レベルで常時販売されているナシの品種は2~4程度である。業界によると、味、価格、食味、外観がナシの購買理由だそうだ。欧州北西部では小さいサイズのナシが好まれる傾向にある。地元で生産されるナシ、有機栽培のナシは消費が増加する傾向にある。スイス、デンマーク、スウェーデン、ルクセンブルグ、オーストリアでは、既に年間一人当たりの有機農産物の購入額は200ドルを超えている。

#### 加工

形、サイズ、品質において生鮮果実に向かないものは加工に回される。用途は缶詰、ジュース、パイ用である。また、食用にできない果実は餌、発酵のためにも利用される。生鮮果実の価格も加工仕向量に影響する。 2017/18年の加工仕向量は28.1万トンであった。

2018/19年の加工仕向量は約31.8万トンと見込まれる。イタリア、オーストリア、スペイン、ポーランドは加工仕向量が多い。これら諸国だけでEU全体の加工仕向量の2/3を占めている。オーストリアでは非販売生産量が増加したことから、加工仕向量は前年より2.5万トン増加し、大部分はペリー(ナシの「サイダー」に相当するアルコール飲料)の生産に向けられている。イタリアでは主にジュースに向けられ、その他の国ではジュースの他、ゼリー、缶詰に向けられる。

# 域外貿易

#### 輸入

域外からの輸入を行う主な国はイタリアとオランダで、両国でEU全体の70%を占めている。その他の輸入 国は、英国、ドイツ、フランスである。輸入の主要港であるオランダのロッテルダムからは域内各国に転送され ている。一方、イタリアの輸入品は主に国内で消費される。

2017/18年のナシの輸入量は減少した。これはいくつかの(EU域外の)輸入国が南半球諸国から直接輸入を行うようになったからであり、以前はEUを経由して輸入していた方式を見直したためである。この傾向は今後も続くと考えられる。2018/19年の輸入量は、域内で高品質のナシが豊富にあることから、更に減少し18.5万トンと予測される。

輸入されたナシは生鮮果実として消費される。主な輸入先は南半球であり、国内生産を補完するために輸入されている。輸入は2月に始まり、4月にピークを迎え7月過ぎに終了する。主な輸入品種は Packham、Williams Bon Crétien、Forelle、Abate Fetel.である。

中国は輸入先国として第4位であるが、品種 Ya を供給する唯一の国であり、EU在住のアジア人に消費されている。

米国からの輸入量は2016/17年に過去最低となる31トンまで減少した。これは残留農薬基準が厳しくなっ

たためと欧州産と競争関係にあるためである。価格差に加え、特に北欧の消費者は、米国産の Anjou よりも 欧州産の Conference を好む傾向があるようだ。2017/18年には米国からの輸入量は172トンに回復したが、これらは有機栽培によるナシであり、主に英国の高級スーパーで販売されている。

ナシの国別輸入量(単位:	トン、	%)
--------------	-----	----

国名	2015/16	2016/17	2017/18	17/18の前年との 比較(%)	17/18の構成 比(%)
南アフリカ	96,656	88,285	76,655	-13	39
アルゼンチン	64,323	46,502	52,069	12	26
チリ	47,596	56,777	45,927	-19	23
中国	10,909	11,160	12,984	16	7
トルコ	1,569	1,833	5,991	227	3
セルビア	343	675	1,477	119	1
ボスニアヘルツェゴビナ	303	842	554	-34	0
ニュージー・ランド	537	413	434	5	0
ウルグアイ	285	1,679	387	-77	0
米国	154	31	172	445	0
韓国	84	84	141	67	0
モルドバ	22	0	139	∞	0
オーストラリア	0	0	123	∞	0
ベラルーシ	534	101	66	-35	0
スイス	92	62	59	-5	0
その他	206	133	211	59	0
合 計	223,613	208,577	197,389	-5	100

#### 輸出

2016/17年の輸出量は前年と変わりなかったが、2017/18年は増加に転じた。これは既存の輸出市場 (ベラルーシを除く)及び新規市場への輸出が拡大したためである。2018/19年の輸出量は域内で生産されるナシの品質が良いことから、やや増加すると予測される。

ベラルーシが引続き最大の輸出先であるが、ロシアに近接する国は、ベルギー、オランダで生産される Conference の主要な輸出先国となっている。

2017/18年にはブラジル向けの輸出量が50%増加した。これはポルトガル産の Rocha の生産量が増加したためである。2018/19年は生産量の減少が見込まれるため、ブラジル向けの輸出は減少すると予想される。

成熟した市場であるノルウェーとスイスへの輸出は、2017/18年に比べ変化はないと予想される。また、モロッコ、中東、極東向けの輸出は収益性が高いことが確認されているが、安定して推移すると見込まれる。

香港向けの輸出は減少したが、中国本土向けの輸出は2017/18年には50%増加し、約5,000トンに達した。業界の専門家によると、2018/19年には更に増加すると見込んでいる。

ロシアの輸入禁止措置及び不確実な英国のEU脱退により、生産者は既存の輸出市場だけでなく、アジア、中東、南北アメリカにおける新規市場の開拓を進めている。カナダ、メキシコの市場は開放されたが、未知の品種を持続性の高い市場として開拓するには更に数年を要することになるだろう。

ナシの国別輸出量(単位:トン、%)

国名	2015/16	2016/17	2017/18	17/18の前年と の比較(%)	17/18の構 成比(%)
ベラルーシ	148,201	149,034	131,111	-12	38
ブラジル	42,813	43,257	63,215	46	18
モロッコ	15,272	21,219	40,885	93	12
ノルウェイ	17,264	17,185	17,317	1	5
カザフスタン	10,189	8,581	11,702	36	3
スイス	6,017	6,292	11,521	83	3
ボスニアヘルツェゴビナ	9,304	10,563	10,729	2	3
サウジアラビア	5,863	5,145	7,572	47	2
中国	3,130	3,253	5,091	57	1
アルメニア	2,103	223	3,562	1,496	1
アラブ首長国連邦	4,381	3,639	3,532	3	1
イスラエル	5,263	3,738	3,457	8	1

ヨルダン	2,202	1,739	3,193	84	1
セルビア	2,145	4,413	2,963	33	1
リビア	6,779	2,255	2,745	22	1
カナダ	2,014	1,623	2,728	68	1
アルバニア	2,258	1,991	2,586	30	1
香港	4,474	3,670	2,524	-31	1
その他	19,950	20,934	18,634	-11	5
合 計	309,622	308,754	345,067	12	100

#### 価格

ロシア市場は引続き閉鎖されているが、ナシの生産者価格は順調な品質に支えられ、今シーズンは平均的な水準となると見込まれる。ナシ業界は新規市場の開拓を進めており、今後も継続すると見込まれる。

## く生食ブドウン

EUの生食ブドウ統計(在EU 米国農務省 農務官)

	2016/17年	2017/18年	2018/19年
栽培面積(ha)	96,654	97,446	97,450
収穫面積(ha)	91,590	92,140	92,190
販売生産量(トン)	1,711,400	1,442,063	1,545,000
非販売生産量(トン)	6,822	11,297	11,500
生産量計(トン)	1,718,222	1,453,360	1,556,500
輸入量(トン)	648,566	684,797	688,000
総供給量(トン)	2,366,788	2,138,157	2,244,500
域内生鮮仕向量(トン)	2,279,310	2,059,445	2,166,000
輸出量(トン)	86,778	78,712	78,500
市場隔離量(トン)	700	0	0
総出荷量(トン)	2,366,788	2,138,157	2,244,500

年産は6月-5月

EUは世界で最大の生食ブドウ生産地であり、イタリア、ギリシャ、スペインの3カ国でEU全体の92%を占めている。2018/19年の販売生産量は、不作かた回復し、前年を7.1%上回ると予測される。これは主にイタリアで生産が回復するためであり、開花期の湿潤な天候、夏の降雨にもかかわらず前年を13.3%上回ると見られるからである。生産量の増加は、フランス(23.8%増)、ルーマニア(1.3%増)でも見込まれ、天候不順により減収が予想されるポルトガル(26.4%減)、ブルガリア(4.2%減)を相殺する模様である。ギリシャ、スペインでは前年と同程度の生産量と見込まれる。品質面では、7月と9月が高温で推移したことから、糖度が高く良好と見込まれる。2018/19年の栽培面積は、主にイタリアでEU内外からの需要の増加に伴い、種無し品種(Sugraone、Crimson、Thompson、Sublime)への投資が進んでいることから増加すると見込まれる。

イタリアは生食ブドウの最大の生産国で、次いでギリシャ、スペインである。イタリアの生食用ブドウは主に南部で生産され、プッリャ州(70%)、シチリア(25%)が主産地である。Italia、Victoria、Red Globe が主な種のある品種で、これらで70%を占めている。早生品種(Black Magic、Vittoria)は5月から7月にかけて販売される。中性、晩生品種はItalia、Palieri、Pizzutello、Bianca、Red Globe でシチリア、アブルッツォ、プーリア、バジリカータ、サルデーニャで生産され、8月から12月に収穫される。種無し品種は Sugraone、Crimson、Thompson、Sublime などで国内生産量の約30%を占めているが、今後数年間で大幅な伸びが見込まれる。ギリシャの栽培面積は1.7万 ha で、主産地はペロポネソスのコリント、マケドニアのカバラ、クレタ島のイラクリオンである。主な品種は、Sultana (Thompson Seedless)、Victoria であるが、販売時期を10~11月まで延長するために品種を多様化することが目下の課題である。

スペインの栽培面積は1.4万 ha である。2017/18年には約6,000ha(原文ママ)の新品種が古い品種の跡地に植栽された。主産地はムルシアで、生産量の70%を占めている。アリカンテ、セビリアがこれに次ぐ産地である。栽培品種は50を超えるが、主な品種は Aledo、Ideal、Muscatel、Dominga、Napoleon である。種無しブドウは全体の30%を占め、ムルシアが主産地であり、主な品種は Apirena である。

生食用ブドウの国別販売生産量の推移(トン)

	<u> </u>	<u> </u>	· - /		
	2016/17	2017/18	2018/19	18/19の前年 との比較	18/19の 構成比
イタリア	1,000,000	750,000	850,000	13.3	55.0
ギリシャ	315,239	311,123	310,000	-0.4	20.1
スペイン	281,955	266,200	266,000	-0.1	17.2
フランス	50,000	42,000	52,000	23.8	3.4
ルーマニア	34,000	39,000	39,500	1.3	2.6
ポルトガル	20,140	21,740	16,000	-26.4	1.0
ブルガリア	10,066	12,000	11,500	-4.2	0.7
合 計	1,711,400	1,442,063	1,545,000	7.1	100.0

# 消費

2018/19年の域内生食ブドウ消費量は、イタリアの生産増が牽引し、回復すると予想される。6月から12月まではEU域内で生産されるブドウが消費されるが、年の上半期は南半球から輸入されるブドウが消費され、その割合は全消費量の概ね25%である。

生食ブドウの最大の消費国はイタリアで、次いで、ドイツ、英国、ギリシャ、フランス、スペイン、ルーマニア、チェコ、ポルトガル、オーストリア、ブルガリア、スロバキア、クロアチア、スロベニアの順である。現時点ではイタリア産の種のある品種は市場で受け入れられているが、域内の消費者は次第に種無し品種(Sugraone、Crimson、Thompson、Regal、Summer Royal、Centennial、Sublime)に嗜好を移しつつある。また、夏果物が少なくなる時期に供給できるよう晩生品種(Crystal、Princess)の供給にも力を入れている。

# 貿易 輸入

EUは生食ブドウの純輸入地域である。2018/19年の輸入は、域内の生産量が増加するものの、堅調な需要があることから引続き増加すると予測される。2017/18年の輸入量は、前年を5.6%上回った。輸入が増加した国は、モルドバ(66%増)、エジプト(54%増)、ナミビア(31%増)、トルコ(26%増)、ブラジル(23%増)である。主な輸入先は南アフリカ(輸入全体に占める割合30%)、チリ(16%)、インド(13%)である。主な輸入国はオランダ、ドイツ、英国であり、次いでフランス、ベルギー、オーストリア、スペイン、イタリアである。オランダは中継貿易基地として機能している

生食ブドウの国別輸入量(単位:トン、%)

y	,			,	,
国名	2015/16	2016/17	2017/18	17/18の前年 との比較	17/18の構 成比
南アフリカ	197,669	214,909	205,128	-4.55	29.95
チリ	103,071	109,289	111,033	1.60	16.21
インド	82,290	94,851	88,575	-6.62	12.93
エジプト	54,997	49,578	76,329	53.96	11.15
ペルー	64,058	62,921	63,102	0.29	9.21
トルコ	24,344	31,404	39,735	26.53	5.80
ブラジル	29,324	28,018	34,362	22.64	5.02
ナミビア	18,070	18,976	24,899	31.22	3.64
モルドバ	11,730	12,313	20,471	66.25	2.99
モロッコ	8,093	6,851	6,424	-6.23	0.94
米国	6,401	4,399	5,199	18.17	0.76
マケドニア	6,394	10,632	3,965	-62.70	0.58
メキシコ	1,797	1,471	1,597	8.56	0.23
ボスニア・ヘルツェゴビナ	730	543	1,007	85.31	0.15
イスラエル	1,649	665	795	19.64	0.12
アルゼンチン	3,293	543	729	34.45	0.11
レバノン	397	673	502	-25.42	0.07
中国	14	35	284	713.69	0.04
ノルウェー	34	25	60	135.95	0.01
日本	_	6	53	721.09	0.01
その他	614	460	543	18.04	0.08
合 計	614,969	648,566	684,797	5.59	100.00

# 輸出

2018/19年の輸出量は、輸送コストが高くつくこと、事務手続きが遅延する傾向にあることなどから、引続き減少すると予想される。2017/18年の輸出量は、域内生産量が減少したことから前年を9.3%下回った。主な輸出先はスイス、ノルウェーで、輸出量全体に占める割合はそれぞれ38%、17%である。更に、北アフリカ、中東、中国での市場開拓を進めている。域内の貿易も含めると、種無し品種(Sugar Crisp、Sweet Sunshine、Sweet Celebration、Sweet Sapphire、Jack's Salute、Cotton Candy)が主に英国、スカンジナビア諸国、アラブ首長国連邦に輸出されている。

生食ブドウの国別輸出量(単位	:トン	、%)
----------------	-----	-----

生良ノトリの国別輔山里(甲位:トン、%)					
国名	2015/16	2016/17	Jan-17	17/18の前年 との比較	17/18の構 成比
スイス	29,141	29,874	29,867	-0.02	37.94
ノルウェー	14,222	13,682	13,889	1.51	17.65
ベラルーシ	7,419	5,560	3,621	-34.88	4.60
アラブ首長国連邦	6,474	5,405	2,971	-45.04	3.77
南アフリカ	2,539	2,715	2,800	3.11	3.56
サウジアラビア	4,192	3,444	2,194	-36.28	2.79
ロシア	2,783	4,298	2,175	-49.40	2.76
アルバニア	2,154	2,390	2,138	-10.54	2.72
ボスニアヘルツェゴビナ	2,056	2,416	2,113	-12.53	2.68
ウクライナ	1,929	1,918	1,590	-17.12	2.02
ブラジル	1,213	1,022	1,014	-0.82	1.29
カナダ	415	468	1,005	114.91	1.28
アイスランド	795	743	970	30.56	1.23
カタール	336	494	831	68.22	1.06
オマーン	396	370	781	111.16	0.99
米国	863	791	712	-9.96	0.90
ヨルダン	616	1,014	675	-33.44	0.86
スリランカ	674	912	655	-28.16	0.83
マケドニア	166	105	547	419.29	0.70
モロッコ	339	373	505	35.54	0.64
その他	8,391	8,784	7,662	-12.80	9.73
合 計	87,117	86,778	78,712	-9.29	100.00

# 32. 台湾消費者の生食ブドウに対する嗜好の変化等

# FreshPlaza 電子版 (2018 年 11 月 1 日)



注:以下の記事はカルフール台湾(Carrefour Taiwan)
の Penny Chang 氏とのインタビューに基づくものである。

スーパー、カルフール台湾では、最近、消費者が種無しの緑色系ブドウを購入することが普通に観られるようになった。しかし、10年前は普通に観られることではなく、種のあるブドウが一般的であった。今やそれが逆転している。種無しブドウの供給量増加は自然に起ったものではなく、カルフール台湾による輸入努力の賜である。もし、あなたがカルフール台湾の責任者だったとすれば、最新の情報を入手し、真に消費者の好みを理解するとともに、大胆に新品種を仕入れて消費のトレンドを築く努力が求められる。Penny Chang 氏(写真左)は、これら全てに気を配り、現在ではカルフール台湾の輸入部門の責任を任されている。氏は台湾のブドウ市場がどのように進展しているのか、台湾の生鮮果実市場の最新トレンドは何かを十分理解している。

「現在では種無しブドウの方が種のあるブドウよりも人気がある。 種無しブドウの人気は台湾全体の市場で広

がっているが、この変化は7~10年間に始まった。この過程の中で、消費者のブドウの色に関する好みも変化し、5~7年前には色に対する好みが極端になった。以前は、黒色は消費者に好まれていたことから、黒色系の種無しブドウが最も人気が高く、卸売業者は緑色系/白色系のブドウ輸入を敬遠していた。しかし、ここ2年で緑色/白色系の方が黒色系ブドウを凌ぐようになり、カルフール台湾の顧客は、今では緑色系/白色系の方を欲しがるようになった。というのも緑色系/白色系の方が粒も大きく、糖度も高いからだ」と Chang 氏は説明している。

「カルフールで販売する緑色系/白色系ブドウの大部分はカリフォルニア州産である。台湾は、米国と経済面、政治面で良好な関係を持っている。カルフール台湾で扱う輸入果実の30~40%は量的にも金額ベースでも米国産である。夏の間は韓国及び日本産の緑色系/白色系ブドウも扱っているが、量は圧倒的に米国産が多い。確かにブドウは傷つきやすく輸送も難しいが、米国から台湾への輸出は普通に行われている。適切にパッケージを行えば輸送中でも鮮度を保つことができる。温度を適切に保ち、輸送中に段ボールやプラスティックパッケージに代わって発泡スチロールを用いることで、ブドウの新鮮さを保持できる。今日、農産物に関する高度な技術の進展により、より多くの果実を台湾は輸入することが可能となった」と Chang 氏は語っている。

台湾における消費動向の傾向としてもう一つあげられるのは、有機農産物に対する需要の増加だ。これは 台湾だけでなく世界的な傾向でもある。また、生鮮食品に対する完全なトレーサビリティーもトレンドの一つで ある。加えて、台湾の消費者は安全性に対する関心が高まっている。カルフールではこのようなトレンドを踏 まえ、有機農産物や完全なるトレーサビリティーに焦点を当てた戦略的な取組みを行っている。

著者:Melanie Groenewoud

# 33. 中国のシャインマスカット

# Produce Report 電子版(2018年9月13日)



シャインマスカットは香りが良い種無しの緑色のブドウで、1980年代後半に日本で育種され、2000年代に販売が始まった品種である。3年前に中国市場に突然出現し、今では中国各地で生産され、露店から高級スーパーまで幅広く販売されている。

シャインマスカットは、中国では阳光玫瑰又はサンシャインローズ(Sunshine Rose)と呼ばれ、中国の生食ブドウの中では驚くほど多くの人に知れ渡っている。小売店では高い価格で販売され、生産者にとっては最も収益が高い品種である。正確な生産量は把握されていないが、中国の育苗業界では3,000ha 分の苗木が準備されているという。

China Fresh and Produce Report は、最近、Li Chunyu 氏から中国におけるシャインマスカットの歴史、現状、将来について話を聞いた。Li 氏は早い段階からシャインマスカットの生産を推進したブドウの専門家で、2015年に一層の生産新興を図るため、ハイタン・シャインマスカット・市場連盟 (Haitang Sushine Muscat Marketing Alliance (原文ママ))を創立した人物である。

同氏によると、シャインマスカットが中国に導入されたのは2006年で、中国政府による長期的な農業振興、近代化を目的とした「948プログラム」を通じであった。しかし、最初の数年は生産が進展せず、植栽も販売もごく限られたものであった。

初期の問題は、適切な栽培のための知見が存在しなかったことだったそうだ。シャインマスカットは比較的病害に強く、輸送にも耐え、収穫期間が長いという特徴を持っているが、生産に当たっては労働集約的で、高品質な果実を収穫するには整枝・剪定に労力をかけなければならない。こういった理由から、シャインマスカットは米国や欧州では栽培されていない。しかし、中国で生産するに当たっては、労働力は豊富であるし、コストも低い。

数年も経たない内に、特に様々な大学の農学部が大量の日本文献を翻訳し、シャインマスカットを適正な 大きさの果粒(果粒が大きすぎると房の中心部に隙間ができ味も良くない)とし、品質を損なうことなく最大の 収量を得るための知識を習得した。

上記で得られた大量の知見は、中国の消費者が示す関心と一致し、日本から輸入されたシャインマスカット (原文ママ)に対する好意的な反応と相俟って、2015年以降、人を引き付ける果実が生産されるにつれ、 年々人気が高まった。

シャインマスカットの出現で驚くことの一つは、これまで中国の消費者は赤系や黒系のブドウに慣れ親しんでいたのに、この品種は緑系であることだ。Li 氏は、このことは中国の消費者が外観を重視するという習慣から品質や味を重視する方向に変化したことを意味する有益な兆候だ、と話している。

シャインマスカットは現段階では大変に好調であるが、Li氏は持続的成長を図る上では大きな課題があるという。一つは、この品種の多くは必ずしも適地とはいえない場所で栽培されているということだ。同氏によると、中国の生食ブドウ産業は、欧州で行われているような狭い区画の農地でもその土地に適した品種を栽培するという洗練された手法が用いられておらず、広い農地に同じ品種が栽培されているという。あまりも多くの生産者は、品質を犠牲にして収量を高め、果実サイズを大きくしていることに対して関心を示しているそうだ。

実際、中国におけるシャインマスカットの価格と品質は、他の品質に比べると大きなバラツキがある。主要都市では下級品を扱うスーパーでは500g当たり2ドルであるが、高い場合は6ドルにも跳ね上がる。専門小売店やオンラインショップでは輸入品や国産の最高品質のシャインマスカットは遙かに高い値段で販売されている。

ある流通業者にインタビューしたところ、シャインマスカットの主要な産地は雲南省であり、湖北省と湖南省はそれ程大きな産地ではないが生産が行われている。他にも中国各地で小規模ながら産地が散らばって存在する。雲南省のシャインマスカットの収穫時期は4月から10月末まで続くという。

注:Produce Report は上海に拠点を置く中国のウェブサイトである。

# 34. 世界のサクランボ情報を発信するニュースレター

# FreshFruitPortal 電子版(2018 年 10 月 30 日)

世界の最新のサクランボ情報を発信するニュースレターが隔週で発刊されることになった。

「The Cherry Express」と名付けられたニュースレターは、チリに本拠を置くYentzen グループが、果実・野菜情報を提供しているサイトである FreshFruitPortal.com (英語)、Portalfruticola.com (スペイン語)、ChinaFruitPortal.com (中国語)の協力を得て開設するものである。

The Cherry Express は、既に10月初旬からスペイン語版で配信されているが、11月からは新たに英語版、中国語版が配信されることになる。

このニュースレターは、サクランボ業界に関する独自のコンテンツとともに、2週間分の関連重要ニュースを「ポータル」として掲示することを予定している。

Yentzen グループのマネージング・ディレクターである Gustavo Yentzen 氏は、「このニュースレターは、サクランボ産業に携わる全ての人に、最新の情報、関連情報を提供するために設計されたものである。3カ国語で作成されることもあり、サプライチェーンの種々の問題を先取りして提供できる」と語っている。

The Cherry Express は読者に世界中の最新情報を提供するものであり、出荷シーズンを迎えている世界各国の情報や重要市場に焦点を当てたニュースを提供する予定である。

チリのサクランボ販売を間近に控え、10月18日のスペイン語版では、南米における業界のキーパーソン及び中国の輸入業者である Frutacloud 社の George Liu との独占インタビューを掲載している。

今後、数ヶ月は南半球の主要生産国である、オーストラリア、ニュージーランド、アルゼンチン、南アフリカ及び主要な輸入市場に関する情報を提供する予定であり、その後は北半球の情報を取扱うこととしている。 ニュースレターの申し込みは、以下から行うことができる。

https://www.us7.list-manage.com/subscribe?u=bc776e6448992485fa818ba08&id=85d9eb406d

#### 2019年世界サクランボサミット(The Global Cherry Summit)

今年の4月、Yentzen グループと Produce Business Magazine は世界で初となる「世界サクランボサミット」を チリで開催し、主要輸出国から業界専門家650名が参加した。第2回のサミットは、2019年4月25日にチリの首都サンチアゴ郊外の Monticello カンファレンスセンターで開催されることになった。このサミットでは、魅力的な教育セッション、世界各国からの要人によるパネル討議、計り知れない意味を持つ交流機会の提供などで「おもてなし」をする予定だ。

チケット販売、展示ブース、スポンサー契約は申し込みが早々に進んでいる。参加を希望する場合は以下 をご覧頂きたい。

www.globalcherrysummit.com



# 35. アジア特有の果物ヤマモモ

# FreshPlaza 電子版 (2018 年 10 月 30 日)



楊梅(yangmei (Myrica rubra)、日本名はヤマモモ)と呼ばれる果物は、2000年以上にわたり、中国全土で栽培されてきた。この果物は、様々な名前で呼ばれている。例えば、bayberry、waxberry、yamamomo、Chinese strawberry、arbutus、strawberry tree fruit などであるが、最近ではヤムベリー(yumberry)と呼ばれることが多い。

個々の果実は大きめのイチゴくらい(原文ママ)であり、 表面には粒状の突起がある。しかし果実は果肉様の小さな茎の集合体であり、中心に種がある。

小さな茎は独特の歯触りがあり、固めであるが、隙間に小さな害虫や埃を隠すこともある。このため、中国では食べる

前に塩水に漬けて汚れを取り除く。

楊梅の味はイチゴやラズベリーに似ているが、少し酸味がありハーブの風味もある。小売業者は、購入者の求めに応じて、様々な熟期の果実を準備し、販売している。一般に、濃赤色が強い果実は甘いので生食するが、明るい赤色の果実は酸味があり料理用に用いられる。

残念なことに果実には害虫が潜んでいることが多いので、生鮮果実はアジア以外では見かけることは殆どない。しかし、(加工されて)パッケージに入った製品は米国や欧州でも見かける。

atlasobscura.com によると、2000年代初頭にはヤムベリーの名前で、ジュースや粉末として市場に出回り、流行のスーパーフード候補としてもてはやされた。

参考情報:https://www.atlasobscura.com/foods/yangmei

注) 中央果実協会ホームページから(http://www.japanfruit.jp/Portals/0/images/fruit/endemic/pdf/yamamomo.pdf) ヤマモモ

- 1. 原生地と産地形成
- 1)分類と来歴

ヤマモモはヤマモモ属に属する常緑樹である。ヤマモモ属には亜熱帯地方を中心に30余種が分布する。

ヤマモモの野生樹の分布は中国大陸東南部、台湾、フィリピン、朝鮮半島南部、日本西南部に自然分布する。

ヤマモモは、中国では新石器時代、7000年前の遺跡から種子が出土しており、また、唐の時代に多く植栽されていたようである。わが国でも縄文時代初期の遺跡から出土している。わが国におけるヤマモモの記録は、『万葉集』(780年頃成る)、『古事記』(712)にはなく、『出雲風土記』、『続日本紀』(797年撰進)に「楊梅」として現れ、『本草和名』(918、深江輔仁の撰)に「也米毛毛」と表現されていることから、平安時代以前に和名として定着していたものと推察されている。

2)わが国における栽培概況

現在の主産地である徳島県のヤマモモ栽培の歴史は極めて古いと思われるが、残念ながら記録に乏しい。徳島県のヤマモモについては、元禄15年(1702)の阿波藩御触れ書で"五木"(マツ、スギ、ヒノキ、クヌギ、ヤマモモ)の植林を村々に命じたのが、現在残る記録として最古のもののようである。当時は食用としては勿論であるが、用材、樹皮の採収が目的であったと思われる。嘉永年間(1850)には阿波藩の喜田辰吉と住吉兼五郎の2人が、ヤマモモの改良を図り、優良種の選抜、接ぎ木繁殖を研究している。藩主に献上したことか名付けられたとされる'御前'や採草地で見つけたとされる'肥山'等、現存する在来品種の多くがこの時期に選抜・命名されている。

明治23年(1890)頃、これまで徳島市場を限度としていたものが、初めて阪神市場へ進出し、需要の増加から栽培面積も急増した。明治時代中期には徳島県のヤマモモ果実生産額は、温州ミカン、カキ、ウメに次いで第4位の地位を占めていたが、大正時代以降は他の果樹の隆盛に圧倒されて次第に衰退した。

平成 15 年における栽培面積は 50.9ha で、収穫量は 53t、その内加工向けが 21.6t である。徳島県の栽培面積は 37.1ha で 73%を占め、次が高知県の 6.7ha、兵庫県と岡山県の 2.2ha、鹿児島県、愛媛県等である。 (以下、省略)

# 36.2018年米国北西部のサクランボ生産を振り返って

# FreshFruitPortal 電子版(2018年10月26日)

米国北西部のサクランボ生産者は、「2018年のシーズンは『信じられないほどの高品質』で、販売時期も比較的早く始まり好結果に繋がった。しかし、輸出に関しては数次にわたる関税の上乗せで問題が生じた」と語っている。

業界全体では20ポンド入の箱で2,530万箱を出荷し、過去最大であった昨年の2,640万箱をわずかに下回っただけであった。

シーズン前の見通しでは、生産者団体は、カリフォルニア州産のサクランボの供給量が少なかったことから、 北西部産のサクランボも同様の見込みになるのではないかと心配が走った。

前年に比べて生産量が少なく不足するのではないか、という見通しは、世界的な需要を喚起し、供給量を超えたことから、市場の混乱を招き小売業者、流通業者に飛び火した。

「しかし、有り難いことに、出荷は6月1日から始まった」と生産者は述懐している。

「収穫速度は急速に速まり、6月の平均出荷量は1日当たり35.7万箱時に達した。収穫開始は当初見通しよりも早まったため、6月の出荷量は2017年よりも300万箱多かった」とも語っている。

7月に入っても需要は堅調で、協会によると需要が伸びる7月4日の独立記念日を前にして十分な出荷量が確保されたという。

米国の国内市場に出荷されたのは1,700万箱であり、小売業者は北米産のサクランボを最優先で4週連続して宣伝活動を行った。この結果、全米の果実中、宣伝活動が活発に行われた品目のトップ3に7週連続でランクインした。

中国への輸出は2回にわたる関税上乗せ措置が講じられたことにより影響があったが、カナダが北西部産のサクランボとしては最大の輸出先となった。そして、昨年よりも生産量が少なかったにもかかわらず輸出量は昨年を上回った。

## 中国への輸出に当たっての関税上乗せ

協会によると、中国輸出では関税上乗せ等、様々な困難があったが、シーズンを通して北西部産のサクランボに対する需要そのものは旺盛であったそうだ。

「品質が素晴らしかったことと、中国以外の市場からも米国産サクランボに対する根強い需要があったシーズンであった。とはいえ、伝統的な中国市場ではあるが、さすがに2017年の出荷量320万箱から2018年は160万箱に減少し、輸出に影響があった。中国での販売量が減少したため、中国以外の市場でも価格の下げ圧力が生じた」と協会は説明している。

4月に報復関税として15%が上乗せされた時点では、米国産サクランボの本来関税の10%と付加価値税の13%の合計で38%の税率であった。「この段階では、中国の輸入業者は北米産のサクランボの価格引き下げを要求した」そうだ。

7月1日までの段階では、中国向けの輸出量は100万箱で、2017年の輸出量の1/3に達していた。その後、貿易戦争がエスカレートし、7月6日には関税が25%上乗せされ、トータルで50%の関税が課せられるようになった。「50%の関税と13%の付加価値税で輸入サクランボの荷動きの減速した」ようだ。

「それに決定的な追い打ちとなったのは、米国産輸入サクランボに当たり、中国の輸入業者が政府から多額の敷金(deposit)を預けるよう要求されたことである。この段階で、大部分の輸入業者は腐敗しやすいサクランボを輸入するというリスクを負えなくなり、輸出は停止状態になった」という。

# 37. ゼスプリは今シーズン北半球での生産を拡大

# FreshFruitPortal 電子版(2018 年 10 月 28 日)

ニュージーランドのゼスプリは年間を通してキウイを供給するというのが戦略であるが、既に収穫が始まっている北半球から、より多くの供給を行うことを目指している。

ゼスプリは、単に供給量を1,900万トレーに引上げるということだけでなく、プレミアム品種であるサンゴールドの販売を全体の2/3に相当する1,050万トレーとすることも目標として掲げている。

一方、緑系のヘイワードは約100万トレー削減し、800万トレーとする計画である。

「今年の北半球の収穫量は1,910万トレーを見込んでおり、2017/18年の1,540万トレーよりも25%増加させたい。ニュージーランド産のキウイの販売は年内で終了する。その後は北半球産に引き継がれる」とゼスプリの国際生産責任者である McCann-Morrison 氏は語っている。

同氏は、「ニュージーランドで生産されるキウイが供給できない3~4ヶ月の期間、大きな需要に対応すべく、ゼスプリというトップブランド維持できるような産地で北半球産のゼスプリキウイを生産し、供給しなければならない。こうすることで、最終的には、ニュージーランド以外で生産されるキウイに対して長期的で持続可能な形で利益を還元でき、ニュージーランドで花開いたキウイにとっては良いことだ」と話している。

ゼスプリは、イタリア、韓国、日本、フランスなどニュージーランド以外の生産者や供給業者と厳格な品質基準を満たすことを前提として、長期的なパートナーシップを構築してきた。

欧州はニュージーランド以外で生産されるゼスプリキウイの最大の供給源であり、中でもイタリアはゼスプリの国外生産量の90%占め、その内、サンゴールドは900万箱に達する。

McCann-Morrison 氏は、「現在行っている欧州、特にイタリアでの生産拡大に加え、供給源の多様化をどのようにすれば実現できるかを見極めるため、新たな場所で試験生産を行っている。生産の多様化によりリスクを病害や気象災害からのリスクを軽減でき、より市場に近い場所から供給することが可能になる」と語っている。

欧州以外では、引続きアジアでの成長に期待を寄せており、とりわけサンゴールドに対する需要が多い日本と韓国への供給に焦点を当てている。

ゼスプリは、中国でも12ヶ月継続して販売できるよう、現地のパートナーと組んで「概念実証」を進めてきたが、ほぼ終了を迎えている。中国産のキウイ品種の試験生産も行い、持続的にゼスプリブランドとして供給できる品種の選択を進めている。

他にも、サンゴールドに対する需要が大きく、ゼスプリにとって重要市場としての発展が見込める米国のオレゴン州、カリフォルニア州でも既に試験生産を進めている。

# 38. 果物だけを食べて 27 年間

# FreshPlaza 電子版 (2018 年 10 月 24 日)





クリスマスの夕食が8つのナツメヤシとメロン半分だというお女性は27年も続けてきた果物だけの食生活を 自ら絶賛している。彼女は決して空腹にはならず、同じ生鮮果実を自分の子供にも食べさせたという。

アン・オズボーンさん52歳は、二人の息子カミオさん(27歳),カッピさん(14歳)の母であり、オーストラリアのクイーンズランド州グラスハウスマウンテンに住んでいる。外食する時は躊躇せず、自分の前菜、メインディッシュ、デザートのためにメロンを持参するという。

彼女は自らの食生活に決して飽きないそうで、果物フェスティバルのディレクターを務めているという。朝食はマンゴーかメロン半分(約150~200キロカロリー)、午前のおやつはバナナ4本(約400キロカロリー)、昼食はアボカド(約400キロカロリー)、夕食はマンゴー2つ(約300キロカロリー)だという。「こんな豪華な果物よりも他に良いものはありますか?」と語っている。

「この食事ははとても健康だし元気になります。果物主義者(fruitarian)は気に入っています。よく『果物だけで病気にならないか』と聞かれるけど、果物は沢山の種類があります。豪華な果物があれば他に欲しいものは考えられません」と話している。

アンさんは1991年まではビーガン(乳製品も摂らない厳格な菜食主義者)だった。鉄道で働くパートナーのジェームス・ルークさん(52歳)は果物が好きだが、他の食べ物も摂るという。アンさんは健康と幸福のため、長男が生まれて以降、果物だけを食べるようになり、もう後戻りは考えていないそうだ。

「人間は元々果物を食べる動物です。生の果物や多肉性の野菜、根や茎、ナッツや種を食べてきたのです。だから、果物だけを食べるということは、とても意味があることです」とレスター生まれのアンさんは述べている。「私の体が欲しているのです。もしフルーツ・ダイエットを始める人がいれば、最初は普通の食事をするような満腹感はないけれど、継続しなければなりません。今はまったく空腹を感じません」と話している。

アンさんは遠く離れた米国のニューヨーク州ウッドストックの果物フェスティバルのために働いているが、毎週果物のために必要な額は200ドル(約110英ポンド)だという。

同じような食事をすれば、午前中に空腹による苦痛を感じる人がいることは認めているが、アンさんは良質な果物を食べれば自分はそんなことを感じない、とのことだ。

「主要栄養素の炭水化物、タンパク質、脂肪と微量栄養素のビタミン、ミネラル、抗酸化物質を食べることが必要だけど、良質な果物で十分賄えます。フルーツ・ダイエットをしたい人は、良い果物を食べることが大事で、有機栽培で、養分を十分含んだ良質な土壌で栽培された果物を食べること大切です」とも話している。

アンさんはアルコールを飲まない。果物を食べる時は、ジュースにしたオレンジか炭酸が入っていない水を飲むだけそうだ。誕生日かクリスマスのような特別の日だけ発泡水を飲むという。

周囲の人は美味しい肉料理や野菜をお腹に「押し込む」という感覚で食べているが、アンさんの食事はそ

んな感覚は一切ないという。

「社会生活の中で問題があることはありません。レストランに行けば、私は先に注文をして果物の料理があるかどうか確かめます。あるいは自分の果物を持参して、他の人が食べている時に持参した果物を出すようにお願いしています」とも話している。

彼女は、周囲がクリスマスのロースト肉を食べているときもひるまない。「クリスマスにはナツメヤシ8つとメロン半分です。確かに伝統的な料理ではないかも知れませんが、少なくとも食事の後で2時間眠るなんてことにはなりません。ほとんどの人はロースト肉が好きだけど、羨ましいとは思いません。果物を食べるとその後は爽快です。元気で健康になります」と話している。

アンさんは息子(前のパートナーとの間にもうけた子供だそうだ)の授乳期が終わった後、果物主義者となった。

「子供には必要な栄養を補給するためにナッツは与えたけど、それ以外は果物だけです。二人とも果物、特に良質で熟している果物が大好きです。誕生日には果物主義者のパーティーをしていました。二人とも家に帰ってもお菓子を欲しがらない子供なので大好きです」とのことだ。

子供のパーティーにはスイカでケーキを作るそうだ。果物を積み重ね、上に乗せるお菓子の代りは、キウイフルーツとオレンジだそうだ。子供の食事バランスは取れていると断固主張している。「カミオを栄養士に連れて行ったけど、鉄分は完全に正常で、欠乏症は全くありませんでした。成長してもお菓子を欲しがることもなく、14歳になった時、食生活を続けることにし、もっと沢山果物を食べるようにしました。カミオは現在オーストラリア軍陸軍に勤務しているので肉を食べていますが、カッピはビーガンです。私にとっては十分です。自分で決めたことなのだから」と説明してくれた。

アンはスリムな体です。しかし、体重を落とすために果物主義をしているわけではありません。「1日2000 キロカロリーを果物だけで摂ることは難しいことではありません。アボカドは1つで400キロカロリーですから2 つ食べれば800キロカロリーです。バナナは1本で100キロカロリーです。決して痩せるためにしているのではありません。果物を食べれば気持ちよくなり、それが一番大切なことです」とのことだ。

栄養学者のエルダー氏は、「果物は水分が多く、必要なエネルギーを果物からだけ摂るとなると、沢山の 果物を食べる必要がある。体重を適正な範囲内に維持するよう果物だけを食べるとすれば、タンパク質、脂肪、カルシウム、ビタミン D、ビタミン B 類、要素が不足する可能性がある。糖分を摂取し、繊維質を多く取り 過ぎるとお腹の膨満や軟便を含む消化障害を起こしかねない。子供は成長のためにエネルギーの摂取が必 要であり、成長段階では合併症を減らすために栄養を補給しなければならない。ナッツを食べることは栄養 面で良いことだ。しかし、果物だけや果物とナッツだけでは、鉄、カルシウム、ビタミン D、ビタミン B、ヨウ素は 不足する。鉄とビタミン B 類が不足すると代謝機能が阻害されてエネルギー不足に陥り、ビタミン D とカルシ ウムの不足は骨粗そう症を招きかねない」とコメントを寄せている。



情報源:virginmediatelevision

# 39. イタリアのカキ生産

# FreshPlaza 電子版 (2018 年 10 月 25 日)

若い人はカキが好きである。一つの理由は甘くてデリケートな味を持っているからであり、もう一つの理由は パリパリして食べやすいからである。加えて、カキは新たな海外市場を獲得しつつある。カキをカットして皮を 剥くと手を汚さずに食べられることもプラスの要因である。

これはカキの品種 Rojo Brillante のことであり、果肉が固い。この品種の収穫はエミリア・ロマーニャ州で始まったばかりである。同地の協同組合である Agrintesa di Faenza はイタリアで初めてカキの栽培を行った組合だ。約10年前である。協同組合はカキの生産と優れた栽培技術の導入のために投資を行った。

Bucchi,氏は Agrintesa di Faenza の下部組織である Alegra で副マネージャーを務めているが、「生産者は益々カキに関心を示している。現在130ha で Rojo Brillante を栽培し、12年生と2年生の果樹園がある。2年生の果樹園は間もなく生産を始めるので、近い将来、生産量は10%増える見込みだ。我々の傘下の250の



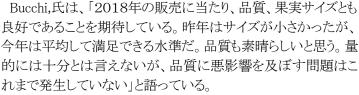


会社はカキの栽培のために 農地を提供してくれているの で、販売機会を提供して収益 に満足してもらうようにしてい る」と説明してくれた

2018年のカキ販売が始まるに当たり、Agrintesa di Faenza は2,800トンの Rojo



Brillante の生産を予想している。この品種は生産量の変動が少ない。一方、品種 Tipo は3,600トンの生産を予想しているが、昨年に比べて大きく減少する見込みだ。Tipo は古くからある品種で、香りが強い。果肉が柔らかいので食べるときはスプーンが必要になる。Tipo は700以上のパートナーにより生産されており、現在の栽培面積は200ha である。





Agrintesa di Faenza は、Tipo の生産量に関しては、昨年よりも20%少ないと予想している。「これは、昨年の収穫量が多かったために生理的な隔年結果が発生したためだ。早い段階で落果が多く、春と夏の気象条件も減収に結びついている。これは自然現象なのでどうしようもない。生産されたカキの販売促進に力を言えるだけだ」とも話している。

Alegra と Valfrutta Fresco は Agrintesa di Faenza の中の2つ

の事業部門であるが、Valfrutta Fresco のゼネラルマネージャーである Soli 氏は、「2つの組織はそれぞれ生産振興とマーケティングを担っている。国内外の多様なニーズに応じてパッケージをアレンジすることができ、統一したブランドで販売を行っている。そのブランド名『Valfrutta』はイタリアススタイルの最高品質のブランドだと自負している」と語っている。

今年、Agrintesa di Faenza は新たなプラントを導入した。特に Tipo に用いようとするものであるが、光学方式によりサイズや熟度を判別し、人の手を介することなく品質を維持しながら選果する装置である。イタリアでは他に例はないそうだ。

# 40.ペルーの落葉果樹(生食ブドウ)事情

### 米国農務省海外濃陽極 GAIN レポート (2018 年 10 月 25 日公表)

### 生産

# ペルーの生食ブドウ統計(在ペルー 米国農務省 農務官)

	2016/17	2017/18	2018/19
栽培面積(ha)	30,000	30,000	30,500
収穫面積(ha)	28,000	28,500	29,000
商業的生産量(トン)	496,000	505,000	540,000
非商業的生産量(トン)	115,000	118,000	118,000
生産量合計(トン)	611,000	623,000	658,000
輸入量(トン)	5000	3000	3000
総供給量(トン)	616,000	626,000	661,000
国内生鮮消費量(トン)	296,000	261,000	271,000
輸出量(トン)	311,000	360,000	385,000
非市場出荷量(トン)	9,000	5,000	5,000
総出荷量(トン)	616,000	626,000	661,000

年産は10月から翌年9月まで

2018/19年産(10月から9月)のペルーの生食ブドウ生産量は54万トンと予測される。生食ブドウ生産量は、2017年初頭にエルニーニョの影響を受け降雨が多く気温も不安定であったことから収穫が遅れ、単位面積当たりの収量も少なくなり、品質も低下したが、2018/19年産は回復が見込まれる。

ペルーの沿岸部は乾燥した気候で、温度も14℃から30℃の範囲にあり、日照時間も12時間を超えていることから、生食ブドウの生産の適している。これらの気象条件と精緻な灌漑により、近隣諸国に比べてブドウ樹の生育速度は55%も早いとされる。生食ブドウの主な産地はイカ県(41%)、ピウラ県(22%)である。栽培面積は約3万 ha と推測される。ペルーにおけるブドウの収穫時期は10月下旬に始まり4月まで続く。

栽培品種では、成長する中国市場で人気が高い Red Globe が最も多い。しかし、生産者の多くは、他の市場で人気がある付加価値の高い品種に転換を進めつつある。即ち、海外の市場に受け入れられやすい20程度の品種に多様化しつつある。具体的には、Crimson seedless、Flame seedless、Surgeon、Thompson seedless などである。

ブドウは、栽培を始めるに当たって、ブルーベリーに次いで多くの資金が必要となる作物である。初期投資額は土地代を除きヘクタール当たり4万ドルとされている。このうち、約30%は土壌改良及び灌漑施設導入のための経費であり、25%が支柱(トレリス)設置にための経費、14%が苗木代である。小規模農家にとっては初期投資が大きな負担となるが、付加価値の高い品種を栽培すれば相応の報酬が得られる。

ブドウ栽培は労働集約的で維持経費が高くつくが、ブドウ産業は農業分野の中で多くの雇用を生み出している。イカ県のような生産量の多い地方では、労働力需要が増加しており、完全雇用を誇っている。

#### 消費

2018/19年の国内生鮮消費量は27.1万トンと前年を4%上回ると予測される。生産者は、国内市場は国際市場に比べて極度に価格が抑えられていることから、2級市場という位置づけをしている。国内市場における品種は、Green Italian が依然として最も多く流通している。

ピスコ(ブドウの蒸留酒)産業もブドウの販売先としては重要な位置づけである。生産省の推計では、2018年のピスコ生産量は1,100万リットルであり、チリと米国が最大のペルー産ピスコの得意先である。ピスコはイカ県とリマ県で90%が生産されている。

#### 貿易

2018/19年の輸出量は前年を7%上回る38.5万トンと予測される。米国が最大の輸出先で、オランダ、香港がこれに続いている。

生食ブドウの輸出額は農産物の中でも最も多い品目の一つであり、2017年(暦年)は6.53億ドルに達した。 米国市場向けの単価はトン当たり3,070ドルで、輸出全体の単価である2,419ドルを27%上回っている。20 17年の米国への輸出は、金額で42%を占め、数量で33%を占めた。

# 政策

ペルーは、米国、中国、EUを含む多くの国と自由貿易協定を締結している。ペルーで最大のブドウ協会であるPROVID、ペルー国立農業衛生防疫機関(SENASA)の協力により、SPS協定に則した輸出を行っていることから、ペルーのブドウは国際的に受け入れられている。

ペルーの生食ブドウの輸出先 (2017年暦年)

出量(トン) 88,210 37,679
~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~
27 670
01,019
31,578
16,281
10,995
9,017
8,667
8,410
6,732
6,421
42,404
266,394

品種別ブドウ輸出量(2017/18年)

品種名	輸出量(ドン)	割合(06)	累積割合(%)
		<u>                                    </u>	*************************************
Red Globe	131,975	47.7	47.7
Crimson Seedless(Sper Seedless)	27,824	10.0	57.7
Sugraone(Superior Seedless)	25,871	9.3	67.0
Flame Seedless	18,610	6.7	73.8
No Declarada	13,629	4.9	78.7
IGF Theree(Sweet Celebration)	8,361	3.0	81.7
Shrrgene2(Timpson)	8,328	3.0	84.7
IFG Ten(Sweet Globe)	7,723	2.8	87.5
Thompson Seedless	7,673	2.8	90.3
Arra 15	5,801	2.1	92.4
IFG Nine(Jack's Salute)	3,747	1.4	93.7
Shrrgene3(Magnta)	3,501	1.3	95.0

# 41. チリのサクランボ生産量は最大20%減少との予測も

# FreshFruitPortal 電子版(2018年10月24日)

業界筋によると、今シーズンのチリのサクランボ生産量及び輸出量は、昨シーズンに比べて最大で20%減少すると見込んでいるようだ。

昨シーズンのチリの輸出量は、前年に比べほぼ倍増し、18.7万トンとなり、箱数に換算すると3,900万箱であった。この結果、サプライチェーンの主要な場所で問題を引き起こす事態が生じた。

もし、今回の予測が正しいとしたら、今シーズンは同様の問題が生じる可能性は少なくなるということになる。 サクランボを専門に輸出する Ranco Cherries 社の総支配人 Vial 氏は、「昨シーズンは単位面積当たりの収量が異常に高かった。つまり、どの産地でも、どの品種でも、一様に10年に一度起るくらいの豊作だった。一方、豊作の次の年は収量が少なくなるのが通例である。つまり、今シーズンはこれが当てはまる」と語っている。

同氏は、今シーズンは開花数が少ないことから見ても減収が予測されるとし、「今日の段階ではサクランボの生産量は2,800~3,000万箱程度と見込まれる」と話している。

チリ・サクランボ委員会会長の Tagle 氏も、「昨シーズンのような生産量を期待するのは難しい」と述べている。

Vial氏は、「生産量が少なくなるといっても、十分な量の収穫は見込める」ことも強調しており、「いずれにせよ、中国に2,500~3,000万箱を輸出するということは大いなる挑戦だ」とも述べている。

二人の話で共通するのは、今シーズンの生産量は昨シーズンよりも少なくなること、中国への輸出で昨シーズン経験したような物流、梱包段階での混乱や中国市場での供給過剰といった問題が少なくなる、との見通しだ。

「昨シーズン経験したような問題は、この先数年は発生するリスクは少ないと思う。『量と集中』という点から見ると、昨年は12月の最後の2週間に極端に集中した。同じことは繰り返したくない。業界としても昨年の経験を踏まえ、選果・梱包ラインを増加し、収穫・梱包・搬送作業に支障を来さないように準備している」と Tagle 氏は述べている。

### 10月と11月が鍵

Vial 氏は、開花ステージから推測すると今シーズンは収穫時期が早まることはないと予測しており、販売開始がいつ頃になるかはこの1、2ヶ月が鍵を握るとし、「今春の状況にかかっている」と語っている。

チリ中央部でここ数ヶ月経験した降雨と降霜も業界にとっては懸念材料である。しかし、「偶発的な霜害はあったが、影響があった果樹園面積は全体の3~5%程度ではないか」と Tagle 氏は考えている。一方、Vial 氏は、供給量が減少する分、品質は向上するのではないか、と期待している。

### Decofrut 社も同様の予測

チリで果実の市場情報を扱う Decofrut 社も、今シーズンの輸出量は15~20%減少すると予測しており、輸出量は約15万トン(3,100~3,300万箱)としている。

同社によると、減収要因として、一部は豊作年の翌年に見られる隔年結果であるとし、一部は特にチリ中部・北部地域において低温遭遇積算時間に問題があったためとしている。

しかし、この予測は今後数ヶ月の気象条件により変更があり得るとのことだ。

訳注)FreshFruitPortal はチリに拠点を置く情報サイト

# 42. 世界のオレンジ消費量は増加傾向

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 10 月 24 日)

市場調査会社の IndexBox が10月24日に発行した「世界のオレンジ市場の分析、予測、規模、動向、洞察」によると、2017年の世界のオレンジ消費量は7,500万トンで前年に比べて2%増加したとのことである。

(注:全文は https://www.indexbox.io/store/world-oranges-market-report-analysis-and-forecast-to-2020/から有料で入手できる)

以下 IndexBox のレポートの概要を記した。

世界のオレンジ消費量は、このレポートの調査対象期間である2007年から2017年まで、年平均で1.2% 増加した。増加パターンは比較的均一であったが、一時的に急速に増加した年もある。最も増加率が高かった年は2008年で、前年に比べて5%増加した。対象期間中に最大の消費量を記録したのは2017年であり、この先、当面は着実な増加が見込まれる。

世界のオレンジ市場の売上高は、2017年で550億ドルと推計される。売上高は、生産者及び輸入業者の収入を踏まえて推計しており、最終消費者が支払うことになる流通コスト、小売業者マーケティングコスト、小売業者のマージンは除外した。

# 中国が牽引する世界のオレンジの需要

2007年から2017年までの間、主要国の中で最も消費が増加したのは中国であり、年率10.6%の伸びを示した。その他の主要国における消費の増加は緩やかであった。消費額は中国が飛び抜けて多く180億ドルであり、次いでブラジル(80億ドル)、米国の順であった。

アジア諸国のオレンジの需要が拡大していることから、今後8年を見通したオレンジ消費量も引続き増加傾向を示すと予測される。市場の成長速度もこれまでと同様のパターンが継続すると見込み、2017年から2025年までの8年間の成長率は年平均で0.9%と予測した。この結果、2025年の市場規模は8,100万トンと見込んだ。

この間、ブラジルが世界最大のオレンジ生産国として君臨するが、中国が急速に迫ると見込まれる。

2017年のオレンジ生産量が最も多かった国はブラジル(1,700万トン)で、次いで中国(930万トン)、インド(800万トン)の順であり、この3カ国で世界のオレンジ生産量の46%を占めている。

2007年から2017年までの間、最も生産量が増加した国は、主要生産国の中では中国であり、年率10.3%であった。その他の主要国の生産量の伸びは緩やかであった。

生産量の増加基調は、主に収穫面積の若干の増加と単位面積当たり収量の緩やかな増加によりもたらされてきた。2017年の世界のオレンジ収穫面積は約400万 ha であり前年と変化は無い。一方、単位面積当たり収量は2007年から2017年までの間、年平均1.2%の増加を示した。この増加傾向は対象期間中に多少の変動はあったが比較的安定していた。2017年の ha 当たりの収量は19トンで、前年に比べて2%増加した。

# 43. スペインのカキビジネス

# FreshPlaza 電子版 (2018 年 10 月 23 日)







今年のスペインのカキの販売シーズンは、霜害と雹害による被害が大きかったため、順調なスタートを切ったわけではない。実際、これら気象災害により、スペインのカキ生産量は40%の減収があるとも言われている。しかし、バレンシア州カステリョン県の内陸部に位置するパランシア地域では幸いにも気象災害を免れた。ここで紹介するのは同地でカキを生産、販売する会社 Blasco Fruit に関するカキビジネスである。

今シーズンの販売活動に当たり、同社では最新式の技術を用いたカキの荷受け、選果、パッケージを行う施設を導入した。FreshPlaza は同社を取材し、同社のマネージャーでカキの生産、販売に35年携わってきた José Luis Blasco 氏と販売部長の Cecilia Taboada 氏にインタビューを行った。





José Luis Blasco 氏によると、「生産量が著しく少なかったため思うように集荷できず、折角最新式の施設を導入したが、十分な減価償却を行えなかった」そうだ。相当な減収にも拘らず、市場での価格は上昇しなかったためだ。「欧州で最大の農業協同組合連合組織の一つである Anecoop 傘下の協同組合は、スペインのカキ販売の相当部分を担っているが、市場に溢れる程の量のカキを、適切な計画も持たず、取引価格を設定しないオープン価格で販売したため、価格の崩壊を招き、カキ産業に携わる関係者に多大な影響を与えている」と説明してくれた。

Blasco Fruit 社のカキシーズンは9月に始まる。Tomatero という品種の収穫が最も早いが、濃い赤い色の果皮が特徴であることからこの名前が付けられた。「Tomatero は以前からこの地域で栽培されてきた品種であり、バレンシア地方で最も栽培が盛んな品種 Rojo Brillante よりもやや小ぶりである。赤みのある果皮はトマトを連

想させるが、果肉は甘く、肉質は柔らかい。実際、十分熟した果実はスプーンで食べるのが普通だ」と Cecilia Taboada 氏が説明してくれた。

品種 Tomatero





「この地域の協同組合は、Tomatero は他の果実に比べて収益が劣るとして何年に前に販売を中止したが、 我が社はこの品種を希有な食材として販売を続け、輸出も行ってきた。現在では会社の販売量の15%を占めている」そうだ。

José Luis Blasco 氏によると、「スペインにおけるカキ生産の拡大は制御不能の状態に陥っており、このため、市場からは絶えず価格の値下げ圧力を受けている。だからこそ、経験豊かなものだけが生き残ることができる」と強調している。

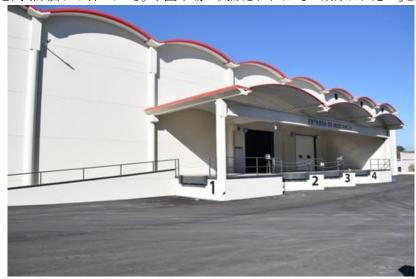








「カキの栽培面積の拡大は、誰も制御することはできないが、こういった現象はスペインではよくあることだ。 どこかでうまく事が運んでいれば、多くの人が十分な知識も持たずに真似をして参入してしまうからだ。この 結果、昨年は何度も供給過剰に陥り、最悪時には平均価格がキロ当たり15セントまで下落するという事態を 招いた。もちろん、これでは生産コストを賄いきれない。今年は降霜と降雹のお蔭で市場はややバランスを取 り戻した。しかし、来年、もし平年作に戻ったなら再び災厄が襲ってくるだろう。今年は既にカキ栽培を放棄す る生産者も出ている。将来にわたってカキの栽培を続けるのはカキの専門家かプロフェッショナルだけになる のではないか」とも語っている。 これまで輸出量の30%を占めていたロシアが輸入禁止措置を講じたが、ロシアに代わる市場を見つけ出すことは容易ではない。このような中、Blasco Fruit 社では代替市場をいくつか開拓している。「欧州だけでなく、スカンジナビア諸国(原文ママ)、北米、中南米、特にカナダ、米国、ペルー、コロンビアなどへの輸出を進めている。輸出先にはカキが知られていない国や、関心が高まりつつある国もあるので、潜在的可能性は大きい。このような中、期待を寄せているのはアジア市場だ。香港向けの輸出は拡大中だが、中国向けの輸出に関しては早く認可が得られることを期待している。アジア諸国は既にカキに対する馴染みがあり、消費者は我が社のカキを高く評価してくれている。中国市場が開放されればその効果は大きい」と語っている。



カキ業界では、新しい品種の「探索」を進めている。興味深い品種は現れているが、食味試験では Rojo Brillante を超える品種は出現していない。おまけに、品種探索の主要な目的である収穫期間の延長という面でも有望品種は未だ得られていない。

「新たな品種の導入による収穫期間の延長という試みは既に限界がきた。代わって、ポストハーベスト技術の進歩と栽培技術の改善により販売期間の延長が可能となっている。数年前までは12月上旬には販売は終了していたが、今では3月まで販売期間を延長することができるようになった」と José Luis Blasco 氏は語っている。同氏はペルーで生産を行うことで、販売期間を更に延長することを考えている。実際、いくつかのスペインの企業はペルーでカキを生産するための投資を既に行っている。

カキは美味しくて魅力ある果物であり、食べやすく健康面での効果もある。「カキ産業が成功を納めるには長い道のりが必要だ。そして様々な課題に適切に対処しなければならない。例えば、販売の開始はカキに十分な糖分が蓄積されてから始める必要があるし、理想的な着色が求められる。そして、十分な収益が得られるようなサプライチェーンを構築することが必要だ。特に販売が始まるシーズン初期の段階では、適切な販売計画の下で供給過剰が起らないようにすることが肝要だ」と José Luis Blasco 氏は締めくくった。

参考情報:http://www.blasco-fruit.es/

# 44. 生産市場協会の年次総会

# FreshFruitPortal 電子版(2018 年 10 月 18 日)



生産市場協会(The Produce Marketing Association (PMA))の年次総会(Fresh Summit)が開幕し、協会の 最高経営責任者である Cathy Burns 氏が、技術の急速な進展、消費者のトレンドの変化、食品安全の重要性 に焦点を当てた基調講演を行った。

フロリダ州オーランドで3日間開催された年次総会の中の基調講演は、幅広い分野にわたり、深い洞察に満ちた内容であった。

Burns 氏の講演は、(果実、野菜)生産業における技術開発の役割が近年益々有用となっていることについての説明から始まった。以下、Burns 氏の講演を要約した。

昨年だけでも100億ドル以上が農業技術分野に投入されており、これまでにない程のペースで技術は進展している。技術開発への投資は上流サイド、下流サイド両面で進められている。また、しばしば労働力不足に対応したテーマに投入されていることも特徴だ。

上流サイドへの投資の例としては、授粉作業のロボット化、GPS を用いた移動車両、植物工場におけるレタスの垂直栽培技術などがあげられる。下流サイドへの投資の例としては、自動運転の配送ビークル、各種ニーズに対応した食品供給システムの開発などである。

一方、サプライチェーンにおける追跡可能なシステムの需要に応えるための分散型ネットワーク(ブロックチェーン)の開発により、透明性を確保し、トレーサビリティーを可能とする試みが進められている。

次に重要な視点は食品の安全である。食品安全は生産業界に携わる全ての企業にとって基盤となる問題であるからだ。食品、食料業界では、過去10年間に多くの「回収」や「大腸菌の大規模検出」などの問題を経験した。それぞれの事案が発生する度に一般の人々から信頼を失い、業界としては逆風に晒されてきた。そして、人々は健全性に対して疑問を持ち始めたため、業界としては全てのサプライチェーンを対象とした対応策を考えざるを得なくなった。

現在 PMA は、特に果実と野菜に焦点を当てた生産安全確認プログラムの構築に取組んでおり、最終段階にある。このプログラムは業界の体質の改善を目指したものであり、誰もが理解できるように工夫している。 PMA は今後数ヶ月で詳細を公表する予定である。

次いで、今日、人々は企業やそのリーダーに対してより多くのことを求めるようになったことを理解しなければならない。つまり、経済的側面の企業から社会的側面の企業への脱皮であり、関連する3つのトレンドが見て取れる。

第1は個の力が大きくなっていることであり、特にミレニアル世代でその傾向が強い。第2は社会がより分極化し政治的な動きが強くなる中で、企業にはその隙間を埋める存在になることが求められている。人々は政府よりも企業を信頼する傾向が強まっている。第3は持続可能な成長のための技術開発が求められる傾向にあることだ。技術の進展はビジネスの在り方を大きく変えるが、より多くの富をもたらす技術開発が求められている。

### 消費者のトレンド

消費の動向に関しては、直近の1年は大変に興味変化が見て取れる。米国では従来型の食料品店での消費額は減少傾向にあるが、消費者の選択肢が増えたことで食品全体に費やされる金額は増加している。世界的には、特にアジアを中心に、電子商取引による食料品の購入額が過去1年で30%増加しており、この先5~7年で70%の消費者がオンラインで食料品を購入することになると見込まれる。

変化のスピードと、最近の消費者の電子商取引に対する許容姿勢を見ると、電子商取引による1000億ドルの支出、即ち1世帯当たり毎年850ドル程度の支出はこれまで予期されていたよりも早く実現する可能性がある。(訳注:米国ないでの支出のことを指していると見られる)

一方、「食事キット(meal kits)」もこの先急成長することが予測される。定額制の購入方式だけでなく、実在店舗での購入も含めての予測であるが、今年の初めの調査では、過去6ヶ月に食事キットを購入した人は6%であったが、今後6ヶ月に購入したいとする割合は25%にも達した。

この他の消費動向としては、スナックに対する需要の増加と植物由来の食品の「驚異的な」成長があげられる。 いわゆるビーガンやベジタリアンの数が増加しており、植物由来の食品のブームは、業界にとって大きな追い風となる。

しかしながら、最近テキサス州オースティンで開催された祭典(サウス・バイ・サウスウエスト)に出席した経験からすると、世の中にはこういった流れに逆行する潮流もあり、食品や農業にとって逆風にもなりかねない。 業界としては世界との関係を常に強化してゆく努力が必要である。

世界をより健全に成長させたいと思うのであれば、我々の業界は「文化的」な影響力を維持し続けるとともに、日々汗が滲む努力を通じて世界との繋がりを保ち続けなければならない。業界の未来はその努力如何に左右されるからである。

# 45. 世界のリンゴ市場(1)

# FreshPlaza 電子版 (2018 年 10 月 19 日)

(原文のうち、英国、ドイツ、オランダ、チェコ、ロシア、スイスに関する記述は省略し、イタリアに関する記述は 抜粋した)



現在、欧州では多くの産地においてリンゴの収穫作業は終了したか終期を迎えている。欧州のリンゴ情報を検討する Prognosfruit 会議では、8月の段階で生産予想量を1,260万トンとしていたが、その後修正があり1,250万トンとしている(注:それでも史上最高の生産量といわれている)。 夏の期間は気温が高く、乾燥が続いたが、収穫期も同様の天候で推移した。 業者によると、品質は上々とのことで、着色も味も概ね良好とのことである。

# スペイン:ゴールデンデリシャスの収穫量は過去10年で最も少ない

現在、グラニースミスの収穫が終盤を迎えている。その他の品種(ゴールデンデリシャス、レッドデリシャス、ガラ等)は順調に収穫が終了した。スペインの主要なリンゴ産地であるジローナの生産者によると、生産量は昨年に比べて少ないとのことである(注:スペインは、昨年、欧州の大部分の国を襲った霜害を免れた)。産地リェイダでも同様の傾向である。ゴールデンデリシャスはスペインで最も生産量が多い品種であるが、過去10年で最も収穫量が少なかった。

生産者及び輸出業者によると、「Prognosfruit が公表した生産量見込みよりは実際は少ないのではないか」 とのことである。「小売御者の中には、Prognosfruit の数字を利用して仕入れ価格を低く抑えているものがいる のではないか。しかし、この予測数字通りになるか否かを判断するには時期尚早である。新シーズンは始まったばかりであり、不確定要素が沢山ある。この先を予測するのは難しい」と語る者もいる。

## イタリアでは平年作の見込み

Prognosfruit が8月に予測した生産量に達する見込みである。収穫時期の天候に恵まれたことから、一般に、品質、サイズ、着色は良好である。一方、多くの産地で雹害があったことから、相当量の果実は加工に回ると見込まれる。リンゴ産業見本市(インテルポーマ)2018の期間中、様々な議論が行わるが、中でも有機リンゴについては、生鮮、加工ともに人気が高まっていることが話題となりそうだ。特にアルト・アディジェ地方では有機リンゴへの転換が積極的に行われている。ただ、どの品種を有機栽培に転換するかは、未だ模索が続

いている。

イタリアでは3社(Rivoira、RK Growers、V.I.P Van Venosta)が合弁でアジア向け輸出を専門に行うベンチャー企業を立ち上げた。Omnifreshというブランドで輸出を行うこととしており、ターゲットとする市場は、香港、シンガポール、マレーシア、インドネシア、中国、ベトナム、台湾、タイ、韓国、日本である。この内、既に輸出が認められているのは、香港、シンガポール、マレーシアである。台湾、ベトナムは間もなく輸出許可が得られそうである。

## フランスでは既に市場にリンゴが溢れる

供給量は現時点で相当多い。というのも、直近の数ヶ月は高温で経過したため、多くの品種で熟期が早まったからである。このため日持ちが悪く、価格を押し下げる要因となっている。しかし、業者はこのような状況は早晩改善されると見ている。「従来型の品種の生産量が少ないため、価格面ではプラスの要因となっている」と考えているからだ。

フランスのリンゴ産業で最も目立った動きは、有機栽培の増加とクラブ制リンゴの増加だ。フランスで最も大きいリンゴ生産協同組合は、長年に渡りこの2つの方向を目指してきた。「クラブ制リンゴへの需要は大きく、生産量が限られているため投資面でのリスクも少ない」と輸出業者は考えている。

## ポーランド: 政府が市場隔離を検討中

現在収穫されているリンゴの品質は良好である。業者によると、例年よりも甘く、サイズややや小さいとのことだ。この2つの特徴は、中国に輸出するに当たっては好都合だ。「欧州市場ではこれまでのようにポーランド産のリンゴに対する需要は強くないのでアジア市場に目を向けざるを得ない」と考えている業者もいる。一方、輸出業者の多くは、より馴染みのある中東市場、北アフリカ市場への輸出機会をうかがっている。昨年に比べて生産量が大幅に増加する中、生産者を救済するため、ポーランド政府は50万トンのリンゴを一定の価格で買取り、市場隔離を行うことを検討している。この措置は、まだ実行に移されていないが、業者は「短期的には効果を発揮するのではないか」と考えている。

# 米国:産地により事情は異なる

今シーズンは、産地により事情が異なっている。

ニューヨーク州では平年よりもやや生産量が増加すると見込まれている。生産者によると、「供給量は確かに多い。素晴らしい収穫時期を迎えた。着色は良好で、サイズも普通の大きさである」とのことだ。ニューヨーク州で栽培されている品種は、エンパイア、マッキントッシュ、コートランド、デリシャス、ガラ、ふじ、ハニークリスプ、スナップドラゴン、ルビーフロストである。これら品種の単位当たり収量は概ね期待通りである。昨年、ニューヨーク州は雹害に遭遇し、生産量は減少したが、今年はそういった被害はない。ただ、州西部では着色の遅れから、収穫時期が5~7日間遅れている。収穫作業が終了するのは、11月上旬と見込まれる。

一方、ワシントン州では生産量が減少すると見込まれている。しかし、品質は良好のようである。最新の生産予測では更に生産量が減少すると見られており、1億3,100万箱から1億1,680万箱(何れも生鮮果実の生産予測量)に修正された。ワシントン州で主に栽培されている品種は、ガラ(24%)、レッドデリシャス(21%)、ふじ(13%)、グラニースミス(13%)、ハニークリスプ(11%)、ピンクレディー(クリプスピンク)(4%)である。ゴースデンデリシャスは減少傾向にあり、何十年にも渡り最大の生産量を誇ったレッドデリシャスはガラにその地位を譲った。

ミシガン州では昨年よりも生産量は増加するものの、当初の予測よりは少ないと見込まれる。10月上旬にはスウェータンゴ、ロイヤルガラ、マッキントッシュ、ジョナゴールド、ハニークリスプの収穫が始まり、その後、ゴールデンデリシャス、レッドデリシャスが、続いて晩生種のカンジ、キク、ふじ、エバークリスプの収穫が行われる。ミシガン州では天候が収穫時期に影響を及ぼしている。ある地域では収穫時期は例年よりも早まったが、他の地域では収穫作業は2~3週間に渡る降雨が終わるのを待たなければならなかった。

夏の期間は高温で推移したため、リンゴに対する需要は数ヶ月間停滞した。9月も高温が続き、核果類の供給量も多かったが、10月になって需要は回復した。輸出に関しては各国の関税引き上げにより支障が出ることが懸念されている。関税引き上げを延期していたインドも、最近になってリンゴに対する関税の引き上

げ措置を講じた。

# リンゴ輸出を目指すオーストラリア

「新リンゴ、ナシ産業戦略(2018-2023)」ではサプライチェーンの見直しについて言及している。業界は、プレミアムブランドの生産振興と新たな輸出市場(特に中国)の開拓について今後の可能性に期待している。2017/18年産の収穫が終了した2017年6月末のデータによると、319,686トンが収穫され、このうち29%は加工に向けられた。輸出量は4,950トンで、前年よりも僅かに増加した。最大の輸出先は英国であり、全体の1/4を占めている。新品種の植栽が活発に行われているが、現時点はピンクレディー(37%)、ガラ(23%)、グラニースミス(20%)が上位3品種である。一方、政府は米国北西部の諸州(オレゴン、アイダホ、ワシントン)からの輸入リスクに関して検討を行っている。輸入に当たってのプロトコル案は2019年3月に公表される予定である。

## 中国:天候不順による生産量の減少

今年の中国のリンゴ生産量は、気象災害により例年に比べて大幅に減少する見込みだ。リンゴの生産地である陝西省、甘粛省、山西省では生産量は20~50%減少すると見込まれている。現在、晩生種のリンゴが収穫されているが、生産量が少ないため、連年よりも早く収穫が終了した地域もある。生産量が少ないためリンゴの価格は上昇中である。実際の価格は産地や品種により異なるが、全般的に見ると、昨年同時期に比べて少なくとも40%は高い水準となっている。高級品種として知られる陝西省産の Qinguan は前年の倍の価格をつけている。

価格の上昇は国内販売をしている業者にとっては朗報であるが、輸出業者にとっては都合が悪い。価格が高いため他の輸出国との競争で不利を被っているからだ。輸出に関しては、現在2つの問題に直面している。 米国が中国から輸入されるリンゴに対して高率の関税をかけていることと、インドが引続き中国産のリンゴの輸入を禁止していることだ。これら2カ国とも中国産リンゴにとっては重要な輸出先である。しかし、中国の輸出業者はこれに代わる代替市場を見つけることができたことから輸出は引続き行われている。

# 46. チリの果実貿易戦略

# EUROFRUIT 誌 (2018年10月号)

南半球で生鮮果実の最大の輸出国であるチリの課題は何かと問われれば、多くの人は「現在の地位を継続することだ」と答える。しかし、一部の人は、「新規植栽や新品種の導入のための投資を促進し、主要市場への輸出を拡大することだ」と答えるだろう。しかし残念なことだが、発展を続ける世界の果実貿易の中であっても単純には物事は進まない。「何故チリが後者の道をすんなり進むことができないか」については様々な理由がある。

チリ・カンキツ委員会の Ortuzar 氏に尋ねると、チリには現在3つの問題があると説明してくれた。第一は労働力の確保が困難であるため、労働力を必要とする生産者は、少ない人数で効率的な経営に取組まざるを得ない状況にあることだ。第二はチリの通貨であるペソがドルに対しここ数ヶ月安値で推移しているため、労働力コスト、生産コストの高騰を招いていることだ。そして第三は特にアジア市場においてライバル国の力が増しているため、チリとしては新たな市場の開拓を迫られていることだ。これらの諸問題を克服することなく、避けて通るとすれば、チリの果実産業界は世界から置き去りにされるというリスクを背負うことになる。

### 課題に立ち向かう

Ortuzar 氏は、輸出業者や生産者にとって成功の鍵となるのは、競争力を維持することだとし、「生産者は単位面積当たりの収量を高め、効率的な経営を行い、労働力をうまく活用することが不可欠だ。チリは決して生産コストが低い国ではない。通貨ペソの為替レートがドルに対して低下を続ける中、どうすればより効率的な生産ができるかを考えなければならない。例えば、矮性の果樹を植栽することで収穫作業を容易にし、可能な限り人力作業から機械作業に転換するといったことが重要だ」と語っている。

アボカドはチリの果実の中で最も輸出の伸びが著しい品目である。カンキツに関しては、チリ・カンキツ委員会によると、今シーズンの輸出量は31.4万トンに達する見込みだという。この数字は2017年に比べて16%上回るものであり、主に皮を剥き易いカンキツ、なかんずく晩生のマンダリンであるナーダコットが貢献している。輸出額では、カンキツはブドウ、リンゴ、サクランボ、ブルーベリーに遅れをとっているが、輸出の増加率という点からは、アボカドに次いで2番目である。しかし、カンキツの輸出を牽引しているのは、チリの主要輸出市場である米国である。現在、チリから輸出されているカンキツの80%は米国に輸出されている。そして、日本もレモンに限ればもう一つの主要な市場である。しかし、輸出市場の構成は早期に見直されるべきだ。チリ政府によると、チリ生鮮果実輸出協会(Asoex)は、現在、中国に対しカンキツの輸入を許可するよう交渉を行っているそうだ。チリ産の高品質カンキツに対し、成長を続ける中国の中間層からの需要が高まれば、国内のカンキツ生産量を大幅に拡大することが可能となる。

# アジアへの期待

輸出量を増加させる上で、アジア市場が最も重要であることは疑問の余地はない。そして、それは中国だけではなく、それ以外のアジア諸国にも当てはまる。Asoex 会長の Bown 氏は、「将来、輸出量を拡大する上で最も大きなポテンシャルを持つ地域はアジア太平洋地域である。引続き中国においてプロモーション活動を進めることは重要だ。特に、サクランボ、ブルーベリー、アボカドは重点品目である。しかし、長期的観点から先手を打つことも必要だ。最も重要で可能性のある市場はインドである。インド経済が中国を追いかけるとなれば、今後10年以内にインドは大市場となる」と語っている。

カンキツに関しては、中国市場における南半球産の輸出可能性は大変に大きい。現在、南アフリカ、オーストラリアから中国に輸出が行われているが、輸出量は2017年10月までの1年間で25万トンを超えており、大部分はオレンジとマンダリンである。中国の関税当局によると、前年同時期に比べて55%の伸びであったという。

しかし、チリ産のサクランボ、ブルーベリー、アボカドは中国市場において既に確固たる地位を築いているということを忘れてはならない。チリは中国に対する世界で最大の生鮮果実輸出国であるが、同時に拡大の余地が残されていることも確かだ。今年3月、中国で開催された生産市場協会の会合(PMA Fresh Connection)で、Joy Wing Mao グループ会長の Mau 氏と中国果実市場協会会長の Lu 氏は、今後10年間は

中国の果実市場が拡大、発展する「黄金の時代」となると予言している。

#### 市場の不思議

チリが継続して輸出に力を入れている品目の一つはサクランボである。チリ産サクランボは、南半球産の輸出シーズンに限れば、中国市場の92%を占めている。昨年は数百万ドルを投入して販売促進活動を展開し、週当たり消費量を20%増加することに成功した。Asoex によると重点的に販売活動を行った都市部に限れば、週当たりの販売額は27%増加して15.50ドルに達したという。

「赤い瞬間を楽しもう」というキャッチコピーの下、チリ・サクランボ委員会はサクランボの健康効果をPRするとともに、いつでもどこでも気軽にサクランボを消費するよう宣伝に力を入れた。しかし、Asoex の販売担当責任者の Caballero 氏は、「中国の春節の時期が最も重要であることに変わりはない」と言う。つまり、消費量が急増する春節の前にサクランボを輸出できなければ意味がないというのだ。

もう一つ、チリ産の果物の輸出時期が鍵になる品目はリンゴだ。トランプ大統領による米中の貿易戦争は、 チリのリンゴの輸出にも大きな影響をもたらすと見られる。米国が課した鉄鋼とアルミニウムに対する関税へ の報復として、中国は米国の多くの果実とナッツに対して15%の関税(後に更に25%を上乗せした)を課し た。この対象にはリンゴ、サクランボ、クルミなどが含まれる。このため、今シーズンはチリの輸出先と競合する 中国以外の市場に大量のリンゴが米国から輸出されることが考えられるからだ。

### 貿易戦争

Bown 氏は、「貿易戦争で得をする者はいない。しかし、予期せぬ副作用は起るものだ。中国の市場関係者がどのような行動を起こすかは予測できない。中国の業者は関税の上昇分を吸収するかも知れない。しかし、米国が関税の上昇を嫌って、国内市場、欧州市場、中南米市場への出荷や輸出を拡大すれば、価格低下という問題を引き起こすだろう」と語っている。

梱包施設の中には、米国が中南米市場に輸出を行う前にチリ産リンゴを輸出すべく、例年よりも作業を早めている施設がある。「通常は1月末までに貯蔵リンゴの選果、梱包を終えるが、今年はこの作業を11月末までに早めたい」とチリで最大級の梱包施設の作業管理者である Maraboli 氏は話している。

ただ、残念なことに、世界貿易の中で不安定な状況に置かれているのはリンゴだけではない。チリからインドに輸出されるクルミについては関税が100%に引上げられたのだ(従来は30%)。この引き上げは、インド政府がトランプ大統領に対する報復関税として米国に課した関税率と同じである。

チリと米国との関係に関しては、チリ貿易振興局(ProChile)の部長である Schutz 氏によると、「米国への輸出に関しては、まだ問題は生じていない」そうだ。とはいえ、「米国と他国(中国、カナダ、ロシア、メキシコ、トルコ、EU)との関係には絶えず注目している」とのことだ。更に、予防的措置として、チリ外務省の国際経済関係総局は、先月、官民の関係者からなる円卓会議を開催し、米国との間で貿易戦争が誘発される可能性について常時監視するシステムが構築された。

#### キウイの輸出促進

幸いキウイの関税に関してはチリに有利に働いている。インドはチリ産のキウイの関税を半減したため、消費者に安くチリ産キウイを提供できるようになった。チリ・キウイ委員会はインドに対する輸出拡大を目指しており、消費拡大を進めるため、今年、初めて販売促進活動を展開した。この中で、インド最大手の電子商取引業者 BigBasket 社を介した宣伝活動を展開し、健康に良いこと、増加する中間層への浸透に焦点が当てられた。

現在はニュージーランドのゼスプリがインド市場をリードしているが、チリ・キウイ委員会の総合調整役である Kohler 氏の話では、インドの輸入業者は、より安く、柔軟に品物を提供してくれる国を歓迎しているとのことである。

このように、チリはアジアでの販売拡大を目指しているが、南半球の競合国との競争に打ち勝つ鍵は、キウイのような販売促進活動や中国のサクランボで先行して実施してきたような販売促進活動を積極的に行うことである。

### 47. アジアへの進出を目指すスペインのカキ業界

### EUROFRUIT 誌 (2018年10月号)

「どんなに曇っていても希望の兆しは必ずある」という言い回しがあるが、例え雹が降るような曇りでも希望があるものだ。7月、大規模な雹がスペイン・バレンシア地方の Ribera del Xuquer を襲った。スペイン政府による原産地表示制度によって保護されている同地カキは大きな被害を受け、たった半日で生産量の1/4を失った。被害額は4,000万ユーロ以上にも達したが、当初予測されていた「とてつもない生産量に」なることが避けられ、業界には安堵感がもたらされた。

10年前からバレンシアやスペイン各地でかつて見なかったようなカキの新植が進められたため、スペインのカキ生産量は今後2~3年で倍増すると予測されている。確かに消費も伸びてはいるが、生産量の増加には追いついていない。実際、過去2年間は新植が全く行われていないが、新植された木が樹齢を重ね、生産技術も向上していることから、毎年の生産量は順調に増加している。そして、近い将来、生産量が60~65万トンとなる時代を迎えると考えられており、誰が考えても厳しい「シナリオ」になると言わざるを得ない。

スペインのカキ生産の55%を占める42の会社で構成されたスペインカキ協会の会長である Prats 氏は、「今年の生産見込量は、現時点で約24万トンと考えており、昨シーズンよりもやや少ない水準だ。そして当初の生産予測量よりも35~40%少ないと見ている」と語っている。

会長は、今後数年間で業界の収益を確保するためには、既存の市場で消費量を拡大するだけでは不十分であり、新たな市場を開拓しなければならないと考えている。EUROFRUIT 紙に語ったことによると、「欧州は今後とも主要な市場であり続けることは確かだが、過去2か年にわたり供給量が多いことから価格が低く抑えられてきた。このため、欧州市場への偏りを解消しなくてはならない」とのことだ。

会長は、最近、商業使節団の一員として、スペイン産の果実、野菜の販売促進のために中国を訪問した。 そして、9月上旬には協会として香港で開催された果実見本市(Fruit Logistica)出展し、アジアでの市場開拓機会を模索した。香港、マレーシア、シンガポールなどへは着実に市場参入を進めることができたが。究極の狙いである中国市場への参入はできないままである。というのも、中国は市場を閉ざしているからだ。

スペイン産生食ブドウの中国輸出に当たっての議定書の調印は、今後「数ヶ月以内」に行われる見通しである。カキ生産者はブドウの次はカキの輸出が認可されるように、とロビー活動を行っている。しかし、国内には強力なライバルが多く、ブルーベリー、サクランボ業界も生食ブドウの次を狙っている。中国問題に関しては、カキを含む3つの業界は説得力のある主張を展開していている。しかし、Prats 会長は、バレンシア地方におけるカキが占める重要な役割を鑑みると、カキの交渉を急いで進めるべきべきと願っている。

一方、国内で対処しなければならない問題もある。最近、Ribera del Xuquerのカキ原産地表示管理委員会とスペインで最大のカキ生産協同組合である Aneccop はカキ生産者の利益を守るため、スペインカキ協会との協力関係を強化することを申し出たのだ。Prats 会長は、「この点に関しては、皆が同じ目標を持っている。市場の成長を続けることで生産者の利益が向上するよう、品質基準を高めることが肝腎だ」と述べている。

### 48. ニュージーランドのキウイの脅威を及ぼすクサギカメムシ

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 10 月 17 日)

ニュージーランドの国境(港湾、空港)で発見されたクサギカメムシ (brown marmorated stink bug) の数が26 0%増加したことで、同国の米・オブ・プレンティ地方の経済に10億ドルの被害がもたらされる危険が高まった。

ニュージーランド第一次産業省は、2017年9月方2018年4月までにクサギカメムシの個体2,569頭を確認したと発表した。この期間はクサギカメムシが侵入する「危険」な時期とされる。北半球からの貨物に潜り込んでニュージーランドに侵入する時期だからである。

ニュージーランド・ヘラルド電子版(Nzherald.co.nz)が報じるところによると、今シーズンは植物検疫官により死んだ個体が2頭発見されたという。

キウイ検疫機構(Kiwifruit Vine Health)の最高経営責任者である Hutchings 氏によると、この害虫が地域産業に及ぼす影響は甚大であるという。イタリアでは、この害虫はキウイへにダメージを与え、収穫量が40%減少したという。「生産者の収益を奪い取り、2038年までの間に GDP18億ドルに影響を及ぼし、園芸分野の輸出額が42億ドル減少する恐れがある」とのことだ。

(訳注) クサギカメムシ Halyomorpha halys Stal は、カメムシ科に属する昆虫である。体色は全身が暗褐色で、ほぼ無地に見える。普段見かけるカメムシの中では大きい方で、普通なアオカメムシであるアオクサカメムシより大きく、大型のアオカメであるツヤアオカメムシよりやや大きい。日本のほぼ全土に分布し、ごく普通種である。山野にも普通であるが、耕作地に出現することも多い。多食性で、幅広い植物につき、果樹や豆類の害虫としても古くから知られてきた。また成虫が越冬の際に人家に入り込むことがあり、その悪臭を出す性質もあって衛生害虫としても知られている。(ウィキペディア)

# Stink bugs

- 260% increase in the number of brown marmorated stink bugs found at New Zealand's borders.
- 2569 individual bugs were found between September 2017 and April 2018.
- 40% of overseas crops have been ruined by infestations.
- \$1.8 billion of our GDP could be wiped by 2038.



この害虫の食欲は旺盛で、冬の期間は人家で越冬するという。また、危害を受けそうになると厄介な臭いを発する。冬を過ぎると屋外に出て、異性を探すために何でも食べてしまう。また、根絶するのは大変に難しい。

Hutchings 氏によると、多くの草、庭、樹木、原生植物がこの害虫に食害され、他の多くの産業にも影響が及ぶ可能性があるという。「海外から物資が輸入され、観光客が訪れることにより、この害虫の侵入リスクは高まっている」と語っている。

出典:https://www.nzherald.co.nz/business/news/article.cfm?c\_id=3&objectid=12142646

### 49. 中国でリンゴの価格が上昇

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 10 月 16 日)



中国は世界で最大のリンゴ生産国であり、消費国でもある。

昨年は国内の生産量は 4,000万トンを超えている。

リンゴ生産者は、比較的安定した収入を確保するため、市場での契約を 12月に行うことが多い。

ここ1~2ヶ月間の市場調査によると、 当初トン当たり6,471元(935米国ドル)と低かったものが、12,396元(1,7 91米国ドル)と倍に上昇している。

# 市場価格が倍となったため、買取り業者が急増

山東省煙台市の西渓県は、北緯37

度に位置している。この地域は山が多いが、リンゴ栽培の歴史は100年と長い。そして「リンゴの都」として知られている。ここ数年はリンゴの生産量が増加し、価格が低迷したため、多くのリンゴ生産者は生計を立てることが困難となっていた。中には、リンゴの樹を伐採する生産者も出たことから、地域の生産量が減少していた。しかし、今年は春先の厳しい寒害により生産量が大きく減少し、昨年の同時期に比べてリンゴの価格が上昇している。

リンゴの供給量が減少した理由は、春先の気象災害の他、夏の暑さと秋の雹害も大いに関係している。このため、山東省の生産量は、昨年に比べて20~25%減少している。このため、価格は大幅に上昇したことから、 買取り業者は貯蔵用のリンゴを何時のタイミングで購入するかに関して慎重になっている。

業界の関係者は、リンゴの契約価格について今年は高止まりをするものの、限度のない価格の上昇は起らないだろうと語っている。というのも、結局、リンゴは他の果物に置き換わりやすいからだ。価格が高くなりすぎれば、消費量は減少するものだ。しかし、短期的には、10月の晩生ふじの収穫量が少ないとなれば、買入業者は品物を確保しようとして果樹園へ殺到することになりかねない。この結果、リンゴの価格は更に上昇することも期待されている。

情報源:Fruit Service Center

### 50.2018/2019 年産の米国のカンキツ生産見通し

### 米国農務省統計局 (2018年10月11日)

米国のカンキツ生産予測-米国農務省統計局2018年10月11日公表-単位: 千トン

			「木呂辰傍自杭計向2018年10月11口:				
		生産量					
	2015/16	2016/17	2017/18	10月予測			
ネーブル等非バレンシア							
フロリダ	1,474	1,347	774	1,388			
カリフォルニア	1,713	1,426	1,303	1,452			
テキサス	52	42	59	69			
全米合計	3,239	2,815	2,135	2,909			
バレンシアオレンジ							
フロリダ	1,862	1,464	1,061	1,837			
カリフォルニア	410	327	345	327			
テキサス	13	11	13	23			
全米合計	2,285	1,801	1,420	2,187			
オレンジ合計							
フロリダ	3,335	2,811	1,835	3,225			
カリフォルニア	2,123	1,753	1,647	1,778			
テキサス	65	53	72	93			
全米合計	5,523	4,616	3,555	5,096			
グレープフルーツ							
フロリダ計	416	299	150	258			
赤色種	320	242	123	212			
白色種	96	57	27	46			
カリフォルニア	138	160	145	142			
テキサス	174	174	174	225			
全米合計	728	633	469	625			
レモン							
カリフォルニア	762	744	769	726			
アリゾナ	58	56	36	51			
全米合計	820	800	806	777			
タンゼロ							
フロリダ	15	NA	NA	NA			
タンゼリン、タンゼロ							
フロリダ計	61	70	32	52			
早生種	34	26	NA	NA			
ロイヤル	NA	9	NA	NA			
ハニー	27	23	NA	NA			
タンゼロ	NA	12	NA	NA			
カリフォルニア	787	864	697	835			
全米合計	848	933	729	886			

注)公表数字は箱で示されているが、トンに換算した。

### フロリダ州オレンジ生産見込量は7.900万箱(322.5万トン)

農務省農業統計委員会によるフロリダ州のオレンジの生産見込量は7,900万箱で、前年を79%上回る数字である。うち、非バレンシア(早生、中生、ネーブル)は3,400万箱(138.8 万トン)で、バレンシアは4,500万箱(183.7万トン)である。なお、ネーブルだけの生産予測量は80万箱で、非バレンシアの2.4%を占めるに過ぎない。

全てのオレンジの結果樹数は4,490万本と見込まれる。2015年以前に植栽された果樹は結果樹齢に達していると見られる。2018年6月に商業的カンキツ樹現存調査が行われ、この成果を踏まえて損耗率が算定され、結果樹本数の予測モデルに当てはめられた。

この報告書では過去9年の数字を用いて比較している。つまり、ここで使う「平均」「最小」「最大」とは、直近の10年のうちハリケーン・イルマの影響で異常な年であった2017年を除外した9年の数値に基づいている。

#### フロリダ州の非バレンシアの生産見込量は3.400万箱(138.8万トン)

この数字は前年に比べて79%上回るものである。ネーブルを除く結果樹数は1,970万本と推計される。1 樹当たりの結果数は、早生、中生種で813個であり、前年を9%上回る見込みである。予想される果実サイズ は最小を下回ると見込まれ、90ポンド入の箱に入る果実数は平均317個と推計される。落果率の23%は平 均値を上回ると見込まれる。

(訳注:着果数が前年より9%しか上回らず、落果率が「平均値」を上回っているにも拘わらず、生産見込量は前年を79%上回っている理由は、2017年の場合、ハリケーンによる落果率が非常に高かったが、落果率の「平均値」には異常年の2017年が除かれていることによると推測される。以下同様)

ネーブルの生産見込量は80万箱で、前年を60%上回ると考えられる。結果樹数は95.1万本で、前年より1%増加すると見込まれる。1樹当たりの果実数は213個と見られ、前年より16%下回る予想である。果実サイズは最小値を下回ると見込まれ、90ポンド箱に入る果実数は平均140個と予想される。落果率は最高値を上回る30%と予測される。

### フロリダ州のバレンシアの生産見込量は4,500万箱(183.7万トン)

この数字は昨年よりも73%上回るものである。結果樹数は2,930万本と推計され、前年より2%上回る見込みだ。1樹当たりの結果数は609個で前年より19%上回ると見込まれる。果実サイズは最小値を下回る見込みであり、90ポンド箱に入る果実数は平均255個と予想される。落果率は平均値を上回る26%と見込まれる。

### フロリダ州のグレープフルーツの生産見込量は670万箱(25.8万トン)

この数字は昨年を73%上回るものであるが、2016/17年産に比べれば14%少ない。生産見込量は、昨年の例外を除くと、1921/22年以来最低の水準である。

このうち、赤色種は550万箱(21.2万トン)で、前年を73%上回るものであるが、2016/17年産に比べると12%少ない。結果樹数は昨年よりも7%減少している。1樹当たりの果実数は最低値よりも少なく、落果率は平均値よりも上回っている。また、果実サイズは平均値よりも上回っている。

白色種は120万箱(4.6万トン)で、前年より71%上回っているが、2016/17年産より19%下回っている。結果樹数は前年を19%下回り、2年前より35%下回ると予測される。1樹当たりの結果数は、最低値よりも下回る見込みである。果実サイズは現時点で平均値並みであり、最終的にも平均値程度と見込まれる。落果率は平均値を上回ると見込まれる。

### フロリダ州のタンゼリン、タンゼロの生産見込量は120万箱(5.2万トン)

この数字は昨年を60%上回るものであるが、2016/17年産に比べると26%下回っている。この数字の中はタンゼリン、タンゼロとして認められている全ての品種の合計である。

#### 生産地の気象条件の推移

フロリダ州のカンキツ栽培地帯は、2月、3月は乾燥した状態で経過した。月間降水量は過去の平均値よりも少ない状況であった。3月末には西部で干ばつが厳しさを増し、北部、中部、南部では中程度の干ばつが続いた。この時期には大部分の地域でエンドウ豆かそれ以上の大きさの幼果が全ての品種で着果した。春になってから降水量は平年並みになり、全ての地区で干ばつ状態を脱した。良好な気象状況は果実が肥大する間は継続し、夏の期間は理想的な生育環境で推移した。

### (関連記事)

# フロリダのカンキツ生産量は大幅増加

The Packer 電子版(2018 年 10 月 14 日)

昨年、フロリダ州のカンキツ生産はハリケーン・イルマにより甚大な被害があったが、2018/19年産の生産量は、米国農務省によると8,690万箱で前年を75%上回るという予測である。

とはいえ、この数字は最盛期であった1997/98年産の2億4,400万箱に比べれば大幅に少ない。

フロリダ州農業局長官は、生産の増加は大歓迎であるとして、「この生産予測は、フロリダ州の象徴的産業であるカンキツ業界にとって光明をもたらすものでる。過去10年以上、カンキツグリーニング病との闘いを続け、昨年はハリケーン・イルマによる壊滅的な被害に苦しんできた。この度、生産量が増加するという予測が出されたが、州内の生産者が待ち望んでいたニュースである。まだ多くの仕事が残っているが、カンキツ業界は力強く立ち向かっている」とコメントを発表した。

米国農務省の公表数字によると、フロリダ州のオレンジ全体の生産予測量は7,900万箱で、4,495万箱であった2017/18年に比べると76%増加する見込みである。

一方、グレープフルーツについては、670万箱で、386万箱であった2017/18年産に比べると72%増加する見込みである。このうち赤色種は550万箱で、318万箱であった2017/18年産よりも大幅な増加が見込まれている。

タンゼリン・マンアリンは120万箱で、昨シーズンに比べて60%増の見込みである。

### カリフォルニア州及びテキサス州

米国農務省によると、2018/19年産のカリフォルニア州ネーブルの生産量は4,900万箱であり、前年の確定値を8%上回る見込みだ。バレンシアは900万箱で、昨シーズンよりも5%減少すると見込んでいる。

テキサス州のオレンジ全体の生産量は240万箱で、昨シーズンに比べて26%増加すると見込んでいる 米国全体のグレープフルーツ生産量は昨シーズンの確定値よりも33%増加すると見込んでいるが、テキサス州では29%増の620万トンと予測している。

レモンの生産見込量は、米国全体で昨シーズンよりも4%減少すると見込まれているが、カリフォルニア州では2,000万トンで、2017/18年産よりも6%減少すると見込んでいる。

タンゼリン、マンダリンに関しては、昨シーズンより全国計で22%増加すると見込んでいるが、この内カリフォルニア産の生産見込量は2,300万箱で、前年に比べると20%の増加を見込んでいる。

### 51. オーストラリアは日本へのブドウ輸出を急速に拡大

### FreshFruitPortal 電子版(2018 年 10 月 10 日)

Weekly Times 紙(オーストラリアの農業関係新聞)が報じるところによると、今シーズン(日本の冬から春にかけて)、オーストラリアから日本に輸出された生食ブドウは、昨シーズンに比べて30%増加したとのことだ。この結果、日本はオーストラリアの生食ブドウ輸出先国としてアジアの中で第3位に上昇した。



たそうだ。

2018年1月から6月までの対日輸出 全体の増加率が3%だったのに比べ ると、いかに急速な伸びであったか理 解してもらえるだろう。

輸出金額も同程度に増加し、3億84 7万オーストラリアドル(2億720万米ドル)に達した。

オーストラリア生食ブドウ協会の最高 経営責任者である Jeff Scott 氏による と、今年日本向けに出荷された生食ブ ドウは10,882トンであり、輸出向けに 出荷された生食ブドウの10%を占め

このような日本市場での需要の高まりは、今年1月早々に日本と韓国で実施したプロモーション活動の成果だという。

Scott 氏は、「日本市場でのシェアを拡大するために相当な努力を行った」と説明している。さらに、「日本は成熟した市場であり、質の高いものはちゃんと理解される。そして、質に見合った金額を支払ってくれる。韓国もそういった意味でもう一つの有望な市場だ。韓国市場でも活動を進めており、輸出量の増加も著しいものがある」とも語っている。

オーストラリアからの生食ブドウの輸出先としては、中国が依然として首位であり、41,668トンで輸出量の38%を占めている。これに続くのがインドネシアで16,149トン、15%となっている。

Scott 氏によると、過去5年間で生食ブドウの輸出は、毎年8%増加しているという。

### 52. 世界のマンダリン市場

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 10 月 5 日)



スペイン産のマンダリンが市場に出始めた。現在市場では南半球産のマンダリンとともに北半球産が同時に販売されているが、その概況について見てみたい。

### イタリアは早生のクレメンティンに期待

ターラント湾沿いに栽培されているマンダリンは豊作が期待されている。今年は品質的にも量的にも素晴らしい年になりそうである。これは天候に恵まれたためであり、特に十分な降水量があったことによる。クレメンティンは前年より20%生産量が増加する見込みだ。クレメンティンは国内販売だけでなく輸出も行われており、主な輸出先はチェコ、ウクライナ、ルーマニア、バルト諸国である。

プッリャ州ターラント市の近郊のマッサフラでは早生のクレメンティンと共に Orogros、Clemenrubis の収穫も始まろうとしている。これらは種無しで、濃いオレンジ色の果皮を持ち、糖度も高い。大きいサイズの果実が多く、国内市場で好評である。

シチリア島シラクサ市のレンティーニでは Rudolfino という品種が栽培されている。これはブラッドオレンジと 地元のマンダリンの交配種で、果皮が美しく食味も良い。いわゆる皮を剥きやすい(イージー・ピーラー)カンキツである。

#### スペイン:サイズが小~中のマンダリンが多い

バレンシア州では8月初旬の熱波は短期間で終わった。この期間を除けば、夏の気候は総じて暑くはなく、早生のマンダリンである岩崎温州、興津温州、尾張温州の生産には適していた。今年は、昨年の損失を補うほどの収益が期待される。業者によると、「今年は昨年に比べて生産量が大幅に増加する見込み」とのことだ。9月下旬、業者によると、サイズが小さいものと中程度のものが多いが、品質は良好であるため、「今年は価格の上昇を期待」しているとのことであった。最も早く収穫されるマンダリンは収穫が既に始まっており、欧州市場に出回っている。

一方、Clemen Rubis、Marisols、Oronuls の収穫も始まっている。今年は豊作が見込まれており、最も生産量が多いバレンシア州では、昨年に比べて21.5%の増収が予測されている。

とはいえ、サイズの小さい果実が多いことは輸出にとっては問題である。輸出業者は10%の減少はやむを得ないと見ている。スペインにとってはシーズン初期の輸出環境は複雑だ。 南半球産の Nadercott、Clemcott、Tango、Orri と重複するからだ。このため、業界としては出荷シーズンの長期化を目指している。 今年は輸出に向いたサイズの果実が少ないことから、価格は高くなると見込んでいるが、暫くすれば下げ圧力が強くなると予想する業者もいる。

#### 収穫が始まったトルコ

トルコではシーズンが始まったばかりで、この先3月まで続く。トルコのカンキツ全体としては5月までシーズンが続くが、マンダリンは3月で終了する。マンダリンは世界中に輸出されているが、主な輸出先は、欧州、ロシア、北米、極東である。

### 新シーズンは始まっていないフランス

フランス市場ではマンダリンやクレメンティンは未だ市場で販売されていない。シーズンは10月下旬に始まる見込みだ。10月20日にはコルシカ島産のクレメンティンが入荷する予定である。同島産のクレメンティンは地理的表示制度(PGI)で保護されているが、国内で人気が高い。「高品質なものほど人気が高い」と業者は語っている。価格は品質ほど重要な要素ではないそうだ。フランスではスペイン産のカンキツも評価が高い。

### オランダ:量が多く、特にサイズの小さいマンダリンが多い見込み

今年の夏のマンダリンの消費は振るわなかった。特に7月と8月は暑さのせいで厳しい状況であった。しかし、学校が始まってから市場は回復しており、スペインからの入荷は順調に進んでいる。しかし、夜温が高いことから着色が悪い。

オランダの輸入業者としては、スペインから早い持期に入荷したマンダリンについては酸が高く満足いくものではなかったが、今年は量が増加すること、特にサイズの小さいマンダリンが多いことを見込んでいる。これは、2年前の状況に近似している。しかし、サイズの小さいものは全て商品化することが難しいため、量的な増加は難しいとの見方もある。スペインの輸出業者としては、ロイヤリティーが付与されている Orri やNadorcott の輸出の強化を図りたいとしているが、温州ミカンの復活を期待する業者もいる。

#### ドイツ:市場は欧州産に転換中

ドイツの卸売市場は、現在、転換期を迎えている。南欧からのマンダリンは徐々にではあるが、確実に増加している。一方、南半球産は減少している。中でも、スペイン産のマンダリンの入荷が増加している。

今週はイタリア産の有機クレメンティン及び温州ミカンも市場で歓迎された。とはいえ、南半球産のマンダリンも未だ多く市場に出回っており、特にNadorcottが多い。現時点では、特に欧州産のマンダリンは値動きが激しいと業者も認めている。

#### 米国:欧州産と国産のマンダリンに移行中

チリ産の入荷は終了しつつある。このため、業者は欧州産に転換しつつある。一部の業者は引続きチリ産のマーコットを輸入する動きがあるが、11月中旬には確実に入荷は終わる。

今年、チリ産のシーズンは遅れて始まった。7月上旬に入荷した量は少なく、昨年に比べれば3週間は遅れた。始まりは遅かったが、終了は例年と同時期である。「スペイン産とモロッコ産が入荷する11月まではチリ産のマーコットを持っておきたい」とある業者は語っている。価格は徐々に上昇しており、1箱26~28ドルだったものが、現在は28~29ドルで取引されている。

欧州産に転換すると同時に、国産のマンダリンも入荷が始まる見込みだ。10月には国産の温州ミカンからシーズンがスタートする。その後、マーコットなどの品種が続く。新品種を販売しようとする動きもあり、ある業者は、2019年からゴールドナゲットも販売する予定であるとのことだ。

#### シーズンが終了するチリ

チリのシーズンは終わりに近づいている。今後数週間で出荷は終了する見込みだ。収穫は例年より遅れて第27週(7月8日)からコキンボ州で始まった。輸出数量は10.1万トンと見込まれている。チリから米国への輸出は2012年以降急速に増加しており、業者としては米国での足場を構築したと考えている。

霜害が発生する季節に、チリ生鮮果実輸出協会(ASOEX)のカンキツ委員会は霜害を受けた果実の輸出を禁じるよう指導を行った。これはチリ産果実の評価を下げないようにする措置であった。

#### ペルーは世界市場で地位を獲得

過去15年間でマンダリン業界は飛躍的進歩を遂げた。輸出も大幅に増加している。数年前まではあまり需要がない品種の栽培が行われていたが、状況は大きく変わった。「この結果、ペルーは南半球で主要な生産国になった。2017年には米大陸で最もマンダリンの輸出が多い国になった」と業者は語っている。転換先として植物特許を有する品種を選定するといった努力により、北米、欧州、アジアで市場のシェアを獲得してきた。カンキツの輸出は毎年10~12%拡大している。

第30週(7月29日)、ペルーカンキツ生産者協会は W. Murcott や Tango などの晩生マンダリンの輸出量は前年に比べ4%増加する見込みだと発表した。同協会は生産者の86%が参加する組織であるが、第30週までの輸出量は36,463トンであり、2017年は35,096トンであった。

主な輸出先は、米国、英国、中国、カナダ、オランダ、ロシアである。今年の第30週までの米国への輸出量は35%増加し13,284トンであり、中国へは30%増加して5,746トンとなった。その他の市場向けでは、カナダが19%、英国が25%、オランダ向59%、ロシア向40%それぞれ前年より減少している。

### アルゼンチン:中国向け輸出を再開

アルゼンチンの Etchevehere 農業大臣は輸出業者を訪問し、10年ぶりに輸出が再開された中国向けのコンテナを視察した。中国はアルゼンチンに対し、10年ぶりにカンキツ輸入を解禁した。

### コロンビアはアルゼンチンのマンダリン輸入を解禁

コロンビア当局はアルゼンチンからのマンダリン輸入を解禁した。コロンビアは既にオレンジ、レモンに関してはアルゼンチンからの輸入を解禁している。アルゼンチンはこの見返りにコロンビア産の製品の輸入を解禁した。

#### ウルグアイは米国向け輸出を推進

2010年、カンキツ生産者は米国向け輸出を拡大するため、米国の需要に即した栽培を行う方針を決めた。 つまり、種無し、果皮が綺麗、皮を幹易いといった果実の生産である。この成果が実り、最近では米国向け輸 出が増加している。1月から6月までの輸出量は3万トンに達し、輸出額は2,000万ドルであった。輸出のうち、 米国向けが60%、EU 向けが20%、残りはロシア、ブラジル、カナダ、アラブ首長国連邦である。

### 南アフリカ:輸出は増加

既にシーズンは終了しているが、主な輸出先は、英国、アジア、東南アジア、アフリカ、インド洋諸国、中東である。カンキツ業界においては総じて多難なシーズンであったが、その中で、マンダリンの販売は順調に進められた。マンダリンの輸出先としては、英国が第1位に返り咲き、シェア28%、15kg箱で450万箱であった。第2位は英国を除く欧州で25%、395万箱、次いでロシア11%、北米、東南アジアが10%であった。

南アフリカでは栽培面積が急拡大しており、輸出も前年より250万箱多い1,570万箱であった。この先、数年間は生産、輸出の増加が見込まれる。西ケープ州の干ばつは解消され、東ケープ州では最近の降雨で生産者は一息つけた。干ばつは果実サイズに大きな影響を及ぼすものである。

### 日本:ペル一産のマンダリン輸入を解禁

2007年から始まった交渉の後、日本はペルー産のマンダリン輸入を解禁した。農林水産省は輸入に当たっての条件を公表したが、これによると輸出に当たっては冷蔵輸送が義務付けられている。

### パキスタン:種無しのキノーの輸出を目指す

国際競争に打ち勝つため、種無しのキノーの栽培が勧められている。専門家からは、病気に罹患していないキノーの栽培も必要だと指摘されている。

### 53. ゼスプリの過去と未来

### EUROFRUIT 誌(2018 年 7 · 8 月号)

ニュージーランドのキウイフルーツ販売企業であるゼスプリ(Zespri) 社は、2025年にグループの年間売上額45億 NZ ドル(31億米ドル)を目指すと発表した。昨年のゼスプリグループの総売上額は23.9億 NZ ドル(16.8億 US ドル)、これにライセンス料収入を含めると25.1億 NZ ドル(17.6億米ドル)だったという。これを今後7年で45億 NZ ドル(31億米ドル)へ倍増するというのはかなり野心的な目標といえる。

同グループが目標実現に自信を持っているのには、それなりの理由がある。ゼスプリは2025年のキウイフルーツの世界の総需要量は約2億6,000万トレー(1トレー:約3.5kg)で、そのうち1億7,000万トレーはライセンス制により同社のコントロール下にあるゴールド種で、残り9,000万トレーがオープン品種である緑色種のヘイワードと見込んでいる。2018年の生産見込みがゴールド種7,500万トレー、緑色種9,500万トレー合計1億7,000万トレーと比較すると、2025年には9,000万トレーの増で、緑色種の微減、ゴールド種は倍増以上ということになる。ゼスプリ・ゴールドがゼスプリ・グリーンを上回る価格で売れていることから、ゴールド種の大幅拡大となったのである。

9,000万トレーの増加を確実なものにするためには、ニュージーランド以外での増産を視野に置くことが必要である。今後7年間の生産増は、ニュージーランド国内で一定量はカバーされるとしても、かなりの量は国外での生産に依らざるを得ないからだ。つまり、北半球産の販売調整を行っている Zespri Global Supply(ZGS)を通じた供給の増加に頼ることになる。これは、イタリア、フランス、韓国、日本といった諸国産の売り上げがグループ全体の3分の1に上ることを意味する。2017年国外で生産されたキウイフルーツの売上額は、全体の売り上げの11%に当たる2億6,400万 NZ ドル(1億8,600万米ドル)であったから、2025年には現在の数倍に増やさなくてはならない。ニュージーランド国内の栽培適地の減少や土地価格の上昇等々を考えると、9,000万トレーの半分以上を北半球産でカバーせざるを得ないことになる。さらにゼスプリ社が国内で直面している長期的な問題として、収穫のための労働力確保にどう対処するか、大量の生産物を選果し貯蔵するための施設整備に必要な10億 NZ ドル(7億米ドル)に上る追加経費をどう確保するかといった問題もある。

### 業界再編の動き

晩生種である緑色種の「ヘイワード」は収穫期もかなり長いが、「サンゴールド(SunGold®)」という名前で新たに売り出された果肉の黄色い新品種は収穫からパッキングまでの期間は3-4週間と短い。ニュージーランド国内で6,500万トレーと見込まれている今年産の扱いに苦労するようでは、2025年には1億トレー以上と見込まれている量に果たして上手く対処出来るだろうか大いに疑問である。それはさて置き、国内のキウイ主産地である北島のプレンティ湾地域のキウイ産業関係者の間に現在広まっているムードは、2010年当時に比べるとかなり異なる。当時、ゼスプリがニュージーランド産キウイフルーツの単一輸出窓口であることに対して、キウイの生産販売を行っているターナズ・アンド・グロワーズ(Turners & Growers(T&G))社が異を唱え裁判を起こし、侃侃諤々の議論がなされ、まさにキウイ産業の大転機となっていた。

T&G 社はニュージーランド産キウイフルーツの輸出窓口をゼスプリ1社に限るというシステムは終わらせるべきだと大々的に主張を展開し、同社自らが生産する「エンザゴールド」と「エンザレッド」をどこでも自由に販売することを認めるべきだと訴えた。つまり、豪州を除く外国市場向けのニュージーランド産キウイフルーツの輸出をゼスプリ社が独占的に仕切るというシステムに反旗を翻したのである。これは、1980年代末にゼスプリの前身であるキウイマーケッティングボード以来の伝統である輸出窓口の一元化、つまり豪州向け以外は全てゼスプリの管理下で行うという規定を根本から問う重大問題であった。

裁判の結果、一元化の継続が支持され、T&G 社は訴訟で負けた。訴訟を引っ張ってきた同社の Gibbs 社長と Wesley 専務は程なく身を退き、同社はドイツに本拠を置くコングロマリット BayWa 社に買収された。 Wesley 専務の引退後程なく、BayWa 社はゼスプリとの和解に転じ、同社が持つ独自の品種をゼスプリと共同で販売を行うこととなった。

また、2010年は、初めてキウイフルーツ潰瘍病(Psa-V)の発生が確認された年でもあった。北島で Hort16A 種のキウイフルーツ(ゴールド種)が大きな被害を受けたが、その後、ゼスプリによる Psa-V への耐性 を備えた新品種の作出が驚くべき成功を収め、「サンゴールド」の名で知られる新品種 G3 が作出されたので ある。G3 の育成品種権はゼスプリ社が保有している。G3 の作出を受けてキウイ生産の再編が進み、G3 の生 産ライセンスが大規模に付与され、流通業界は大量に生産される「サンゴールド」の処理に追われている。

### 続く逆風

激しい内部抗争は、8年前のゼスプリ社による「サンゴールド」の成功によって、組織化の確立と自信に取って代られた。これはキウイフルーツ潰瘍病によって引き起こされた荒廃からの回復、「サンゴールド」による記録的売り上げ、さらにはゼスプリ組織体制が生産と販売の協調重視に変わり、販売業者はこれまで以上に生産者に対する説明責任が求められるようになったことの結果である。

現在のところ差し迫った危険は無いとはいえ、キウイフルーツ産業に問題ないというわけではない。先ず上げられるのがシーカ社である。同社は執念深くキウイフルーツの輸出窓口単一システムに反対を唱えており、あらゆる機会をとらえて自らの主張を取り入れるようゼスプリ社に圧力をかけている。今年4月初め、シーカ社は取締役会議で負債軽減のため、保有する業績好調なゼスプリ社株を売却すると発表した。同時に、豪州にある同社のキウイフルーツの生産施設からアジア、英国を含むEU諸国向けに輸出を始めたことを明らかにした。これらの市場はゼスプリ社がニュージーランド産キウイフルーツを輸出している市場と重なっている。シーカ社が競合することを承知の上で豪州からの船積みを始めたことには、長期的視点に立った隠された狙いがあるのかも知れない。

また、2010年のキウイフルーツ潰瘍病の大発生は同国の防疫対策部門が病原菌に汚染された媒介物のニュージーランドへの侵入を見逃したからだとして、シーカ社が主導して原告団を結成して政府の責任追及の裁判を起こしている。これに対し、ゼスプリ社は訴えには根拠がないとしているが、裁判の行方が注目される。

### ブランド化への挑戦

先に見たように、2025年に販売収入の倍増を目指すということになると、ゼスプリとしてはそのブランドを 消費者に直に理解してもらえるものにすることが重要だ。成熟した社会の小売店では、生鮮食品というのは 昔から一括りにして「生鮮食品」という単純な商品範疇として扱われてきた。つまり、消費者にとってはバナナ とか、キウイフルーツとか、あるいはオレンジとかどれもこれも単に「生鮮食品」でしかない。買うか買わないか の判断は値段次第ということになる。

しかし時代は変わりつつある。例外的事例が増えていて、果物についていえばブランド化が重要になりつつある。最も有名なのが、発展途上国で作られた農産物や商品を適正な価格で取引し、生産者の生活向上や環境保護につなげようというフェアトレード運動である。リンゴでは「ピンクレディ」、「エンビィ」、「ジャズ」等のクラブ品種が有名であるが、これ等は「グラニースミス」、「ゴールデンデリシャス」および「ロイヤルガラ」を土台にして生まれた品種で、それぞれ特有の持ち味を備えてブランド化に成功している。これらのクラブ品種は値段の安さでではなく、その品質の高さで消費者を惹きつけている。これこそ、ゼスプリがこれまで成功した企業間取引業者から世界的に通用する消費者ブランドオーナーに転進するに当たって、模範とすべきことである。

その際「サンゴールド」は不可欠な素材である。「サンゴールド」は、ニュージーランドの国立研究機構傘下の植物・食品研究所の質の高い研究の成果であり、そう遠くない将来、赤色品種や甘味を備えたグリーン品種も市場に登場するだろう。これ等の3品種はお互いにはっきりとした違いがあり、キウイフルーツのブランド化の促進に有効だろう。しかし、他とははっきり区分できる素晴らしさがあるかというと不十分である。例えば現在ブランド化に成功した例としては、ゴールデンパインと呼ばれている MD2 パイナップル、フロリダのインディアンリバーグレープフルーツ等がある。キウイフルーツに、これらが備えているような他との明白な違いを持たせることが必要だ。

### 世界へはばたく

ゼスプリは自らが特に有利な立場にあることにようやく気付いたところである。つまり世界各地に展開しているゼスプリ組織網を通じた販売窓口一元化システムを利用して世界規模で供給をコントロールできるということ、「サンゴールド」のみでなく、次に作出する新品種についても品種育成者権を確保していること、供給果実の品質及びサービスのレベルを確保するための独立したシステムを確立していること、さらには世界規模で販売促進事業を展開するのに必要な資金力があることである。ゼスプリが2025年の年間売上額45億 NZ ドルという目的達成のためには、これら要素を複合的に組み合わせて活用することが必要である。

そうはいっても、これら4つの要素を組み合わせて展開することは容易ではないだろう。というのは、対外的

にも対内的にもいくつかの問題があり、しかもキウイフルーツは工業製品とは違って日持ちが悪いといった問題を抱えているからである。園芸農業というのは、そもそもハイリスク産業といえる。例えば、一度キウイフルーツ潰瘍病(Psa-V)に罹患した樹体が突然変異したウィルスにより数年後に再び罹患しないということは保証されないのである。もし、キウイフルーツでクサギカメムシ\*\*あるいはミカンコミバエの痕跡が見つかれば、キウイフルーツ生産が大打撃を受けること必定である。

※ marmated strik bug。カメムシの一種で、中国、日本、朝鮮半島等東アジア原生。ニュージーランドへの侵入す確認されていない。

また、世界規模で事業を展開するということは、いつ起こるか予測できない、事業とは全く関係ない政治の判断、あるいは国際的危機によって、とてつもない打撃を受けかねないということである。その好例は、現在欧州の果実輸出業者がウクライナ問題を契機とした対ロ経済制裁で遭遇しているような破局的な打撃(ロシアによる生鮮果実輸入禁止措置)である。さらに、ニュージーランドが生産条件において国際競争の場で(南半球に位置することから)有利な立場にあるとはいっても、地理的条件からして輸送コストの安さを維持できるかどうかにかかっている。

恐らく、組織内部から起こる最も重要で危険な問題は、生産者がゼスプリに対して不満を抱くことである。キウイ産業内部の争いの緩衝役として解決策をまとめるのがキウイフルーツ・ニュージーランド(KNZ)である。この KNZ はゼスプリがキウイ産業において果たすべき役割を適切に行っているかの監視とゼスプリと協力して輸出を行う者の認定を行っている。

KNZ によりゼスプリの協力輸出業者との認定を受けた者のみに輸出を認めるというシステムは、ゼスプリと協力業者双方にとってはまさに共に利益を手にできるウイン・ウインのシステムである。ゼスプリは協力輸出業者を介して営業管轄区外にニュージーランド産キウイを売り込むことが可能となり、ゼスプリによる輸出窓口の一元化に不満を抱く者をつなぎ止める結構なシステムなのだ。

キウイフルーツ潰瘍病(Psa-V)がゼスプリにとって「ダンケルク大撤退作戦」に相当する深刻なことだったとすると、「サンゴールド」の登場はまさに大きな幸運だったといえる。ダンケルク作戦を指示したチャーチルに相当するのが当時のゼスプリ議長の McBtidge 氏である。当時、融資銀行団は「大規模な農場閉鎖を」と主張していたからだ。「サンゴールド」がなく、McBtidge 議長がいなかったら、多分現在のゼスプリはパッとしない多国籍企業に留まり、生産と販売のバランス維持に苦労することになっていただろう。

しかし、必要なものはちゃんと配置されている。その好例が新たな組織機構と、2015年に世界市場の販売拠点として初めてニュージーランド国外に開設されたシンガポール事務所である。もしゼスプリが新機構、新事務所の強みを活用し、目の前に広がっているチャンスをものにできなければ、それこそ非難されるべきことであろう。

### 54. サクランボ栽培の新技術「開閉式被覆装置」

FreshPlaza 電子版 (2018 年 10 月 4 日)



樹体保護の目的で被覆布を数分間で開閉する新技術は作業の効率化をもたらし、コストを削減し、果樹園経営に革新をもたらすものである。

この技術「Wayki」の開発者によると、サクランボの生産者は既に樹体をカバーする布は装備しているが、この技術のお蔭で天候に応じて開閉をより早く行えるようになったと説明している。一人の生産者が1haの果樹園で被覆の開閉を行うのに要する時間は丁度20分ですむという。既存の自動あるいは半自動のシステムでは。開閉に要する時間は長くかかり、労働力も必要となるために結果的にコストが高いという。

Wayki を使うことにより、サクランボは可能な限り被覆を外した自然条件下で栽培でき、降雨や降雹があった時は素早く樹体を被覆することができるとのことだ。 作業者は既存のハンドドリルを用いて巻き取り機構を使うことで開閉作業を行うことができる。

巻き取り機構は果樹園のポールの上に据え付けられている。そして、果樹園を被覆する複数の種類のカバーに対応することができるそうだ。現在、開発を行った会社では、サクランボ以外のブルーベリー、リンゴ、ブドウでも試験を行っているという。

被覆された状態で果実を置く時間を短くし、可能な限り外気に晒すことで、より固く、甘い果実を生産することが期待できる。例えば、常時被覆して栽培した場合は、果実の硬度が次第に小さくなり、甘さもなくなってしまう。

Wayki はチリで開発されたものであるが、同国では、2020年までにサクランボの栽培面積が4万 ha まで増加すると予想されており、南半球から輸出されるサクランボの85%を占めている。しかし、この技術は今回初めて欧州でも導入が始まった。

欧州のWayki 販売会社のLopez は、「世界中で予期せぬ気象災害が増加しており、果樹産業では降雨や降雹の被害が増加している。そして、暴風雨の影響でポールやケーブルなどの基盤設備の被害も増加している。Wayki は気象条件に応じて短時間で被覆を開閉することができるので素晴らしい技術だ。時間も労働コストも削減できることに加え、質の高い果実の生産も可能とするものだ。この技術はチリで実証されているが、イタリアを始め欧州各国の生産者、資財会社、研究者と導入に向けた話し合いをしている」と語っている。

間もなく、イタリア、ノルウェーのサクランボ栽培でこの技術が導入されることとなっているが、チリの生産者の支援の下で、更に欧州での普及を目指しているという。

既に特許が取得されているこの技術は、1樹列当たり350~450ユーロで導入できるとのことだ。勿論、樹列の長さ、ポール間の距離によって導入コストが変わってくる。

参考資料(動画):www.youtube.com/channel/UC7c6u0KCH3PI6OLgBgDt-KA情報源:www.wayki.cl

### 55. この冬オーストラリアから中国へ空路でサクランボを輸出

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 10 月 2 日)



BiteRiot!社はオーストラリアのシドニーの西に位置するカノーボラス山地区で高品質なリンゴとサクランボの生産を行う会社である。同社は、この冬、中国向けに週3回以上の航空便でサクランボの輸出を行うことを目指しており、香港を経由せず直接中国本土に輸出を拡大する上で起爆剤となると考えている。同社は、パートナーとしてTopFruit!社の Vincent Chen 氏と組み、広州と上海に電子商取引を進めるための流通拠点を整備

した。

「これまで取引がなかったスーパーとも提携し、直接小売業者に販売することができる」と説明している。

オーストラリア連邦政府は、昨年、サクランボを中国に空輸するに当たって、プロトコルの見直しに関する協定を締結したが、これにより3日以内に中国の店頭に荷が届くことが可能となった。

「燻蒸処理をしなければならないため、輸出するサクランボは処理に耐えられる最高品質なものに限られる。 サクランボはクイーンズランドミバエが混入しないよう燻蒸処理をするのだが、その施設はシドニーにあり、処理に要する時間も数時間と短い」と同社の Hall 氏は説明している。

サクランボの収穫はクリスマスの頃がピークであり、1月中旬まで続く。BiteRiot!社が栽培している品種は、Sambas、ビング、Chelan、Kordia、Regina、Simone、Sweethearts、Lapins、Sweet Georgia である。

BiteRiot!社は香港、シンガポール、マレーシア、インドネシア、ベトナムにも輸出しているが、これらの国とは直近2か年で照射方式によるプロトコルを採用することより輸出が再開された。



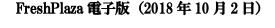
「恐らく70トンを輸出することになるだろう。これが今年の目標である。今年は着果が良く、順調な生育が見込まれる。収穫は11月半ばから始まるだろう」とも語っている。

生鮮果実だけでなく BiteRiot!社では付加価値の高い加工品も生産している。例えば100%のサクランボジュースだ。

「加工品は、品質面では劣るサクランボから生産している。我が社のパートナーはサクランボ酒、リンゴ酒も扱ってくれる。もちろん生食リンゴも販売してくれる。酒は昨年開発したものだ。サクランボジュースは香港、シンガポールに輸出しているが、健康に良く、リューマチや痛風に効果があるとされている」と説明してくれた。

著者:Nichola McGregor 参考資料:www.biteriot.com.au/

### 56. ポーランド産リンゴの中国への輸出





ポーランドのリンゴに関しては、最近メディアから芳しくない情報が流されている。例えば、 労働者の賃金が高すぎる、輸出市場に期待が持てない、明らかな生産過剰だ、といった具合である。しかし、Grupa Sad Export 社の Michal Glijer 氏に言わせると、これらは誇張されており、特に「中国市場へ輸出を行うのは無理な話だ」ということに関しては誇張されすぎているとのことだ。

中国市場へポーランド産リンゴを輸出するという話は2016年から始まった。しかし、Michał Glijer 氏によると、この年はうまくいかなかったそうだ。「事務作業が滞り、シーズン当初から輸

出できるよう準備をしていたが、じっと待たねばならなかった。結局、輸出ができるようになったのは12月中旬から2017年の年明けまでずれ込んだ」とのことだ。

一部の輸出会社によれば、物流にも問題があったという。消費者はポーランド産リンゴを求めていたが、そのニーズは中国中央部からのものであり、荷が到着した中国の東海岸の港からはまだ1500kmも離れていた。結局、目的地に着いたリンゴは品質が劣化していたそうだ。

その次の年(2017年産)もうまく運ばなかった。これは中国側に問題があったわけではない。「春先にポーランドを襲った強烈な霜害で、量的にも品質的にも中国市場で求められるリンゴが確保できなかった」からだそうだ。

この2年続いた不運のせいで、ポーランドのリンゴを中国に輸出することに関しては否定的な情報が流されている。「これはとても不幸なことだ。今年に関して言えば、品質的にも量的にもポーランド産リンゴは非常に良いからだ。千載一遇のチャンスの中で、生産者の多くは輸出認証を受けるための時間がかかる審査を諦めてしまった。本来、輸出業者が費用負担をするべきだ。認証がなければ中国に輸出はできないのだから。しかし、我が社は輸出認証を受けた果樹園から6,000トン分のリンゴを手に入れることができた。今シーズンが終わったときには、中国へのリンゴ輸出に対して適切な評価がなされることを確信している。中国産のリンゴは(春先の寒害で)30%の減収が見込まれている。このため、月を経るごとにポーランド産リンゴに対する関心が高まると考える。加えて、米中間の貿易戦争のことを忘れてはいけない。ポーランド産リンゴの魅力はますます高まると見込まれる。我が社では中国から複数のバイヤーを受け入れ、彼らはポーランド産リンゴの品質に満足してくれた。だからこそ、一度輸出が始まれば、『中国はポーランド産リンゴなど買いたくはない』という話が誇張であることを証明できるだろう」と Michał Glijer 氏は締めくくった。

情報源:www.GrupaSadExport.pl

### 57. インドネシアの果実輸入規制と果物消費

### ASIAFRUIT誌(2018年9月号)

今年になり、新たな輸入規制と輸入承認の遅れが相俟ってインドネシアの果実輸入業者は大変厳しい状況に置かれている。今年前半こそ昨年と同程度の輸入量であったが、このあおりを受け、専門家は2018年の果実輸入量は前年を下回ると予想している。

1月、インドネシア政府は輸入品に対して更なる規制を強化した。例えば、熱帯果実とカンキツ類の輸入禁止を5ヶ月間(5月から8月と11月)行うこととし、リンゴについても3ヶ月間(8月から10月)輸入を禁止し、中国産のカンキツについては全面的に輸入を禁じた。これらの輸入禁止時期は輸入のピークに当たる時期なのに、と主要業者は報じている。

例えば、旧正月の時期には大きく混乱した。というのも中国産のマンダリンが輸入を禁じられたからである。 また、6月は熱帯果実の取引が活発な時期であり、例年、大量のロンガンが輸入されるが、今回の措置で輸入が途絶えたのである。

また、輸入業者によると、2018年の輸入承認の公表が妨げられたことも1月から6月にかけての果実の入 荷量の抑制に関係していると話している。

業者によると、特定品目では必要とされる輸入承認の認可がますます困難になり、時間も余計にかかっているという。そして、インドネシアの輸入規則がめまぐるしく変更されるため、果実の流通業者としては、輸入申請を行う上で何が輸入禁止で、何が輸入可能かの判断さえできない状況に悩まされているようだ。

#### 厳しい貿易事情

東南アジアの輸入会社である Vanguard International で地域担当マネージャーをしている Sukmana 氏は、これらの諸問題があるため今年のインドネシアの輸入量は昨年に比べて減少すると考えており、「インドネシア政府が今以上に貿易制限対象果実の品目や期間を拡大すれば、2018年のインドネシアの輸入果実の販売額は良くて前年と同程度、むしろ減少するのではないか」と話している。Salitrosa Ausasia 社の Jawono 部長もこの意見に賛同し、果実輸入は厳しくなると見ており、「インドネシア政府が輸入に関して厳しい規則を課すとともに全てのカンキツ類に対して期間を定めた輸入禁止措置を講じれば、輸入できる果物は少なくなる」と語っている。この結果、皮肉にも特定の品目に関しては供給過剰に陥ることにもなりかねない。というもの、「輸入業者が扱える果実の品目が制限され、同時期に同じ果実の輸入を競わなければならないからだ」とJawano 部長は説明している。Laris Manis Utama 社の Sim 部長は、今年の前半に輸入業者が被った影響の一端は消費者の購買意欲の低下にも原因があると語っている。例えば、2017年にはラマダン月に需要が旺盛であったナツメに対して消費者が購入を控えたからだ。貿易会社の SHB Group でゼネラルマネージャーを務める Song 氏も、今年は消費者の購買力が低下していることを認めており、「このことは近代的な小売業界の業績からも見て取れる。昨年の同時期の売上よりも減少しているからだ」と説明している。

### WTO の反応

この間、国際社会はインドネシアが講じた輸入規則に対して異議を唱えてきた。

6月、インドネシアは輸入規則の改正を行った。インドネシアが行ってきた実質的な輸入割当は世界貿易機関(WTO)が定める協定に違反しているとされたため、同国が発行していた園芸作物に関する「輸入勧告(IR)制度」(輸入制限)を見直した。しかしながら、改正された規則においてもインドネシア政府園芸局長は国産果実の供給事情を勘案して輸入数量や輸入時期に制限を加える権限を付与しているのである。

この間、米国とニュージーランドは WTO の場でインドネシアを相手に係争してきたが、米国は賠償請求が行えるとの結論が出された。

#### 別の視点で見ると

しかしながら、専門家の中には、インドネシアの輸入規制により国内の果実供給業者は限られた種類の商品を消費者に届けるために一層の工夫をしなければならなくなったことは天恵だと捉える人もいる。前出の

Sukmana 氏は、「様々な産地で生産された果実の中から新しい品種を選んだり、どういったパッケージが良いかを考えたり、パッケージのデザインを工夫する上で良い機会だ。小売業者と卸売業者は消費者と向き合い、購入金額に見合う品質、味、香りなどの価値をもっと勉強すべきだ」と語っている。

変わりゆく市場ニーズに適切に対応することは不可欠である。例えば、Vanguard International の関連会社はペルーのイカで、種無しブドウの生産を拡充し、新技術を駆使しながらインドネシアの消費者に好まれるような美味しく素晴らしい品質の商品を提供しようと努めている。

Jawono 部長も、市場は甘く、歯触りが良く、日持ちが良い新しい品種を求めており、「ミレニアル世代は生鮮 食品に対して健康に良いことを求めている。そして、より魅力的で衛生的なパッケージを好んでいる」と語っ ている。

### パッケージ革命

インドネシアの近代的小売店では、事前にパッケージされた果物の割合がますます増加している。とはいえ、ある輸入業者によれば、「大部分の消費者はバラ売りの果物を好み、パッケージされたものでもわざわざ破って中身を確かめる」と語っている。

Sukmana 氏は、小売店へパッケージさえた果物を配送するドライバーは、より多くの量を扱えるようになったことを喜んでいるとし、「商品をつかんで消費者に手渡すにも便利で、減耗も少ないため、小売店にとって商品コストは結果的に小さくなる。パッケージを通じて直接消費者に教育を行えるし、味や香り、魅力や食べ方などを伝達できる」と推奨している。

課題は、インドネシアの消費者が信じている、「パッケージは果物の品質が悪くなった時にするものだ」という誤った考えを如何に改めるかだ。

ささいな問題のようにも見えるが、こういった問題に対応するため、Sim 部長は独自のブランドを立ち上げ、そのアンバサダーとして女優、アーティスト、インドネシアで有名なシェフなどを活用している。このブランドは、健康によいこと、衛生であること、コールドチェーンを通じて流通していること、最高品質であることを売りにしており、「この方法で消費者の果物のパッケージに対する認識を変えたい」と語っている。

### 販売促進活動が要

業者によると、インドネシアの小売業界では、ブランド化された果物の量が増加しているため、販売促進活動がますます頻繁に行われるようになったとのことだ。ジャカルタ市内のスーパーでは週末の販売促進活動は普通に見られるようになっており、スカウトされた人で構成された特別チームによる活動が行われている。

ブランド次第でサプライチェーンが活性化する場合もあるし、衰退する現象も見られるようだ。消費者はブランドに秘められた背景に興味を示し、卸売業者はブランドの評判を踏まえて購入を決めている。

「ブランドの力を高め、消費者とのコミュニケーションを進めるためには販売促進活動が不可欠である」と Sim 部長は力説している。

Aeon Indonesia のシニアマネージャーである Saputra 氏は店舗内の販売促進活動が特に重要だとし、「我が社で果物を販売したいとする供給業者には、販売促進活動とブランド戦略を要求している」と語っている。

Saputra 氏は、販売促進活動とは単に値引き販売や衝動買いを促すための試食を指すものではなく、ブランドを消費者に根付かせることだ、と考えており、「消費者はしばしば『知っているから』、『品質に信頼を置いているから』という理由で特定のブランドだけを購入する。そこで、インスタグラムやフェースブックを使い、消費者に新しいブランドの紹介だけでなく、朝市、料理会、有名人を呼ぶイベントなどの情報を提供している」と説明している。

### 58. 中国のキウイベリー生産

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 9 月 28 日)





「丹東市のキウイベリーの収穫は8月31日始まるが、今年の生産量は昨年の50トンから倍増して100トンとなる見込みだ」と Dandong Risheng Linsheng Eco-agricultural Development 社の市場部長の Yu Wenxin 氏は語った上、以下の説明をしてくれた。

生産量の急拡大の要因は幾つかあるが、第1はキウイベリーの果樹園が四方を山に囲まれた丹東の盆地に存在しているという自然的要因である。このため、4月から6月にかけての寒害から果樹を守ってくれる。加えて病害虫の侵入をも防いでくれる。第2は過去6~7年の間に人力で大規模な基盤整備を行ったことだ。これらがキウイベリー生産に適した生育環境を生んだ要因だ。

中国でのキウイベリーの歴史は比較的浅い。消費者が知らないだけでなく、小売り業者もほとんど知識を持っていない。加えて、生産物の流通範囲もごく限られている。

中国における主な産地は、四川省の雅安、遼寧省の 丹東であるが、丹東の生産量は雅安よりも多い。丹東に とって雅安は競争相手ではない。というのも雅安で栽培 されているキウイベリーは海外から導入された品種であ り、形も味も違っているからだ。加えて、両地域の出荷時 期も異なる。

我々の会社が優れている点は、キウイベリーの生産、加工、販売まで一貫して行うビジネスを展開していることだ。会社として製品の品質管理を自在に行うことができる。最も品質の良い果実は生鮮品として販売されるが、品質がやや劣るものはキウイベリージャムやキウイジュースに加工され、中国国内だけでなく海外に輸出されている。





加工されたキウイベリーは過去2か年で急に人気が出てきた。一番大きな理由は加工品が鮮やかな緑を保つことだ。キウイベリー加工品を使ったケーキは緑のままだ。このようなことは他の果実では不可能だ。キウイフルーツは加工の過程で黄色に変色し、アボカドは加工の過程で臭気が発生する。加工品の40%は国内のレストランに出荷されるが、残りの60%は日本に輸出されている

キウイベリーを大々的に生産している果樹園は中国国内にはほとんどない。しかし、ほとんどの果樹園は果実の生産とともに苗木の生産も行っている。このため、キウ

イベリーの樹は増大しつつある。一部の生産者はより早く出荷し、市場シェアを高めようとしているが、こういった行為は果実の品質を悪くするだけである。これでは消費者の印象が悪くなり、市場の拡大を妨げることになる。我々は、キウイベリーの発展のためには広範に規格・基準を設けることが唯一の道と考えている。 情報源:http://www.rslny.com

## 59. ワシントン州のリンゴ生産量は昨年よりも少ないが品質は良好

The Packer 電子版 (2018 年 9 月 20 日)



左:ワシントン州 Rainier Fruit 社で栽培中の品種レディー・アリス

ワシントン州のリンゴ生産量は期待していたほど多くはなさそうであるが、それにも拘らず生産者や出荷業者は品質の良い果実を多く収穫できるのではないかと見ている。

全米リンゴ協会が8月下旬に公表した2018年のリンゴ生産・市場予測によると、ワシントン州のリンゴ生産 量は1億5,500万箱としており、米国農務省による8月の生産予測である1億7,140万箱よりも10%少ないも のであった。

そして前年に比べた生産量は13%少なく、過去5か年平均よりも5%少ない数字である。

ワシントン州ワナッチーのワシントン果樹協会会長である Jon DeVaney 氏によると、この夏に収穫が始まって、初めて生産者は収量が少ないと感じ始めたという。生産者によると、「樹体の表面に着果している見栄えの良い果実と樹体の内部に位置する果実がある」とのことである。つまり、樹体の外側にある果実は成熟していても内部の果実は熟していないということだ。「収穫に当たっては果樹園を何回か往復しなければならない」と会長は語っている。

ワシントン州ヤキマの Domex Superfresh Growers 社の広報担当マネージャーの Gipe-Stewart 氏は、今年は火傷病にも注意を払う必要があると語っている。「開花期の間、暑く降雨があったため、火傷病には不利な気象条件であった。一部の果樹園ブロックでは火傷病の影響で伐採を行ったが、他にも改植を行わなければならない園地がある」と説明している。一方で良いニュースもある。「今年のリンゴはサイズが良好で糖分も多く、着色も良い」と Gipe-Stewart 氏は語っている。

ワシントン州 Selah の Rainier Fruit 社で事業開発担当副社長をしている Tudor 氏は、「今年は生産者にとってかつてないほど火傷病が問題になっている。とても大きな課題で、誰もがこの問題に取組んでいる」と語っている。

ヤキマの Sage Fruit 社で販売・市場担当を指揮する Sinks 氏は、8月下旬にブリティッシュ・コロンビア州で発生した山火事の煙が着色に影響するのではないかと心配していたが、今では着色のための時間は十分あると考えているようだ。生産者によれば、この時期の薄曇りの天候で気温が低下したとみている。「これまでのところ、品質は素晴らしいと思われる」と Sinks 氏は語っている。同氏は Sage Fruit 社の生産量は十分確保できると考えているようだ。

ワシントン州シュランの Chelan Fresh Marketing 社でマーケティング部長をしている Riggan 氏は、収量は昨

年よりも幾分少ないと考えている。同社の樹園地の多くは隔年結果の裏年に当たるからだ。「しかし、全体的に見るときれいな果実が生産できそうだ。サイズも大きく、80玉、88玉が例年よりも多い」と説明している。しかし、有機リンゴの生産量が増加することに関してはやや心配をしているようだ。ワシントン州では今年有機リンゴの生産量が30%増加すると見込まれているからだ。「課題は生じるだろうが、生産量の増加で有機リンゴに対する需要も増加するだろう」と語っている。有機リンゴの増加で、生産者は時には望ましくない価格で販売せざるを得ないだろう。しかし、反面、これまで有機リンゴに手が出せなかった消費者が購入してくれるかもしれない。「もし有機リンゴに価値を見出したなら、翌年には新たな顧客となるだろう。これこそ需要を拡大する方法だ」と Riggan 氏は語っている。

Rainier Fruit 社では8月下旬から慣行栽培と有機栽培のガラ、ハニークリスプの収穫を始めている。同社ではグラニースミスを除いて9月下旬までに全ての品種の収穫を終える予定だ。果実の糖度は通常レベルよりも高い。「特にガラは際立っている」と Tudor 氏は語っている。

ワナッチーの Stemilt Growers 社の販売部長 Pepperl 氏によると、「市場価値が高い」とされる同社の新品種 Rave を今年初めて販売するとのことだ。品種スウィータンゴの収穫は8月下旬から始まっている。「スウィータンゴの品質はこれまでで最高だ」と語っている。収穫の開始は例年よりも遅かったが、終わりは7~10日早いとのことだ。

著者:Tom Burfield

### 60. 中国の早取りリンゴは記録的高値

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 9 月 28 日)



中国では早取りのリンゴの収穫が終わりに近づきつつある。今年の価格は過去数年に比べて大変に高い。 これは、今後収穫されるリンゴの価格に好影響を与えそうだ。現在の価格は過去にない記録的水準となっている。市場環境はとても良好で、果樹園の経営者の中には収穫、梱包、輸送に先だってリンゴが色付くのを 待たないで出荷するものもいる状況だ。需要は供給を上回っている。

生鮮リンゴの価格も貯蔵用リンゴの価格も利益が出る水準である。これは悪天候に見舞われたため生産量が減少したためである。しかし、だからといって流通業者は楽観視することは控えるべきだ。というのも、リンゴの価格は量だけで決まるわけではないからだ。

早取りリンゴの価格は中秋節を迎えて更に上昇しそうである。加えて、最近の甘粛省、陝西省、山西省、河南省、山東省における降雨により、品質の高い「ふじ」を確保する当たり支障が生じる恐れがある。リンゴの価格は、流通業者が貯蔵用リンゴを購入し始める国慶節(10月1日)までは上昇が見込まれている。

情報源:iFresh Fair

### 61. チリが日本市場にレモンの売込み

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 9 月 28 日)

チリカンキツ委員会は栄養豊富で抗酸化作用がありしっとりさせる効果があるチリ産レモンの日本市場での販売促進を目指している。チリ産レモンはビタミン C が豊富であり、日本の夏の期間中を通じて販売活動を進めている。この活動に際しては、様々なスローガンを用いている。例えば、「チリ産レモンは日本の夏が旬」、「栄養豊富なことは健康に良い」といった具合である。

ウェブサイトの https://chile-lemon.com/(日本語)では、販売促進とともに、チリ産レモンの普及宣伝活動を行っている。このサイドでは、チリ産レモンを購入できる期間や特色、市場のデータなどが掲載されている。

このウェブサイトを通じ、日本の消費者はチリが日本とシーズンが逆であること、このため6月中旬から10月まで日本国内で入手可能であることなどを知ることができる。

加えて、チリの地理的条件から、南半球における主要な生鮮果実輸出国であることが理解できるようになっている。また、国際的にも高水準にある農業生産工程管理(GAP)に基づき生産されていることも説明しており、新鮮さや高品質な農産物を求める日本の消費者にアピールを行っている。さらに、持続的な方式により生産されていることも示している。そして、チリ産のレモンが品質、味、色、硬度、香りの点で際立っていることを説明している。

最後に、このサイトでは市場データも提供しており、この中ではチリから日本に輸入されるレモンの量、日本市場におけるチリ産レモンのシェアが掲載されている。

これらの活動はチリ政府の貿易振興局(ProChile)の支援により行われている。

チリカンキツ委員会のレポートによると、今年のレモンの極東への輸出量は、第37週(9月22日まで)までに21,969トンであり、2017年の同時期までに輸出された量とほぼ同じである。この内、日本に輸出されたのは83%であり、2017年に日本に向けて輸出された輸出量である18,139トンと同程度である。

情報源:Chile's Citrus Committee-ASOEX

注) 文章中のウェブサイトで以下の説明文が掲載されています。

「日本のチリ産レモンの輸入は 15 年以上前から安定的に推移し、2017 年の輸入量 は、米国産の 30,108トンに次ぐ 18,195トンであり、総輸入量の 36%を占めています。またチリは季節が日本と逆のため、6 月中旬~10 月に日本市場に品質の良い状態のものが出回り、この時期のチリ産レモンは輸入量全体の 74%を占めています。」

### 62. 米国のカキ販売状況

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 9 月 21 日)

米国では早生のカキの収穫が始まり、カキのシーズンが始まったばかりである。今年、米国市場ではニュージーランド産の富有がこの先の数週間、市場に登場した。カリフォルニア産の富有の収穫はあと1~2週間待たなければならないため、ニュージーランド産の富有はこの間のギャップを埋めるものとして輸入されている。この間、ニュージーランド産の富有と並んで、「チョコレート富有」と呼ばれるカキ(米国産)も出回っている。Coosemans 社の Cole Firman 氏によると、「我々の『チョコレート富有』は9月7日から販売を始めている。ニュージーランド産の富有はカリフォルニア州における僅かの間の供給ギャップを埋めるものだ。カリフォルニア州以外で現在流通しているのは『チョコレート富有』だけだ。カリフォルニア州産の富有は来週にも出荷が始まる」とのことだ。

カリフォルニア州産の富有が入荷し始めるとニュージーランド産の販売は難しくなり、米国市場からは撤退して、本来の市場に向けて出荷されることになるという。「カリフォルニア産の入荷が間近になったため、ニュージーランド産の今後の出荷はキャンセルされた。ニュージーランド産のカキは米国市場で売り切れた後はアジア市場に向けて出荷されるだろう」と Firman 氏は語っている。



### 始めは高く、次第に安値に

シーズンが始まったばかりで、市場価格は高値でスタートしたが、 カリフォルニア州産の富有が潤沢に出回ると価格は下がると見込 まれている。

Firman 氏によると、「今年のカリフォルニア州のカキは豊作の見込みだ。出荷初期には高値で始まるが、10月に入荷が多くなれば価格は下がる。まだ夏の暑さが残ってはいるが、消費者は既に秋の農産物を見るのに慣れている」と説明している。

ところで、「チョコレート富有」というカキは富有や蜂屋とは全く別の品種である。Firman 氏の話では消費者に馴染み易いように使っている販売用の名称であるそうだ。「本当の品種名は『鶴の子(ツルノコ)』で、最も早く収穫でき、食べると富有に似ている(原文ママ)。本来の品種名では消費者が理解しづらいのでチョコレートとした。カリフォルニア産の『チョコレート富有』は来月まで出荷できる」とのことだ。



### カキに親しむ消費者は増加

流通業者の認識では、外国産の果物に中では他の果物よりもカキは 米国の消費者により親しまれていると考えているようだ。富有と蜂屋は2 大品種であるが、後者の方は食べる前に熟す期間が必要だ。

「富有にはリンゴのように固い時期に食べる方法とアボカドのように熟す時間を置いて柔らかくなって食べる方法がある。カキは美味しい果物であり、店頭に並べば秋を思い出させる。年を重ねる毎に販売は増加し

ている。消費者は新しい味を試してみたいと思っており、カキは外来の果物の中ではより多くの人が知っている」と説明している。

Coosemans 社はカリフォルニア州産以外にも海外からもカキを輸入し、ほぼ年間供給している。販売はトレーにパックした状態で行うのが普通だが、カリフォルニア州産が潤沢に出回るときはバラ売りも行っている。カリフォルニア産の富有と蜂屋は10月から2月まで販売される。その後3月は供給できなくなるが、4月以降7月まではチリ産を販売している。ニュージーランドからのカキはトレーの上にプラスティックフィルムを覆い輸送中の振動を避けるように工夫されていた。

著者:Dennis Rettke 参考:www.weshipproduce.com

### 63. チリの果実輸出の増加はサクランボが牽引

### FreshFruitPortal 電子版(2018年9月17日)



チリの果実輸出は、1月から8月までの間18%増加し、輸出金額(FOBベース)では46億米ドルに達したが、これはサクランボの輸出拡大が牽引したものである。

この8ヶ月の間、サクランボの輸出額は187% 増加し8.56億ドルに達したが、他にもブルーベ リーは36%増加し4.84億ドルに、スモモは1 5%増加し1.58億ドルに達した。

これらはチリの貿易促進機関である ProChile (チリ外務省輸出振興局)が最近公表した数字に基づいている。

2017/18年シーズンのサクランボの輸出量は、

前年に比べてほぼ倍増し18万トンであった。

果実の輸出の増加は、同じ期間のチリの総輸出額の増加(銅の輸出を除く)率である15%増に貢献しており、銅を除く輸出額は270億ドルであった。

ProChile の Jorge O'Ryan Schütz 部長は、「このことは、チリにとって大変素晴らしいことである。全ての輸出産業分野が好成績をあげており、銅を除く輸出額としては統計を取り始めて最高の金額となった。今後も付加価値を高め、輸出品目の多様性を図ることが重要だ」とコメントしている。

### 果樹の主産地オイギンス(O'Higgins)州ではサクランボの栽培面積がブドウを超える

チリにおけるサクランボの主産地はオイギンス州であるが、Ciren(チリ天然資源情報センター)の統計によると現在の栽培面積は13,699haであり、2015年の5,024haから58%増加している。

このことは、2015年から9%しか栽培面積の増加がなく、現在13,435ha のブドウよりも栽培面積が多いことになる。 つまり、オイギンス州で最も栽培面積が多い果樹はサクランボとなった。

品種別に見ると、増加が著しいのは Lapins と Satina であり、この間に栽培面積は倍増し、それぞれサクランボの栽培面積全体の1/4を占めている。

### 64. 米国でこの秋カキの新品種を発売





米国の Giumarra 社は、この秋新しいカキの品種である Sugar & Spice (登録商標名)を販売すると公表した。この新しいカキは従来からの品種である蜂屋に形状は似ているが、食感は甘柿の富有に近いという。

Giumarra 社の販売担当部長である Jeannine Martin 氏によると、「昨年の秋、特定の消費者に Sugar & Spice を試してもらったところ、味に対する評価は上々であっ た。大変に甘く、焼いたスパイスとバニラを合せたような

ユニークな風味で、食感は富有のようにパリパリ感がある。また、家に置いておいたら、アボカドが熟するように果肉はクリーミーにとろける」と説明している。

Sugar & Spice はカリフォルニア州のサン・ホアキンバレーで生産されており、10月中旬から販売されるという。

Giumarra 社の西部地域ビジネス担当部長の Kellee Harris 氏は、「我が社の占有品種を秋のパーティーで披露し、カキの生産を拡大したい。 Sugar & Spice はカリフォルニア州独自のカキであり栄養が詰まっている。 サラダやデザートに彩りを与え美味しい味を提供してくれる」と力説している。

Sugar & Spice は Giumarra 社が秋の贈物として、従来品種の蜂屋と富有を取り込んで作り上げた作品である。

Harris 氏は、「Giumarra 社は新たにカキのラインアップに Sugar & Spice が加わったことにより、米国カリフォルニア州で最大のカキ生産会社になった。富有の出荷は始まったばかりだが、カキの販売は12月まで続く予定だ」と語っている。

# 6 5. 「2018 年リンゴ産業見本市」で東方諸国に焦点を当てた会議を予定 FreshPlaza 電子版 (2018 年 9 月 13 日)

2年に1回、リンゴ生産業界が集い開催される第11回リンゴ産業見本市(インテルポーマ)は、2018年11月 15日から17日の日程で、イタリアのボルツァーノ市(トレンティーノ=アルト・アディジェ州、南チロル地方)の 展示貿易センターで開催される。 見本市では新しいアイデアや新品種などの紹介が待たれるが、各種イベントの中で注目を集めているのは「世界のリンゴ会議」だ。 そして、この会議ではポーランドから日本に至る東方諸国の詳細かつ包括的なリンゴ産業の全容が紹介、議論されることになっている。

会議の主催者でコーディネーターである Kurt Werth 氏は、予定されるテーマについて以下のように紹介してくれた。



ポーランドから極東に至るまでの地域のリンゴ産業で何が起っているかを詳細に見ることは有意義なことである。この計画は、AgroFresh 社の欧州及び中東担当ディレクターの Jochen Kager 氏と共同で進めているものだ。

ポーランドのリンゴ生産量は今年450万トンと予想されており、記録的な数字であるとともにイタリアの生産量の2倍に相当する。従って、ポーランドのリンゴ生産は他の国・地域と切り離して別個のものとして扱うべきだ。

それから、新興諸国のリンゴ産業にも、もっと焦点を当てるべきだ。例えばロシアについて議論をしたい。ロシアではコーカサス地域におけるリンゴ生産のために農地や施設に投資が進められている。例えば、カバルダ・バルカル共和国では過去5年間に数千本の新植が進められており、苗木はオランダやイタリアから導入されたものである。これらは旧ソ連時代の果樹生産と比べると全く新しいとは言えないが、大企業が果樹生産に投資をしているという観点からは目新しいものであり興味をそそられる。

次は中央アジア地域に目を転じたい。ロシアはこの地域ではリンゴ生産を行っていないが、この地域ではいくつかの際だった特徴があり急速に発展を遂げている国がある。旧ソ連に属していたウズベキスタン、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタンである。それから、トルコについても取り上げたい。トルコは伝統的なリンゴ生産国であるが、新しい生産装備が投入されつつある。これら諸国では大きな変化が起りつつあるが、農学的観点から見ると全て順調とは言えず、問題も少なからずある。コンサルタントや専門家が支援しているにも拘らず、例えば不適地に果樹が植栽されている場合があるからだ。

それから、イランについても議論をしたい。イランは世界のリンゴ大生産国であり、量的にはイタリアやトルコよりも生産量は多いが、生産技術は時代遅れである。

極東に入る前に、バルト諸国、クロアチア、スロベニア、チェコ、スロバキアなどの中・東欧諸国のことも取り

上げる予定だ。

極東についてだが、私は個人的に韓国、北朝鮮の両国を訪問した経験がある。ところが、北と南では様相がまるで異なっている。韓国は南チロルに似て小規模な家族農業により集約的なリンゴ生産が行われている。一方、北朝鮮では専ら国家によりリンゴ生産への投資が進められているが、しばしば不適地に栽培されていることがある。

東方へのリンゴの旅は日本で終わる。この国でのリンゴの生産は他のどの地域とも異なる。値段は欧州の 十倍するが、必ずしも十分完璧なリンゴというわけではない。ここでは美的要素が基本的に重要視される質 の高い研究が行われている。そして生産は非常に労働集約的であり生産コストを押し上げている。日本のリ ンゴ生産量は南チロルの生産量(100万トン)より僅かに少ない80万トンである。

アジアの中ではインドは特別である。生産という面では特別興味を惹かれる点はないのだが、別の観点から無視するわけにはいかない。インドの人口は中国に近い15億人であるが、リンゴの生産量はわずか200万トンである。つまり、全てのインド人が年間2~3kgのリンゴを消費することになれば、年間で300万トンが不足することになるのだ。南チロルはこの問題を身近に感じており、インド市場を開拓している。しかし、そうは言ってもインドは遠く、日持ちがする品種を大量に揃えなければならないという未解決の問題がある。

そして中国に関しては特に時間を割いて個別の議論をしたい。中国は世界で最大のリンゴ生産国であり、その生産量は4,300~4,500万トンである(世界のリンゴ生産量は8,300~8,500万トン)。中国に関する議論が青島農業大学の Yuan Yongbing 教授と進めることとしている。

「世界リンゴ会議」は第11回リンゴ産業見本市の開催期間中、11月15日、16日に行われる予定である。

参考情報:www.fierabolzano.it/interpoma/

### 66.「初物ふじ」で欧州のリンゴ市場を席捲

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 9 月 12 日)

フランスのリンゴ輸出業者ブルー・ホエール(Blue Whale)は年間で5週間だけ「初物ふじ(Fuji Primeur)」というブランドのリンゴを販売している。同社の Marc Peyres 氏は、「『初物ふじ』は早生の品種で9月と10月に市場に出回る。普通のふじよりは1ヶ月早く出荷している。他との違いを強調するためにブランドを立ち上げた。確かに着色は悪いが、味は他のリンゴよりも素晴らしい」と語っている。

ブルー・ホエール社は既にフランスとスペインでこのブランドを確立した。「我々の目標は北部欧州でこのブランドを売込むことにある。欧州では自国産の果物を購入する傾向が強い。しかし、どこで生産されたかというよりも、味の方が重要だ。『初物ふじ』は他の品種よりも優れたものを持っているからだ」と説明している。

#### スペインで販売

スペインでは『初物ふじ』の大々的な販売促進活動が行われた。「マドリード市場でのバナーの展示に続いて、マドリードとバレンシアの市場の中でイベントを行うことにしている。また、マドリード、バレンシア、バルセロナの果物販売店で試食会や消費者参加のゲームを行う企画も準備している。こういった販売促進活動はスペインでは好評だ。スペインは、小売市場の大きさではフランスに負けるが、ブランドが幅を効かせる市場だ」とも説明している。



### (左)マドリード市場で展示されているバナー

「想定したよりも早くブランドを確立することができた。市場に出してから3年経過したが大変うまくいっている。5週間で3,000トン近い販売が可能だ。つまり需要があるということだ」と語っている。

#### 課題

欧州全域で「初物ふじ」を販売するには課題もある。「『初物ふじ』は大変甘くてジューシーだが、欧州の消費

者は一般に酸味のあるリンゴに親しんでいるからだ。しかし、北部欧州の市場では多くの消費者が『初物ふじ』 のように甘いリンゴ興味を持ってくれると思われる。8月の夏休みを南欧で過ごした北部欧州の消費者にこの甘いリンゴを届けたい。それができれば、この地域のリンゴ消費量を拡大させることができる」と期待を寄せている。

#### アジア市場

ブルー・ホエール社は9月上旬に香港で開催されたアジア・フルーツ・ロジスティカに出展した。しかし、「アジア向けのリンゴの輸出は依然として難しい。欧州産のリンゴはアジアに供給されているリンゴのたった1%に過ぎないのが現状だ。理由は欧州産リンゴの味覚がアジア市場に向いていない、つまり甘くないからだ。欧州ではアジアに向くリンゴの量は十分にない」と語っている。しかし、今年はアジア市場に期待を寄せている。「世界的に見て、今までにないような明るい材料がある。中国を襲った霜害は、昨年欧州で経験した霜害よりも深刻だからだ。中国でリンゴが枯渇すれば、中国産リンゴよりも甘くなくとも欧州産リンゴを購入してくれるだろう。(欧州産リンゴは)クリスマス前後に市場取引が活発になるのではないか」と話している。

フランス産リンゴの輸出にとってもう一つのプラスの点は、米国の中国に対する制裁措置である。「中国が米国産リンゴに課した報復関税により新しい可能性が見いだせる。しかし、この好機は長期的観点に立ってブルー・ホエールから中国に味の良いリンゴを輸出することに利用することが必要だ。来年になれば中国産リンゴは生産過剰になりそうなのだから、来年の成功のために備えをすることを忘れてはならない」と締めくくった。

著者:Elselien Treure

参考情報:www.blue-whale.com

### 67. 中国市場で需要が旺盛だったカナダ産サクランボ

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 9 月 10 日)

2018年、カナダのブリティッシュ・コロンビア州は高品質なサクランボを供給して幕を閉じた。Jealous Fruits 社の Julie McLachlan 氏は、「今シーズンの出荷は8月23日に終わった。開花日らすると9月3日が最終の出荷日となる見込みだったが、夏の暑さの影響で成熟が進み、出荷の切り上げが早まった」と説明している。収穫の終了は早まったものの、Jealous Fruits 社としては2017年よりも生産量はやや多かったそうだ。同社は既に来年を見据えている。というのも生産量が大幅に拡大する見込みであるからだ。「果樹園の一部はまだ商業生産に至らない若い樹で構成されているが、来年になれば商業生産が可能となる」とのことだ。



### シーズンを通じてサポートがあった

「米中間の貿易紛争のお蔭で、中国市場におけるカナダ産サクランボに対する需要は熱狂的ともいえた」とMcLachlan 氏は語っている。カナダ産のサクランボの出荷シーズンが始まるやいなや多くの顧客は競って買い求めてくれた。そして、このような顧客によるサポートはシーズンを通じてあったようだ。「中国からの需要は多かったが輸出量を増加するわけにはいかなかった。出荷シーズン前にタイ、米国、ベトナム、ドバイなどの顧客に出荷の

約束をしていたからだ」と説明している。ブリティッシュ・コロンビア州サクランボ協会からの公式発表は未だ行われていないが、今年のカナダから中国への輸出量は昨年を上回ったと思われる。

#### 日本市場への進出

Jealous Fruits 社は上記以外にも欧州、台湾、シンガポール、マレーシアなど世界各地にサクランボを輸出しているが、日本も新たな市場として輸出を目指している。今年、カナダは日本への試験輸出が認められ、2019年には本格輸出が可能になると見込まれる。日本市場はカナダにとって大きな可能性を秘めている。2017年の日本のサクランボの輸入量は6,300万カナダドルもあったからだ。

著者:Marieke Hemmes

参考情報:www.jealousfruits.com



### 68. カナダ産サクランボが日本市場へ

### FreshPlaza 電子版 (2018 年 9 月 7 日)

「カナダのブリティッシュ・コロンビア州産のサクランボを日本市場へ輸出することになった」と Lawrence MacAulay カナダ農業大臣と国会議員の Stephen Fuhr 氏が公表した。

カナダ政府によると、年間600万ドルのサクランボの輸出を期待しているとのことだ。カナダは環太平洋パートナーシップの包括的及び先進的協定(CPTTP)に加盟しているお蔭で、アジア市場へは有利に参入することができる。

日本市場においてはサクランボの輸入関税は現在8.5%であるが、CPTTP によると5年で関税が撤廃されることになっている。

ブリティッシュ・コロンビア州サクランボ協会の Sukhpaul Bal 氏によると、「生産者と業界は日本との消費者の間で長期的な関係構築を熱望しており、日本の小売店でカナダのカエデマークの付いたサクランボが陳列されることを待ち望んでいる」とのことだ。

昨年、日本では4,800万ドルにのぼる生鮮サクランボを輸入したことは注目に値することである。

情報源:fruitnews.ru

(訳注:情報源はロシアで運営する世界の果樹産業情報を対象とするウェブサイト。9月3日に電子版としてリリースされたものです)

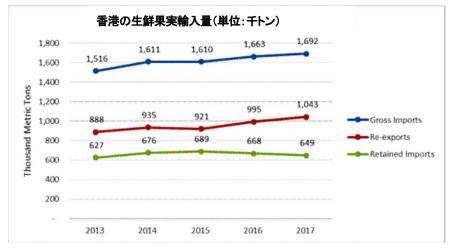
### 69. 香港の輸入果実市場

### 米国農務省海外農業局 GAIN レポート (2018 年 9 月 4 日)

#### 1. 概要

香港は金額ベースでは第5位の米国果実の輸出先地域である。香港では米国産果実は高い評価を受けている。米国以外にも香港市民は世界中から様々な果実を輸入し消費している。消費者の生活習慣の変化と健康に対する意識の向上に伴い、既に定着しているリンゴ、オレンジ、バナナに加え、新たな品目・品種に対する需要が高まっている。人々はスマートフォンやソーシャルメディアを通じて情報を得ているため、季節性、栄養価、新規性に富むものを求める傾向にある。350ドル以上する日本産のスイカから年間を通じて人気があるネーブルオレンジに至るまで、香港は169万トンの生鮮果実を輸入し、金額ベースの輸入額は26億ドルにのぼる(2017年)。そして、輸入は過去5か年で増加傾向にある。





出典:Global Trade Atlas based on Hong Kong Census and Statistics Department(以下同樣)

香港は地理的近接性があること、調達に関する専門家を多数有していること、輸送網が効率的であることから、単にダイナミックな市場というだけでなく、中国本土への再輸出においても重要な役割を担っている。20 17年には輸入された果実の約60%が中国本土に再輸出されている。一方、米国産果実に関しては、再輸出は金額ベースで45%であり、香港の消費者の米国産果実に対する需要が根強いものがあると言える。生鮮果実の価格や量の変動に応じて、輸入業者は市場状況を見極めつつ、香港内で販売するか再輸出するかを決定している。

香港における果実生産量は、土地面積が小さく人口密度が高いことから取るに足らない量であり、果物の

供給は、年間を通じて海外に依存している状況にある。

香港の生鮮果実の国別輸入金額

輸入先国			輸入額	2017年の	平均増加率			
期八元国		2013	2014	2015	2016	2017	シェア	十均垣加平
合 計	総輸入額	1,716	2,186	2,201	2,595	2,635	100.0%	11.3%
	再輸出割合	50%	51%	55%	60%	60%	100.07	11.5/
1. チリ	総輸入額	341	406	448	759	640	24.3%	17.0%
1. 77	再輸出割合	79%	69%	78%	78%	81%	24.5/0	17.07
2. タイ	総輸入額	321	432	444	495	442	16.8%	8.3%
۷. ۲۱	再輸出割合	91%	88%	93%	93%	96%	10.0/0	0.37
3. 米国	総輸入額	416	484	393	393	406	15.4%	-0.6%
5. 不固	再輸出割合	32%	34%	32%	34%	45%	13.4/0	-0.07
4. オーストラリア	総輸入額	144	164	180	197	231	8.8%	12.5%
4. オーヘトフリア	再輸出割合	12%	26%	28%	64%	56%		12.5%
5. 南アフリカ	総輸入額	85	161	149	155	220		26.7%
ひ、用 ア ノリカ	再輸出割合	46%	56%	56%	53%	61%		20.77
6. 中国	総輸入額	88	94	110	131	144	5.5%	13.2%
0. 中国	再輸出割合	16%	115	13%	5%	10%		13.2/
7. ペルー	総輸入額	47	97	11	83	98	3.7%	20.0%
7. * 170—	再輸出割合	80%	88%	97%	89%	84%	3.7/0	20.07
8. 日本	総輸入額	27	38	58	68	84	3.2%	33.4%
0. 日本	再輸出割合	8%	2%	4%	3%	1%	3.2/0	33.4/
9. フィリピン	総輸入額	65	75	74	70	72	2.7%	2.5%
9. 71700	再輸出割合	3%	16%	10%	3%	3%	2.7/0	2.5/
10. ニュージーランド	総輸入額	41	49	47	46	50	1.9%	1 00
10. ニューシーフント	再輸出割合	12%	14%	15%	13%	22%	1.9%	4.8%
	総輸入額	141	185	187	199	250	0.5%	15.49
てい世	再輸出割合	35%	25%	28%	27%	34%	9.5%	15.4%

香港の生鮮果実の国別輸入数量

輸入先国			輸入数	2017年の	平均増加率			
期八元国		2013	2014	2015	2016	2017	シェア	十均垣加平
合 計	総輸入量	1,516	1,611	1,610	1,663	1,692	100.0%	2.8%
	再輸出割合	59%	58%	57%	60%	62%	100.0%	2.0/0
1. タイ	総輸入量	584	562	492	431	406	24.0%	-8.7%
1. 24	再輸出割合	94%	91%	93%	94%	94%	24.0%	0.7/0
2. チリ	総輸入量	138	136	163	257	223	13.2%	12.9%
2. ) )	再輸出割合	88%	85%	91%	90%	93%	13.2/0	12.5/0
3. 中国	総輸入量	183	188	204	220	217	~	4.3%
3. 中国	再輸出割合	5%	4%	5%	4%	7%	12.0%	4.3%
4. 米国	総輸入量	225	231	200	218	205	12.1%	-2.2%
4. 不图	再輸出割合	39%	44%	42%	47%	55%		-2.270
5. 南アフリカ	総輸入量	61	115	126	132	185	10.9%	31.7%
ひ. 用アフリカ	再輸出割合	47%	59%	62%	62%	70%		31.770
6. オーストラリア	総輸入量	73	75	100	103	119	7.0%	12.9%
0. 7 — XI+ J-J-J	再輸出割合	14%	29%	32%	70%	60%	7.0%	12.5/0
7. フィリピン	総輸入量	86	91	87	77	79	4.7%	-1.9%
7. 249L2	再輸出割合	3%	13%	8%	3%	2%	4.770	-1.9%
 8. エジプト	総輸入量	3	12	23	22	52	3.1%	96.4%
o. エンフト	再輸出割合	8%	14%	31%	38%	69%	3.170	90.4%
9. ペルー	総輸入量	18	44	54	45	47	2.8%	26.4%
9. 11/0—	再輸出割合	88%	90%	94%	95%	96%	2.0%	20.4%
10. ニュージーランド	総輸入量	21	20	21	19	22	1.3%	1 40/
10. ニューシーフント	再輸出割合	12%	14%	15%	13%	22%	1.3%	1.4%
<b>エ</b> の出	総輸入量	123	138	140	138	137	0.10/	0.70/
その他	再輸出割合	46%	36%	30%	28%	27%	8.1%	2.7%

香港から見た米国は、金額で第3位、数量で第4位の輸入先国である(2017年)。2013年から2017年までの4年間で見ると、香港の果実輸入金額は平均11.3%増加している。2013年には、米国は最大の輸入 先国であったが、2017年にあっても影響力を持つ国として位置づけられている。とはいえ、トップ10の輸入 先国の中で唯一4年間の平均伸び率がマイナスとなっている。

2017年には金額ベースではチリが最大の輸入先国であり、タイが第2位に這い上がっている。トップ10の多くの国は輸出力の強化を続けており、バイヤーに対して品質面での信頼を獲得している。

温帯性の主要果実(リンゴ、ナシ)については、米国は大生産国だが、チリ、オーストラリア、南アフリカ、中国が香港市場でシェアを獲得しつつある。

香港の生鮮果実の品目別輸入金額と主要輸入先

	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·								
輸入先国			輸入額(単位:百万ドル)				2017年の	亚拉维加索	
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1			2013	2014	2015	2016	2017	シェア	十均垣加华
		総輸入額	1,716	2,186	2,201	2,595	2,635	100.00	1. チリ24.3% 2. タイ16.8%
台	計	再輸出割合	50%	51%	55%	60%	60%	100.0%	3. 米国15.4% 4. オーストラリア8.8%

1. ブドウ	総輸入額	405	456	439	460	494		2. オーストラリア23.2% 3. ペルー15.5%	
(生鮮)	再輸出割合	69%	70%	78%	77%	74%		3. ペルー15.5% 4. 米国13.9% 5. 南アフリカ10.1%	
2. サクランボ	総輸入額	321	432	444	495	442		1. チリ75.7% 2. 米国16.2%	
(生鮮)	再輸出割合	91%	88%	93%	93%	96%	10.0%	2. 水国10.270	
3. オレンジ	総輸入額	416	484	393	393	406	45.40	1. 米国34.7% 2. 南アフリカ27.9%	
(生鮮)	再輸出割合	32%	34%	32%	34%	45%		3. オーストラリア13.6% 4. エジプト10.4%	
4. ドリアン	総輸入額	144	164	180	197	231	0.00/	タイ98.3%	
(生鮮)	再輸出割合	12%	26%	28%	64%	56%	0.0/0	J-1 90.0 70	
5. リンゴ	総輸入額	85	161	149	155	220	8.4% 2 3	2 40 2	1. 中国33.8% 2. 米国26.7%
(生鮮)	再輸出割合	46%	56%	56%	53%	61%		3. 日本13.4% 4. ニュージーランド12.8%	
6. リュウガン、ドラゴ ンフルーツ、バンレイ	総輸入額	88	94	110	131	144		1. タイ70.4% 2. ベトナム7.1%	
シ、ライチ (生鮮)	再輸出割合	16%	115	13%	5%	10%	0.0%	3. エクアドル5.1%	
7. スモモ、プルーン	総輸入額	47	97	11	83	98		1. チリ48.5% 2. 米国38.8%	
(生鮮)	再輸出割合	80%	88%	97%	89%	84%		3. オーストラリア9.1%	
8. レモン、ライム	総輸入額	27	38	58	68	84		1. 南アフリカ52.2% 2. 米国27.5%	
(生鮮、乾燥)	再輸出割合	8%	2%	4%	3%	1%	0.270	2. 水邑27.070	
9. イチゴ	総輸入額	65	75	74	70	72		1. 米国35.1% 2. 韓国28.5%	
(生鮮)	再輸出割合	3%	16%	10%	3%	3%		3. 日本23.7%	
10. グアバ、マン ゴー、マンゴスチン	総輸入額	41	49	47	46	50		1. タイ34.4% 2. フィリピン32.8%	
(生鮮、乾燥)	再輸出割合	12%	14%	15%	13%	22%		3. オーストラリア20.6%	
その他	総輸入額	141	185	187	199	250	9.5%		
~ II	再輸出割合	35%	25%	28%	27%	34%	5.0%		

香港の生鮮果実の品目別輸力	人量と主要輸入先
---------------	----------

輸入先国	A	輸入量(単位: 千トン)			2017年の	平均増加率								
制入尤凶		2013	2014	2015	2016	2017	シェア							
合 計	総輸入量	1,516	1,611	1,610	1,663	1,692	100.0%	1. タイ24.0% 2. チリ13.2%						
숨 計	再輸出割合	59%	58%	57%	60%	62%	100.0%	3. 中国12.8% 4. 米国12.1%						
1. オレンジ	総輸入量	222	234	257	277	320	18.9%	1. 南アフリカ30.5% 2. 米国30.2%						
(生鮮)	再輸出割合	20%	22%	29%	39%	55%	10.9%	3. エジプト14.1% 4. オーストラリア13.0%						
2. ブドウ	総輸入量	167	196	206	236	237	14.00/	1. チリ35.1% 2. オーストラリア21.8% 3. ペルー17.3%						
(生鮮)	再輸出割合	76%	78%	81%	87%	85%		3. ベルー17.3% 4. 米国12.1%						
3. ドリアン	総輸入量	194	358	330	319	222	10.10	タイ99.7%						
(生鮮)	再輸出割合	12%	26%	28%	64%	56%	13.1%	7199.7%						
4. リュウガン、ドラゴ ンフルーツ、バンレイ	総輸入量	281	222	197	151	216								1. タイ73.6% 2. 中国11.0%
シ、ライチ (生鮮)	再輸出割合	16%	115	13%	5%	10%	12.6%	2. 中国 11.0% 3. ベトナム 8.6%						
5. リンゴ	総輸入量	114	127	165	168	165	1 1	1 1	1. 中国51.8% 2. 米国24.2%					
(生鮮)	再輸出割合	35%	29%	25%	21%	29%	3.0%	2. 水国24.270 3. ニュージーランド8.9%						
6. サクランボ	総輸入量	32	58	63	99	81	4.8%	1. チリ77.2% 2. 米国16.2%						
(生鮮)	再輸出割合	63%	63%	82%	82%	86%		- · · —						
7. バナナ(生鮮、乾燥)	総輸入量	65	70	68	66	71	4.2%	1. フィリピン79.1% 2. エクアドル15.9%						
(生鮮、钇深)	再輸出割合	11%	18%	10%	4%	3%								
8. ナシ (生鮮)	総輸入量	63	68	72	77	68	4.0%	1. 中国80.4% 2. 南アフリカ8.4%						
(主無)	再輸出割合	11%	19%	7%	11%	6%								
8. レモン、ライム	総輸入量	31	70	42	38	47	0.00	1. 南アフリカ60.6% 2. 米国16.5%						
(生鮮、乾燥)	再輸出割合	24%	52%	35%	50%	42%	2.8%	3. 中国4.6% 4. エジプト4.5%						
7. スモモ、プルーン	総輸入量	29	18	30	37	42	2.5%	1. チリ66.6% 2. 米国22.5%						
(生鮮)	再輸出割合	79%	76%	74%	80%	81%		3. オーストラリア7.5%						
その他	総輸入量 再輸出割合	217 44%	191 38%	179 38%	194 48%	224 50%	13.2%							

# <u>国別分析</u>

### チリ

チリは金額ベースでは香港の最大の輸入先国である。チリ産果実の供給時期は米国と異なるため、香港市場で直接の競合関係はほとんどない。最も輸出が多い品目はサクランボであるが、贈答用として需要が大きい1~2月の春節と供給時期が重なるため、輸出量は年々増加している。2013年に1.19億ドルであったものが、2017年には3.37億ドルと大幅な増加を示している。チリは中国本土での販売促進活動を熱心に行っており、2017年には香港に輸出されたサクランボの80%が中国に再輸出された。これは、米国産サクランボの再輸出割合が32%であることと対照的である。また、長年に渡り評判と信頼が確立されてきたことから、他の品目についてもバイヤーがチリ産果実を受け入れるようになっている。例えば、チリ産のスモモやアボカドの輸入も増加している。

### タイ

タイは大量のドリアンを香港に供給している。2017年には、タイからの輸入果実のうち、金額ベースで66%がドリアンであった。次いでリューガンやマンゴーなどの熱帯果実が多い。タイから輸入されるドリアンの95%は再輸出されているが、出荷シーズン中、香港の小売店では常にドリアンは店頭に置かれ、デザートとして食されている。マレーシア産のドリアンはプレミアム価格で販売されているものの、量が限られていることから、タイは香港への熱帯性果実の主要供給国として君臨し続ける可能性が高い。

### オーストラリア

オーストラリアは香港では高級果物の供給国として位置づけられている。2017年にはタスマニア産のサクランボやブドウの新品種がメディアの注目を集めた。タスマニア産のサクランボはチリや米国産に比べると量は少ないものの、春節の贈答品とされている。オレンジは米国産や南アフリカ産が多く出回っているが、オーストラリア産のオレンジは果実専門店の一部や健康食品店でこれらに代るオプションとして販売されている。販売店の中には、オーストラリア産果実を高品質商品として中流階級の消費者に焦点を当てた販売をするものもある。

### 中国

中国は、香港で実際に販売される果物の最大の供給国であり、この地位は変わることがないと見込まれる。 ここ数年間で中国の果樹栽培技術は改善されたため、多くの香港の家庭において日々消費されるのに適し た価格と品質を兼ね備えた果実を供給できるようになった。特に、リンゴ、オレンジ、ナシは周年を通して供 給することが可能であり、米国と直接的な競合関係にあるといえる。季節性の強いスイカ、ライチは距離が近 いという利点もあり、豊富に安い価格で香港市場に供給されている。

### 南アフリカ

南アフリカは量的にも金額面でも最大のカンキツ(オレンジ、レモン・ライム、グレープフルーツ)供給国である。南アフリカのカンキツの収穫時期は米国と異なるものの、香港市場には年間を通じて果実を供給している。レモンは食品産業界では最も人気の高い果実であるが、米国産の供給量が少なくなる時期に高値で南アフリカ産のレモンがレストランで利用されている。2013年から17年の間、南アフリカ産のレモンは年平均30%増加したが、米国産レモンが年平均マイナス11%であったのとは対照的である。

### <u>その他</u>

日本は供給量が少ないものの、斬新で特定の品目の果実を市場に供給するという意味でリーダー的な存在である。消費者の中には、例えば白桃、マスカットブドウ(原文ママ)、白色のイチゴ、角形のスイカなどの最新のトレンドに沿い、興味をそそられ、素晴らしい味の果物に対して、価格が高くても購入する人々がいる。エジプトは2013-17年の間で最も供給量が増加した国であり、その増加はカンキツにより支えられている。供給量は2013年の2,996トンから2017年には45,040トンと大幅に増加している。2017年にはオーストラリアを上回るオレンジを香港市場に供給している。

米国の果実輸出に当たって有利な点と課題	
米国にとって有利な点	米国の課題
1980年代と1990年代に販売キャンペーン(サンキスト、ワシントン州リンゴ、カリフォルニア州ブドウ)を実施し、米国産果実に関するイメージを確立した。この効果は現在でも有効である。	他の主要な果実輸出国は、最近様々なメディアを活用して販売促進活動を実施しており、イメージ作りや消費者の信頼を獲得している。
米国産果実は、輸入業者、卸売業者、小売り業者の間で高品質であるという認識がもたれている。	米国産果実は、競争相手である中国産、南アフリカ産、一部の欧州諸国産に比べて価格競争力が劣る。これら諸国は味や品質の水準を高めており、バイヤーにとって魅力的な存在となっている。
香港は果物に関する関税はゼロである。	中国は米国産果実に対して関税を課しているが、一部の国に対しては関税を免除している。このことは米国産果実を中国に再輸出するに当たって影響を及ぼしている。

### 2. 香港市場の特性

### 健康的なライフスタイルに伴う果物消費の拡大

ユーロモニターの報告書によると、香港の果物市場規模は2013年の63.17万トンから2017年には73.53 万トンに拡大し、今後とも拡大を続けて2020年には80万トンを超えると予想している。

この増加は、消費者の健康を重視したライフスタイルの変化がもたらしたものである。このトレンドにより、自然食品や健康的な食品の需要を増加させている。高齢者は肉の多い食事に対して健康リスクを懸念しており、若い世代や子供も十分な果物を摂取しようと心がけている。香港政府は2006/07年から小児肥満を解消するために「EatSmart@school.hk」という計画に取組んでいる。この計画では、子供達に健康的な食生活の重要性を教え、学校給食のガイドラインを提示するとともに、「楽しい果物の月」を企画し1,300の学校を対象として毎日果物を食べることを楽しむような雰囲気作りに努めている。

香港の人達は以前より多くの時間を使ってジムに通うとともに、「フィットネス活動1」という健康とバランスの良い食習慣作り運動に参加している。また、広範に普及しているスマートフォンやソーシャルメディアを通じ、若い世代の間で食品に関する知識や「ヴィーガン・ダイエット」の考え方が広く普及している。さらに、ソーシャルメディアを通じた迅速な伝達手段により、季節性の高い事柄や目新しい情報に関して容易にアクセスできるようになっている。このため、多くの消費者は台湾産のマンゴーや日本産のモモ、マスカットブドウ(原文ママ)のような季節性高い果物の購入を事前に予約するようになっている。加えて、多くの人達はオンラインショップによる宅配サービスを利用している。

#### 業態別動向

### <u>小売業</u>

小売市場ではスーパー対その他の小売業との間で競争が激しい。

#### 伝統的小売業対スーパー

伝統的には、果物は公設市場で購入する方が新鮮で得だと考えられてきたし、現在でもこのことを信じる消費者がいる。実際、スーパーとの競争に対抗するため、公設市場の果物店は一皿により多くの果物を詰めたり、扱い易いように小さなバックで売ったり、不良品の混入を少なくするような努力をしている。そして、消費者にニーズに応じた柔軟な価格設定を行っている。果物籠での販売や大量に買う人に値引きする方式は公設市場の特色でもある。食品環境衛生局の統計によると、2014年から2017年の間、公設市場の数に変動はなかった。一方、スーパーの数は同時期に減少している。しかし、スーパーでは特色ある果物の販売を強化している。例えば日本産の温室栽培果実や有機果実などだ。スーパーでの購入は忙しく近代的な生活をおくっている若い世代で少人数世帯の消費者に向いている。つまり、伝統的な買い物の方法である様々な種類の商品を色々な店で購入するより、一つの店で個人が必要なものだけを購入するという場合にはスーパーは適している。この結果、果物の販売に当たってスーパーの重要性が増しており、スーパーのバイヤーは地元の輸入業者から購入するだけでなく海外の輸出業者と直接取引するようになっている。

### 果物専門店

最近プレミアム果実を扱う専門店が出現しており、カットフルーツや生搾りジュースなどを販売している。これらの店は必ずしも公設市場にあるというわけではなく、実際、交通量の多い地区やビジネス街に多く出店し

ている。このような店は清潔で綺麗な販売環境を提供することで差別化を図っている。また、消費者に原産地や味や栄養素などの情報提供を行うこともしている。このタイプの店の多くは、大量に貯蔵することができず、デリケートな扱いを必要とする品目を扱う場合が多く、従って当該品目の収穫量が少ない場合は価格が大きく変動する場合がある。

### フードサービス業

#### レストラン・ホテル

中華料理では生鮮果実を使用することは限られているが、フルコースのデザートとして果物が使用されている。大部分の中華料理店では中程度から安い価格帯の果実を使用している。通常、リンゴ、オレンジ、スイカ、パインアップルが利用されている。ホテルのビュッフェでは中程度の価格帯の果物をデザート又はサラダとして提供している。しかし、特別な催しの場合は高価格帯の果実を用いたデザートを提供する場合がある。例えば、ベリー類、マンゴー、ドリアンなどである。2年前に(米国農務省)香港農業貿易事務所は5つ星ホテルにおいて米国産ベリー類の販売促進を目的として、デザートやカクテルを振る舞う催しを行った。こういった催しを通じ、メディアの中国を集め、ブロガーや食通を通じて綺麗な画像がソーシャルメディアに取り上げられた。

### デザートバー

香港にはチェーン店又は単独のデザート・カフェがあり、中華式、西洋式又は香港独自のデザートを提供している。ユーロモニターによると、香港の2大チェーンである Hui Lau Shan 及び Honeymoon Dessert の売上はファストフードチェーン業界の2%を占めている(2017年)という。割合は小さいものの、有名な商業地区に出店しており、観光客の間でも熱帯性果物を提供してくれる店として有名である。

#### ベーカリー

香港には数多くの小規模チェーン、独立したカフェ、パン屋の他450店規模のいくつかのチェーンが存在する。ベーカリーでは缶詰果物、乾燥果物、生鮮果実を使ったパン、ケーキ、タルトなどを販売している、消費者は季節性のある商品や目新しい商品に敏感であるため、これらの店では普通のパンに加えて高級果物を用いたケーキを扱っている。季節性のある果物の例としては、米国産のイチゴ、フィリピン産のマンゴー、日本産のハネデゥーメロン(原文ママ)、モモ、ブドウなどがある。

### 果実の取引

香港では、輸入業者による輸入と小売り業者による直接輸入の2つの方式がある。輸入業者は荷が到着すると卸売市場に移送するか再輸出を行う。卸売市場の Yau Ma Tei 果物市場は1910年代に建設されたビルで現在でも営業を行っている。卸売市場は、以前は全ての輸入果実の流通を集中的に管理していたが、現在でも相当程度の果実を扱っている。しかし、最近はスーパーが直接輸入を手がけており、有利な販売をする輸出会社や問題が少ない業者と取引する場合が多い。とはいえ、スーパーのバイヤーはリスクを最小限に抑えるため、輸入業者からの購入も行っている。今後、香港市場に輸出を行おうとする会社は、輸入業者又はスーパーとの間で次のような方法で接触することを薦める。

### □潜在的な輸入業や及びスーパーとの会合

ほとんどの香港輸入業者は新規輸出業者と「個人的環境」の下で会合を持ちたがっている。(米国の)輸出業者は(米国農務省)香港農業貿易事務所でコンタクトすべき業者のリストを入手することができる。

#### □見本市への出展

香港見本市では米国の輸出業者は香港、マカオ、中国本土のバイヤーに高品質な米国果実を展示することができる。アジア・フルーツ・ロジスティカは毎年9月に香港で開催される果物に特化した見本市である。この他にも、果物を含む食品、飲料を対象とした見本市が開催されている。

### □プロモーション活動への参加

(米国農務省)香港農業貿易事務所及び米国の品目別協会は米国農産物の販売を促進するため、セミナー、レセプション、試食会、消費者向けイベントを開催している。これらに参加するためには、地元の輸入業

者又は代理店との協力が必要である。

### 3. コストと価格

香港では果物を含む大部分の輸入品に対して関税及び税金が免除されている。一般に輸入業者及び卸売業者は利益分及び手数料を徴収しており、小売り業者や果物店は販売価格を上げて利益を得ている。通常、香港での果実価格に影響を及ぼすファクターは季節性、在庫水準、ロットごとの成熟度、中国本土への再輸出に関する需要である。特別(廉価)価格としてスーパーが頻繁に行う宣伝も香港での果物価格の値決めに当たってのベンチマークとなっている。以下の表は夏場の平均的なスーパーにおける販売価格である。(調査は2018年8月8日及び9日、スーパーチェーンの Wellcome 及び ParknShop で実施)

香港における生鮮果実の小	売価格
--------------	-----

品目	ブランド	原産国	単位当たりの	単位
			価格(米ドル)	
バナナ	デルモンテ	フィリピン	0.50	ポンド
レモン(3個入9		南アフリカ	0.51	1個
オレンジ(特大、3個入)	サンキスト	南アフリカ	0.66	1個
オレンジ(メッシュ8個入)	サンキスト	南アフリカ	0.45	1個
オレンジ(メッシュ8個入)		オーストラリア	0.27	1個
オレンジ(メッシュ5個入)	サンキスト	米国	0.64	1個
オレンジ(メッシュ4個入)	サンキスト	南アフリカ	0.96	1個
オレンジ(メッシュ5個入)		オーストラリア	0.66	1個
オレンジ(4個入)		オーストラリア	0.64	1個
マンダリン(4個入)		南アフリカ	0.32	1個
マンダリン(5個入)		オーストラリア	0.28	1個
グレープフルーツ(特大、3個入)			0.51	1個
リンゴ(ふじ、特大)		中国	1.14	1個
リンゴ(ふじ、3個入)		中国	0.85	1個
リンゴ(ふじ、小、4個入)		中国	0.40	1個
リンゴ(ガラ、小、4個入)		ニュージーランド	0.30	1個
リンゴ(ロイヤルガラ、2個入)		ニュージーランド	1.12	ポンド
リンゴ(ガラ、大、3個入)		ニュージーランド	0.68	1個
リンゴ(ガラ、有機、4個入)		ニュージーランド	1.31	1個
リンゴ(ガラ、有機、2ポンド)		米国	3.84	ポンド
リンゴ(ジュリエット、有機、4個入)		フランス	1.47	1個
リンゴ(レッドデリシャス、特大、3個入)		米国	0.49	1個
リンゴ(レッドデリシャス、4個入)		米国	0.35	1個
リンゴ(エンヴィー、2個入)		ニュージーランド	1.21	1個
リンゴ(エンヴィー、小、3個入)		ニュージーランド	0.85	1個
リンゴ(エンヴィー、大、2個入)	<u> </u>	ニュージーランド	1.92	1個
リンゴ(ピンクレディー、1kg)		オーストラリア	4.86	キログラム
リンゴ(Au Modi、1kg)	<b> </b>	オーストラリア	2.81	キログラム
		米国及びニュー		
リンゴ(グラニースミス、2個入)		ジーランド	0.83	1個
キウイ(グリーン、3個入)	ゼスプリ	ニュージーランド	0.38	1個
キウイ(グリーン、6個入)	ゼスプリ	ニュージーランド	0.31	1個
キウイ(ゴールド)	ゼスプリ	ニュージーランド	0.83	1個
キウイ(ゴールド、3個入)	ゼスプリ	ニュージーランド	0.53	1個
アボカド		米国	1.27	1個
アボカド(6個入)	<u> </u>	メキシコ	0.70	1個
アボカド(3個入)		メキシコ	1.06	1個
アボカド(3個入)		米国	1.06	1個
アボカド(有機、2個入)	İ	メキシコ	2.56	1個
アボカド(特大)	*	オーストラリア	3.45	1個
ブルーベリー(特大)		ペルー	4.22	125g
ブルーベリー(有機)	ドリスコルズ		7.68	125g
イチゴ(有機)		米国/メキシコ	8.19	250g
イチゴ	ドリスコルズ		4.09	ポンド
イチゴ	リックコルヘ	オーストラリア	3.06	ハント 250g
イチゴ	ドロスコルブ	米国/メキシコ	4.22	250g 250g
11/-	ロッハコルヘ	小田//イノコ	4.22	ZJUB

ラズベリー	ドリスコルズ	米国	3.83	125g
ブラックベリー	ドリスコルズ	米国	3.83	125g
ブラックベリー(有機)	ドリスコルズ	米国	6.27	170g
パインアップル(ゴールデン)		フィリピン	3.19	1個
ドラゴンフルーツ(3個入)		ベトナム	0.55	1個
ナシ(パッカム、4個入)			0.35	1個
ナシ(Gomg、3個入)		中国	0.59	1個
ナシ(センチュリー、3個入)		中国	0.59	1個
ナシ(ブラッシュ)		南アフリカ	3.00	800g
キウイ(特大、4個入)		ニュージーランド	1.15	1個
メロン (Hami)		中国	2.55	1個
イチジク		トルコ	12.56	700g
ブドウ(コットンキャンディ、2房)		スペイン	3.20	250g
ブドウ(グリーン・シードレス)		エジプト	2.55	ポンド
ブドウ(レッド)		チリ/オーストラリア	2.17	ポンド
ブドウ(レッドシードレス)		南アフリカ	2.29	ポンド
ブドウ(ブラックシードレス)		米国	3.83	ポンド

### 4. 市場アクセス

香港は世界で最も自由な経済地域として24年連続して第1位にランクされており、課税されているのはタバコと蒸留酒だけである。

香港で販売される全ての食品は、公衆衛生及び地方自治サービス条例第132章のパートVと付属規則に 規定されている食品安全管理に適合したものでなくてはならない。

香港政府の食品安全センターは食品による危害を防止するため、監視プログラムを遂行している。同プログラムに基づき、検査官は輸入、卸売り、小売りの各段階でサンプルを採取し、微生物検査、科学検査、放射線検査を実施している。果物に関しては残留農薬が法的な基準値を超えていないかについて、しばしば検査が行われている。

## 海外果樹農業情報 刊行物一覧

	IAM WANTED IN 1917 IN 36	
No.	調査報告書名	発行年月日
80	中国山東省におけるオウトウの生産・流通事情調査報告書	04. 7
81	米国における果実消費動向及び生食用果実流通実態調査報告書	04. 8
82	欧米のくだもの消費事情調査報告書	04. 9
83	オーストラリアにおけるリンゴ及びオウトウの生産・流通事情調査報告書	05. 3
84	中国におけるリンゴの生産・流通事情調査報告書	05. 6
85	タイにおける果実の流通・販売の実態に関する調査報告書	05. 6
86	日米におけるフードガイドの新たな動きについて(くだもの編)	05. 7
87	インドネシアにおける熱帯果実の生産・流通事情調査報告書	06. 1
88	海外の果実生産・貿易状況 2006 年版	06. 4
89	台湾における果実の生産・流通・消費事情等に関する調査報告書	06. 4
90	スペインにおけるカンキツ類の生産・流通事情調査報告書	
		06. 10
91	ベトナム・韓国・インドネシア・台湾における果実の生産・流通事情調査報告書(補遺版)	06. 10
92	チリにおける落葉果実等の生産・流通事情調査報告書	07. 2
93	台湾における果実の輸入関連制度に係る調査報告書(付 果実の生産・流通状況)	07. 5
94	アラブ首長国連邦・インド・タイにおける果実の生産・流通・消費事情調査報告書	07. 7
95	ニュージーランドにおける果実の生産・流通・消費事情等調査報告書	08. 3
96	台湾における日本産果実の流通・消費実態調査報告書	08. 6
97	韓国における主要果実の生産及び輸出入等に関する実態調査報告書	08. 7
98	ドイツ・オランダにおける果実・果実加工品の生産・流通状況調査報告書	09. 2
99	台湾における日本産果実の生産・流通・消費実態調査報告書	09. 6
100	世界の主要果実の生産・貿易概況 2009 年版	09. 11
101	中国におけるポンカンの生産・流通実態調査報告書ー福建省及び浙江省を中心として一	09. 11
102	米国におけるリンゴの加工品等実態調査報告書	10. 2
103	ロシアにおける日本産果実の販売可能性及び同国の果樹農業・政策基礎調査報告書	10. 7
104	米国連邦行政組織による果実消費拡大に向けた取組みに係る調査報告書	10. 8
105	台湾における日本産果実の流通・消費実態調査報告書	10. 8
106	グローバリゼーション下の米国の果汁産業及び新たな生産流通システム実態調査報告書	10. 8
107	インドにおける日本産果実の販売可能性及びインド産ブドウの対日輸出可能性調査報告書	10. 10
108	カナダの果樹農業・政策実態調査報告書	11. 3
109	米国カリフォルニア州におけるオウトウの生産・流通事情調査報告書	11. 6
110		11. 6
111		11. 8
111	プラジルにおけるオレンジ及びオレンジ果汁を中心とした生産・流通事情調査報告書	+
		_
<b>—</b>	中国の主要都市における日本産果実の販売可能性及び中国のオウトウ産地調査報告書	11. 10
114		12. 3
	台湾における日本産果実の流通状況等実態調査報告書	12. 6
	中国におけるブドウの生産・流通・消費調査報告書	12. 10
117	韓国の対米国 FTA 締結による韓国果樹産業への影響等調査報告書	12. 11
118		13. 3
119		13. 3
120	世界の主要果実の生産概況 2013 年版	13. 10
121	台湾における日本産果実の流通状況及び輸入に関連する規制等に係る調査報告書	14. 3
122	世界の主要果実の貿易概況 2013 年版	14. 3
123	世界の主要果実の生産概況 2014 年版	14. 10
	世界の主要果実の生産概況 2015 年版	15. 3
125	台湾における日本産果実の流通及び輸入促進に向けた諸課題に係る調査	15. 3
126	ニュージーランドの果樹農業及び香港の日本食品・果実事情調査報告書	15. 8
127	海外の果樹産業ニュース 2015 年度版	16. 3
	台湾における日本産食品の輸入規制強化にともなう日本産果実の流通への影響に係る調査報告書	16. 3
129	海外の果樹産業ニュース 2016 年度上期版	16. 10
130		17. 2
131		17. 3
132	台湾における日本産果実の流通状況及び輸入促進に向けた諸課題に係る調査	17. 3
133	海外の果樹産業ニュース 2017 年度上期版	17. 9
134	世界の主要果実の生産概況 2017 年版	18. 2
135	世界の果樹産業ニュース 2017 年度下期版	18. 3
136	世界の未倒産業ニュース 2017年度下期版 台湾における日本産果実の流通・消費の状況及び輸入促進に向けた諸課題に係る調査	18. 3
137	海外の果樹産業ニュース 2018 年度上期版	18. 10
		_
138	世界の主要果実の生産概況 2018 年版	19. 2

